



SDGs取組事例集 2025



SDGsの達成に向けて、鳥取大学で取り組む教育・研究・社会貢献などの活動をご紹介します。

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) は、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標です。2015年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられました。2030年を達成年限としている国際目標です。



目標1 [貧困]
あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる



目標10 [不平等]
国内及び各国家間の不平等を是正する



目標2 [飢餓]
飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する



目標11 [持続可能な都市]
包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する



目標3 [保健]
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する



目標12 [持続可能な消費と生産]
持続可能な消費生産形態を確保する



目標4 [教育]
すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する



目標13 [気候変動]
気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる



目標5 [ジェンダー]
ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う



目標14 [海洋資源]
持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する



目標6 [水・衛生]
すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する



目標15 [陸上資源]
陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する



目標7 [エネルギー]
すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する



目標16 [平和]
持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する



目標8 [経済成長と雇用]
包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用 (ディーセント・ワーク) を促進する



目標17 [実施手段]
持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化



目標9 [インフラ、産業化、イノベーション]
強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る

17のゴールと169のターゲットから構成されています。



目 次



鳥取大学SDGs推進体制	1
--------------	---

【取組事例】

地域学部	3
------	---

医学部・大学院医学系研究科・附属病院	9
--------------------	---

工学部・大学院工学研究科	41
--------------	----

農学部・大学院連合農学研究科・ 大学院共同獣医学研究科	87
--------------------------------	----

大学院持続性社会創生科学研究科	104
-----------------	-----

附属学校	107
------	-----

国際乾燥地研究教育機構	110
-------------	-----

教育支援・国際交流推進機構	118
---------------	-----

染色体工学研究センター	122
-------------	-----

その他部局等	125
--------	-----

事務局・技術部	130
---------	-----



鳥取大学SDGs推進体制

鳥取大学SDGs基本方針（令和3年5月14日 学長裁定）

鳥取大学は基本理念である「知と実践の融合」のもと、教育研究及び社会貢献活動を通じてSDGs(持続可能な開発目標)の達成に取り組み、地球上の「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指します。

鳥取大学SDGs推進会議設置要項（抜粋）

（設置）

第1条 鳥取大学（以下「本学」という。）に、国連サミットで採択された持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のための持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals。以下「SDGs」という。)の達成に向けて、本学の基本理念「知と実践の融合」のもと、全学的視点から分野を横断した取組を行い、学内の連携強化並びに地域社会及び国際社会とのパートナーシップ構築を推進することを目的に、鳥取大学SDGs 推進会議(以下「会議」という。)を置く。

（業務）

第2条 会議は、次に掲げる事項を所掌する。

- 一 SDGs 推進に係る基本方針の策定、企画・立案、連絡調整、情報収集、広報、意識啓発及び学外機関との連携に関すること。
- 二 その他前条の目的を達成するために必要と認められること。

（組織）

第3条 会議は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 学長
- 二 理事
- 三 各学部長
- 四 連合農学研究科長
- 五 共同獣医学研究科長
- 六 附属学校部長
- 七 医学部附属病院長
- 八 国際乾燥地研究教育機構副機構長
- 九 染色体工学研究センター長
- 十 鳥由来感染症グローバルヘルス研究センター長
- 十一 その他学長が必要と認めた者



鳥取大学SDGs表彰最終選考会



2025年12月8日（月）、鳥取キャンパスのTottori uniQを会場に鳥取大学SDGs表彰最終選考会を開催しました。最終選考会は、SDGs達成に向けた意欲的な活動を学内外に広く紹介し、全学的なSDGs推進の機運を高めることを目的として、今年度初めて開催いたしました。全学で231件ある取り組みの中から、各部局から推薦を受け、教職員及び鳥取県のとっとりSDGsネットワーク構成員の投票で高く評価された11組が登壇し、熱意あふれる発表を行いました。

最終選考会で選ばれた受賞者（大賞、優秀賞、ビッグインパクト賞、とっとりSDGsネットワーク会議賞）には、記念品として表彰楯（蒜山の森の間伐材で作成）と最大30万円相当の副賞が贈呈されました。



SDGs表彰式 記念写真



大賞：地域学部



優秀賞：国際乾燥地研究教育機構



ビッグインパクト賞①：工学部（写真右）
ビッグインパクト賞②：農学部（写真中央）



とっとりSDGsネットワーク会議賞：医学部

地域学部



教育、社会貢献



【活動概要】

昨今の鳥取県では、JA（農業協同組合）系のスーパーであるAコープやポプラの閉店・撤退によって、中山間地域における買い物困難者の問題が焦点化されつつある。2023年度鳥取大学の必修授業「地域調査プロジェクト」を受講したFグループの学生12名と教員（竹川・菰田）は、倉吉市関金地区における買い物弱者支援問題に取り組んだ。机上学習を経て、倉吉市企画課・関金コミュニティセンター・関金地区振興協議会・倉吉市社会福祉協議会等と連携、進行中の買い物弱者支援政策（買い物代行・買い物ツアー等）に関する学習・地域住民へのインタビューを含めた定期的なフィールドワークを重ね、学生を主体にした買い物代行チケットの原案作成・利用PR動画の作成（写真1）、住民の多世代交流&啓発イベント（写真2・3）を実現してきた。その中でも来場者数174名を数えた2023年11月19日開催の地域イベントは読売新聞で取り上げられたばかりでなく、参加者アンケート（80名）からこのイベントを次年度以降も継続する要望と共に高い評価を得た。その後、関金庁舎内に「新鮮市場 せきがねストア」が2024年3月31日に開店、引き続き関係学生と共に協力支援活動を継続中である。

写真1：地域活動への支援



写真2：多世代交流のためのイベント実施



写真3：地域住民への啓発とメディア掲載



【担当】代表者：竹川俊夫・菰田レエ也
(地域学部地域学科地域創造コース)

社会福祉 福祉行財政 地域福祉

教育



【活動概要】

地域学部地域学科地域創造コースの専門科目である「社会福祉」「福祉行財政」「地域福祉」について、初年次必修科目である「社会福祉」では、“社会福祉”や“社会保障”といった概念について学ぶとともに、少子高齢化や世帯構造、就業構造、地域構造等の社会変化をふまえながら、貧困をはじめとする様々な生活リスクに対応する社会保障・社会福祉制度の概要や、イギリス・日本における発展の歴史、福祉行財政の仕組み等について基礎的な学びを提供します。

2年次選択科目である「福祉行財政」（前期）では、国や自治体を実施する専門的な社会福祉の制度やサービスの側面を中心に講義を行います。前半の総論では、社会福祉の行財政の現状や社会（福祉）政策の理論について理解を深めるとともに、後半の各論では、生活保護や生活困窮者自立支援制度を核とする、貧困や社会的排除、社会的孤立の克服に向けた対策や、介護保険制度を中心とする高齢者保健福祉サービスを通じた高齢者の生活支援の現状と課題等について学びます。

2年次選択科目である「地域福祉」（後期）では、地域住民やボランティアが主体となって地域を基盤に自主的に取り組まれる福祉活動にスポットを当て、ノーマライゼーションやソーシャル・インクルージョンの理念をふまえながら、住民が福祉活動に主体的に参加する意義や参加促進に向けた各地の取り組みを学びます。さらに、住民参加を支援する専門機関としての社会福祉協議会の役割について学びながら、持続可能な福祉のまちづくりの現状と課題について理解を深めます。なお授業においては、社会福祉協議会で活躍している専門職（コミュニティソーシャルワーカー）を招いて、地域課題の解決のために実際に地域社会にどのように働きかけて住民主体の福祉活動を促進させているかについて、リアルなお話を伺う機会を設けています。

【担当】代表者：竹川俊夫（地域学部地域学科地域創造コース）

鳥取県八頭町との連携による 地域共生社会の実現に向けた地域を基盤とする住民主体の福祉活動推進 基礎組織づくりや福祉の学び場づくりに関する研究

地域学部

研究



【活動概要】

鳥取県八頭町では、2012年に策定された第1次「八頭町地域福祉計画」によって、住民が地区を単位に自主的に福祉活動や防災・まちづくりに取り組む「まちづくり委員会」の設立が提起され、2025年4月現在、14地区中12地区まで組織化が進むとともに、高齢者の介護予防活動（100歳体操）や地域交流活動（まちづくりカフェ）を中心に様々な福祉活動が実施されています。

現在八頭町は、八頭町役場と八頭町社会福祉協議会が2024年3月に共同策定した「第2期八頭町地域福祉推進計画」に基づき、まちづくり委員会の機能強化を通じて地域包括ケアシステムづくりや地域共生社会の実現に取り組んでいます。そのためにはより多くの住民の参加と協力が必要です。本研究は、そうした課題に応えるべく、住民が「我が事」としてまちづくり委員会の活動に参加し、地域の様々な団体と福祉専門機関が「丸ごと」つながるための学びの場づくりと、それを通じたまちづくり委員会のさらなる発展や八頭町全体での包括的支援体制の構築に向けた方策を実践・研究するものです。



廃止された保育園を活用した八頭町の「まちづくり委員会」の活動拠点（下私都地区）



活動拠点で取り組まれている住民主体の福祉活動（写真は「いきいき100歳体操」の様子。カフェや見守り支援活動等、地域の実情や課題に応じて多様な活動が実施されています。

【担当】代表者：竹川俊夫（地域学部地域学科地域創造コース）

自然の「過少利用問題」解決を目指す 地域共創実学教育

地域学部

教育



【活動概要】

鳥取県東部を舞台として、地域で活躍する農家・林家・漁家と鳥取大生の協働によって、アンダーユースとなった海・山・野の再資源化を目指す地域共創実学教育です。

具体的には、鳥取県東部の「耕作放棄地」「間伐遅れの山」「放棄漁場」を再び糧とする営みに、地域学部地域創造コースの学生らが身体を伴って参画します。そして、現場が直面する具体的な課題を身体で体感したうえで、学生らが現場と共に悩んで問題解決の道を模索するためのワークショップを実施しています。

本授業の特徴は、第一産業（農業・林業・水産業のすべて）を通じて、自然と共にあるとする人々との協働するなかで、「人と自然の関係」を学ぶ授業形態にあります。アンダーユースという現代的な地域課題の最前線で模索する人々との身体ベースの協働から、「持続性」の理念を再考する「学びの場」を創出しています。



日本3大林業地（智頭林業）の歴史を体感する学生ら



近年になり、鳥取の沿岸漁業振興として導入された定置網漁



ブランド米の確立に向けた自然乾燥のためのはせがけ作業

【担当】代表者：村田周祐（地域学部地域学科地域創造コース）

教育、研究



【活動概要】

地球温暖化への対応から低炭素社会への転換が求められ、コンパクトシティなど脱クルマ依存型の都市形態がよく知られるようになりました。他方で多くの都市がモータリゼーションに対応した都市構造となっている地方圏の現状では、それだけでは住みよい都市にはなり得ません。リバブルシティは、欧米ではポピュラーな望ましい都市の概念で、インフラ整備による生活利便性のほか、経済基盤や治安、教育など多様な評価観点をもつ点に特徴があります。本研究では生活利便性に優れた大都市型の都市タイプだけでなく、それとは異なる住民の生活満足度の高い多様な都市の在り方などを、国内外の事例を比較検討することを目的としています。

他方で21世紀は、途上国の人口増加にともないこれまで人間活動が低調であった地域でも都市開発が活発化し、砂漠など乾燥地での開発が進んでいます。こうしたサブ・アネクメーネでの開発は環境負荷が大きく、持続可能性が低いなど多くの課題があります。かかる地域での都市開発の動向や課題についても視野を広げ、研究に取り組み教育に還元しています。

【担当】 代表者：山下博樹（地域学部地域学科地域創造コース）



フランス・グルノーブル。公共交通の再生で環境問題と生活利便性の改善に取り組む。



モンゴルの首都ウランバートル。急速な人口集中のため生活環境の整備は後手に。

地域の伝統行事を担う人材の育成
—地域と連携した山陰の「一式飾り」の継承の取り組み—

教育



【活動概要】

山陰では、「一式飾り」と呼ばれるユニークな民俗行事が、江戸時代後期より受け継がれています。これは地域の祭りにおいて町内ごとに、住民が協働して陶器一式など同種の生活道具だけを用いて、話題の人物や干支の動物などに見立てて飾り、作品の腕を競い合うもので、暮らしを彩る創作活動として、地域で長年親しまれてきました。しかし近年の人口減少によって「一式飾り」の担い手が減少し続け、これまで地域の絆を深めてきた伝統行事の存続が危ぶまれるようになっていきます。

こうした状況に対し、高橋研究室では2011年より毎年地域と連携してフィールドワークを実施し、地域の方から伝統の技を学ぶなど、「一式飾り」の価値を探究する研究に取り組み、その知見をもとに2014年から「一式飾り」が伝わる鳥取県南部町法勝寺地区の西伯小学校において、「まち未来科」の一環として「一式飾り」の価値を再発見する学習を毎年新たに開発して実践し、これからの地域を担う人材の育成に継続して取り組んでいます。

【担当】 高橋健司（地域学部地域学科人間形成コース）



地域の方から指導を受けて制作・展示した山陰の「一式飾り」。写真は陶器一式による作品。



地域と連携して2014年から毎年小学校で実践している「一式飾り」の授業風景。

教育



2025年度プロジェクトテーマ

【地域と教育】

- ・夜間中学とは？
- ・外国人にとっての地域／地域にとっての外国人
- ・地域の読書環境を考える
- ・地域（鳥取）を題材とした物語創作
- ・「総合的な探求の時間」への参与観察

【発達福祉】

- ・発達・教育・心理・福祉・障害者問題に関する研究提案
- ・特別支援教育・障害者福祉の問題に関する調査研究
- ・〈家族〉のかたちを考える
- ・赤ちゃん学のすすめ

【学習デザイン】

- ・授業づくり入門
- ・理科授業の課題とその改善
- ・「子どもの音楽イベント」の企画と実践
- ・「授業観察」を科学する
- ・地域のマラソン・駅伝大会を考える

【概要】人間の形成作用（産・育・訓・教）及び生涯にわたる人間形成を見通す、地域教育をとらえる上で共通に持つべき基礎的方法を学ぶとともに、具体的な地域の教育にふれることで、地域教育を学ぶ意欲を培う2年次開講科目である。教員が、それぞれの研究分野の特色を生かして立ち上げたプロジェクトに分かれて学習活動が展開する。地域における諸活動を教育という視点から捉える能力を身につけること、疑問を持ち、科学的な手法を用いて検証する能力及び、仮説設定から先行研究の検討、調査・分析、発表にかかわる技能と態度を身につけることを目標とする。

学年	必修科目等	選修・実習系	選択科目群
1年次	地域学入門 地域教育入門 学習社会論 教育の課程と方法	大学入門ゼミ 地域フィールド演習	心理学科科目 保育（幼児）教育学科科目 特別支援教育学科科目 教育学新科目 教科教育学科科目
2年次	生涯発達論	地域調査プロジェクト 海外フィールド演習	発達福祉プログラム 地域と教育プログラム 学習デザインプログラム
3年次	地域学総論 A 家族支援論 障害児教育総論	保育実習（基礎） 教育実習指導 インターンシップ 専門ゼミ	
4年次	卒業研究	教育実習（応用） 保育・教職実践演習（幼・小） 教職実践演習（中・高） 人間形成ゼミ	



地域の学校や児童クラブ、こども食堂など、人間形成に関わる様々な場所が調査対象となる。



フィールドワークや教育実践、実験的研究など、多様な調査方法を用いながら活動を展開する。

【担当】鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース・教員養成センター

東アジアプロジェクト
（東アジアの現場・現地感覚を持つ人材育成プロジェクト）

教育



【活動概要】

鳥取大学地域学部では「東アジアプロジェクト」を進めています。海外で言葉や文化・生活習慣を高い壁と感ぜないで一步を踏み出せる人、必要な知識と言語、現場・現地感覚を備えた人を育成するためです。

中国（厦門大学）・台湾（高雄師範大学）・韓国（慶熙大学校）の学生を鳥取大学に迎える東アジアプログラムと3つの海外プログラム（中国、韓国、台湾）があります。海外プログラムでは事前学習、現地調査、事後発表を行います。また、留学生との勉強会を通して中国語・韓国語の上達を目指します。

これらの活動によって「韓国・中国・台湾」といった枠組みではなく、仲間の顔が見える、生きた場としての「東アジア」という新たな世界を発見します。



【担当】鳥取大学地域学部国際地域文化コース
柳静我教授、岸本寛教授、李素妍准教授

工芸のある暮らしを育む社会人のための哲学講座 —西郷工芸の郷で哲学カフェ—

地域学部

教育、研究、社会貢献



【活動概要】

てつがくカフェは、そこで得られた気づきを他の参加者同士で対話/共有し、対話の空間がどのようにしたら生まれるのかを、そして対話の空間の意義について考えることができます。この学びは、単に対話の「テクニック」を学ぶだけでなく、哲学的な対話を通して、自分自身や、自分の住んでいる地域その風土について、みんなで一緒に考えることにつながり、それぞれの地域で「地域をつくる」とはどのようなことなのかを考え直す機会にもなります。

西郷工芸の郷では、てつがくカフェとして「伝承」「変わる？変えたい？変えるべき？」「対話をするってどういうこと？」というテーマで話し合い、映像カフェでは、「『白磁』伝承者養成技術研修会」記録映像、「映像で知る河原町の昔「観光かわはら」視聴」を行いました。このような活動を通して、同じ地域に住んでいるからこそ話題にしにくい問題について、いつもなら「聞くことのできない意見」をお互いに述べ聞くことのできる貴重な機会となりました。



参加者による対話の風景



重要無形文化財「白磁」
保持者の前田昭博さんによる
映像の解説

【担当】代表者：丸 祐一（地域学部地域学科地域創造コース）

八頭町出身の夭折の歌人・杉原一司の研究

地域学部

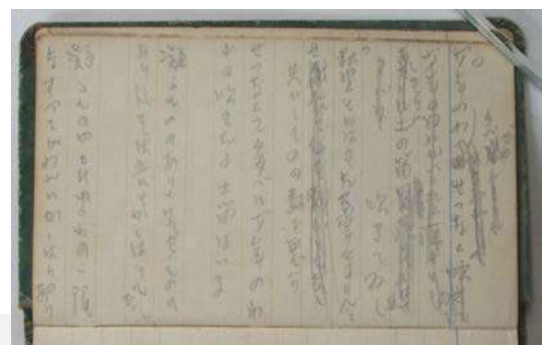
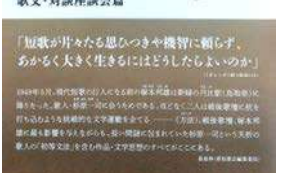
研究、社会貢献



【活動概要】

鳥取県八頭郡八頭町に生まれ育った杉原一司（1926－1950）は、鳥取商業学校在学中に短歌に目覚め、卒業後は、結社『日本歌人』主宰者であった前川佐美雄を師と仰ぎ、塚本邦雄という盟友と出会うことで、歌人としての自己を確立していきました。23歳という若さで病没したために、現在ではほとんど忘れられた存在となっていますが、一司の作品が掲載された雑誌の紙面や、塚本との間で交わされた書簡を追っていくと、同時代の全国歌壇において、短歌・評論の両面にわたり新星として注目されていたことが見えてきます。

本研究では、未発表資料を含む一司の全集を編纂することで、人権蹂躪の最たるものである戦争への批判意識が、虚実や欲動／自制をめぐる難解な理論を生み、反抒情的な歌として結実する一連の営みが、現代の読者・研究者に受けとめられることを目指しています。



手帳に書き残された歌稿 8

【担当】代表者：岡村知子（地域学部地域学科国際地域文化コース）

医学部 大学院医学系研究科 附属病院





鳥大病院の『医療のエコWG』4Lの取り組み ～ 環境と医療の未来を創るプロジェクト ～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育、研究、社会貢献、課外活動、大学運営

【活動概要】

医療のエコ＝超高齢少子化が進む地方で、経済的、環境的にハイレベルの医療を持続するという考え方の提唱。鳥大病院では『医療のエコWG』を立ち上げ、資源・経費の無駄を省く「Less waste」、地域連携「Local Collaboration」、知識普及の「Literacy」、長寿命設計の「Long-life Design」の4Lを柱にした活動に取り組んでいます。具体的な活動には、CT画像共有システム「JOIN」や脳卒中搬送支援システム「JUST-7」といった救急医療のデジタル化、薬剤管理支援のシステム化、廃棄物の排出量を減らすためのゴミの分別意識改革および病院と行政の文書を安全に電子連携し効率化する「Trip」システムおよび電子決裁システムの導入による事務作業の効率化などがあります。また、患者リテラシーイベント、健康増進啓発イベントの開催、新病院建設を見据えた温室効果ガス削減目標の検討や、DNAR（蘇生に関する意思決定）に関する地域プロトコール整備といった、広範なテーマを議論しています。

鳥取大学医学部附属病院医療の4Lエコ

鳥大病院の医療のエコ

Less waste

- ・省エネ
- ・ペーパーレス化
- ・医療材料等搬送の効率化
- ・オーダリングシステム
- ・ゴミの削減とリサイクル
- ・業務作業の効率化
- ・後払いシステム
- ・重複検査の削減
- ・健康増進

新病院建築の医療のエコ

Long-life Design

- ・自然エネルギー発電
- ・建築寿命の延長
- ・廃棄物やCO2排出を削減
- ・製品や機材の長期利用
- ・ゴミの削減とリサイクル
- ・災害時避難 防災機能

現場と医療をむすぶ、スマートエコ

Local Collaboration

- ・DXを用いた消防と医療機関の情報共有
- ・DXによる遠隔診療 遠隔支援
- ・検証会によるフィードバック
- ・プロトコールの整備（DNARなど）
- ・プレホスピタルケア（ドクターヘリ）
- ・病院機能分担（住み分け）下り搬送

市民や患者の医療のエコ

Literacy

- ・診療時間内の受診
- ・処方薬の服用
- ・薬手帳の持参
- ・かかりつけ医
- ・不要な救急受診を控える
- ・適切な救急車の利用
- ・市民講座
- ・ unnecessary 検査依頼



DXを用いた遠隔医療支援

【代表者】 鳥大病院『医療のエコWG』座長 上田敬博

子ども第三の居場所『tetote～つなぐん家～』でのボランティアと レモネードスタンドによる募金活動

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

社会貢献、課外活動

tetote～つなぐん家～



【活動概要】

ボランティアサークルnecoteは「猫の手を借りるくらいのささやかなサポートを」をモットーとしているボランティアサークルです。メインの活動として「te to te～つなぐん家～」でのボランティアとレモネードスタンドによる募金活動を行っています。

「te to te～つなぐん家～」は子どもにとって学校でも家庭でもない第三の居場所づくりを行っている施設で、病気や発達障害、いじめや不登校、ネグレクトやヤングケアラーなど様々な困り感を抱えた子どもたち（会員の子どもは小1から高卒まで）の自立支援に取り組んでいます。necoteではそんな不安や悩みを抱えた子どもたちが、安心して穏やかに過ごせるよう、子どもたちと一緒にその場を全力で楽しみながら、心の機微を観察し見守っています。一緒に遊んだり、宿題を一緒に頑張ったり、ご飯を食べたり、夏休みにはお泊りキャンプに参加したりと「半分利用者、半分スタッフ」として居場所づくりに貢献しています。

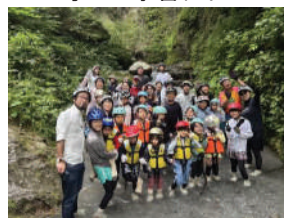
レモネードスタンドとは小児がんの治療研究を支援するためレモネードを販売しその収益を寄付する社会貢献活動です。私たちはその理念に共感し、医学部の学祭である錦祭でレモネードスタンドを出し、売上から経費を除いた全額を鳥取大学小児病棟に寄付しています。



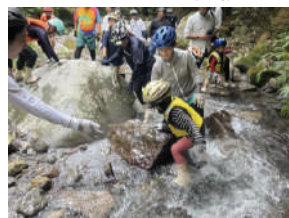
毎日の学習タイム



クリスマス会開催



夏のキャンプでシャワークライミングに挑戦



錦祭でのレモネードスタンド



【担当】 鳥取大学医学部 ボランティアサークルnecote

（担当教員：脳神経小児科学分野 教授 前垣 義弘）

遊びを通じて届ける笑顔と安心
～子どもと家族の心を支える学生の取り組み～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

課外活動



【活動概要】

◎活動の場

- ・鳥取大学医学部附属病院 小児病棟
 - ・鳥取大学医学部附属病院精神科 児童・思春期病棟
 - ・鳥取大学医学部附属病院 すぎのこ保育所
- の3か所で主に活動を行っています。

◎小児病棟

病室を学生が訪問し、折り紙やゲームなどで子どもたちと遊ぶことで、入院生活の中に楽しみや社会的つながりをもたらします。また、その間は入院中の子どもにつきっきりになる保護者の方に休息の時間を持っていただくことも目的としています。

◎児童・思春期病棟

学生が健康な大人のモデルとして関わり、ボードゲームや室内で行える身体活動、勉強などそれぞれの子どもがやりたいことを通して安心できる交流の場を提供しています。医師でも看護師でもなく、年齢の近い学生だからこそできることを意識しています。

◎すぎのこ保育所

子どもたちとの遊びを通して社会性や感情表現を育むサポートを行っています。

小児病棟での活動



【担当】パッチアダムスクラブ

(担当教員: 鳥取大学医学部附属病院 小児科 助教 宮原史子)

鳥取大学医学部学生による思春期ピアカウンセリング・エデュケーション
＝鳥取県委託事業＝

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

社会貢献



【活動概要】

鳥取県は人工妊娠中絶実施率が全国比で高率です。鳥取県の委託により、平成16年より本学の学生を中心に「**思春期ピアカウンセラー®**」を養成し、鳥取県内の中学校・高等学校や団体等に出向いて、ピアエデュケーション（仲間教育）を実施しています。実施内容は各団体のニーズに合わせ、性＝生の教育を中心に、人と人との関係性、妊娠・性感染症、ジェンダー、デートDV等をテーマに、中学生や高校生と比較的年齢の近い大学生世代が“Peer＝仲間”として実施しています。

思春期ピアカウンセラー®は、思春期の特徴や性に関する様々な知識、カウンセリング技術等について、計45時間の講義や演習等を受け、「JPCA EA日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会®」の認証を得てから活動に出向いています。

【担当】医学部サークル Peer in Heart

(担当教員: 医学部保健学科母性・小児家族看護学 教授 鈴木康江/助教 大島麻美)

学 生 の ピ ア 活 動
全ての子どもたちに正しい情報の提供



学生のコミュニケーションスキルの獲得



学生主体で地域社会への貢献活動

活動実績 (R6年度)
中学校 2校
高等学校 1校
＊その他、保健所の性感染症予防・デートDV予防啓発等に参加



性感染症予防啓発
ステッカーのデザイン

デ11 DV予防
啓発ポスター展示

EBウイルス再活性化に誘導される抗体産生 ：再活性化からIgM産生の経路遮断による自己免疫疾患の治療

医学部
大学院医学系研究科
附属病院



[概要]

自己免疫疾患は慢性に経過して、徐々に機能障害や臓器障害が進行し、生活の質に重大な低下をもたらす。その治療は長期にわたり、副作用も大きく、再発、再燃の可能性もある。

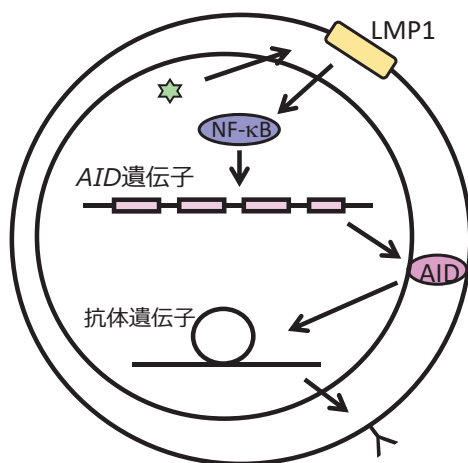
我々は、EBウイルスの再活性化によるIgM型抗体の産生から病原性のIgG型抗体産生の経路を示しており、この経路の遮断によるIgG型自己抗体産生抑制による、自己免疫疾患の根本的で安全な治療をめざしている。

EBウイルスはB細胞に感染する

EBウイルス再活性化により、B細胞は形質細胞に分化し抗体を産生する

産生された抗体はIgM優位で、標的組織を破壊し、細胞内抗原の流出にはたらく。

EBウイルスがB細胞の膜に誘導するLMP1はさらにNF-κBを誘導する



EBウイルス感染によりB細胞は活性化しクラススイッチの酵素 (AID) も誘導するため各アイソタイプの抗体が出せるようになる

循環中に流出した自己抗原に対して、病原性のIgG型自己抗体が産生される。

担当：長田 佳子、今村 武史
(医学部 医学科 薬理学・薬物療法学分野)

日常生活に潜む依存症・行動嗜癖に関する疫学研究 ～実態把握、診断方法開発、治療方法開発、社会還元、医学教育～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育、研究、社会貢献の融合



【依存症・行動嗜癖研究】わが国における喫煙、飲酒、ゲーム使用(ネット使用)、ギャンブルの実態(中高生、若年者、一般成人)を調べ、依存や嗜癖疑い者の頻度や関連要因、それらの年次推移を調査しています。
【女性の飲酒調査】女性の多量飲酒者の飲酒行動の履歴、関連要因を質的調査(面接調査)により詳細に分析しています。
【ゲーム障害スクリーニングテストの開発】ゲーム障害疑いを見つけるアンケート調査項目を開発しています。
【介入方法の開発】問題飲酒者の飲酒量や飲酒頻度を減らすために、カウンセリングによる介入方法を開発し、その効果を検証しています。無作為化比較試験という方法で検証しています。
【社会還元】調査結果を論文だけではなく、一般住民へ伝えるためにメディア出演、講演会、行政の委員会を通して社会還元、周知しています。
【医学教育】医学教育において、様々な依存症、行動嗜癖について講義や当事者の体験を通して学ぶ機会を設け、依存症への理解を深めること、学生自身の予防についても注意喚起しています。

アルコール依存症生涯経験あり



中学・高校生のネット依存が疑われる者の割合の変化



調査対象者: 100,500名(2012), 64,000名(2017)
評価尺度: Diagnostic Questionnaire (Young & 1998) の 35 項目

Mihara S et al. Addict Behav Rep. 2018
精神科臨床から見た研究報告書, 2019



アルコール依存症当事者12の家族から体験や思いを聞く特別講義

【担当】医学部環境予防医学分野

研究成果の報道内容

1. 山陰の山間へき地での地域医療体験実習(中山間へき地での地域包括ケア) 2. 山陰の各地に出向く、課題解決型・地域実践教育(高齢者保健、学校保健)

地域に出向き、実践の中で学ぶ医学教育

医学部
大学院医学系研究科
附属病院



【研究室配属(医学科3年)鳥根県浜田市弥栄診療所】地域の維持すらままならない山陰の中山間地での地域包括ケアシステムの維持・発展させるための提言を見出すため、問題解決型の授業を実施した。地域連携授業の目的は、家庭訪問やインタビューを通して、住民の暮らし、生活環境、健康問題やそれに対する態度などを学び、医師の役割と地域医療の在り方について考える、望ましい地域医療が醸成される要因を考察する、今後の弥栄の地域包括ケアにとって大切なことを提案するである。体験型、問題解決型、アクティブラーニングの典型例である。

【社会医学チュートリアル実習(医学科4年)米子市、大山町、松江市東出雲町】地域の現場へ学生と共に出かけ、地域住民、児童生徒、保健医療福祉関係者、学校教育関係者等との接点の中で学ぶ、問題解決型、アクティブラーニングである。米子市では、高齢者を対象としたフレイル予防に関する健康教室、大山町では、山間地の小学生を取り巻く地域社会の実態調査を通じた放課後活動の提案、東出雲町では実態把握に基づいた望ましい生活習慣やメディアコントロールに関して保健教室を行った。

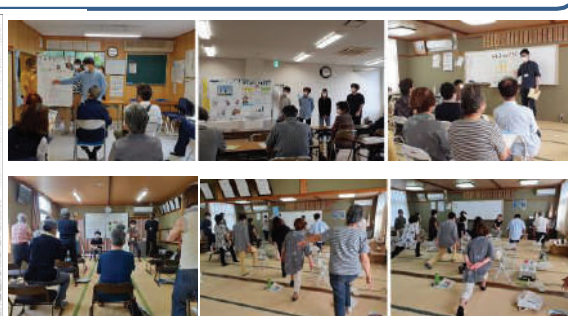
いずれの教育プログラムも、学生と地域社会との相互作用による相互にメリットのある実践型教育となっている。



地域医療実習



6/7～7/12 のべ16地区



地域健康教室

【担当】医学部環境予防医学分野

鳥取県と鳥取大学医学部の協働による公衆衛生医養成 ～鳥取県公衆衛生体制強化事業＝公衆衛生医を増やし支える～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

大学公衆衛生医と保健所医師の連携強化を通じた公衆衛生医養成



公衆衛生医を増やし支える取り組み

コロナ禍で、公衆衛生医不足が顕在化し、大学が鳥取県と協定を結び、鳥取県+鳥取市の予算で、特命助教を採用し、公衆衛生医を増やす取り組みを開始(鳥取県公衆衛生体制強化事業)。

1. 増やす取り組み

毎年の社会医学系専門医説明会(医学生、卒後医師対象)卒業生等、相談者からの相談に随時乗る

2. 支える取り組み

- ・環境予防医学分野スタッフが毎週ローテーションで米子保健所・倉吉保健所・鳥取市保健所のいずれかに1日勤務し、保健所での様々な相談、管内市町村からの相談に乗る。
- ・県下の公衆衛生を結ぶオンライン勉強会を毎月実施し、情報交換、研修・学会での学びの共有、各種相談について話し合う。
- ・最近採用された若手医師はすべて、社会医学系専門医制度(鳥取プログラム)の専攻医となり、専門医取得者も排出。
- ・若手専攻医はすべて、大学の社会人大学院生にもなり、既に博士(医学)取得者も排出。これらは大学の公衆衛生医が学位研究を指導している。

3. 採用実績

事業開始以来採用実績を積んでいる。2021年より毎年のように入職者があり、のべ6名入職し、4名が残っている(2名は他県で産業医、医系技官経験後臨床医となっている)。



保健所地域診断検討会



専門医プログラム説明会



保健所スタッフへの講演



保健所医師勉強会(Web)



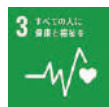
医学科の外来講師を交えた相談会



鳥取県公衆衛生体制強化事業を全国学会で紹介

口唇口蓋裂児へのチーム医療による一貫治療 ～乳児期から成人期にかけて～

教育、研究、社会貢献、大学運営



医学部
大学院医学系研究科
附属病院

【活動概要】

口唇口蓋裂の治療は、出生後できるだけ早期に鼻や歯槽を患者個々に製作した器具を用いて矯正する**PNAM治療**から始まり、口唇形成手術、口蓋形成手術を行い、言語治療を開始します。必要に応じて第1大臼歯が生えたころから歯科矯正を開始し、顎裂部骨移植手術や顎矯正手術を行います。

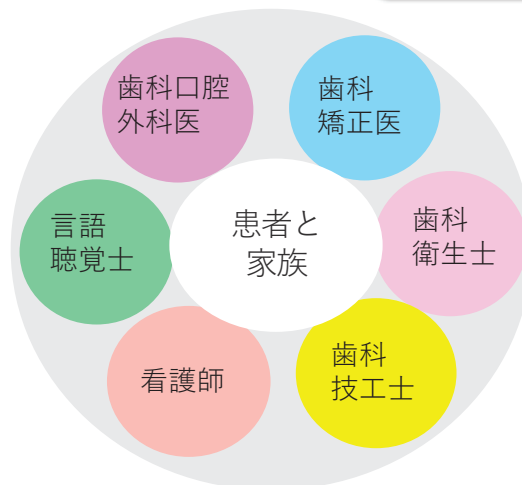
この治療は、小児科より出生後早期にご紹介をいただく体制のもと、口腔外科医、歯科矯正医、言語聴覚士、歯科技工士、歯科衛生士、看護師など多くの職種によるチーム医療により実践されています。またそれぞれの患者に最適な治療を提供するために、多職種による、口唇裂・口蓋裂言語カンファレンスを定期的に開催しています。

また、口唇口蓋裂治療については学生教育の中にも取り入れ、地域医療の向上のために、この疾患に対する知識を持つ医師の養成に努めています。

さらに、口唇口蓋裂治療の国際的医療支援にも参加し、海外の多くの患者・家族に福音を与える活動にも継続的に取り組んでいます。

【担当】

土井理恵子・片岡伴記・藤井信行（医学部医学科口腔顎顔面外科学分野）
中力直樹・生田三佳（診療支援技術部歯科口腔外科技術領域）
玉川友哉（診療支援技術部リハビリテーション技術領域）



モンゴル

2011, 2012, 2013年



ベトナム

2016, 2017, 2018, 2024年

（* 2019～2023年はCOVID-19のため活動休止）

胃癌腹膜播種の治療抵抗性に関与するメカニズムの解明

研究

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

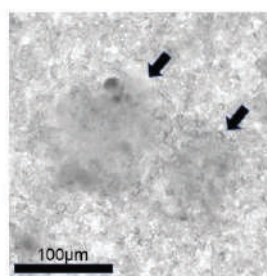


【活動概要】

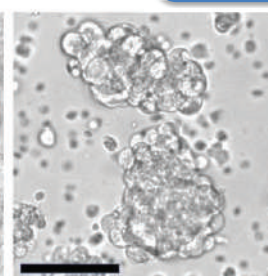
これまでに、胃癌腹膜播種患者の腹腔内に直接抗癌剤を投与する腹腔内化学療法が一定の有効性を示すことが報告されており、当院でも2017年から臨床研究として腹腔内化学療法を施行し、一定の成果を上げています。その中でも、腹水中の浮遊のがん細胞クラスターにはこの化学療法は有効であるが、播種結節に対しては効果が限定的である知見を得ました。

そこで、腹膜中皮とがん細胞クラスターの相互作用に焦点を当て、腹膜播種治療のさらなる活路を見いだすことを目指しています。

実際には、京都大学の井上研究室と共同研究の上、オルガノイド培養技術であるCTOS法（クラスターとしての特性を維持できる）を用いてこれらの研究を行っていきます。

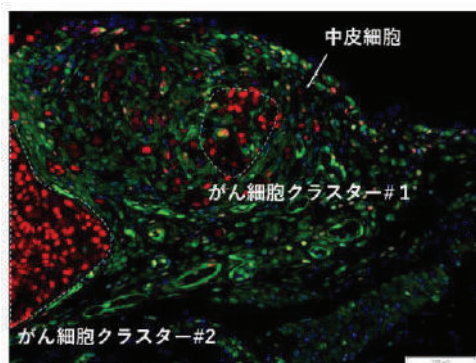


Ascites



CTOS

他の癌腫（卵巣癌の腹膜転移症例）でもがん細胞はクラスターで存在しており、CTOS法を用いて研究をする意義は大きい。



マウス腹膜播種モデル(卵巣癌)

赤: PCNA
緑: マウス特異抗体
青: DAPI

増生した中皮細胞はがん細胞クラスター#1の全周を、#2の側面のみを被覆している。

卵巣癌腹膜播種は、中皮細胞に完全に被覆された場合にはがん細胞の分裂が低下し、被覆が不完全な場合には分裂能が保たれることが明らかになっている。胃癌でも同様のことが起こっている可能性がある。**14**

【担当】 清水翔太・藤原義之

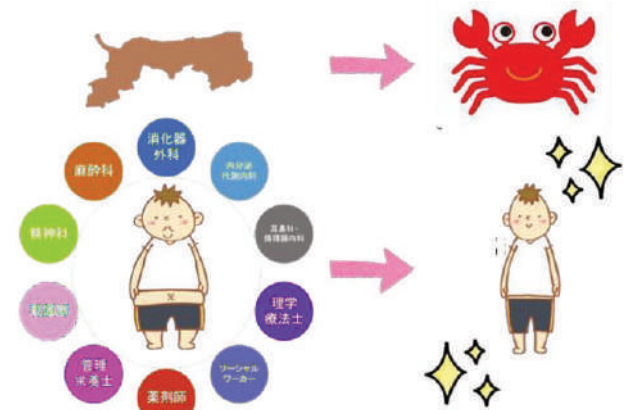
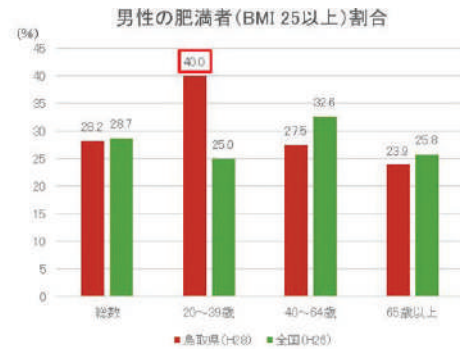
（医学部 器官制御外科学講座 消化器外科・小児外科）

社会貢献



【活動概要】

高度肥満症に対する外科治療が、全国で急速に普及してきています。鳥取県でも働き盛りの男性の肥満者の割合が全国平均より高くなっており、本術式の導入が急務です。当院でも外科・内科を中心にチームを結成し、高度肥満症患者に対して、食事療法・運動療法・薬物療法などの内科治療から、適応があれば外科治療まで、包括的に取り組むことができるフローを構築しました。現時点で、山陰地方で高度肥満症に対する外科治療を導入している施設はなく、山陰初の高度肥満症に対する外科治療成功施設を目指して、チームで肥満症治療に取り組んでいます。



『カニが取れる鳥取県、脂肪も取れる鳥取県』を目指して、チーム全員で取り組んでいます！

【担当】 藤原義之・宮谷幸造

(医学部医学科病態制御外科学分野)

新規分子に注目した膵がんの薬剤治療抵抗性メカニズムの解明
—治療への応用を目指して—

研究

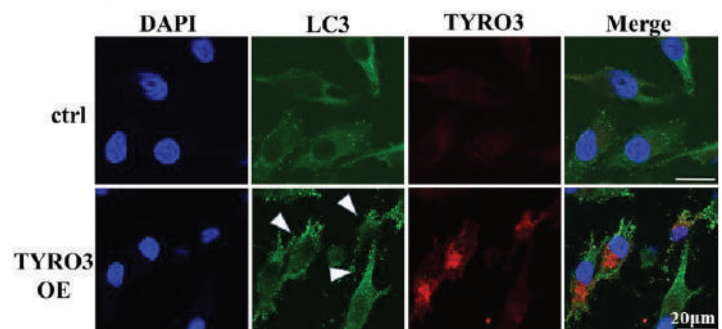


【活動概要】

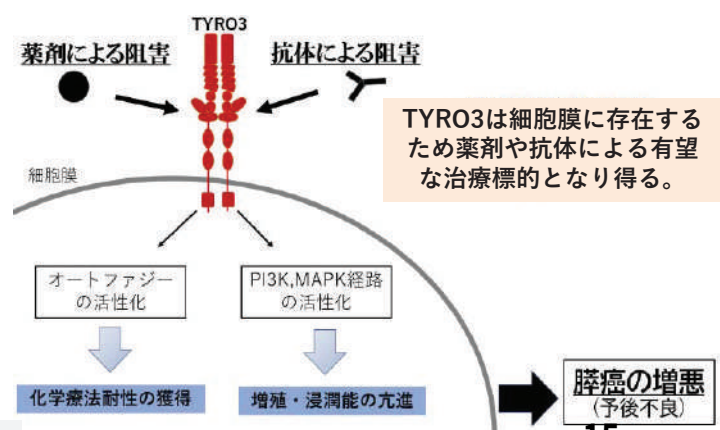
膵がんは代表的な難治癌の一つであり、その一因として化学療法への抵抗性を示すことが挙げられます。膵がんの生存率を向上させるためには治療抵抗性を示すメカニズムを解明し、新たな治療薬を開発する必要があります。

我々は、新規チロシンキナーゼ受容体であるTYRO3が膵がんの増殖・浸潤機構を担う重要な分子であることを明らかとしました。

最近の研究で、TYRO3の発現が選択的オートファジーを制御することで化学療法抵抗性を惹起する可能性について見出しており、最終的にはTYRO3を標的とする新たな膵がん治療薬の開発を目指しています。



TYRO3の活性化はオートファジー(LC3)の亢進を促す



【担当】 原和志・森本昌樹・藤原義之 (医学部医学科
消化器・小児外科学分野)

新規微小管安定化剤の開発 ー消化器がんの新たな治療薬としての可能性ー

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

微小管はチューブリンの重合によって構成される主要な細胞骨格の一つであり、重合と脱重合を繰り返す事による形態変化”微小管ダイナミクス”により細胞構造の維持、細胞内輸送、細胞分裂に関与しています。鳥取大学大学院工学研究科(松浦和則教授, 稲葉 央准教授)において開発されたTau由来ペプチドTPとその化合物が微小管安定化能を持つことに着目して、当教室ではそれらが消化器がんに対して抗がん効果をもたらすことを示しつつあります。さらに、ある種の光刺激によって微小管の安定化がさらに向上する事を発見しており、TPを基軸とした微小管安定化剤の可能性を探索し、新たな治療薬剤の開発を目指します。

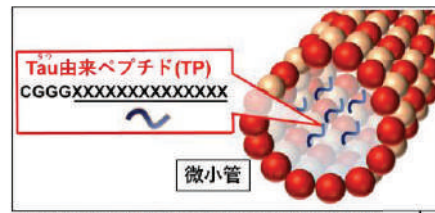
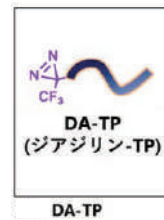
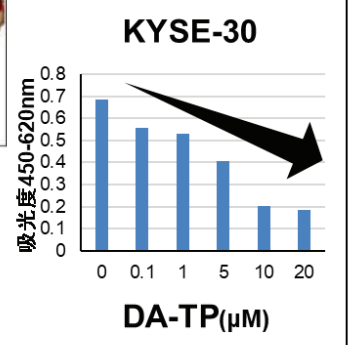


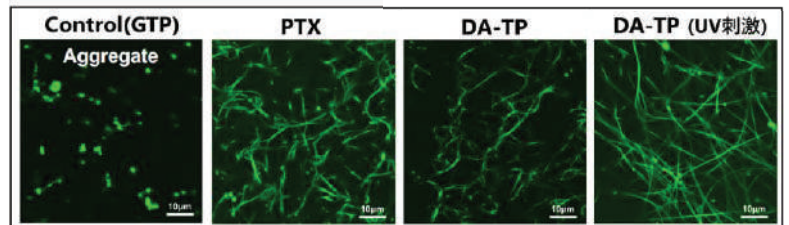
図1. 微小管とその内層に結合するタウ由来ペプチド(TP)



DA-TP



DA-TPは濃度依存的に増殖抑制作用を示す
Morimoto, 未発表データ



DA-TPは微小管の安定化を促進させる。(未発表データ)

【担当】 森本昌樹・藤原義之 (医学部医学科消化器・小児外科学)

小児短腸症候群、及び長期静脈栄養に伴う腸管不全関連肝障害(IFALD)における肝クッパー細胞の炎症病態に関する研究

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】 新生児期での壊死性腸炎や中腸軸捻転、腸閉鎖症に対する手術後にみられる短腸症候群とこれに必要な長期静脈栄養において、腸管不全関連肝障害が高率に合併し、患児の予後を極めて悪くしている。対処方法は静脈栄養の工夫や腸管の延長術や成長を促す薬物療法、小腸肝移植などが試みられているが、いずれも肝臓に直接作用するものではない。我々は腸管不全に伴い腸内細菌からのエンドトキシンと静脈栄養からのω6系多価不飽和脂肪酸によって肝クッパー細胞から発現する炎症病態(xCT)が重要と考え、ノックアウトマウスを用いて実験を行っている。図1のように15グラム程度のマウスに80%以上の小腸を切除、吻合を行った。4週間程度生存するモデルが得られている。図2には同マウスの肝臓である。各種染色やxCT発現を検討中である。肝障害におけるxCTの役割が明らかになれば、その拮抗薬や抗体などにより肝障害が予防できることが期待され、患児の予後に大きく貢献する。

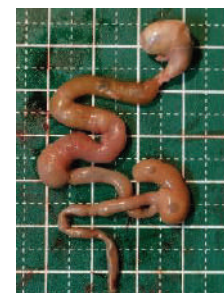


図1 80%小腸切除の短腸モデルマウス



図2 同モデルマウスの肝臓

【担当】 消化器小児外科 生化学

増田興我、長谷川利路、高野周一、中曾一裕、藤原義之

胆汁漏“0”目指した肝切除への取り組み ～ICGを用いた胆汁漏※注の術中高感度検出能評価のための臨床研究～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

血中に投与されたICG(Indocyanine green、インドシアニングリーン)は胆汁中に排泄される性質があり、肝切除の際に肝離断面をICGカメラで観察することで、ICGの混じった胆汁が高感度に検出できることを当教室から報告しました(Hanaki et al. DOI: 10.1002/ccr3.5942)。

この性質を、胆汁漏の予防に利用することができると考え、ICGの胆汁漏※注)軽減効果に関して、特定臨床研究(ICGによる肝切除後胆汁漏出の術中検出システム開発の非盲検、非無作為化臨床研究;JRCTs061210043)を当教室で実施中です。

ICGの胆汁漏軽減効果を証明し、ICGの肝離断における胆汁漏検出に対する新規用法収載と、より安全な肝切除術の実践を目指しています。

※注:「胆汁漏」とは、肝離断面から消化液である胆汁が腹腔内に漏れ出る状態を指します。胆汁漏が生じた結果、肝切除後の入院期間が延長したり、致命的な合併症が継続したりすることがあるため、胆汁漏を未然に防ぐことは肝切除における大きな命題です。

【担当】花木武彦・後藤圭佑・村上裕樹・徳安成郎・坂本照尚・藤原義之(医学部医学科消化器・小児外科学分野)



図1; 肝離断面の肉眼観察。明らかな胆汁漏出は認めず、ガーゼの胆汁汚染も指摘できない。(* 肝離断面に露出された肝静脈)

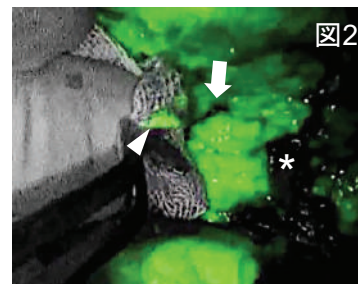


図2; 肝離断面のICGカメラ観察(図1と同一症例)。胆汁の漏出部位(矢印)がICGのガーゼ汚染(矢頭)として確認できる。(* 肝離断面に露出された肝静脈)

こののち、胆汁の漏出部位に縫合を加えて、漏出停止を確認した。

大山健康プロジェクト

教育、研究、社会貢献、課外活動、大学運営



【活動概要】

大山町大山地区をフィールドとして、医学部の教員と学生が、自主的な地域づくり組織「まちづくり大山」の皆さんと協働して、健康で安心して暮らせるまちづくりを模索しています。主な活動として、平成29年度に大山農村環境改善センターにおいて、健康についての講話や地域資源のマッピング、ワールドカフェなどを行い、30名近くの住民の方々と交流しました。平成30年度からは、毎年、希望のあった集落において健康講座を実施しています。住民の方々にとってより身近な各集落の公民館(集会所)を訪問し、延べ200名を超える住民の方々にご参加いただき、現在も継続中です。内容は、大山賛歌体操や大山診療所長の井上先生を中心に「家庭医とは?」といった講話、ワークショップなどです。また、活動の1つとして、地域課題や地域の強みについて適宜、調査しています。住民ニーズに沿って、昨年度から金城先生を中心に大山小学校の児童が放課後に大学生と様々な形で触れ合う、「大山のびのび道草プロジェクト(詳細は環境予防医学分野HP参照)」がスタートしました。実際に活動に参加した学生にとって、住民の方々との交流は何ものにも代え難い体験となっています。今後も住民の方々が健康で安心して暮らすことのできるまちづくりを目指して取り組んでいきます。

【担当】金田由紀子(医学部 保健学科 地域・精神看護学講座)
金城文(医学部 社会医学講座 環境予防医学分野)
井上和興(医学部 地域医療学講座)(大山診療所)

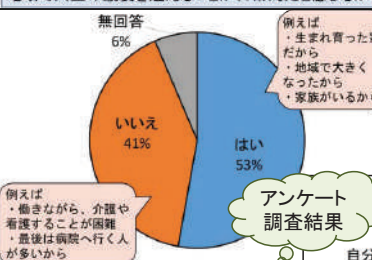
医学部
大学院医学系研究科
附属病院



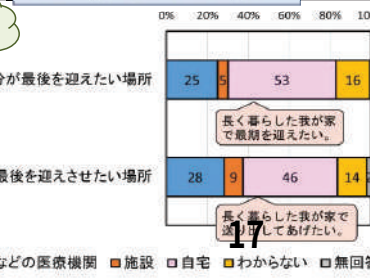
話が弾んでいます！



地域で人生の最後を迎えることが日常的だと感じるか



人生の最後を迎えたい場所



ネットによる遠隔ペアレント・トレーニングの開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究・社会貢献



鳥取大学方式
ペアレントトレーニングの
ワークブック

【活動概要】発達に遅れや偏りのある子どもの子育ては、養育者にストレスや不安をもたらします。ペアレントトレーニングは親と子どもの行動変容に対してエビデンスのある方法とされています。ネットを使ったプログラムによって、離島や山間部、海外といった支援が届きにくいご家庭にもとどけることができます。私たちはネットによる遠隔ペアレント・トレーニングプログラムを開発・普及することに加えて、ペアレントトレーニングを実施する支援者の研修やスーパービジョンにも力を入れています。



【担当】 井上雅彦（医学系研究科臨床心理学講座）

強度行動障害のある人の行動記録アプリケーションの開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究・社会貢献



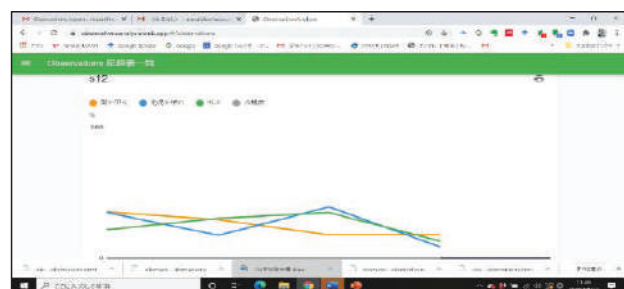
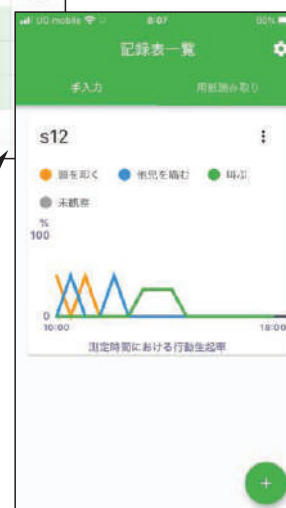
アプリ入力画面

【活動概要】

強度行動障害とは、自傷行動や他害・破壊的行動、こだわり行動などにより、社会参加が困難になる状態をいいます。知的障害・自閉症のある方の数パーセントが該当するといわれています。行動障害の治療には、その指標として客観的なデータが必要です。私たちは、現場でだれでもが簡便・かつ正確に記録できるアプリケーションを開発しています。アプリケーションはスマートフォンやタブレット端末で使用できます。家庭、学校、福祉、医療現場でのご意見を基にアップデートを行っています。



アプリ表示画面



パソコン上での分析画面

【担当】 井上雅彦（医学系研究科臨床心理学講座）

留学生のメンタルヘルスに関する取り組みと研究

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

📖 教育、研究、課外活動



【活動概要】

留学するとこれまでとは異なる環境に身を置くことになるため、文化適応、言語の習得、経済面での懸念、差別など、さまざまな困難に直面しやすくなります。そのため、留学が学生のメンタルヘルスに与える影響は大きいとされていまし。しかし、日本の留学生を対象としたメンタルヘルスに関する取り組みや研究は未だ限られている現状があります。

そこで、臨床心理学講座では、国際交流センター・国際交流課と連携し、本学の留学生を対象として、日本語・英語でメンタルヘルスに関するセミナーを毎年開催しています。セミナーでは、留学生のメンタルヘルス意識の向上を目指すとともに、サポート資源の周知や、メンタルヘルスの問題にどのように対応したら良いかについて考え、話し合う機会を提供しています。さらに、留学生を対象とし、メンタルヘルスについてのアンケート調査を行い、本学の留学生のメンタルヘルスの実情の把握につとめています。



【担当】 細田珠希 （臨床心理学講座）

附属病院医療従事者を対象としたダイバーシティ(LGBTQIA+)研修プログラムの開発と効果測定

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

📖 教育、研究



【活動概要】

LGBTQIA+の当事者の方の約半数が医療において嫌な体験をしたことがある、また医療にかかるのをためらったことがある、との報告があります。一方、医療従事者にとっても、ダイバーシティに関する十分な教育の機会が提供されていないという現状があります。すなわち、医療に特化したダイバーシティ研修は日本ではほとんど行われていないと言えます。

そこで、本研修は医療従事者を対象としたダイバーシティ研修プログラムを開発・実施し、その効果を測定することを目的とします。研修では、医療従事者が知っておきたい LGBTQIA+に関する基礎的な知識に加え、当事者の患者にどう接したら良いか、カミングアウトにどう対応できるか、といったすぐに使える知識を盛り込みます。

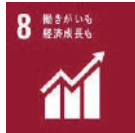


【担当】 細田珠希 （臨床心理学講座）

うつ病の認知機能障害を簡便に捉えるための思考の柔軟性検査の開発

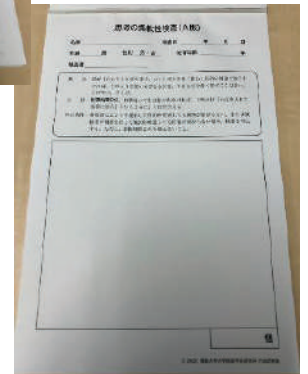
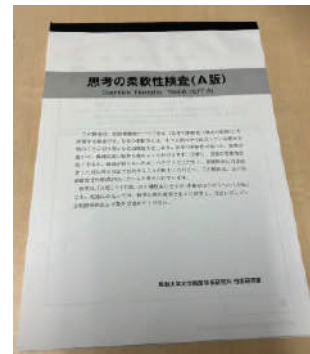
医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究、社会貢献



【活動概要】

うつ病を患うと抑うつ気分が慢性化し、日常生活を障害することが知られています。さらには、重症化すると自殺を引き起こす病気であることも知られていることから、うつ病からのよりよい回復は非常に重要な研究テーマです。うつ病治療は服薬やカウンセリング等、様々な方法を用いて抑うつ症状を軽減することを目的として行われます。しかし、うつ病の重要な問題の一つに、抑うつ症状が軽減した後でも、「言われたことをすぐに忘れてしまう」「一つの考えにこだわってしまい、考えを切り替えることが難しい」等の認知機能障害が残ることが分かっています。この認知機能障害により、復職等の社会復帰が遅れてしまうことが問題となっています。そこで、我々はうつ病による認知機能障害を簡便に評価するための思考の柔軟性検査の開発を行っています。この検査を使用し認知機能を簡便に評価できるようになることで、うつ病治療の早期から認知機能障害をターゲットとした介入を実施することができるようになり、将来的にはこの思考の柔軟性を向上させるための独自の介入法を開発し、うつ病治療をよりよく発展させる予定です。



思考の柔軟性検査

【担当】福崎俊貴（医学系研究科臨床心理学講座）

地域共生社会の実現に向けた官民共同によるコミュニティづくり

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

社会貢献



【活動概要】

私たちの国では、経済的・社会的な余裕がなくなり、自己責任論が幅を利かせています。こうした条件が伴うと、弱者に対する風当たりが強まります。弱者を排他する心理は、「弱者は自分とは無関係な存在である」という理解からも起こります。しかし、弱者とは、「時間軸の異なる自分」のことだと、私たちは考えています。つまり、かつての自分やいつか訪れる自分が、弱者の本体なのです。そう考えると、居心地よい地域社会とは、誰もが安心して弱さを表すことができ、「支えを必要とする人がいれば、できる範囲で力を届けよう」という市民の連帯に基礎づけられたコミュニティだといえます。

そこで、私たちは鳥取県、米子市、多機関、市民と協同しながら、市民に向けたコミュニケーションスキル、市職員の断らない相談力や支援者の重層的支援力の向上などの研修、様々な事情を抱えた人を理解し共生するためのワークショップ、居場所づくりなど、鳥取県や米子市の孤独・孤立対策や重層的支援体制の整備発展に向けて、市民や専門家と連帯しながらチャレンジしています。



地域共生社会に向けたパネルディスカッション



関係者で作成した出版物



市職員、支援者、市民向けの対人援助研修

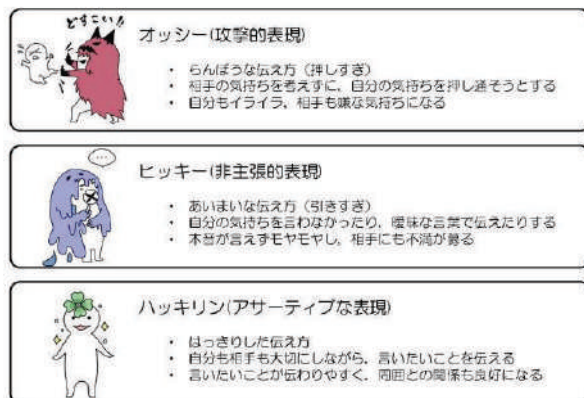
【担当】竹田伸也（医学系研究科臨床心理学講座）



【活動概要】

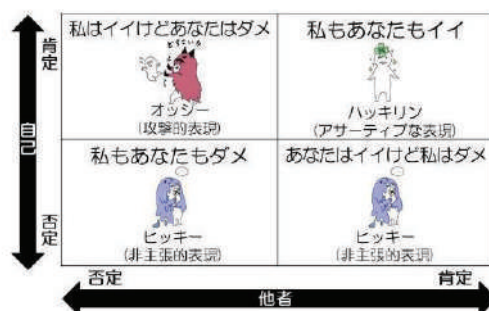
近年、価値観の異なる人同士が言い争う様子を、様々な媒体を通して目にする機会が増えています。このような実態は、意思疎通が難しい人間を排除し、自分と似た立場にある人との葛藤のない暮らしを志向する人が増えていることを示唆しているのかもしれませんが、たとえれば、これからの時代に求められるのは、価値観の異なる人同士が、互いに尊重しあってコミュニケーションする力です。そのような成熟を遂げるためには、世の中に対する構えの柔軟な子どもの頃に、「自他尊重の心」を育てることが重要だと思います。

そこで私たちは、価値観が違って、意思疎通が難しく感じられても、そこで諦めることなく互いにコミュニケーションする力を育むためのアサーション授業プログラムを開発しました。アサーションとは、互いを大切にしつつ意思を伝え受け取ることです。専門的な知識がなくてもスライドを使って授業を進めることができ、子どもたちが体験的に自他尊重の心に基づけられたアサーションを習得できる。そうした授業プログラムを全国に普及しています。



『ハッキリンで互いの気持ちをキャッチしよう』(2023)より

心の状態と自己主張の関係



『ハッキリンで互いの気持ちをキャッチしよう』(2023)より

【担当】竹田伸也 (医学系研究科臨床心理学講座)

非ABCE型ウイルス性肝炎の 発症機序の研究と治療薬候補の探索



解決すべき課題

非ABCE型ウイルス性肝炎の発症機序は不明であり治療法もまだない。

非ABCE型ウイルス性肝炎の発症機序の解明と治療法の開発を目指す。

① 非ABCE型ウイルス性肝炎

ウイルス性肝炎の1/3を占める

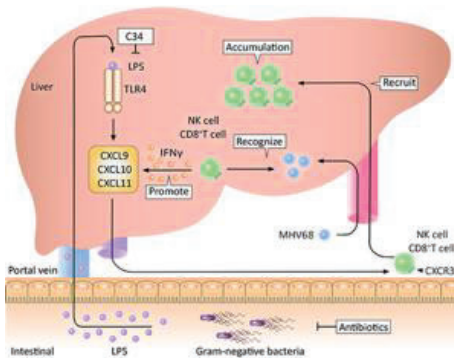
原因ウイルス	頻度
A型	17%
B型	32%
C型	5%
E型	12%
非ABCE型	34%

国立国際医療研究センター、肝炎情報センター、2. 急性肝炎の頻度
<https://www.kanen.ncgm.go.jp/cont/010/kyuusei.html> より作成

非ABCE型肝炎の疾患モデルとしてマウスヘルペスウイルス68 (MHV68) 感染マウスに生じる肝炎の解析を行っている。

② 発症機序の研究

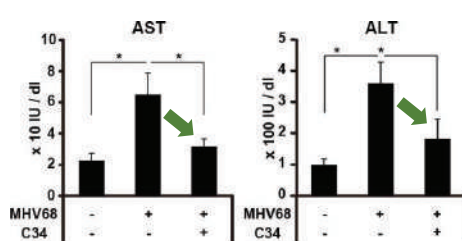
腸内細菌産物が肝炎の発症に関与する



腸内グラム陰性菌由来LPSが肝臓に移行しTLR4を介して肝炎を起こすと考えられた。(Kanai et al., J Immunol. 2018; Kanai et al., J Immunol. 2023)

③ 治療薬の探索

TLR4阻害剤が肝炎を抑制した



TLR4阻害剤を投与したマウスは、肝炎マーカーである血清中のAST・ALT量が低下した (Kanai et al., in submitting)。

非ABCE型ウイルス性肝炎の治療法開発への発展が期待できる。

季節性インフルエンザの 国内流行株・事前予測に挑む

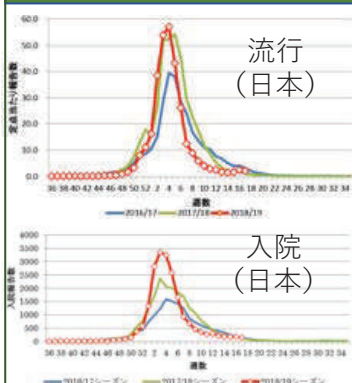
医学部
大学院医学系研究科
附属病院



インフルエンザウイルスが常在するインドネシアを観察拠点にして、日本の冬に流行する株を事前予測する。共同研究結果が、継続的に日印双方の利益となる感染症対策を目指す。

① 課題

本邦の流行規模・重症化

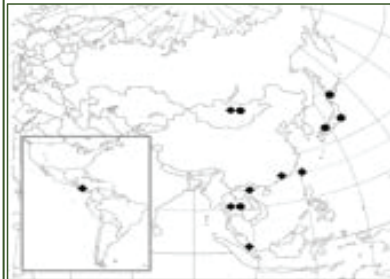


感染症研究所、厚労省
データを一部改変

② 事前観察の猶予期間

流行株は、100日以上変異しない事実を鳥取県他で実証済

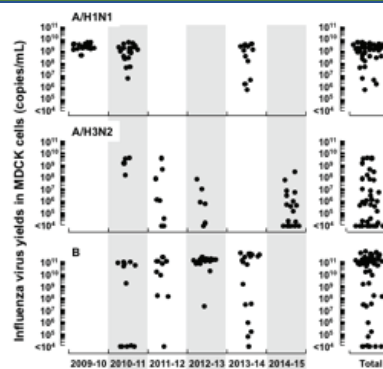
同一変異株を確認した地域



未変異ウイルス感染連鎖
(鳥取県、世界各地)
(Tokunaga et al. Arch Virol 2022)

③ 流行規模と重症化

高い増殖能を持つ変異株の関与の可能性が高い



増殖能の異なる株の流行
(鳥取県) (Tokunaga et al. Arch Virol 2021)

④ 社会実装

次の流行期に問題となるウイルスをインドネシアで事前把握する



担当: 医学部ウイルス学分野 ワルディ・パダナ、金井亨輔、景山誠二

アジアに引き続く、日本のエイズ 患者数の増加に備える

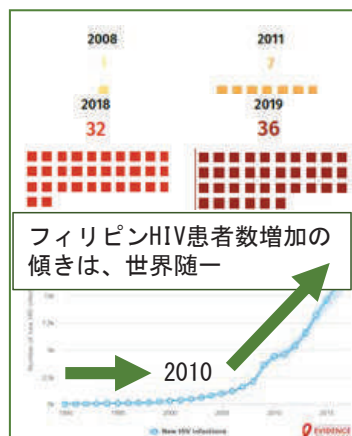
医学部
大学院医学系研究科
附属病院



「新たなHIV感染者の集積は、高増殖能株が偶発的に集積した結果」と仮定し、実験室内診断により検証すると共に、より簡便な診断法の開発を試みる。

① アウトブレイク

世界初の観察事例

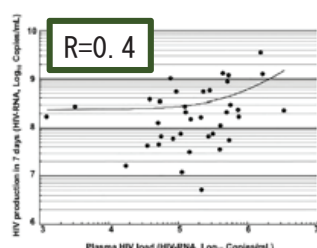


フィリピンHIV患者数増加の傾きは、世界随一

② HIV変異株

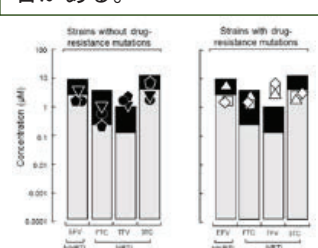
変異株の増殖能と血液中のHIV濃度は相関する。
高い増殖能株には、薬剤効果が減弱する

高増殖能株保持者の血中HIV濃度は高く、感染拡大に繋がる原因と考えられる。



Kageyama et al. JIAPAC
2019, 18: 1-8.

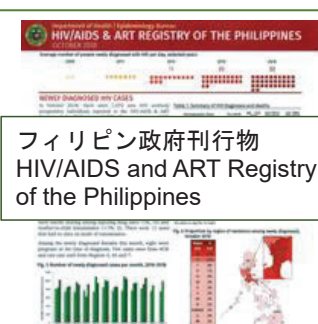
薬剤耐性株 (右図) と同様に、高増殖能株 (左図) は、治療薬では制御できない場合がある。



Alfredo et al. Int. J. Mol. Sci. 2022, 23, 15380.

④ 社会実装

政府刊行物に情報提供、
増殖能診断の開発



フィリピン政府刊行物
HIV/AIDS and ART Registry
of the Philippines

診断薬の開発: 高増殖能型のエイズウイルスの同定

担当: 医学部ウイルス学分野 景山誠二、金井亨輔

IVR(InterventionalRadiology)の啓蒙活動

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

課外活動



【活動概要】

IVR (InterventionalRadiology: 画像下治療) という言葉は医療に携わっていない限り、一般には馴染みがありません。そのため、自らが何らかの病に罹患した際、その治療法にIVRという選択肢があること自体を知らないことがほとんどです。自らがインターネットで調べ上げない限り、担当医が勧めるがままの治療法を受けている高齢者が多いです。末梢動脈疾患 (PeripheralArterialDisease) に対する経皮的血管形成術 (PTA: percutaneoustrans-uminalAngioplasty) がその例です。地元ケーブルテレビ局の健康講座に出演し、啓蒙活動を行っています。

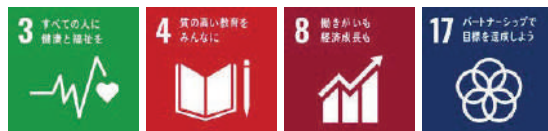


【担当】矢田晋作 (医学部医学科画像診断治療学分野)

韓国AsanMedicalCenterとの相互交流

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育



【活動概要】

当教室では、韓国AsanMedicalCenter (AMC) との相互交流を行っています。AMCは世界的にも有数のIVR実施件数を誇り、InternationalJournalや国際学会の場においても存在感は際立っています。

定期的にAMCから講師を招いて研究会を開催し、当教室からも医師を派遣しています。近年冷え込んだ日韓関係の中において、このような相互交流は個人個人の対韓感情・対日感情が融和することに繋がります。隣国との友好関係は個々から回復していることも可能と考え、この関係性を維持していきます。



【担当】矢田晋作 (医学部医学科画像診断治療学分野)

災害時の避難と福祉避難所をみんなで考えよう ～医療的ケア児(者)が利用しやすい福祉避難所の創設を目指して～

社会貢献、課外活動、研究



医学部
大学院医学系研究科
附属病院

セミナー開催



シミュレーション開催



医療的ケアの
避難物品(例)



机上
シミュレーション



避難シミュレーション



福祉避難所設立シミュレーション

【活動概要】日常生活を送る上で医療的ケアを必要とし在宅生活を送る「医療的ケア児は国内に約2万人と推計されています。2016年に内閣府は東日本大震災における障がい者の死亡率は健康者の死亡率の2倍と報告しました。

医療的ケア児(者)やその家族に対して、自助に焦点を当てた活動はありませんが、公助や共助に対する介入は少ないのが現状です。

現在、福祉避難所の選定は進みつつあるものの、多くが高齢者施設であり、障がい者施設は25%、特別支援学校は10%未満と医療的ケア児の避難先の少なさも見受けられます。

そこで我々は、「公助」の部分に焦点を当てた活動をしたいと考え、鳥取県と協力しながら、市町村や特別支援学校への働きかけを行なっています。医師や看護師から行政スタッフや教職員に向けてのレクチャー、机上シミュレーション、避難シミュレーションを市町村に出かけて活動しています。

我々の活動から自治体のマニュアル改訂や鳥取県の政策への反映に至っています。

今年度は鳥取県立皆生養護学校で防災フェスタを行い、医療、行政、福祉、教育が一同に介して医療的ケア児(者)の災害時の避難と福祉避難所に関して検討する場を設けます。

公助についての働きかけから、共助にも自助にも影響を及ぼしています。

【担当】中村裕子(医学部医学科 脳神経小児科学分野)

連携:鳥取大学医学部附属病院 高度救命救急センター

写真から褥瘡の評価を行う人工知能モデルの開発

研究



医学部
大学院医学系研究科
附属病院

【活動概要】

褥瘡(じょくそう)は、長期間の臥床や活動制限によって起こりやすい皮膚の損傷で、いったん発生すると治療が長引き、患者さんの生活の質を大きく損なうとともに、医療現場にとっても大きな負担となります。

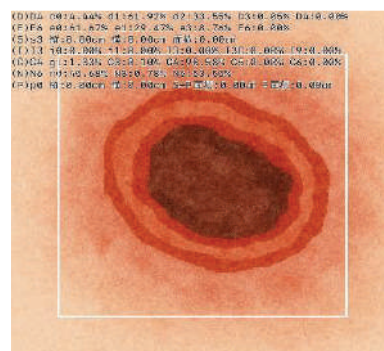
私たちは、この褥瘡の写真を解析して重症度を自動判定する人工知能モデルを、株式会社フォーカスシステムズと共同で開発しています。

現在は、タブレット端末で創部を撮影するだけで診断できるアプリを試作しており、さらなるデータの集積と改良を進めています。

本研究によって、診断のばらつきを減らし、施設間での診療水準の均一化や効率的な治療方針の決定を支援し、医療従事者の負担軽減につながることを期待されます。



褥瘡のイメージ画像



試作アプリの一部画面

【担当】生田健人(医学部附属病院形成外科)

海外からの医学生形成外科実習への受け入れ

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育



【活動概要】

形成外科での臨床実習を希望する、海外からの医学生を複数名受け入れて臨床実習を行っています。これまでにブラジル、韓国、ロシアの医学生の受け入れを行いました。

形成外科手術の見学、その他モデルを用いた手術手技、血管吻合技術の習得など、形成外科専門医のもと、医学生は積極的に取り組んでいます。

医師免許取得後に再訪を検討している外国人医学生もあり、受け入れ体制の整備について今後準備をしていきます。



縫合、局所皮弁の手技に積極的に取り組む外国人医学生

【担当】八木俊路朗（医学部附属病院形成外科）

高齢化社会における排泄ケアに重点をおいた大人用おむつの開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

日本における高齢者率は、平均寿命の伸び、少子化を背景に増加しています。高齢者が増えるに伴い、介護問題は増加し、中でも排泄に関する問題は特に重要な位置を占めます。

排泄ケアは、介護者および非介護者に双方にとって負担が少なく、より快適な生活を実現できる方法が望まれます。そこで、尿もれを減らし、スキントラブルの少ないおとな用おむつを大王製紙株式会社および株式会社ニシウラと共同研究開発しました。大学病院が企業と協力することで、医学的見地と検査法を応用し、おむつ尿もれのメカニズムを科学的に証明できました。その尿もれメカニズムを解決する新しいおむつ形状を考案し、製品化に至りました。

尿もれが減り、ムレや交換回数・枚数が減ることで、非介護者の心理的負担の軽減、介護力・経済的な負担の軽減につながりました。

介護における排泄ケアは、今後世界規模の問題となることです。



中国地方発明協会発明賞受賞

【担当】陶山淑子（医学部附属病院形成外科）

鳥取県でのマダニ媒介感染症を防ぐ取り組み

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究

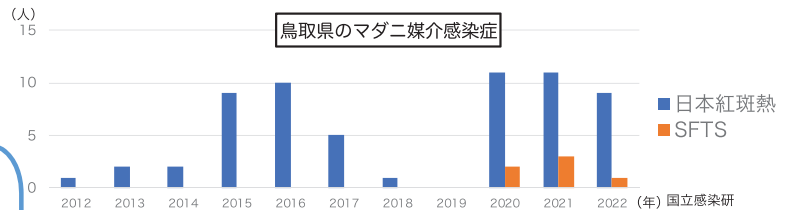


【活動概要】

日本でマダニが媒介する感染症の患者数が増加している。鳥取県でも2010年代に入ってから細菌によって起こる日本紅斑熱の患者数が増加し、2020年からはウイルスによる重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の患者が毎年発生している。

これに対し医動物学分野では

- 1) 鳥取県内のマダニの日本紅斑熱リケッチアとSFTSウイルス保有状況の解明
- 2) 検出された病原体の比較・解析を行っており、鳥取県内で初めて野外のマダニから日本紅斑熱リケッチアとSFTSウイルスの検出に成功し、現在も調査を続けている。



マダニの採集



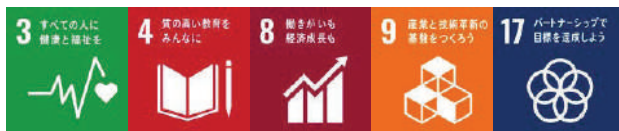
採集したキチマダニ成虫

担当:医学部医学科 医動物学分野
大槻 均 伊藤大輔 近藤陽子

発明楽コンテスト ～つながりのループから地域創生を図る～

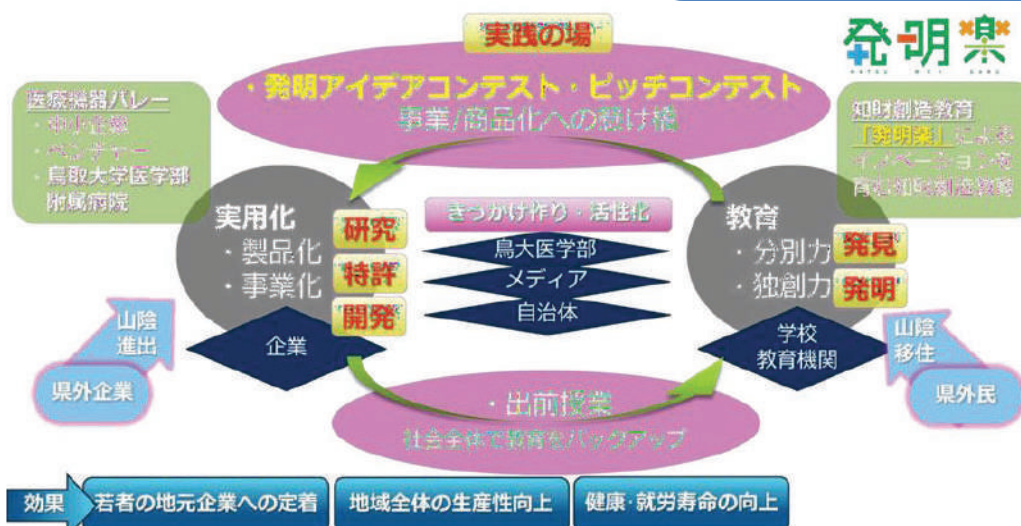
医学部
大学院医学系研究科
附属病院

課外活動



【活動概要】

発明楽コンテスト（発コン）は、高校生等が、身の回りを感じた課題にチャレンジする姿勢や未来の発明家を目指すきっかけをつかんでもらうため、創意工夫して社会や人の役に立つ独自のアイデアを募集するコンテストです。次代を担う若者に知的財産について触れてもらうとともに、主体性を持って挑戦する姿勢を育みます。特に優れた発明については、地域企業への紹介を含め事業化に繋げる支援を行います。



【担当】植木賢（医学部医学科医学教育学分野）
古賀敦朗（研究推進機構）

民間機関等との共同研究「パルプ射出成形品の医療関連用途への展開可能性に関する検討」

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究

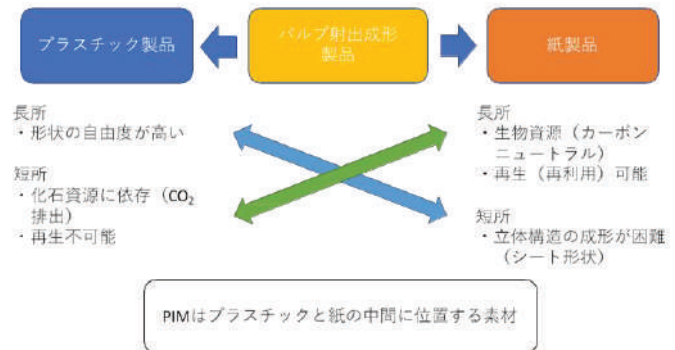


【活動概要】

パルプ射出成形技術（PIM）は、鳥取県内に工場を有する大宝工業(株)が2000年に開発したものであり、パルプと澱粉を原料とした材料を射出成形して3次元立体構造物を実現する技術です。従来のプラスチック成形品と同程度の寸法精度が得られることに加え、生分解性を有すること、製品を原料としてリサイクルできるなどの特徴を有することから、環境への配慮が求められる新たな分野へ展開が期待されています。

本共同研究は、パルプ射出成形技術を展開する新たな分野の一つとして医療分野を取り上げ、医療従事者とのディスカッションを通じてパルプ射出成形品の実現可能性のある医療関連用途や展開先を抽出するものです。まずは、小児用知育玩具、医療用マスクなど、単回使用品（ディスポーザブル品）と再利用品の中間的な位置づけ（複数回使用できるもの）のものをターゲットとしてパルプ射出成形品の適用可能性を検討を進めます。

パルプ射出成形（Pulp Injection Molding, PIM）技術の概要



医療用アンプルケース

大宝工業(株)によるPET成形品からPIMへの置き換え事例。マイクロプラスチックや産廃処理費の削減効果が期待される。

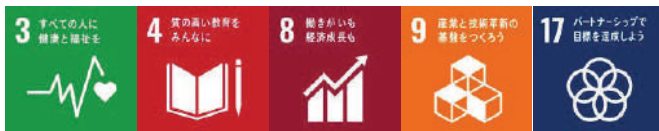


【担当】 植木 賢（医学部医学科医学教育学分野、医学部附属病院）
古賀敦朗（研究推進機構、医学部附属病院）

リアリティを追求したシミュレータロボット「ミコト」の開発！

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

気管挿管、内視鏡検査、喀痰吸引の3つの手技を一体でトレーニングでき、人のようなリアリティ・柔らかさ・生体反応を再現した医療シミュレータロボットを民間企業と共同で開発しました。複数の診療科の臨床ニーズに基づく知見を取り入れ、鼻腔・口腔・咽喉頭の構造は実際のコンピューター断層撮影装置のデータから3Dプリンターを用いて精密に作り、誤ったところに触れるとセンサーにより、リアルな反応を示します。難易度も調整でき、行った手技は点数評価でフィードバックしてくれます。これまでのマネキンにはない、まさに「生命を感じるシミュレータ／mikoto」です。また、2023年6月にmikoto大腸内視鏡モデルを上市しました。本シミュレーターは、好評で海外進出も検討されています。

* 医療シミュレータロボットの特徴 *

- 人を再現した外観・内部構造
- 気管挿管・内視鏡検査・喀痰吸引の3つのトレーニングが可能
- 難易度の調整により挿管困難症例の再現
- 咽頭後壁等へのセンサによる生体反応
- 各種センサの反応強度や手技時間により客観的評価を表示



ミコト開発に関わる組織

mikoto
大腸内視鏡モデル

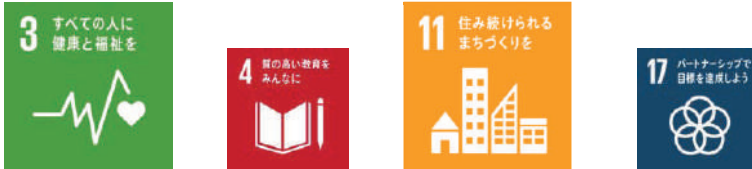
【担当】 植木 賢
（医学教育総合センターシミュレーションセンター）

27
ミコトを用いた上部消化管に内視鏡トレーニング

心不全の地域連携 地域で心不全患者さんを支える！ 地域の心不全チーム作り！

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

社会貢献



【活動概要】

人口の高齢化に伴い心不全患者は急増し、近年心不全パンデミックと呼ばれている。増加する高齢心不全に対して循環器の専門病院だけで診療を行うことは不可能であり、かかりつけ医、地域のケアスタッフと連携して心不全をみるシステム作りが不可欠である。地域のスタッフは心不全診療の知識や経験がないこと、心不全への恐怖感が心不全診療を避ける原因となっている。そこで、鳥取県西部医師会と連携して、かかりつけ医、地域のケアスタッフが心不全の標準的なケアを統一しておこなえるよう地域連携パスを作成した(図1)。

また、患者が自分の体調を記録する心不全手帳を無料で地域に配布し、心不全患者のセルフモニタリングの向上と、地域のスタッフが手帳を通じて心不全患者の体調を共有、把握することで心不全悪化を早期に察知するシステム作りをすすめている。地域全体がチームとなり心不全患者を支える取り組みである。



図1心不全地域連携パス



図2心不全手帳

Log-rank trend test $p=0.024$

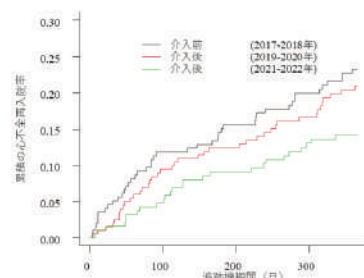


図3 心不全地域連携パスの効果
連携開始後、心不全増悪による再入院が減少

Circ Rep. 2024 20;6(5):168-177

【担当】衣笠良治 山本一博（鳥取大学循環器・内分泌代謝内科学分野）

医療過疎地で活躍する医療人材の育成 ー総合診療医を過疎地で育てるー

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育



【活動概要】

医師の偏在や人口減に伴う社会の高齢化により、過疎地の医療は危機的な状況にあります。過疎地医療の特性は、医療資源（医師数・診療科）不足、介護資源不足、アクセス問題など多様であり、多疾患合併の高齢者が多いことも問題です。

この多様な医療ニーズに対応するには総合診療医が重要な役割を担う必要があり、その育成も当該フィールドで行うことが肝心です。鳥取大学は鳥取県西部過疎エリアに地域医療総合教育研修支援センター（日野病院）、家庭医療教育ステーション（大山診療所）を設置し、総合診療医の育成を行っています。地域への愛着を醸成し、地域の医療課題に責任をもって取り組むことが、総合診療医の人材育成にもっとも適した環境と考えています。



日野病院の指導医のもとで回診や症例検討をおこなう28たち

【担当】谷口晋一（医学部医学科地域医療学講座）

社会貢献



【活動概要】

2011年2月に、**医学部附属病院に低侵襲外科センター**が設立されました。診療科の壁をなくした**組織横断的な診療体制**を特徴とし、ロボット手術を含む低侵襲手術全般について、質の向上とチーム医療の推進に努めています。ロボット手術は全国有数の実績を誇り、2025年8月には手術件数が3,700例に到達しました。

ロボット手術を核とした横断的組織

大学病院の縦割り構造打破

安心・安全の先進医療

鳥取大学医学部附属病院低侵襲外科センターの特徴

大学病院の縦割り構造の打破

医療安全 術式認定、術者認定、手術中止命令
先進医療 手術機器及び手術方法の開発
臨床・基礎研究 学術研究・教育・出版



鳥取大学医学部附属病院低侵襲外科センターの横断組織

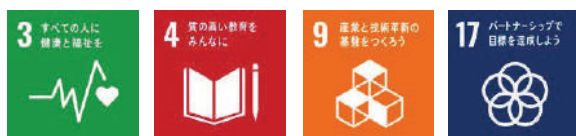
風通しの良い組織風土



ロボット支援手術の実例

【担当】谷口文紀（医学部附属病院低侵襲外科センター）

鳥大発バイオ抗がん薬の開発



【活動概要】

がんウイルス療法は、新しいがん治療法として期待され、世界中で開発が進められている。これまで痘瘡ワクチンに使われたワクシニアウイルスを基に、正常細胞を傷つけずがん細胞のみを溶解する**がん治療用ワクシニアウイルスの独自開発に成功し、AMEDをはじめとする競争的研究費によって、そのトランスレーショナルリサーチを実践している。又、この実践教育を通して、健康福祉に貢献できる人材を育成している。**

さらに、AMED大学発医療系スタートアップ支援プログラムによって、大学発ベンチャー創出の準備を進めており、その実用化を目指している。

がん治療用ウイルスのトランスレーショナルリサーチの実践

基礎研究



応用研究
独創性が高いシーズの創出



前臨床研究
動物モデルでの効果と安全性の検証

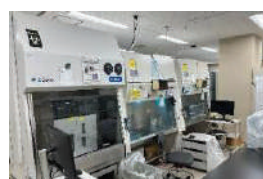


製剤製造
GMP製剤の調製と品質管理

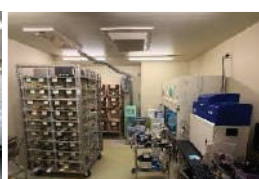


病院

実際のトランスレーショナルリサーチ



がん治療用ウイルスの創出



動物モデルでの評価



がん治療用ウイルスの製剤化

社会貢献



【活動概要】

助産師は専門的な知識・技術を自律的に習得しながら臨床実践していきますが、看護職全体の約3.0%程度であり、教育の場が多くありません。最近では妊産婦の高齢化によるハイリスクの増加、高度生殖医療、出生前診断など進歩が著しいです。そこで、本学の「助産コース」用の講義・演習などの一部を県内を中心とした臨床助産師に公開し、教育の機会を提供しています。

この中には、CLOCMiP®認証研修も含まれており、必修研修・WHC指定項目および指定研修など今年度は約12講座、昨年度は延べ参加人数60名程度でした。受講した助産師には受講証明を発行し、これにより、CLOCMiP®認証申請・更新ができることから、モチベーションが上がるとともに、臨床助産活動に生かされると好評を得ています。

助産師以外にも、在宅訪問看護師の方や臨床看護師の方にも利用いただいております。



日時・場所	テーマ
12/5/20(火)4時限 【262講義室】	無痛分娩の医学的管理、不育症(KEY WORDS)不育症、無痛分娩
6/6(金)1時限 【431講義室】	胎児心拍モニタリング、胎児評価法/【キーワード】CTG、NST、fetal wellbeing、hPL、E3
6/27(金)1時限 【431講義室】	陣痛の異常、子宮収縮剤の使用/【キーワード】微弱陣痛、過強陣痛、遷延分娩、陣痛促進剤、過期産
7/15(火)2時限 【262講義室】	新生児期:新生児の適応生理、フィジカルエグザミネーション/【キーワード】新生児適応、健康診査、フィジカルエグザミネーション
7/18(金)2時限 【262講義室】	乳児検診/【キーワード】健診、健診後フォロー、医療的ケア児、発達障害、成長発達
9/24(水)13:30~15:00【第1会議室】	後輩育成:臨床指導(助産実習)から新人研修へ
12/4(木)3時限 【131講義室】	生殖医療と妊娠:最先端の生殖医療とその倫理的課題/【キーワード】ホルモン動態、性感染症、妊孕性、不妊、生殖医療、不妊カウンセリング、生命倫理
12/4(木)4時限 【131講義室】	妊娠期~産褥期の薬剤/【キーワード】臨界期、薬剤、薬理、胎盤移行
12/11(木)3時限 【131講義室】	遺伝看護と助産:出生前診断/【キーワード】出生前診断、遺伝病、遺伝カウンセリング、生命倫理
12/25(木)3時限 【131講義室】	女性とメンタルヘルス/【キーワード】女性とホルモンと精神疾患、産褥うつ病、マタニティブルー、産後精神病、思春期、更年期
1/23(金)4時限 【131講義室】	循環器・呼吸器合併疾患:妊娠期~産褥期/【キーワード】妊娠に伴う呼吸器循環に関する母体の生理的変化/具体的な事例を通じた逸脱状況の予測と対応
1/29(木)3時限 【131講義室】	周産期における運動機能と合併疾患/【キーワード】妊産婦の腰痛、恥骨離開、DDH、妊婦および新生児、新生児多指症、他

2025年度の公開講義一覧

【担当】鈴木康江・大谷多賀子・大島麻美・服部多恵
(医学部保健学科看護学専攻 母性家族看護・助産学)

地域の高齢者の自己管理と健康を支える
“膝いきいき教室”の取り組み

社会貢献



膝いきいき教室

高齢性膝関節症の自己管理 | 自分らしく生活するために



【活動概要】

我々のチーム(看護教員、医師、理学療法士、作業療法士、健康運動指導士)では、自己効力感、自己管理能力といった認知にはたらきかける理論を援用した患者教育プログラムを設計し、米子市の整形外科医院の協力のもと「膝いきいき教室」を実施しています。目的は自己管理行動を促進し、高齢者のQOLの向上を目指すことです。教室の内容は「病気の理解」「運動・食事管理」「痛み管理・関節保護」などで、アクティビティ、ディスカッション、視聴覚教材によるフィードバックなどを用いて認知を刺激しながら進めていきます。定期健診を行い、健康状態や膝の状態を評価しています。現在では3期まで開催し約45名の高齢者の方が参加しました。これまでの効果として、症状緩和、困難感の改善、自己管理能力、QOLの向上、歩行時間、片脚起立時間などの身体機能の向上がみられています。この活動は地域に在住する高齢者のいきいきとした生活を支えることに寄与すると考えます。また、高齢者看護、地域看護に関心のある学生の参加を促進し、地域志向の学生の育成を目指しています。この取り組みは、米子市の協力のもとに実施しています

*2025年現在、いつでもどこでも誰でもできる“を目指し、「膝いきいき教室動画版・WEB版」を開催しています。

<https://www.med.tottori-u.ac.jp/nursing/hiza-ikiiki/>



膝いきいき教室の風景、クイズや討論を交える



学生が体力測定を実施
地域の高齢者との交流の場となる



専門家による運動指導を取り入れる

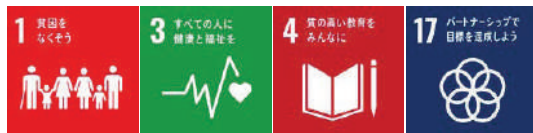
代表者: 谷村千華(医学部保健学科看護学専攻成人・老人看護学)

担当者: 野口佳美・深田美香(医学部保健学科看護学専攻)・三好雅之(医学部医学教育総合センター)・萩野浩(山陰労災病院)

フィリピン低所得者層地域における 生活の質改善を目指した糖尿病予防プロジェクト

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

フィリピンでは、糖尿病有病率が年々増加しています。対象地区は、医療者や設備不足の問題を抱えています。我々は、患者ピアリーダーの育成に力を入れ、患者同士が助け合うピアサポートシステムを強化しています。現地のスタッフと協働してワークショップと健診事業を開催し、知識提供だけでなく、ピアリーダー役割や患者支援に役立つコミュニケーションスキル、血糖測定などのトレーニング、運動機会を提供してきました。活動当初は、ピアリーダーの知識不足、健診時の測定技術不足がみられましたが、現在では、適切に行動・運営できるほどに成長されました。また、ピアリーダーは仲間である患者全体への糖尿病教室を定期的で開催しており、自主的に糖尿病クイズや食事指導などに取り組んでいます。このような活動を通して、ピアリーダーだけでなく、患者全体の糖尿病知識や生活の質も向上してきました。学生も定期的にこの活動に参加しており、国際的視野の向上を目指した教育にも貢献しています。この活動はJICAの草の根技術協力事業として、実施されました。2025年現在は、定期的に現地に訪問し、ピアリーダーの活動継続支援および新たな課題の調査を実施しています。



ピアリーダーへの血糖測定技術指導の風景



健康食のバイキングを通して、糖尿病の食事管理について学ぶ



ゲーム感覚で糖尿病の知識を提供する
国際交流に関心のある学生も参加

研究代表者：谷村千華（医学部保健学科看護学専攻成人・老人看護学）

研究担当者：杉原誉明（病態検査学講座）・深田美香・宮本まゆみ（基礎看護学講座）

森田明美・天野宏紀・増本年男（健康政策医学分野）

手話のできる医師を育成して きこえない方・きこえにくい方も安心できる医療を提供

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

大学運営 教育



【活動概要】

鳥取大学医学部医学科では2008年から基礎手話言語、2009年から医療手話言語の授業を実施しています。

病院は、きこえない・きこえにくい方が一番不安を感じる場所の一つです。そこに手話のできる医師がいて、きこえない・きこえにくい患者さんに配慮できれば、大きな安心につながります。

誰でも気兼ねなく平等に医療を受けられる病院を増やして、健康と安心を提供することを目指します。

基礎手話言語の
授業

医療手話言語の授
業

手話のできる医師、
きこえない・きこえにくい方
に配慮できる医師の育成

医学部手話サー
クル

手話検定で資格
取得



薬のアレルギー

【担当】濱崎 佐和子、海藤 俊行（医学部医学科解剖学）

海馬機能の低下を予防するための基礎的研究

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究

3 すべての人に
健康と福祉を



【活動概要】

海馬は学習や記憶を司る脳領域です。高齢化が進む今、認知症をはじめとする海馬機能の低下による疾患が年々増加しています。海馬は外部からの刺激の影響を受けやすく、それが海馬機能にも影響することが知られていますが、詳しいメカニズムは明らかになっていません。

私たちは、運動や温熱刺激など手軽に取り組むことができる行動の効果を研究しています。これらの刺激による血中のホルモン濃度の変化、血中因子の海馬への移行の変化を調べ、それが海馬の神経細胞にもたらす変化、さらには記憶、学習能力に及ぼす効果を検討しています。

こうした基礎研究の取組みを通して、海馬機能の低下を日常生活の中で予防する具体的方法の開発に貢献したいと考えています。

運動、温熱刺激



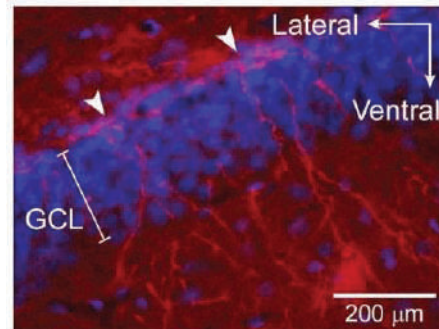
血中のホルモン濃度の変化、血中因子の海馬への影響を中心に検討を進めている。

海馬機能の低下を予防



臨床応用

適度な運動、入浴やサウナ浴で手軽に海馬機能の低下を防ぐ。



赤: Doublecortin
青: DAPI

海馬では生涯を通して神経細胞が新しく生まれ続けている。新生幼若神経細胞(Doublecortin 陽性細胞)は適度な運動や温熱刺激により増加する。

【担当】 椋田崇生、濱崎佐和子、小山友香（医学部医学科解剖学講座）

絶滅危惧種トビハゼの学習と記憶のメカニズムを解明する

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育、研究、社会貢献

4 質の高い教育を
みんなに



11 住み続けられる
まちづくりを



14 海の豊かさを
守ろう



【活動概要】

トビハゼは海水と淡水が混ざる汽水域の干潟に生息する絶滅危惧種の魚です。魚であるにもかかわらず陸に上がるという珍しい生態を持っていますが、陸には天敵の鳥や乾燥などの困難が待ち受けています。その時、彼らは海馬が司る空間認識能力を頼りに水域の在処を認識して逃げ込みます。

私たちは、トビハゼの優れた空間認識能力とわかりやすい行動に着目して、学習と記憶の神経ネットワークの原点の解明に取り組んでいます。

近年、護岸工事により干潟が減少しトビハゼの生息域はかなり限られるようになってきました。研究成果とともに実験動物であるトビハゼを紹介することで、水辺環境の保全と都市開発のあり方を考えるきっかけにしたいという思いから、一般市民向けのイベントなどで積極的に研究を紹介しています。



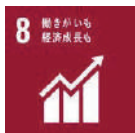
干潟に生息するトビハゼ

【担当】 椋田崇生、濱崎佐和子、小山友香（医学部医学科解剖学講座）

高齢者および障害者のための履きやすく履かせやすい 高機能ソックスの開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究、社会貢献



【活動概要】

寝たきりは踵部の褥瘡(床ずれ)や尖足(つま先立ち状態で固定されること)を引き起こします。一方で、加齢や疾患によって運動機能が低下すると、ソックスの着脱が大きな負担になります。

私たちは、こうした課題の解決を目的とした高機能ソックスの開発に取り組んでいます。

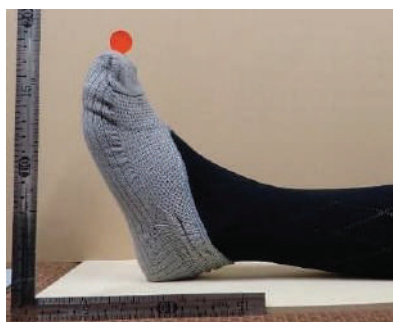
- ・共同研究を行う企業独自の編み上げ技術を最大限に生かして、褥瘡と尖足の予防とともに、簡単に着脱できる“履きやすさ／履かせやすさ”にもこだわった仕上がり

- ・ポリエステルナノファイバー生地を用いることで保温・保湿効果に優れ、着圧による締め付けがない快適さの追求

履く人のQOL向上と履かせる人(介助者)の負担軽減に寄与する高機能ソックスの開発を目指しています。



企業との打ち合わせ



試作品の検証

【担当】 椋田崇生、濱崎佐和子、小山友香（医学部医学科解剖学講座）

Amigo2を標的とした世界初肝転移予防薬の開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



【活動概要】

がん死のおよそ9割は、原発巣から離れた他臓器への遠隔転移によって占められている。とりわけ、がんの転移先として最も頻度の高い肝臓への転移を防ぐことは、がん患者の予後の改善に大きくつながる。我々は、**Amigo2タンパクを発現しているがん細胞は、肝臓の血管内皮細胞と高い接着性を示すことで肝臓への転移巣の形成に関与している**ことを世界に先駆けて見いだした。動物実験の結果、がん細胞の**Amigo2発現量を下げることで肝転移が抑制**できることを実証している。

がんの肝転移を予防するために、①がん細胞におけるAmigo2発現を消失または減弱させる薬剤および②Amigo2の機能を阻害する薬剤の開発に取り組み、がん患者の予後を大きく改善するための新たな手段の構築を目指している。

Amigo2を標的とした創薬開発



【担当】 尾崎充彦、岡田 太（医学部生命科学科 実験病理学）

MTA1を標的とした新規血管新生阻害剤の開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



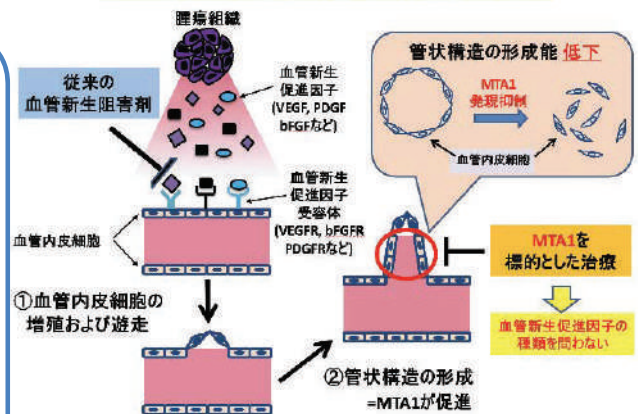
【活動概要】

血管新生は、腫瘍の増大や網膜症などの目の病気の進展に大きく関わっている。こういった病的な血管新生を阻害することは、疾病の進展を抑制し、患者の予後の改善につながる。血管新生には、大きく①血管内皮細胞の増殖と遊走および②管状構造の形成が関わっている。

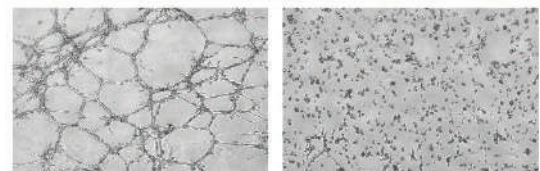
これまで①を標的とした治療薬が多数開発されてきた。しかしながら、①に関与する分子は多様であり、特定の分子阻害による血管新生抑制効果は限局的であった。

我々は、②に関わる新たな分子として**MTA1**を同定し、**この分子阻害が管腔形成阻害を介した血管新生阻害効果を示す**ことを世界に先駆けて見いだした。血管新生が増悪に関わる多くの疾病に対する新たな治療戦略として、MTA1阻害剤の開発を進めている。

血管新生におけるMTA1の機能は、従来の血管新生阻害剤の標的部位とは異なる



血管内皮細胞の管腔形成能実験



内皮細胞のMTA1遺伝子発現を抑制すると、血管の管腔を造れない(=血液供給遮断効果を示唆)。

【担当】尾崎充彦、岡田 太（医学部生命科学科 実験病理学）

核酸医薬による骨肉腫肺転移阻害剤の開発

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究

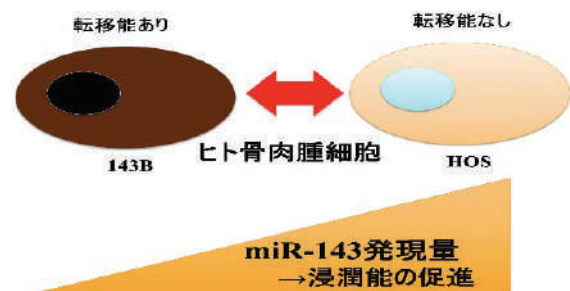


【活動概要】

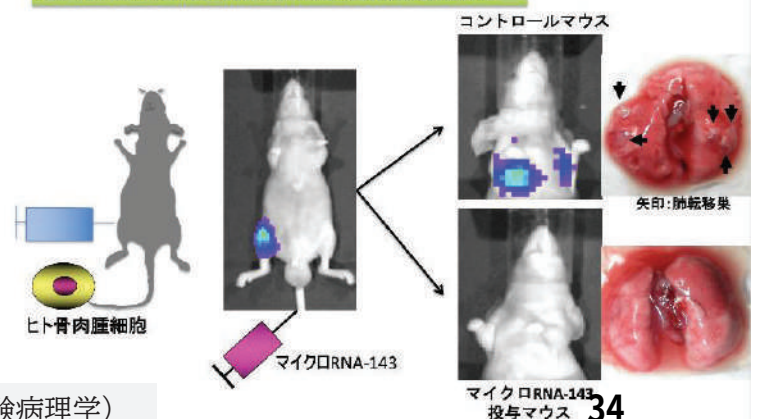
細胞内に存在している核酸（DNAやRNA）を医薬品として治療に用いる「**核酸医薬**」の開発に世界中が取り組んでいる。我々は、肺転移を起こしやすいヒト骨肉腫細胞ではマイクロRNA-143(miR-143)の発現量が低下しており、これががん細胞の浸潤能を促進させて肺転移を引き起こすことを世界に先駆けて見いだしている。

さらにヒト骨肉腫細胞が肺に転移するモデルマウスに**miR-143を全身投与すると肺転移を抑制**することを実証した。新たながんの治療法として、核酸医薬によるがんの転移予防手段の開発を目標に掲げ、miR-143の製剤化に取り組んでいる。

ヒト骨肉腫の浸潤能を抑制するmiRNAを同定



ヒト骨肉腫細胞自然肺転移モデルによる検証



【担当】尾崎充彦、岡田 太（医学部生命科学科 実験病理学）

研究



【活動概要】

世界のがん死の原因の20～25%を炎症や感染症が占めている。炎症は、正常細胞のがん化だけではなく、がん細胞が悪性の形質（浸潤・転移など）を獲得する悪性化の進展に至るすべての過程に関わることが分かってきた。従って、炎症は生体内における”発がん niche”として捉えることができる。換言すると、原因と結果がこれほど明確に示されている発がん要因は少なく、炎症はがんの予防を達成するための最初の標的になるものと考えられる。このような観点から、独自に開発した“炎症発がん”の動物モデル等を用いて、炎症発がん機構の解析と予防へ向けた新たな切り口から探索研究を行っている。

“発がん niche”としての炎症



【担当】尾崎充彦、岡田 太（医学部生命科学科 実験病理学）



ワークライフバランス・ダイバーシティの推進 ～一人一人の職員 大事にします～

医学部
大学院医学系研究科
附属病院



【ワークライフバランス・ダイバーシティ推進の目標】

- 1) 多様な人材の育成
- 2) 一人一人の能力発揮
- 3) 活力と持続性に富む組織



【概要】鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス（WLB）支援センターは、2010年4月15日の開所以来、2025年に15周年を迎えました。私たちは、子育てや介護・治療と仕事の両立支援、メンタルヘルスケアや職場復帰支援、快適な職場環境の整備を通じて、当院で働くすべての職員を支えたいと活動しています。とりわけ、職員の多様化や医療を取り巻く環境の変化に即応し、制度・支援策・周知方法をその都度見直ししながら、ニーズに即した事業を機動的に展開しています。これからも、ワークライフバランスとダイバーシティ推進の両輪で、持続可能な支援策を提供していきます。

ライフイベントに応じた 働き方の提案と支援

- ① 仕事と育児の両立支援
- ② 仕事と介護の両立支援
- ③ 院内保育所等利用促進
- ④ 家事支援サービス補助
- ⑤ ハッピー子育て交流会
- ⑥ 働き方に関する情報提供
- ⑦ 食事支援サービス提供

キャリア支援 職場復帰支援

- ① 語学支援
- ② 女性医師支援事業「リフレッシュルーム」
- ③ 復職支援相談
- ④ 職場復帰情報提供
- ⑤ キャリア継続の相談
- ⑥ 生成AI活用支援

メンタルヘルスケア 院内派遣研修

- ① 個別相談
- ② 新規採用者面談
- ③ 異動者面談
- ④ 院内派遣研修（メンタルヘルス・ハラスメント・コミュニケーション等）
- ⑤ お昼休みの介護相談

ダイバーシティ 推進活動

【理解・啓発研修会テーマ】

- ① アンコンシャスバイアス
- ② 生理の問題とキャリア形成
- ③ 多様な働き方と機会均等
- ④ 女性外科医師のキャリア形成
- ⑤ LGBTQs視点からのアプローチ



*赤字は2025（令和7）年度の新規事業および継続的・重点的に取り組んでいる活動です。

モニタリング

- ・アドバイザーボード：若手・中堅職員のアイデアや意見を聴く場の確保
- ・WLB調査→職員の意見や要望を病院に伝え、WLB支援センターの活動にも反映

代表者：山田七子
（鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センター センター長）

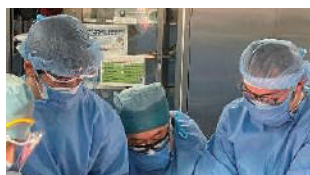


ホームページ
はこちら
35

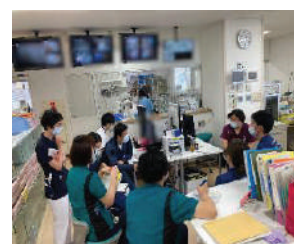
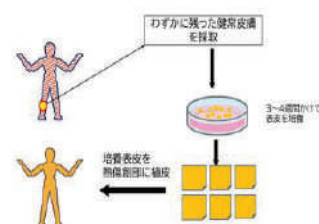
自家培養表皮や人工真皮を用いた重症熱傷治療と熱傷応急処置啓蒙活動

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

教育、研究、社会貢献、課外活動、大学運営



自家培養表皮植皮術



【活動概要】

- ・高度救命救急センターでは軽症の熱傷(やけど)から重症熱傷まで幅広く診療しています。臨床での特徴は傷病者の健常皮膚を用いた自家培養表皮植皮術であり高度で最先端救急医療を実践しており、自家培養表皮作成まで3~4週間の間は人工真皮と自家健康組織から採取した真皮を微細粉碎したmicrograftとの併用で真皮構築を行っています。
- ・2歳未満の広範囲熱傷の救命に本治療での本邦初の救命を報告しました。
- ・医師のみでなく、看護師・リハビリスタッフ・ソーシャルワーカー等チーム医療をモットーとして治療を行っている。また患者のみならずそのご家族にも精神的ケアを行うよう心掛けています。
- ・重症熱傷では損傷組織からDAMPs(Damage Associated Molecular Patterns)という炎症性サイトカインが過剰放出されていることが知られており、その中でもHMGB-1とAT(Anti-thrombin)に注目して研究を行っています。
- ・また市民の方に軽症熱傷に対する応急処置についても市民講座で啓蒙活動を行っています。

【担当】 高度救命救急センター

上田敬博 生越智文 山本章裕 松田健一 大河原悠介 眞鍋聡子

専門知識を英語で学ぶ

医学部
大学院医学研究科
附属病院

教育、課外活動



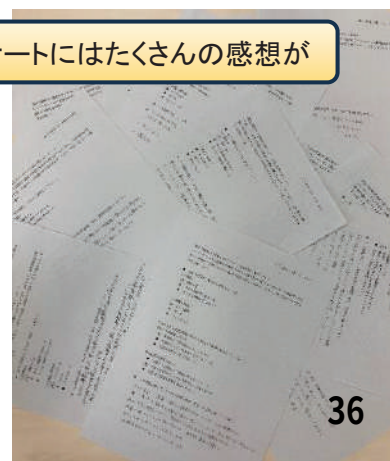
【活動概要】

グローバルな医療や研究を行うには、専門知識を英語で聴きとる、説明できる、共有するといった”英語で自在に操る能力“を育てることが必要となってきます。このため、細菌学教室では、毎年、後期の2年生の細菌学講義の時期に合わせて、課外活動として細菌学の講義を全編英語で行うという試みを有志学生を募り実施しています。医学科2年生の本講義で日本語で受けた講義内容がそっくりそのまま、話す言語も英語、使う資料も英語という構成になっています。日本語で受けた講義の記憶が新しいうちに、その内容を英語で聴くため、耳が慣れてくると理解が深まっていきます。また、医学科2年生だけではなく、他の学年からや、他の学科からの参加者も増えています。比較的少人数で、質問もリラックスしてできるため安心して参加できます。将来、経験するであろう国際会議への参加や海外への留学、外国人患者の診療などのための下地となり、これらのことに自信をもって取り組めるようになることを目指しています。

講義風景



アンケートにはたくさんの感想が



【担当】 小幡史子 (感染制御学講座細菌学分野)

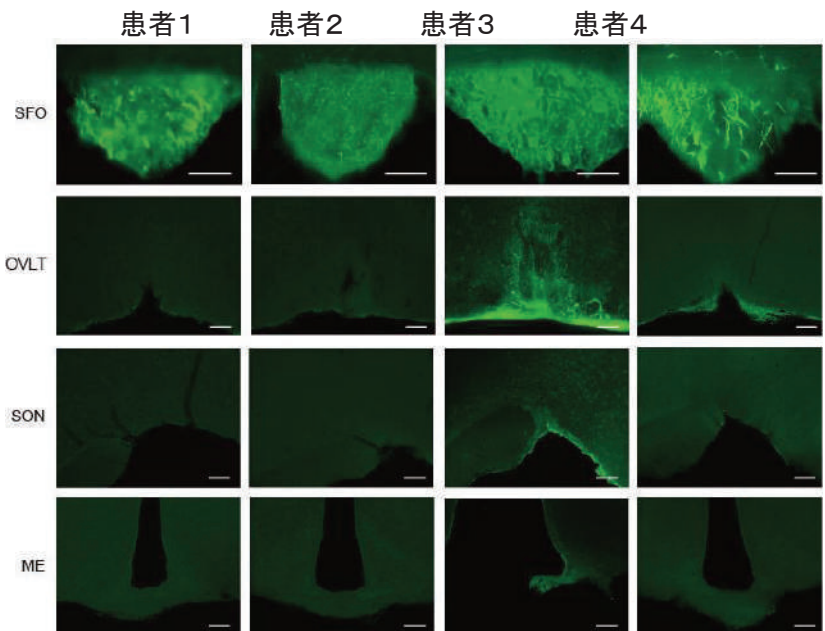
教育、研究、社会貢献



図：患者血清を用いてマウス脳を免疫組織化学染色すると、口渴中枢であるSFOが染色される。本疾患の特徴の一つ。

【活動概要】

私たちは、本態性高Na血症の患者の中に、口渴欠如性高Na血症を見出し、その発症機序は、口渴中枢が自己免疫性の炎症を起こすことにあると、突き止めました。さらに、治療法の開発に向けた病態解明に取り組んできました (Hiyama et al., Neuron 2010; Hiyama et al., Brain Pathol. 2017; Nakamura-Utsunomiya et al., Clin Endocrinol (Oxf). 2022)。現在、国内外の臨床医と協力し、血清サンプルの解析による診断に取り組むと共に、基礎研究を通じてさらなる病態解明に取り組んでいます。また、希少疾患であるため、研究指導や講演活動を通じ、本疾患の知識普及と啓発に取り組んでいます。



【担当】 統合生理学分野 檜山武史・近藤邦生・吉村祐貴

すべての学生を対象にした自主的脳科学教育

教育

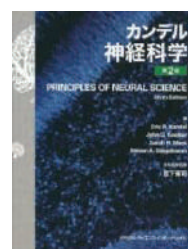


【活動概要】

世界中の学生が脳神経科学の学習に使用している、総合的教科書である「カンデル神経科学」を題材に、毎週1回のペースで脳神経科学の自主勉強会を開催しています。湖山キャンパスとオンラインでつなぎ、すべての学部・学年に参加者を募った結果、学部1年生から4年生まで参加する勉強会に発展しています。

学生自ら発表する形式とすることで、主体的な学習の場となっています。この勉強会参加者の中から、他地方での学会に自主参加する学生も現れるなど、リサーチマインド向上に役立っています。

また、研究への参加を希望する学生に門戸を開いており、研究に自主参加する学部学生も現れ始めています。



【担当】 統合生理学分野 檜山武史・近藤邦生・吉村祐貴

教育、研究、社会貢献

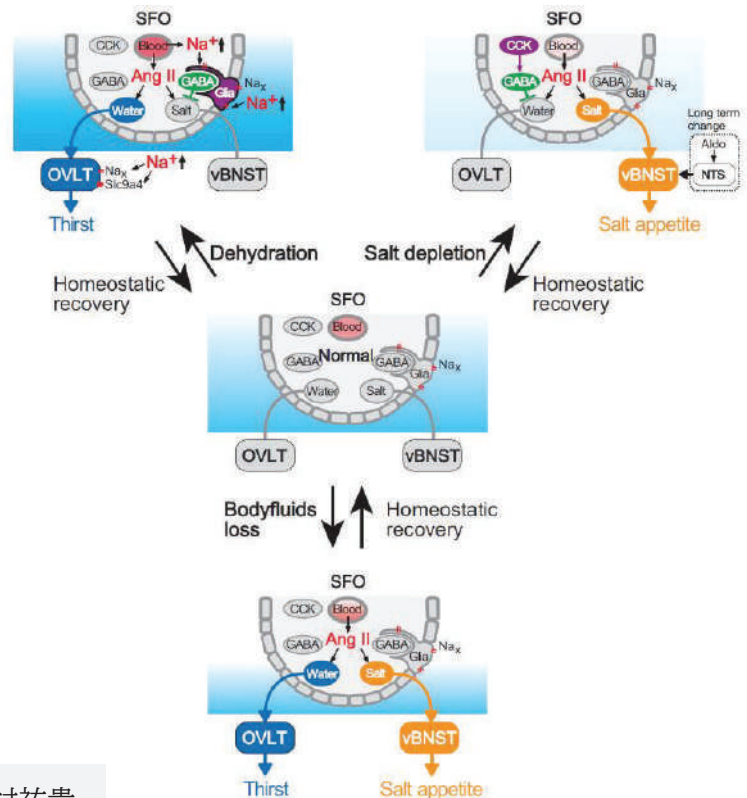


【活動概要】

鳥取県は人口当たりの熱中症搬送数が国内最悪レベルです。その解明と対策の確立は、国内のみならず、気候変動により高温化が進む世界の諸地域に貢献するものです。私たちは、身体の脱水状態を感知するセンサータンパク質を哺乳類の脳の中に発見しました(Nature Neurosci 2002)。このセンサーは口渴の制御や塩の摂取調節による体液成分の維持などに重要な役割を担っていることがわかり、そうした調節を担っている神経回路を解明しました(Neuron 2007; Cell Metab. 2013; Nature Neurosci 2017; Neuron 2019; Nature Comm 2020など)。現在、これらの成果に基づき、熱中症の体内で起こる生理現象の解明と、新たな熱中症治療法及び予防法の解明をめざす、鳥取発の「極限生理学」の創成を目指し研究を進めています。

【担当】 統合生理学分野 檜山武史・近藤邦生・吉村祐貴

図:脱水等の体液異常によって生じる脳神経活動の変化 (Hiyama et al Phys Rep. 2024より引用)



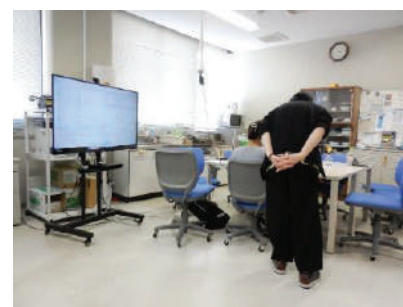
すべての学生を対象にしたバイオインフォマティクス講習会の自主開催

教育



【活動概要】

コンピューターの計算能力と大量データ取得技術の飛躍的進歩により、生命科学におけるパラダイムシフトが起きつつあります。従来の仮説駆動型の生命科学に替り大規模データ駆動型の生命科学が急速に広まりつつあるのです。そうした社会の動きに敏感な学生のニーズを満たすため、初心者向けバイオインフォマティクス講習会を自主開催しています。従来、こうした講習会は、コンピューターツールの使用法の解説に留まっていたことが多かったのですが、それでは、真の使い手になることはできないので、解析手法の背景にある数学的概念をやさしく解説することを目指し、バイオインフォマティクスを独習した医学生に講師を依頼して実施しています。湖山キャンパスからもオンライン参加する学生も居り、全学の学生を対象としています。



【担当】 統合生理学分野 檜山武史・近藤邦生・吉村祐貴

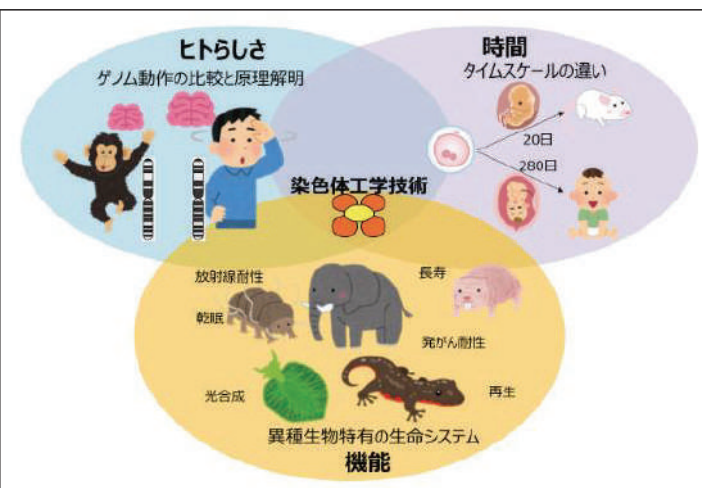
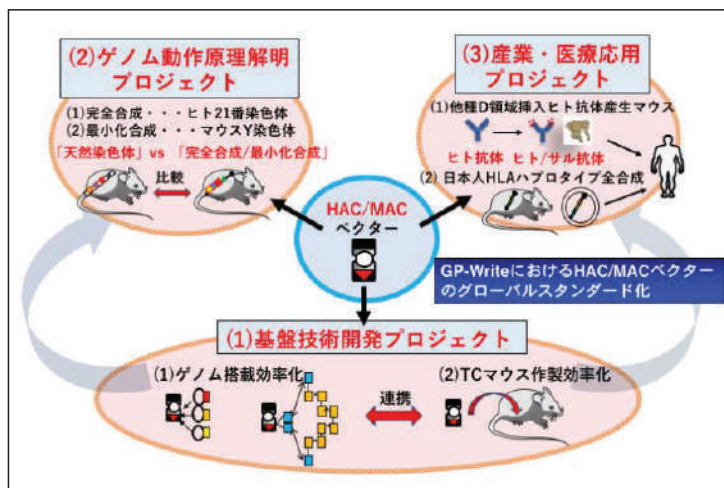
ゲノム合成による細胞制御技術の創出 ー染色体工学技術を用いたゲノムライティングと応用ー

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



<概要> 2016年、Genome Project-Write (GP-W)が立ち上がった。本プロジェクトでは、ゲノムを「読む(read)」から、「合成=書く(write)」に重点を移し、ヒトを含む哺乳類を対象にゲノム配列の動作原理の解明などの基礎研究や複雑な疾患病態(複数遺伝子、遺伝子クラスターおよび染色体ドメインレベル等が関連するもの)の分子メカニズムの解明から医療応用を目的とするものである。本研究室では独自に開発した染色体工学技術を用いて、「Mb単位の合成DNAを目的細胞に効率的に導入する基盤技術開発」を行い、「ゲノム配列の動作原理の解明」と「産業応用および医療応用」を目指す。



担当：医学部生命科学科染色体医工学講座
森脇嵩史、香月康宏

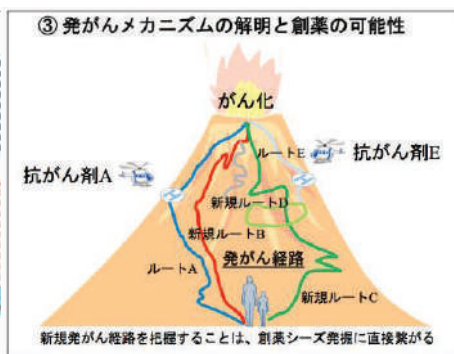
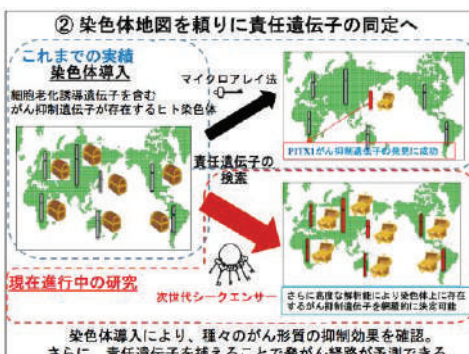
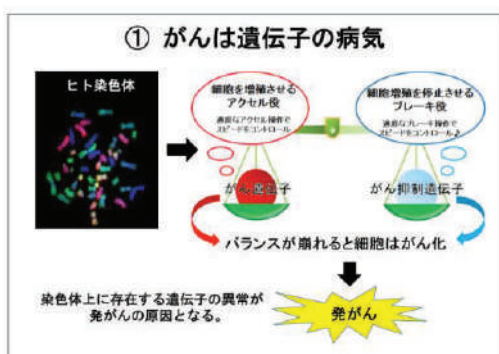
染色体工学技術を利用した発がんおよび細胞老化制御機構の解明①

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

研究



<概要> 本プロジェクトは、独自に開発したオリジナルの染色体工学技術と次世代型ドライ解析を融合させることで、新規がん抑制遺伝子の同定に成功したことを起点としている。今後は、未だ未知のがん抑制遺伝子を網羅的に探索し、その機能解析を通じて新たながん抑制経路を解明することで、発がん機構の全体像に迫り、次世代型のがん治療戦略の基盤を築くことを目指す。本研究は、SDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」に直結し、がんの予防・診断・治療の革新に貢献するとともに、基礎科学から臨床応用への橋渡しを推進する点に意義がある。さらに、得られた知見を社会実装へと展開し、がん克服を通じた健康寿命の延伸や医療資源の効率的活用に寄与することで、持続可能な社会の構築に資することを期待している。

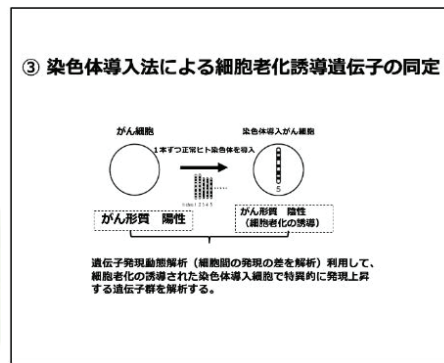
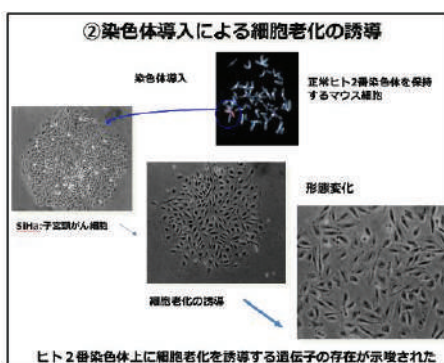
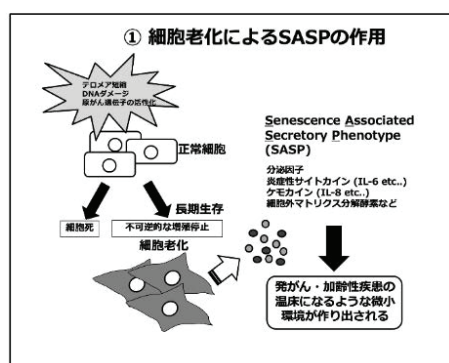


担当：医学部生命科学科染色体医工学講座
大平崇人、久郷裕之

研究



<概要> 本研究は、独自に開発した染色体工学技術を基盤に、細胞老化の分子機構とその発癌や加齢関連疾患への寄与を体系的に解明することを目的とする。染色体工学技術を利用して新規の細胞老化に関わる遺伝子群を同定し、老化細胞の蓄積やSASP（老化関連分泌因子）が腫瘍微小環境および組織恒常性に与える影響を多層的に解析する。さらに、老化制御に関わる新規分子経路を同定し、セノライティクスやSASP制御薬など新規治療法の基盤開発へ展開する。本プロジェクトはSDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」に直結し、老化に起因する疾患の予防・治療の革新に資するとともに、基礎科学から臨床応用へのトランスレーションを推進することで、持続可能な社会における医療・健康寿命延伸の実現を目指す。



担当：医学部生命科学科染色体医工学講座
大平崇人、久郷裕之

小町での活動と海外研修を通じて、
地域との関わり方と国際的な考え方を養う。

医学部
大学院医学系研究科
附属病院

課外活動



【活動概要】

・地域研修は、鳥取県西伯郡伯耆町にある小町という小さな集落で、住民の方々と関わりを持ちながら、農業体験や水路清掃に参加させていただいている。また、住民の方々と環境予防医学教室の先生方、OBOGの方々と、部員が参加する交流会を年に2回開き、そこで「健康教室」を実施している。これは、小町での課外活動で大変お世話になっている住民の方々に、医学生として恩返しをしたいという考えから、高齢化が進む小町で健康に関する知識をお届けしようという趣旨で行っている。・海外研修は、毎年、参加希望者を募り実施している。環境予防医学教室の先生方のお力をお借りしつつ、基本的には学生が訪問する国・施設を決め、アポイントメント取り、飛行機やホテルの予約など準備を進める。海外研修に行くことでその国で行われている保健事業を知り、日本とその国の医療を比較することができる。帰国後は、学んできたことを他の部員や先生方、OBOGさんに報告することで、ハクナマタ全体の学びや成長に繋がっている。



【担当】国際保健友の会 ハクナマタ

（担当教員：鳥取大学医学部 環境予防医学分野 教授 尾崎米厚）

工学部

大学院工学研究科



研究

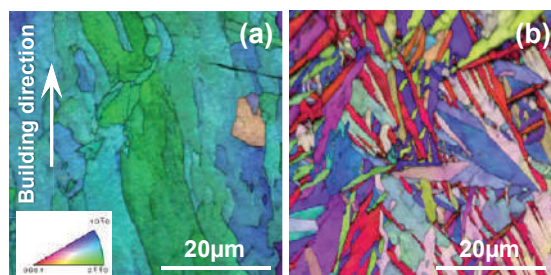


【活動概要】

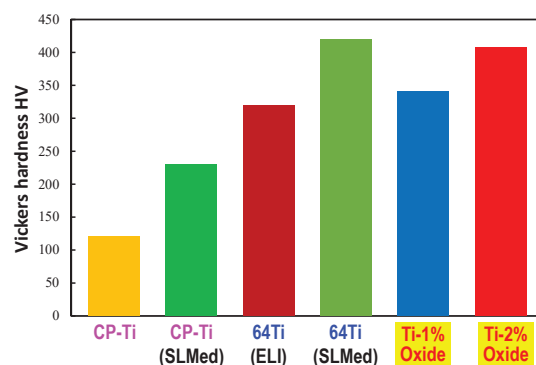
日本は、2035年には人口の3人に1人が65歳以上の高齢者になると予測されています。厚生労働省の調査によると、高齢者が要支援となる原因として関節疾患および骨折・転倒という整形外科領域の疾患が全体の3割以上を占めています。その治療法として人工関節や人工骨といった生体用インプラントに置換することは高齢者の自立支援に益々重要になっています。

本研究は、生体適合性に優れた微量酸化物をチタンに添加し、3D造形のワンプロセスのみで、現在汎用の毒性のあるAlとVを含むTi-6Al-4V合金を凌駕する、高強度・高延性新規チタン合金の創製とその強化メカニズムの解明、および次世代人工股関節用多孔質層と緻密体の一体造形プロセスの構築を目指しています。

本研究により、近い将来、インプラント等医用分野のみならず、航空機や自動車部品にもTi-6Al-4V合金の代替材料として新規チタン合金の利用が拡大でき、学術的にも実用的にも大きな波及効果が期待されます。



積層造形した(a)純チタンおよび(b)Ti-1%酸化物試料のIPFマップ



チタンおよびチタン合金の従来材と開発材の硬さ比較

【担当】 陳中春・音田哲彦・衣立夫 (工学部機械物理系学科)

新しい材料加工プロセスの開発および高性能材料の創製

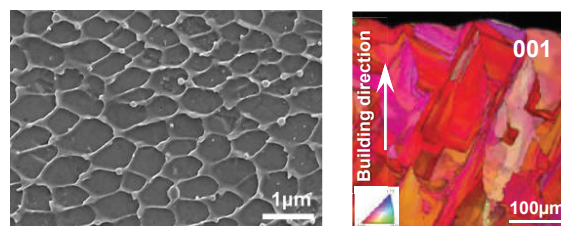
研究



【活動概要】

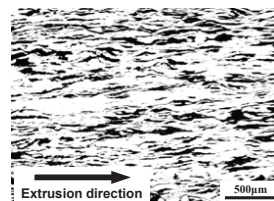
マクロおよびミクロの立場から、高機能・高品質を引き出すための材料加工プロセスの開発およびその適用による先端機能材料・構造材料の創製に関する研究・開発に取り組んでいます。特に、粉体成形や塑性加工における変形、流動、反応および相変態を制御することにより、様々な材料の高性能化を追求しています。

- 金属3Dプリンタを駆使した高性能マルエージング鋼の開発
- 積層造形したステンレス鋼の組織制御と耐食性向上
- 高熱伝導率と低熱膨張係数を有するアルミニウム／炭素系複合材料の開発
- 反応焼結／押し出し加工によるアルミニウム基複合材料の作製および強度・耐摩耗性の向上
- セラミックス基複合材料のIn-situ合成およびマルチ靱化効果
- エネルギー貯蔵用強誘電体セラミックスナノ複合材料の開発

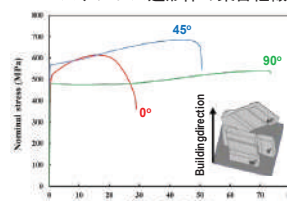


造形したマルエージング鋼のセル組織

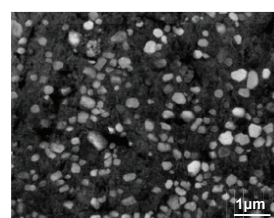
ステンレス造形体の集合組織



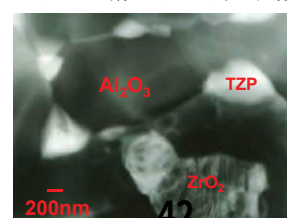
押し出したAl/黒鉛複合材料の組織



ステンレス鋼の応力-ひずみ曲線



反応合成したAl基複合材料の組織

In-situ合成したAl₂O₃基複合材料のTEM像

【担当】 陳中春・音田哲彦・衣立夫 (工学部機械物理系学科)

研究

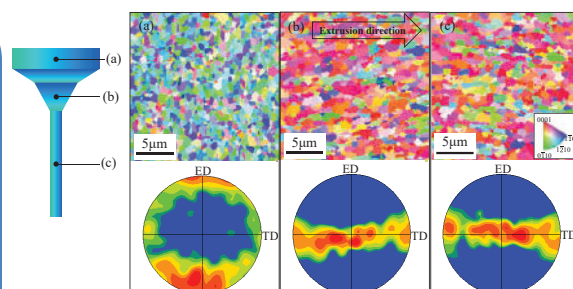


【活動概要】

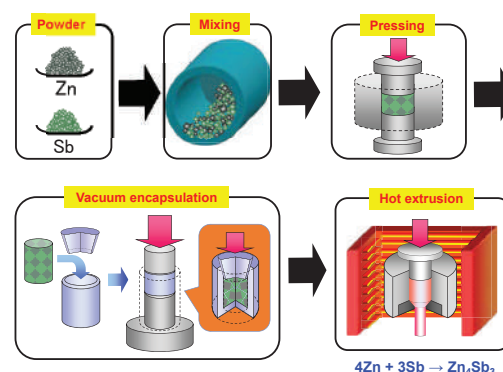
現在、日本で消費される一次供給エネルギーのうち、使用されているのは約三分の一のみで、残りの三分の二は最終的に廃熱として棄てられています。熱から直接発電できる熱電変換技術は、産業や民生分野の廃熱による発電への応用が期待されています。

産業・民生分野からの200℃以下の未利用低温廃熱による熱電発電や熱電冷却が可能な Bi_2Te_3 系熱電材料について、メカニカルアロイングあるいはガスアトマイズによる粉末作製と熱間押し出し加工を組み合わせたプロセスを提案し、結晶粒の微細化と配向化を同時に実現し、熱電性質と機械的性質の両立が可能であることを示しました。また、機械学習を用いて加工プロセス-組織-特性の相関の解明や加工パラメータの最適化を効率よく実現でき、高性能熱電材料の創製への新しい手法を構築しています。

さらに、自動車排気熱や産業分野から排出されている中温廃熱を電力に変換することが可能な Zn_4Sb_3 や MnSi 、 SnSe 等熱電材料の作製プロセスの開発についても精力的に研究を行っています。



押し出し成形した $\text{Bi}_2\text{Te}_{2.85}\text{Se}_{0.15}$ 試料のIPFマップと(0001)極点図



Zn_4Sb_3 熱電材料の反応-押し出しプロセスの模式図

【担当】 陳中春・音田哲彦・衣立夫 (工学部機械物理系学科)

ウイルス共生社会を支える革新的抗ウイルス材料の開発

研究

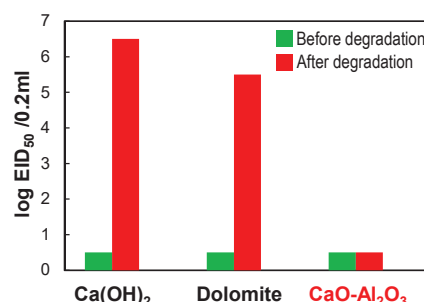


【活動概要】

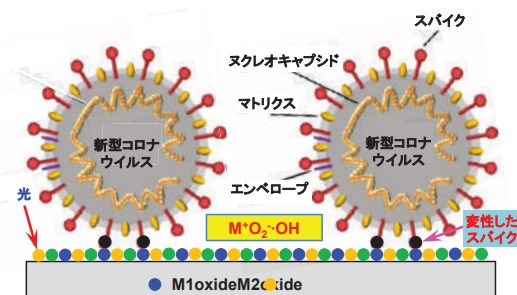
私達はウイルスの世界に生きています。この20年近く、SARS, MERS, そして新型コロナウイルス感染症は世界中で猛威を振るい、甚大な人的・社会的・経済的被害をもたらしています。ウイルスの蔓延を防止する対策として、ワクチンの接種や治療薬の開発に加えて、日常生活環境でのウイルス感染リスクの低減が重要であり、抗ウイルス材料とそれを活かした各種加工製品の開発も必要不可欠です。当グループは、以下の研究に取り組んでいます。

- ・高い即効性と持続性を有する強アルカリ性抗ウイルス粉体の開発
- ・メカニカルアロイングによる抗ウイルスナノ複合材料の合成

本研究では、抗ウイルス活性を有する新規素材を合成し、その抗ウイルス活性を発現するメカニズムを材料科学的に解明するとともに、材料の設計・組織制御の指針を構築しています。近い将来、抗ウイルス材料やその加工製品がウイルス共生社会のパンデミック対策として利用され、学術的にも実用的にも大きな波及効果が期待されます。



$\text{CO}_2-\text{H}_2\text{O}$ 雰囲気中40℃、24時間加速劣化試験前後の感染力価の比較。感染力価の値が小さいほど良い抗ウイルス活性を示す。



酸化物ナノ複合材料の抗ウイルス活性のイメージ図

【担当】 陳中春・音田哲彦・衣立夫 (工学部)
景山誠二 (医学部)

研究

7 エネルギーを安全に
もって利用する9 産業と技術革新の
基盤をつくらう11 住み続けられる
まちづくりを12 つくる責任
つかう責任

【活動概要】

安全で安心な機械や機械システムの構築のために、以下の研究に取り組んでいます。

・機械材料の強度評価に関する研究

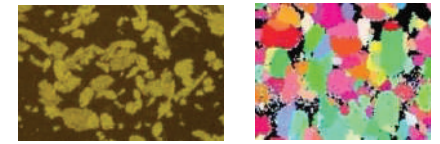
機械材料は稼働中の繰返し負荷により疲労破壊を引き起こす可能性があるため、疲労寿命を正確に把握して設計に反映させることが重要となります。そこで、疲労試験を実施することに加えて、薄膜を用いた応力測定法についても検討しています。

・機械要素の効率化・高強度化に関する研究

機械要素の代表である動力伝達用歯車について、疲労強度や衝撃強度を向上させる表面処理等について検討しています。このような歯車の実現により、安全な機械システムのさらなる効率化につながります。

・交通渋滞の緩和に関する研究

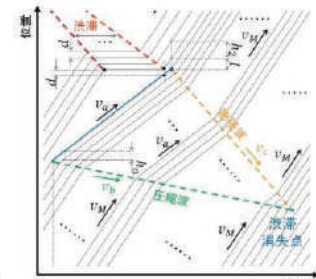
高速道路上における車の集団運動の研究として、少数の車の動き方を工夫した渋滞の除去・緩和方法を研究しています。この研究によって、安価でフレキシブルな旅行時間の短縮と、燃料消費量や排出ガス量の削減が期待されます。



応力測定用薄膜（左：成長粒子，右：逆極点図）



自動車用トランスミッション 焼入れによる歯型の硬化層

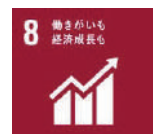


1台の車による渋滞除去の模式図

【担当】小野勇一，西遼佑（工学部機械物理系学科信頼性・設計工学研究室）

極低温冷却環境下における機械加工

研究

8 働きがいも
経済成長も9 産業と技術革新の
基盤をつくらう11 住み続けられる
まちづくりを12 つくる責任
つかう責任14 海の豊かさを
まもり

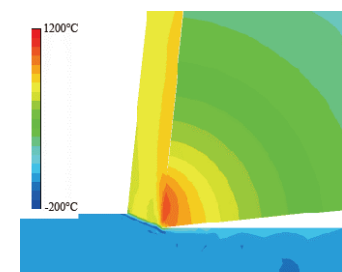
【活動概要】

チタン合金といった機能性材料は航空機や医療介護機器部材として幅広く使用されています。しかしこれらの合金の加工では切削温度が高くなりやすく、工具摩耗の抑制に対するクーラント技術が重要です。クーラントとして切削液を使用する場合、油剤による環境汚染や作業者の健康被害など悪影響が生じます。このため、切削液を使用せず、液体窒素などの低温冷媒を切削点に噴射供給する極低温切削の研究を進めています。

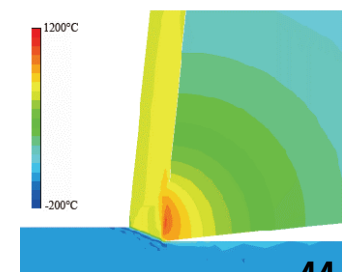
液体窒素は液滴が被冷却物と接触した際に蒸発をし、冷却効果を十分に発揮できないなど課題が多いです。本研究では、低温環境下での切削における工具や被削材表層での熱伝達特性を解明し、冷却効率を最大限に高めるような加工条件の最適化を図ることで、環境負荷の小さな、極低温冷媒を使用した新たな機械加工技術を実現することを目標としています。



噴射ノズル



Dry



LN2

温度分布 V = 120 m/min

【担当】佐藤昌彦（工学部機械物理系学科）

研究



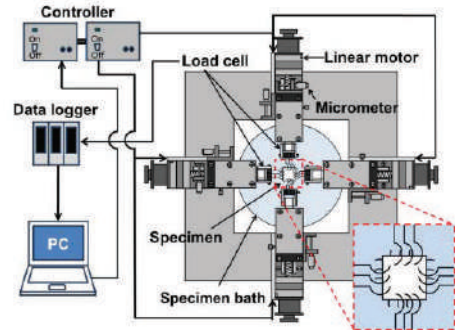
【活動概要】

・ 傷害バイオメカニクス

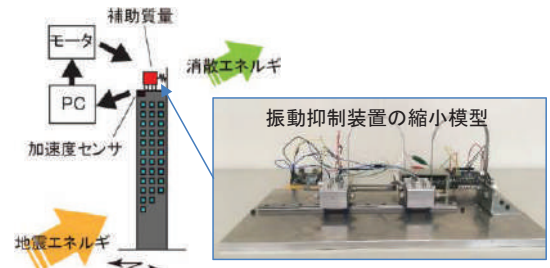
交通事故やコンタクト・スポーツによる怪我の受傷メカニズムを明らかにするため、人体モデルを活用した数値シミュレーションや生体材料を対象とした力学実験に取り組んでいます。その一方で、血管や胚など、私たちの身体や生命に関する様々な不思議も大切にしながら、人々の「安全で健康な暮らしを守る」をコンセプトに日々の研究を進めています。

・ 機械・構造物の振動制御に関する研究

持続可能な社会を実現するため、モノを長期に利用できるようにすることは重要です。我々の身近にある機械・構造物は様々な外力に曝されており、中でも振動による共振現象は、小さな力で甚大な被害をもたらします。私たちは、このような振動被害から機械・構造物を守るための研究をしています。



二軸引張試験装置を活用した生体材料の力学実験



構造物の振動抑制装置の開発

【担当】田村篤敬，本宮潤一
(工学部機械物理系学科 機械力学・メカトロニクス研究室)

革新的な宇宙往還技術と流体制御デバイスの開発
～宇宙利用の加速と低燃費航空機の実現～

研究



【活動概要】

地球観測衛星、GPS衛星、宇宙資源の開発など、宇宙から地球を守る・利用する需要が急増しています。我々は、この宇宙利用の増加に対応するため、安全かつ低コストに宇宙を行き来できる革新的技術の研究を行っています。また、世界的な航空機の需要増加の中、そのCO2排出量が問題視されています。我々は、航空機の抵抗を低減し、燃費を向上させる革新的の流体制御デバイスの研究を行っています。

【宇宙利用の加速のための革新的技術】

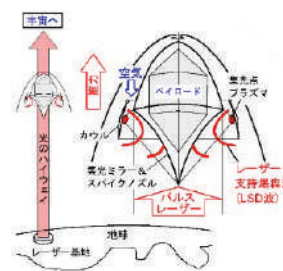
- ・ アブレーションセンサーによる大気圏突入機の安全性向上
- ・ 超高速大気圏突入機の加熱環境の解明
- ・ 電磁力を用いた大気圏突入機の能動的減速技術
- ・ パルスレーザーを用いた低コスト打ち上げロケット

【低燃費航空機のための流体制御技術】

- ・ プラズマアクチュエータによる空力抵抗の制御
- ・ 圧電振動板式シンセティックジェットによる流れ制御



大気圏突入機用飛行
アブレーションセンサー



低コストパルスレーザー
打ち上げロケット



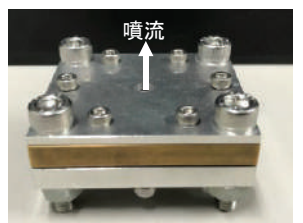
プラズマアクチュエータ
による流れ制御



超高速大気圏突入試験用
自由ピストン衝撃波管



電磁を用いた大気圏突入
機の能動的減速法



圧電振動板式シンセ
ティックジェット

【担当】酒井武治・松野隆・坂本憲一（工学部機械物理系学科・流体工学研究室）、葛山浩（同学科・宇宙推進工学研究室）

核融合エネルギー開発 ～ 持続可能な基盤エネルギー源のひとつとして

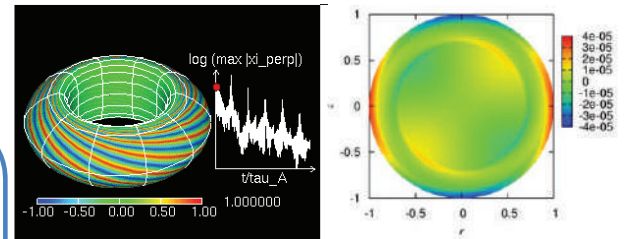
工学部
(機械物理系学科)
大学院工学研究科

研究

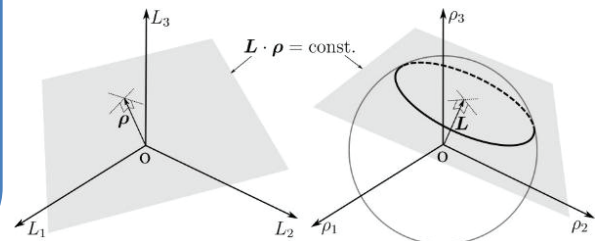


【活動概要】

- 火力発電や原子力発電に代わる基盤電源のひとつとして、核融合発電を研究しています。
- 燃料になる重水素を海水から得る技術は確立しており、量はほぼ無尽蔵です。
- 核融合反応によりエネルギーを取り出すためには、高温のプラズマを炉内に閉じ込めておく必要があります。これが核融合開発が始まった頃に予想されたよりもずっと難しく、世界中で研究が続けられています。
- プラズマ閉じ込め性能の改善に必要なプラズマ物理学について、特に巨視的な運動を記述する磁気流体力学の観点から研究しています。
- プラズマ物理学の数理的側面にも注目して研究することにより、流体力学や数値解析学といった他分野との交流も積極的に行っています。
- 物理・数理的研究の成果を核融合開発にフィードバックし、持続的なエネルギー源の実現を目指しています。



(左上) プラズマ中で発生し得るバルーニング不安定性と、プラズマ流シアによる安定化のシミュレーション
(右上) プラズマ外に原因をもつ非対称磁場がプラズマ中に浸透する様子
(下) 磁気流体力学方程式と似た性質をもつ有限自由度の非正準ハミルトン系(重力下のこま)の相空間



【担当】 工学部機械物理系学科 古川勝

固体・液体・気体のナノ薄膜を利用した省エネ

工学部
(機械物理系学科)
大学院工学研究科

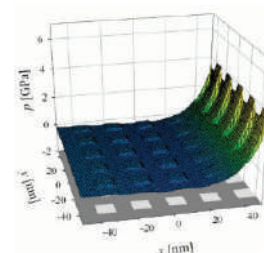
研究、社会貢献



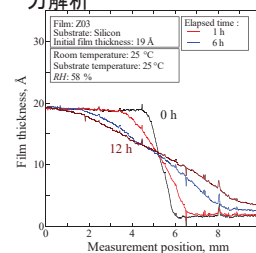
【活動概要】

機械には動く部分があり、そこには必ず摩擦が生じます。また、近年では機械の精密化・高精度化が急速に進むと共に、目に見えるか見えないか位の微小な部品からできた小さな機械も生活の中で随所に使われています。機械を精密に動かしたり小さな機械部品を間違いなく動かすためには、表面と表面が互いに作用しあって生じる摩擦を原子・分子のレベル(ナノメートルあるいは大きくてもマイクロメートルの領域)から理解し制御する必要があります。

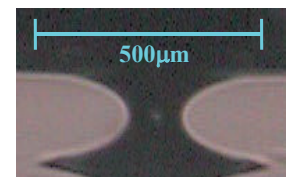
ナノ/マイクロメートルの超微小領域では、一般的に我々が経験するセンチやメートルの大きさでの現象とは違う現象が重要となってきます。例えば、空気はナノメートルの空間では粒々に見えます。こうした超微小領域で顕著となる”表面間相互作用”, ”分子液体効果”, あるいは”分子気体効果”による力学作用を、連続体力学, 統計力学等に基づいて究明し、理論解析・計算機シミュレーションあるいは実験的手法を駆使することにより、超微小領域での機械の特性解析を行います。それにより低摩擦化、引いては省エネの実現を目指します。



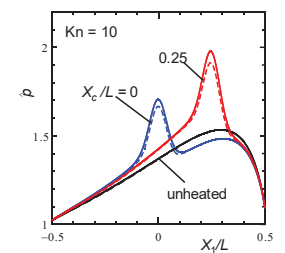
ナノメートルすき間に生じる分子間力による圧力解析



液体ナノ段差形状の時間変化の測定結果



微小液体メニスカス架橋の実験観察



局所加熱マイクロ潤滑流路内の空気膜圧力分布

	ダイヤモンド	DLC	グラファイト
構造	sp ³	sp ² + sp ³	sp ²
結晶質	結晶質	非晶質	結晶質
元素	C	C, H, etc.	46 C

炭素ナノ薄膜の内部構造とその多様性

【担当】 松岡広成・土井俊行・石川功
(工学部機械物理系学科, 持続性社会創生科学研究科工学専攻, 工学研究科工学専攻)

流体機械内で用いられる新しい騒音低減デバイスの開発

工学部
(機械物理系学科)
大学院工学研究科

研究

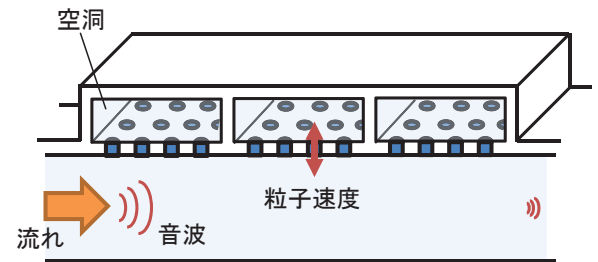


【活動概要】

航空機用エンジンやガスタービン発電機に代表されるような流体機械では流路内を伝播する圧力変動（音）が異常に大きくなって騒音問題を引き起こしたり、運転できなくなってしまう場合があります。このような圧力変動を低減するために、音楽室や教室の壁にも見られるような多孔板が流体機械内でも吸音デバイスとして用いられます。

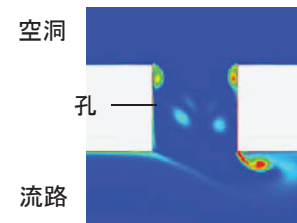
多孔板を設計するには、吸音性能を予測しておく必要がありますが、吸音性能は流れによって大きく変化するため、予測することは難しいのが実情です。

この研究では、流れを可視化する実験 (Particle Image Velocimetry, PIV) や数値解析 (Computational Fluid Dynamics, CFD) と音響計測を組み合わせ、流れと多孔板の吸音性能との関係を調べています。それが明らかになれば、より高い吸音性能を示す多孔板の形状や寸法を決めることができます。



多孔板による流路内音波の吸音

流路を伝わる圧力変動（音）が空洞内で共鳴し、孔を通る往復流の速度が増加する。音響抵抗によって、往復流のエネルギーが散逸し、音波が小さくなる。



多孔板の孔一つをモデル化した数値解析結果

孔を往復する流れによって、壁の角から渦が放出されている。往復流のエネルギーが渦のエネルギーとして運び去られる。

【担当】 工学部 AMES/機械物理系学科 後藤，松野，中井

小形垂直軸風車の最適密集配置の探索研究

工学部
(機械物理系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

二酸化炭素の排出が無く、環境に優しい小形風力発電の普及を目指して、低コストになりうる垂直軸型のバタフライ風車の研究開発を行っています。風車は低風速において効率良く回転させるだけでなく、強風の中において安全に回転数を低下させて風車を制御することも重要です。これまでに企業との共同研究によって、リサイクルが可能なアルミ合金を用いた14mクラスのバタフライ風車の開発を行ってきました（図1）。この風車には、遠心力と強風的作用によって自動で傾いて回転数を制御できるユニークな可動アーム式過回転抑制機構を備えています。将来的には、バタフライ風車のウインドファームの導入を想定しています。効率的な発電のためには最適な風車配置を見つけることが重要です。特に垂直軸風車では、回転方向の異なる風車どうしの相互作用によって、単位面積当たりの高い出力密度を持ったウインドファームとする可能性があります。生物の進化を模倣した遺伝的アルゴリズムなどの最適化手法を応用して、短時間で最適な配置を探る研究を実施中です（図2）。

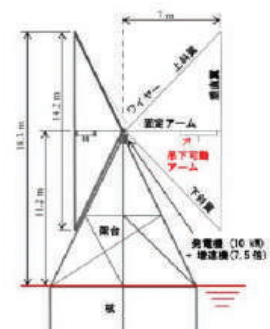


図1 14m バタフライ風車

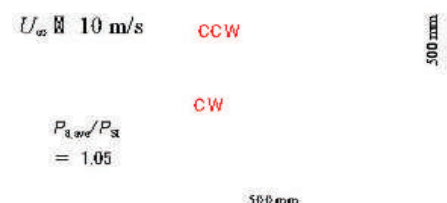


図2 8基のミニチュア垂直軸風車を対象とした最適密集配置を探索するシミュレーションの結果例。●:時計方向回転, ○:反時計方向回転; 緑色は減速領域, 赤色は増速領域。

【担当】 原豊（工学部機械物理系学科，持続性社会創生科学研究科工学専攻）

課外活動



【活動概要】

工学部機械物理系学科には、所属する女子在学生と上級生、卒業生のグループ「鳥大メカ女連絡会」があります。

現代においても、

- ・機械系や航空・宇宙系、物理工学系の学科の女子学生比率が低い
- ・女子がこれらの学科で学び、卒業後にメカ等で働くことについて日本社会全体に現代的なイメージが形成・浸透していない
- ・「機械=作業服」で油まみれというステレオタイプが固定化という現実があります。

ところが実際の現場では、多様な価値観を持つ人たちの柔軟な思考がシステム設計に求められており、就職は非常に良好で、卒業後は様々な領域で大きな活躍をしています。

鳥大メカ女連絡会では、機械物理系の女子学生や卒業生の意見交換の場を設け、リアルな将来イメージを描けるように努めています。



【担当】 工学部機械物理系学科 メカ女連絡会

究極の軽量構造を実現する超高強度材料

研究



【活動概要】

自動車のような内燃機関を有する輸送体では化石燃料の消費に伴い二酸化炭素が排出されます。地球温暖化の原因とも考えられており、いかに燃料消費を抑制して二酸化炭素を出さないかという点が課題です。

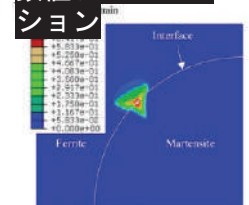
このような省エネルギーには輸送体の軽量化が必要です。ただし、輸送体は中に人が乗ることが前提ですから、衝突事故のようなアクシデントに備えて構造体としての強度を落とすことは許されません。

本研究では、このような構造体の強度を保持、あるいは向上させながら軽量構造を実現する材料として、超高強度金属材料を研究しています。その強度と延性の発現機構を巨視的・微視的な材料試験とシミュレーションを用いて明らかにし、その知見を踏まえた材料設計指針を導出することを目指しています。

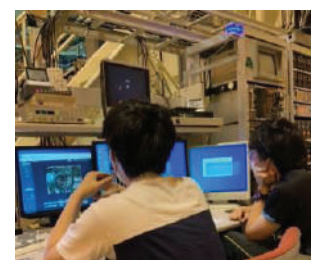
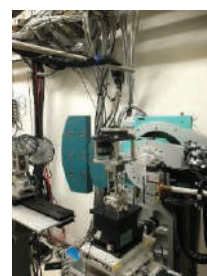
実験



数値シミュレーション



超高強度鋼に対するナノ硬さ測定とその数値シミュレーション



Spring-8でのX線応力測定その場引張試験

【担当】 松野 崇（工学部機械物理系学科）

研究

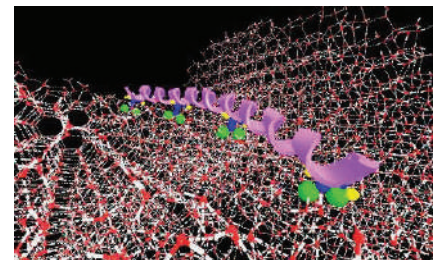


【活動概要】

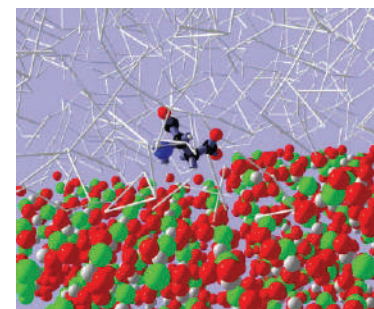
自然界でつくられている結晶の多くは、多彩なかたちや性質を示します。まるで芸術品のような美しい雪結晶のかたちは、水分子が自然に集まってできたものです。生体内でつくられる鉱物結晶などには、人工のものよりも優れた性質を示すものが沢山あります。それら結晶は、電気やエネルギーを費やすことなく、自然界に大量にある物質だけを使って巧みに造られています。その自然や生体内で結晶ができるしくみには、私たちが必要な環境にやさしい物質設計のヒントが刻まれているに違いありません。

私たちの研究室では、雪や氷、鉱物など自然界の様々な結晶ができるしくみを原子や分子を単位としたコンピューターシミュレーションで追及しています。また、それら結晶のかたちをコントロールする生体分子や高分子などの機能もコンピューターを使って探っています。それらの研究から得られる新しい学術的知見により、省エネルギー技術や新しい産業の創出などに貢献していきます。

極域の魚に含まれる不凍タンパク質が氷に
吸着して結晶のかたちを制御する機構



アスパラギン酸が炭酸カルシウム結晶表面
に吸着して表面構造を制御する機構



【担当】工学部機械物理系学科 灘 浩樹

分散型e-Learningシステムの研究

研究

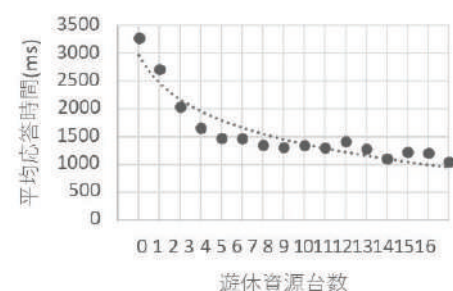


【活動概要】

教育機関におけるe-Learningシステムには、ピーク時の利用に耐えられる高性能なシステムが要求されます。一方、教育機関には多数のコンピュータが存在し、各コンピュータのCPUやストレージは十分に活用されていません。そこでこれらの遊休資源を利用して、e-Learningシステムに費用負担なしで高い拡張可能性を与える手法の研究を行っています。具体的には、コンピュータがe-Learningシステムに動的に参加・離脱する手法の開発、コンテンツを分散管理する手法の開発を行っています。



遊休資源



遊休資源を利用した応答時間の向上

【担当】研究代表者：川村尚生（工学部電気情報系学科）

研究



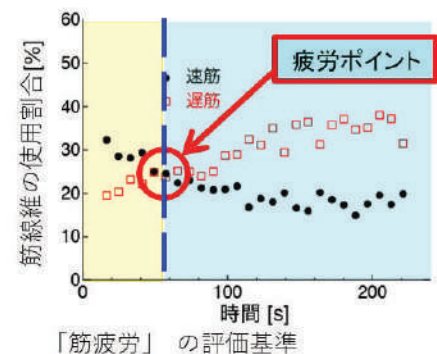
【活動概要】

市販されているリハビリ機器では、筋の回復状態や疲労といった患者のコンディションを自動判断できない欠点があります。これは筋が発する力や筋の疲労を科学的に評価する方法が存在しないことが原因です。

そこで、筋が収縮する際に皮膚表面から測定できる筋活動電位（EMG）を用いて「筋力」や「筋疲労」を評価する研究を行っています。これによって主観に左右されない筋の評価基準を作ることができ、健康状態の筋力に復帰させる目的で実施するリハビリテーション、高齢者の筋力を維持する目的で実施するリハビリテーション、筋力を増強させる目的で実施するトレーニングといった、目的ごとに最適な筋負荷を最適なタイミングで与えることが可能となります。本研究では患者や健康者を問わず、また、高齢者や若者を問うこともなく、各々が自身の健康と福祉のために活用できる技術を社会にもたすことが期待されます。



筋活動電位 (EMG) の取得例



【担当】研究代表者：櫛田大輔（工学部電気情報系学科）

ウェアラブル生体センサの体動ノイズ除去の研究

研究



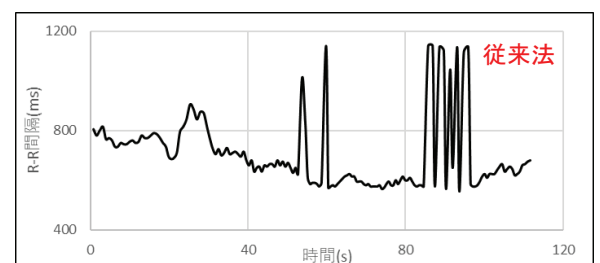
【活動概要】

身体に装着して用いるウェアラブル医療機器によって心電波形などの生体情報を常時モニターし、異常の兆候があればユーザに知らせることは生活習慣病の予防などのヘルスケアに有効です。しかしながら常時モニター用ウェアラブル医療機器には以下のような課題があります。すなわち、電極を肌に固定する場合、肌の弱い人にはかぶれや痒みを引き起こし、また電極を肌に固定しない場合、体動に起因する波形乱れが生じます。

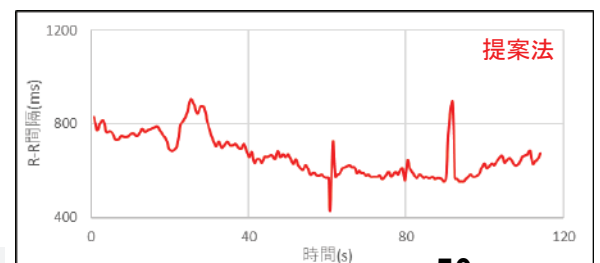
そこで電極を肌に固定せず、複数のセンサを組み合わせで適応フィルタで波形乱れを除去する研究を行っています。実験の結果、提案法によって体動ノイズを低減し、肌に固定した場合に近い高精度な生体信号推定を可能とすることが確認されました。



衣服型生体センサ



ノイズ低減



【担当】研究代表者：中川匡夫（工学部電気情報系学科）

植物育成に有効な農業用蛍光フィルムの研究

工学部
(電気情報系学科)
大学院工学研究科

研究

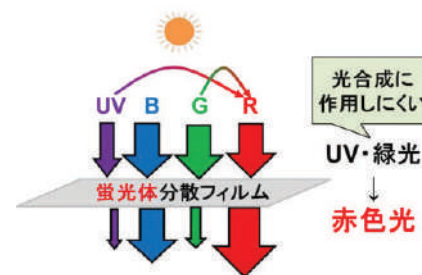


【活動概要】

日本海側を中心とした低日照地域では、冬季の栽培が難しく、暖房費等のコストが高くなる問題点があります。

そこで波長変換機能を有する農業フィルムによる育成促進の研究を行っています。化学的に安定な無機蛍光体を使用することで、3～5年の製品寿命を実現する耐久性を向上させます。また安価かつ低毒性の無機材料を選択し、光合成の促進や光形態制御などを狙います。

栽培の結果、蛍光フィルムにより、乾燥重量やポリフェノール含有率が約10%増加しました。



波長変換フィルムの動作



栽培例(ホーリーバジル)

【担当】研究代表者：大観光徳（工学部電気情報系学科）

MEMS技術を用いた水質モニタリングシステムの研究

工学部
(電気情報系学科)
大学院工学研究科

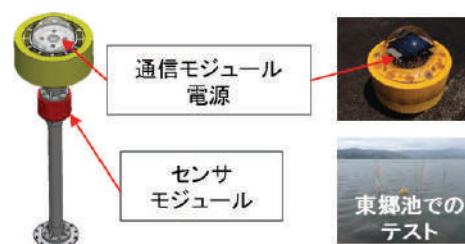
研究



【活動概要】

環境汚染の監視、自然環境資源の保護のため水や空気などを対象にした環境モニタリングシステムのニーズが増加しています。しかしながら現存の環境モニタリングシステムは高価であり、実時間測定が困難です。

そこで安価であり、実時間で測定可能なモニタリングシステムを開発します。また湖沼水や地下水の水質をモニタリングするセンサを開発し、IoT技術とMEMS技術を用いた安価な水質モニタリングシステムの実現を図ります。



湖沼水モニタリングシステム概要



地下水モニタリングシステム概要

【担当】研究代表者：李相錫（工学部電気情報系学科）

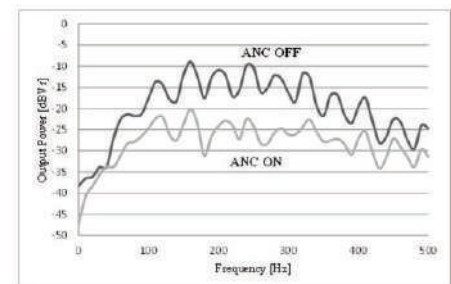
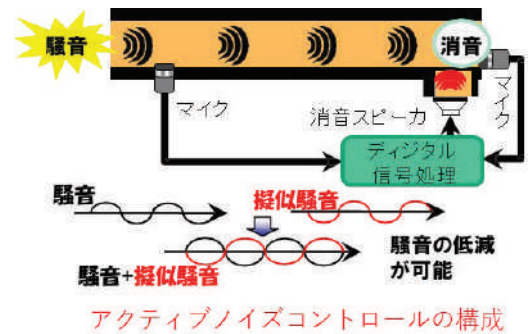
研究



【活動概要】

高速道路や排気ダクトなどから発生する騒音は公害となります。このような騒音を低減する手法として、同振幅逆位相の騒音を発生し打ち消すアクティブノイズコントロールがあります。しかしながら、従来手法の動作は不安定でした。

そこで安定動作するシステム構成の研究を行っています。計算機シミュレーションと実機による実験の結果、提案法により安定的に騒音を低減することが確認されました。



実機による実験結果

【担当】研究代表者：笹岡直人（工学部電気情報系学科）

高効率太陽電池の開発

研究



【活動概要】

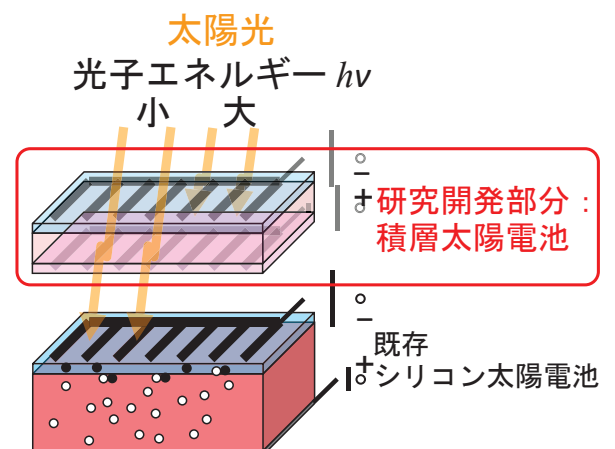
太陽光発電は、化石燃料に代わる自然エネルギー利用の中心の一つと考えられますが、発電コストの低減が望まれています。

それには、製造コスト削減の他に太陽光から電力への変換効率の向上が有効です。これは設置面積の有効利用にもなります。

太陽電池は半導体の働きで光のエネルギーを電力に変換しますが、一つの太陽電池では理論的に30%程度の変換効率が限界です。一方、複数種の半導体からなる太陽電池を積層することで高効率化できることが知られています。

本研究では、以下のようにコストを抑えた高効率太陽電池を目指しています。

- 既存のシリコン結晶太陽電池を用い、この上に重ねる太陽電池を開発することで、太陽光のエネルギーを有効活用します。
- そこで用いる半導体として、適性があり、研究代表者らがノウハウを持つリン化ガリウムまたは硫化物半導体を用います。
- 各太陽電池から個別に電力を取り出します（4端子型）。



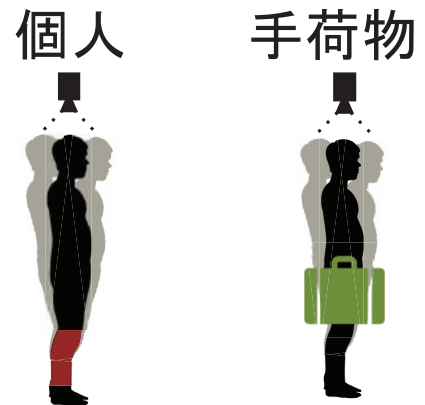
【担当】研究代表者：市野邦男（工学部電気情報系学科）

研究



【活動概要】

人々の生活の安心・安全を守るため、人物画像認識の研究に取り組んでいます。カメラから撮影された画像の中に存在する人物を対象とし、様々な情報(例えば、個人、性別、身体の疲れ、所持する手荷物など)を認識する技術開発に取り組んでいます。人物は普段から様々な行動をとっており、歩いていることもあれば立っていることもあります。我々の研究では、特に立ち止まる人物を対象とし、その人物の体から自然に発生する微小な動きを手掛かりとする認識技術を開発しています。この微小な動きは身体動揺と呼ばれており、本人が意識することなく発生しています。また、個人や性別や疲れなどによって、身体動揺の時系列信号は変化するため、その人物の特徴をつかむことができます。将来の応用として、疲れを認識することで人々の健康を守り、個人を認識することで迷子をすぐに発見でき安心を保つことができるようになります。

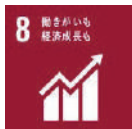


カメラで認識



【担当】研究代表者:西山 正志・井上 路子(工学部電気情報系学科)

教育、研究、社会貢献



【活動概要】

ChatGPTなどの言語生成AIは、情報収集、質問応答、要約、対話、文章生成、プログラミングなど、多岐にわたる機能を実現している。

言語生成AIを有効活用する研究を進めている。具体的には、教育的小説の生成と株予測分析を進めている。

言語生成AIを使うと、教育に役立つ小説を生成できる。自然言語処理、SDGs、行動経済学を楽しく学べる小説を生成した。興味を持ったか、勉強になったかの軸で-3から3の評価点のうち約1.5を得た。

言語生成AIと機械学習を併用して日経平均株価の新聞記事を分析した。言語生成AIで主要な要因を新聞記事から抜き出してから機械学習で分析したところ、日経平均株価の上昇の原因としてアジア株、米国株の上昇があげられること、株価下落の原因として利益確定売り、市場への警戒感の増加、米国株の下落があることがわかった。

【担当】研究代表者:村田真樹(工学部電気情報系学科)

ChatGPTで生成した教育的小説の例:

タイトル:「未来の種を蒔こう」第5章:学びの場

リナは、自分たちの村に学校を作りたいと考えました。リナはナオミと一緒に、村の若者たちを集めて、学校設立のための計画を立てました。

「子供たちには教育の機会を与えたい。それが彼らの未来を築く力になるはずだ」とリナは熱く語りました。

「私も賛成だよ、リナ。みんなで力を合わせれば、きっと学校ができる」とナオミが言いました。

若者たちが一致団結して学校設立のために努力を始めた。村の人たちも、彼らの取り組みを応援しました。

村の長・タカシは、「私たちも力を貸そう。村のために良いことをしているんだから」と言って、学校設立の資金を提供しました。

学校ができると、リナは先生として、村の子供たちに読み書きや算数を教え始めました。子供たちの目は輝き、学ぶ喜びに満ちていました。

リナの母・ユミコがリナに声をかけました。「リナ、本当にすごいことをしたね。子供たちが教育を受けられるなんて、これからの村が楽しみだわ」

リナは笑顔で、「母さん、ありがとう。これからは、村の子供たちが未来を築いていくんだ」と答えました。

ある日、学校の教室で、リナが子供たちに言いました。「私たちが学び、成長することで、私たちの村がより良い場所になる。一緒に未来を築いていこうね」

子供たちが一斉に、「はい、先生!」と返事をしました。リナは子供たちの笑顔に心を打たれ、村の未来を築く力を感じました。

(SDG4: 質の高い教育)

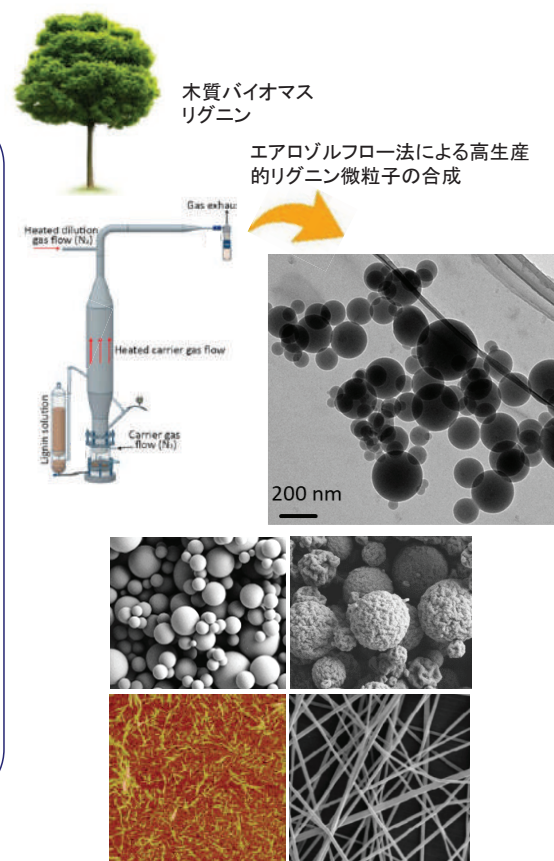
研究



【活動概要】

日本の国土の約7割は森林であり、豊富な森林資源を有する森林資源大国であるにもかかわらず、未利用木質資源を活用した材料化や高付加価値化に関する研究・産業構造は、依然として確立途上にあります。そこで本研究では、未利用資源の代表例であるリグニンに着目し、コロイド・界面化学の視点から機能性材料の開発と社会実装を目指した研究に取り組んでいます。

リグニンは、フェノール性水酸基、メトキシ基、カルボキシル基など多様な官能基を含む高分散かつ不均一な分子構造を有しており、水素結合性や疎水相互作用などを介した独自の材料特性を発現します。このような構造的・化学的多様性は、設計自由度の高い材料創製に資する一方で、溶解性や再現性、表面エネルギー制御の難しさといった課題も内在しています。そこで本研究では、リグニンの構造的不均一性や官能基多様性による材料設計の困難さを克服するため、リグニンの微粒子化、表面化学制御および集合体構築に基づく階層的アプローチを採用し、機能性の高度化とその再現性の確保に挑戦しています。これまでに、エアロゾルフロー法により、真球状リグニン微粒子を高収率、高効率で合成することに成功し、さまざまな用途への適用を実証しました。



【担当】研究代表者：吾郷万里子（工学部化学バイオ系学科）

電気化学に基づく物質生産・電力貯蔵・情報処理

研究

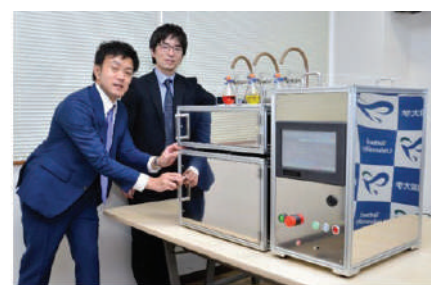


【活動概要】

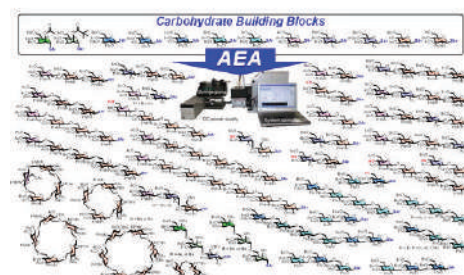
電気化学的手法を用いた有機化合物の分子変換が注目を集めている。我々はこれまでにオリゴ糖合成などに電気化学的手法を利用し、効率的な分子変換法を開発してきた。また、最近では企業と共同でオリゴ糖の液相電解自動合成装置を開発し、社会実装に取り組んでいる。これまでに合成可能なオリゴ糖のライブラリーは環状オリゴ糖を含め多岐に渡っているが、装置を用いて合成可能な化合物はオリゴ糖に限定されない。

エネルギー貯蔵といえば、ノーベル化学賞にも輝いたリチウムイオン電池が注目を集めているが、我々は安価な有機物を用いた二次電池の開発に取り組んで来た。最近では全固体電池の実現に向けて新規電解質の開発を学内外の共同研究者と取り組んでいる。

情報処理においても、電気化学反応は大きな可能性を秘めている。これまで記憶装置の開発に用いていたイオン液体を情報処理に応用することで、情報処理の省力化を実現する。



企業と共同で開発したオリゴ糖の液相電解自動合成装置



合成可能なオリゴ糖ライブラリー

【担当】野上敏材（鳥取大学工学部化学バイオ系学科）

ウイルスレプリカの創製と薬物送達・ワクチンへの応用

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究

3 すべての人に
健康と福祉を

9 産業と資源革新の
基盤をつくろう

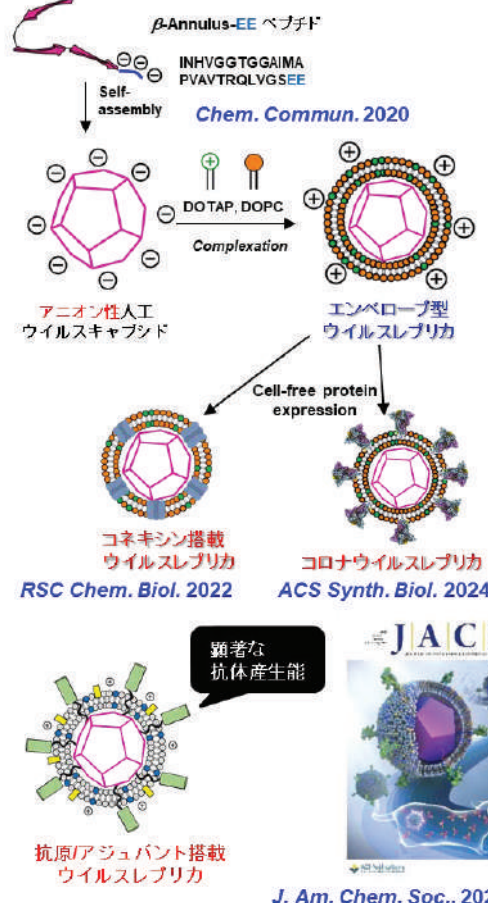
12 つくる責任
つかう責任



【活動概要】

ウイルス類似物を人工的に創ることができれば、ウイルス感染のメカニズムを解析するための分子ツールとしての活用だけでなく、細胞が本物のウイルスと誤認識することによる薬物送達(DDS)技術やワクチンの開発などにも応用可能な基盤技術を与えると期待されています。我々は、「化学の力」で分子設計した自己集合性ペプチドからなるアニオン性人工ウイルスキャプシドとカチオン性脂質二分子膜との複合化により、**エンベロープ型ウイルスレプリカの創製ならびに無細胞発現系による膜タンパク質搭載に成功**しています。例えば、**コロナウイルス由来のスパイクタンパク質を搭載したウイルスレプリカは、レセプターを発現している細胞に取り込まれることを見出しています**。さらに、**乳ガン抗原CH401を表面提示したエンベロープ型ウイルスレプリカがマウス体内で抗体産生を著しく向上させる**ことに世界で初めて成功しています。

これらの研究に関して2024年度高分子学会賞を受賞しています。



【担当】研究代表者：松浦和則（工学部化学バイオ系学科）
稲葉央（工学部化学バイオ系学科）

光応答性ペプチドナノファイバーの創製と分子ロボティクスへの応用

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究

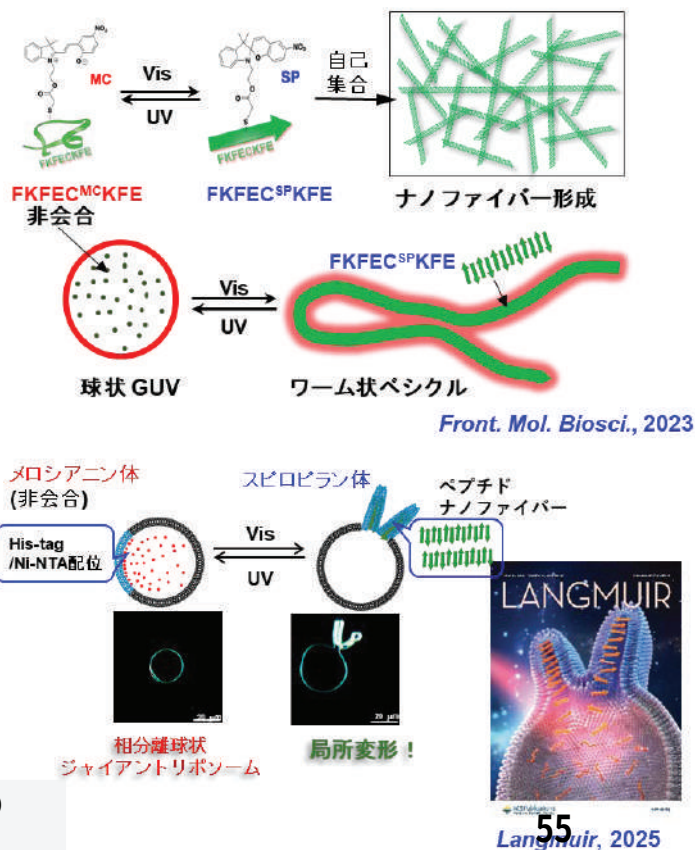
9 産業と資源革新の
基盤をつくろう

12 つくる責任
つかう責任

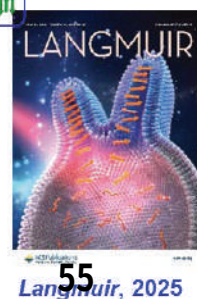
【活動概要】

アメーバなどの単細胞生物は、細胞骨格が細胞膜付近で粘弾性の変化させることにより、仮足の形成などの局所的な変形を行っています。このようなダイナミックな構造変化を人工的に制御し、外部刺激により集合体の長さや形状を制御することは、人工細胞や分子ロボットの実現に向けた重要な課題です。我々は、光異性化により極性や親水性・疎水性が変化する色素である**スピロピラン(SP)** / **メロシアンin(MC)**を修飾したβ-シート形成ペプチドを開発し、**ナノファイバーの形成・解離を光制御することに成功**しています。リポソーム内での光によるペプチドナノファイバー形成により**球状からワーム状に可逆的かつ劇的に形態変化**することも見出しています。また最近、リポソームの一部にこのペプチドを局在化させることで、**アメーバの仮足形成のような局所的な形態変化を光制御**することに世界で初めて成功しました。

これらの研究に関して2024年度高分子学会賞を受賞しています。



【担当】研究代表者：松浦和則（工学部化学バイオ系学科）
稲葉央（工学部化学バイオ系学科）



細胞骨格「微小管」を人工制御するペプチドの創製

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究

3 すべての人に
健康と福祉を

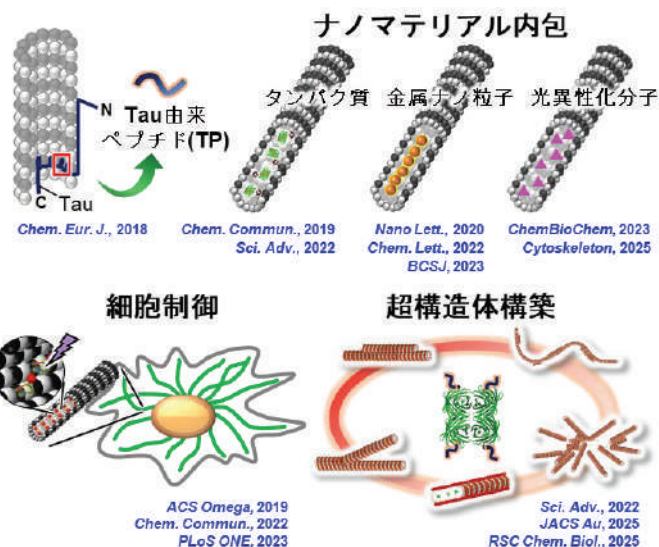
9 産業と技術革新の
基盤をつくろう

12 つくる責任
つかう責任

【活動概要】

細胞骨格の一種である微小管はチューブ状タンパク質集合体であり、細胞機能に重要な役割を果たすことに加え、運動性ナノマテリアルの部品としても注目されています。微小管の構造や機能を人工的に制御することは、生体応用や材料応用の観点から重要な課題です。我々は微小管の内部に結合するTau由来ペプチド (TP) を開発し、世界に先駆けて微小管の人工制御を行ってきました。これまでに、TPを用いたタンパク質や金属ナノ粒子などのナノマテリアルを微小管内部に導入による微小管の構造や機能の改変や細胞制御に成功しています。近年では、微小管からなる複雑な超構造体の構築に成功しています。このように、**微小管の構造や機能を制御する新しい設計指針**を打ち出しています。**微小管を用いたナノデバイスや分子ロボットなどのマテリアル開発や生体応用などの展開**が期待されます。これらの研究に関して2024年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞しています。

【担当】研究代表者：松浦和則（工学部化学バイオ系学科）
稲葉央（工学部化学バイオ系学科）



ケイ素やゲルマニウムを利用した 環境に優しい新しい無機-有機ハイブリッド材料の開発

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究

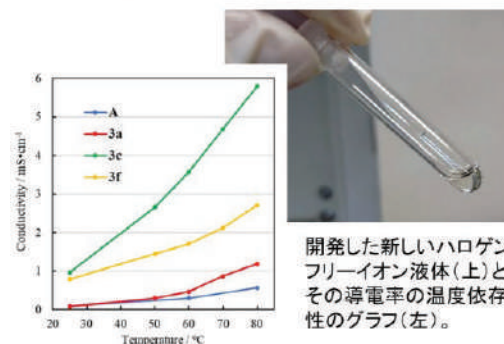
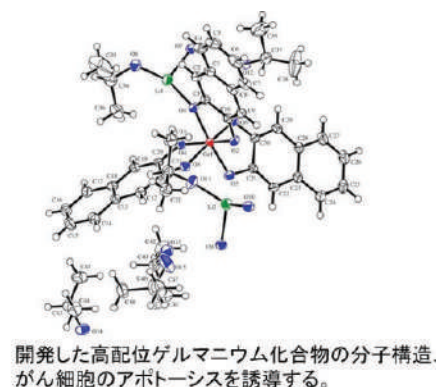
9 産業と技術革新の
基盤をつくろう

12 つくる責任
つかう責任

【活動概要】

生命を創造する重要な元素のひとつに炭素が挙げられます。この炭素と同族元素であるケイ素やゲルマニウムは、炭素と同じような性質を示すだけでなく、超原子価状態という炭素とは異なる特別な電子状態を容易にとり得る元素です。当研究室ではこの性質を利用して炭素では実現できない高配位のケイ素やゲルマニウム化合物の合成や機能性含ケイ素および含ゲルマニウム化合物を創製し、環境に優しいハロゲンフリーの導電性イオン液体の開発や、がん細胞増殖抑制効果を示す物質の開発などを研究しています。このような我々の生活を豊かにするための新規化合物の開拓を通して、環境問題やエネルギー問題の解決に向けた取り組みを行っています。

【担当】研究代表者：南条真佐人（工学部化学バイオ系学科）



人体や環境に優しい新しい機能性無機顔料の開発

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



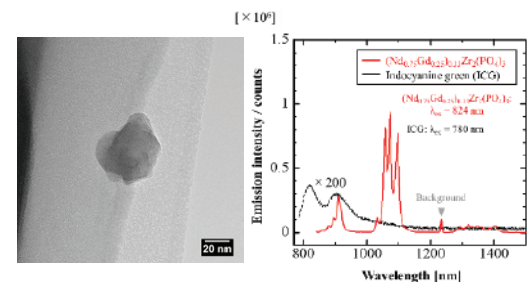
【活動概要】

着色材料、蛍光体、紫外線遮断材といった機能性顔料に注目し、新しい無機顔料の研究開発に取り組んでいます。無機顔料は、セラミックスやガラス、プラスチック、塗料といった様々な物質の着色材料として古くから利用されています。しかしながら、これまでに使用・製造されてきた顔料の多くは、カドミウムや鉛、六価クロムなどの人体や環境に対して極めて有害な金属元素を含んでいます。近年の環境保全意識の向上にともない、世界各国で、これらの有害元素を含む化合物の使用が制限されています。

当研究室では、有害元素を含まない原料及び合成プロセスを用いて、高性能かつ環境に調和した着色および蛍光顔料の開発を行い、誰もが安心・安全に使用することのできる新材料の実現を目指します。



これまでに当研究室で開発した
人体・環境に優しい着色無機顔料



開発した近赤外発光蛍光顔料の透過型電子顕微鏡写真と発光スペクトル

【担当】研究代表者：増井敏行（工学部化学バイオ系学科）
研究分担者：山口和輝（工学部化学バイオ系学科）

ゼオライトの原理と設計

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

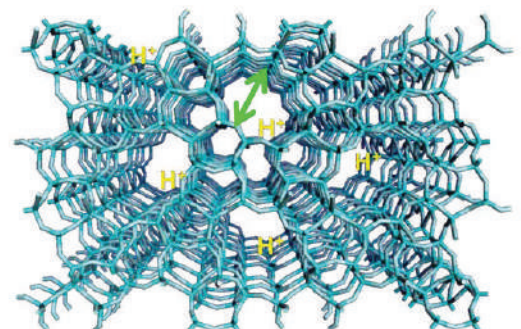
研究



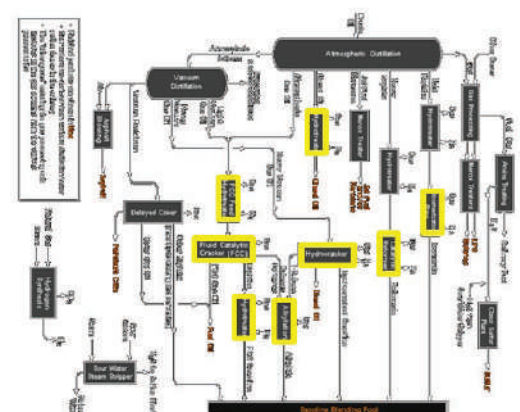
【活動概要】

原油中の重質・多環芳香族成分は化学反応によってガソリン・化学原料として有用な単環芳香族などに転換して利用されています。省エネは進んでも化学製品の需要は減らないので、原油から単環芳香族などの収率が実際のCO2排出量を決めています。ゼオライトは50年来この反応に触媒として利用されています。他にも触媒・担体として廃棄物低減、環境汚染物質の分解、吸着剤として断熱二重窓の普及、イオン交換剤として無リン洗剤、放射性同位体の除去などに用いられ、エネルギー・資源の有効利用にさらなる発展が望まれています。

本研究では先進的な化学吸着解析技術を開発し、ゼオライトの機能の源泉であるイオン交換サイトの化学特性が、原子の押し合う力に由来することを世界で初めて見出し、これを種々の機能材料の設計に反映させています。中でもメタンや重質油を高価値化学製品に転換しCO2総発生量を減らす試みはCREST、プラスチックをナフサ相当成分に選択的に転換する化学リサイクル法の開発はNEDOに採択されています。



ゼオライトとその二大機能の源泉であるミクロ細孔とイオン交換サイトの模式図



典型的な石油精製の流れとゼオライト触媒として利用する工程(黄太枠)

【担当】研究代表者：片田直伸
(工学部化学バイオ系学科・工学部附属GSC研究センター)

形状選択的触媒の開発

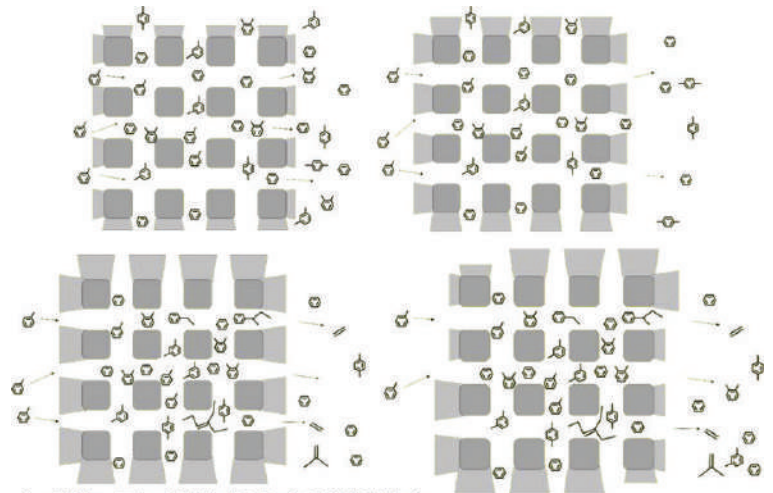
工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

PET原料であるパラキシレンを石油や天然ガス成分からつくる工程では、通常はメタ・オルトキシレンが副成し、資源の無駄となるばかりか分離に多大なエネルギーを費やします。ゼオライトのミクロ細孔の出口をさらに狭め、スマートなパラキシレンだけを取り出すpmスケールの精密技術の基本原則を本学の丹羽名誉教授が世界で初めて発表しました。この原理は工業化され、世界中にあふれるPETはこの方法で生産されています。従来の選択率は93%で、最近我々は触媒の改良によって99.7%を達成しました。このような高度な形状選択的触媒によって副生成物や廃棄物ゼロの世界を目指します。



ちょうどよい厚さで活性を損なうことなく選択性向上
厚すぎると活性低下、エチルベンゼン経由の脱アルキル化、コーク副生
厚さが均一な方がよい

【担当】研究代表者：片田直伸

(工学部化学バイオ系学科・工学部附属GSC研究センター)

エネルギー化学特論

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

教育



【活動概要】

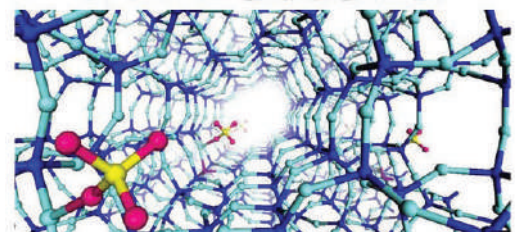
「エネルギー化学特論」は持続性社会創生科学研究科の共通科目であり、超領域科目として特に環境を意識した視点から、エネルギーの創造や有効利用に関する知識を身につけます。

エネルギーの有効利用に関わる化学や材料の技術、二酸化炭素排出など、エネルギーの使用が地球環境に及ぼす影響を学び、人類の持続的発展のために重要な方法を考える材料とすることを目指しています。

具体的には、エネルギーの有効利用に関わる化学や材料の技術を説明し、自分の研究課題に活用できるように、「エネルギー」、「二次電池」、「太陽電池」、「水素」、「自然エネルギー」、「バイオマス」、「重質油」、「メタン」、「蛍光体」、「発光ダイオード」について講述します。



リチウムイオン電池搭載電気自動車



ゼオライト触媒によるエネルギー創造



発光ダイオードによるエネルギーの有効利用

【担当】片田直伸・増井敏行・薄井洋行

(工学部化学バイオ系学科・持続性社会創生科学研究科工学専攻)

研究



【活動概要】

地球環境への配慮から、電気自動車や太陽光・風力などの再生可能エネルギーの活用を進めるため、蓄電池の性能向上が世界的に求められています。私たちの研究室では、現在のリチウムイオン電池をさらに進化させるため、現行の黒鉛負極の10倍近くの性能を有するケイ素に注目しています。ただし、充放電の際の大きな体積変化が課題であるため、ケイ素に他の材料を組み合わせたり、微量の元素を加えることでその課題をクリアしつつあります。さらに、海水に多量に含まれており、リチウムよりも資源的に豊富で安価なナトリウムやカリウムを用いた電池の開発にも力を入れています。当研究室が開発したリン化スズやルチル型酸化チタン、酸化鉄を用いた負極は既に産業界から高い注目を集めており、これらの新しい実用化に大きく貢献すると期待されています。未来のエネルギー社会を支え地球の環境を守るために、私たちは日々、最先端の材料開発に取り組んでいます。



【担当】研究代表者：坂口裕樹（工学部）
研究分担者：薄井洋行（工学部化学バイオ系学科）
道見康弘（工学部化学バイオ系学科）

空気中の水蒸気や二酸化炭素の資源化を目指した電極触媒の開発

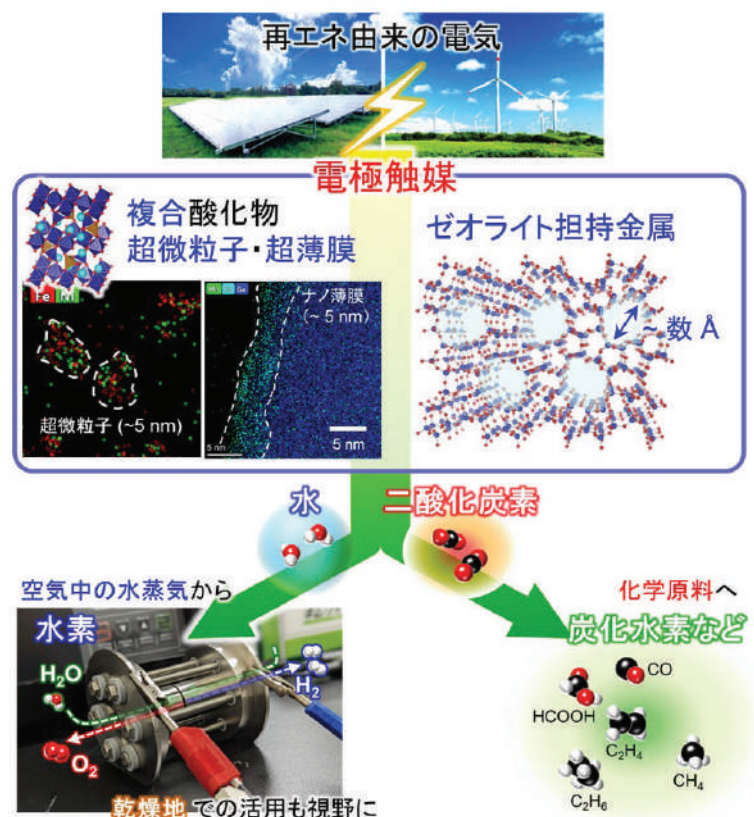
研究



【活動概要】

地球温暖化は現在人類が直面している最も大きな課題であり、温室効果ガスである二酸化炭素の削減が急務となっています。そのためには二酸化炭素を排出しないクリーンな水素製造法や二酸化炭素自体を原料とした有用炭素資源の製造法を確立する必要があります。

当研究室では、太陽光などの再エネ由来の電気を利用した電解用触媒の開発を中心に研究を進めています。太陽光が豊富に降り注ぐものの水資源に乏しい乾燥地において、空気中に含まれる水蒸気を吸湿し電解する新たな水素生成システムやそれを可能とする電極触媒、また資源も豊富で安価な金属元素から成る複合酸化物やゼオライトを活用し電解還元による二酸化炭素の炭素資源化のための電極触媒を開発しています。

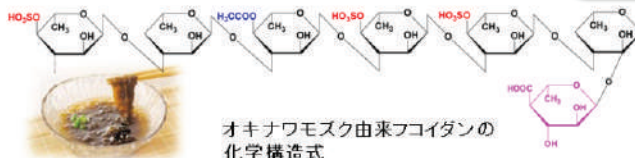


【担当】研究代表者：辻悦司（鳥取大学工学部
化学バイオ系学科工学部附属GSC研究センター）

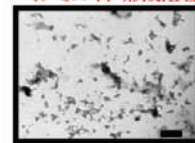
海洋バイオマスの利活用を目指した研究

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

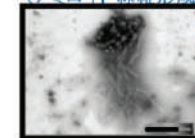
研究



フコイタン有り
(アミロイド形成阻害)



フコイタン無し
(アミロイド線維形成)

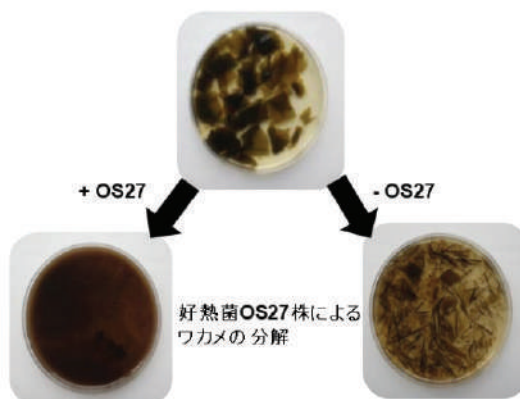


【活動概要】

近年、海洋バイオマスの有効利用が注目されています。我々は、多くの産業分野で利用可能な海藻多糖類に着目し、その分解酵素の探索を行っています。今までに海藻多糖類であるアルギン酸やフコイタンを栄養源として増殖する新奇微生物を単離し、分解に関わる酵素、遺伝子を特定しました。

タンパク質が、アミロイド線維と呼ばれる異常な凝集体を形成すると加齢に伴い発症する疾患の原因の一つとなります。高齢化社会の中で発症予防は重要な課題であり、生活習慣病予防も健康増進には欠かせません。「医食同源」の概念をベースに、日本に豊富に存在し馴染みのある海藻に着目し、海藻成分から様々な有用な物質の探索とその機能について調べています。

ジオバチラス属細菌は、様々な物質を栄養源にできる中等度好熱菌で、従来は難しかった物質生産を可能にする潜在性を持ちます。我々は海藻成分を栄養源にできるOS27株を単離し、それがもつ海藻分解系を解明しようとしています。そのような分解系は、未利用海藻を原料とした有用物質生産に利用できるかと期待しています。



【担当】研究代表者：大城 隆（工学部化学バイオ系学科）

研究分担者：鈴木宏和（工学部化学バイオ系学科）

八木寿梓（工学部化学バイオ系学科）

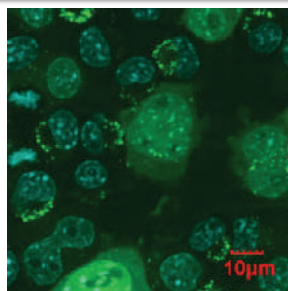
「タンパク質の守り神」の力を利用して異常を探知し、病気を防ぐ

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

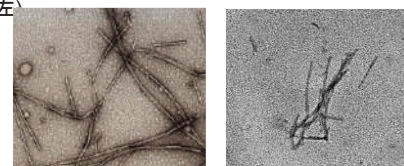
研究、社会貢献



形に異常をきたした蛋白質は時に細胞の中に沈殿として蓄積し(緑の光点)、病気を生む事がある



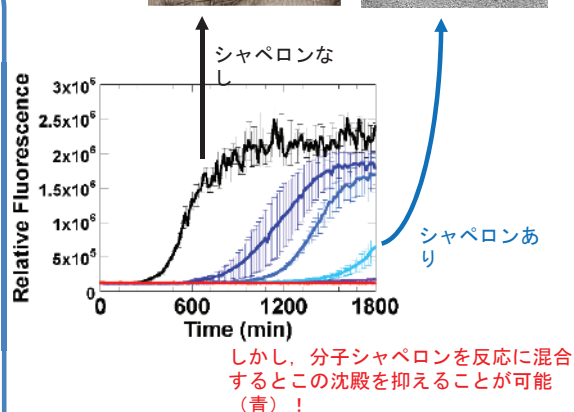
細胞に蓄積する沈殿は規則正しい線維状のもので、大変安定なため、容易に除去できない... (下の電子顕微鏡写真、左)



【活動概要】

私たちの体の細胞では常時数千種類のタンパク質がひしめき合い、様々な生理機能を支えています。これらのタンパク質は細胞のなかで「誕生」>「成熟」>「老化」という「ライフサイクル」を持ち、加齢などによってこのプロセスが円滑に進まない場合、構造異常蛋白質の蓄積=脳神経細胞死から認知症などにつながります。

細胞の中にはタンパク質を守る【分子シャペロン】というタンパク質が存在し、タンパク質構造に異常が発生すると「寄り添って」助けます。異常が生じたタンパク質に寄り添う分子シャペロンを細胞内で初期の異常を感知する目印（マーカー）にしたり、構造異常蛋白質の蓄積を予防し認知症の進行を遅らせる薬などに利用できる可能性を秘めています。我々の研究室では分子シャペロンの能力を生活の質を向上させる革新的な技術の開発に応用することを目指して研究を進めています。



分子シャペロンの力を疾患の予防と治療に応用する

【担当】研究代表者：溝端知宏（工学部化学バイオ系学科）

研究分担者：本郷邦広（工学部化学バイオ系学科）

- ・例えば、分子シャペロンを疾患予防薬に
- ・例えば、分子シャペロンを誘導する60の開発に
- ・例えば、蛋白質の線維を新素材の材料に

タンパク質の3次元構造情報に基づいた新たな生理活性物質や薬剤、抗体医薬品などの創出

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

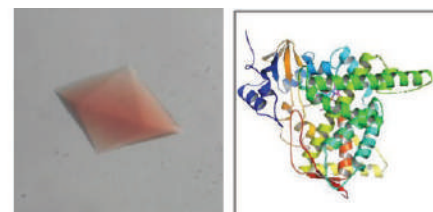
研究



【活動概要】

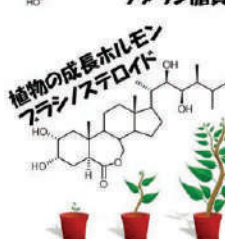
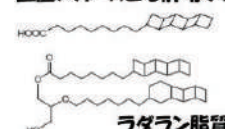
タンパク質は様々な機能を担っています。例えばプロテアーゼはタンパク質などを分解し、受容体タンパク質は細胞外部の環境変化を検知し細胞内に伝える情報伝達を行います。タンパク質が持つ様々な機能は、それぞれの分子が持つ特別な構造で生み出されますが、この構造をアミノ酸配列から精密に予測することは困難であるため、実験的に解析することが必須です。

私たちの研究室では、重要な生理活性をもつ、あるいはユニークな構造を持つ天然物を作り出す酵素や、創薬のターゲットとなる膜タンパク質などに注目し、X線結晶構造解析を主な手法としてタンパク質の構造と機能の関わりを明らかにすることでタンパク質が働く仕組みを明らかにし、創薬や新たな生理活性物質を持つ“超”天然物の創生を目指して研究を進めています。



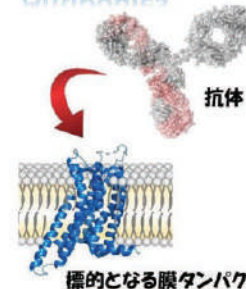
さまざまなタンパク質・酵素の構造を精密に調べて...

生理活性物質など天然物の生産メカニズムを解明する



抗体医薬品などの開発を目指す

Therapeutic Antibodies



【担当】 研究代表者：永野真吾（工学部化学バイオ系学科）

研究分担者：日野智也（工学部化学バイオ系学科）

佐藤裕介（工学部化学バイオ系学科）

海洋微細藻類を利用したカーボンニュートラル型物質生産システムの開発

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

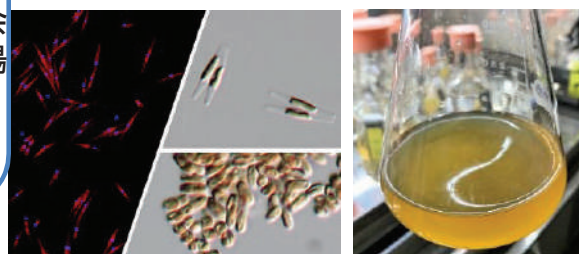
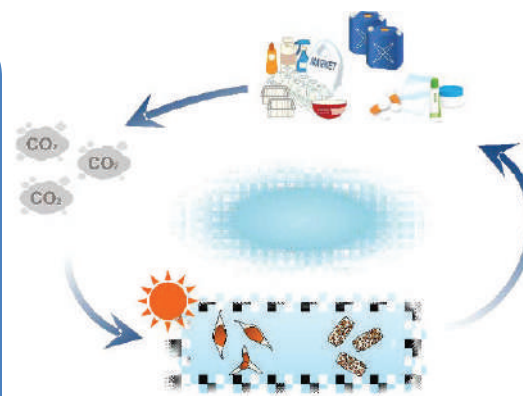
研究



【活動概要】

CO₂をはじめとする温室効果ガスは地球温暖化の主要な原因物質であり、環境中への多量放出が地球の気候変動に多大な影響を及ぼしています。微細藻類（植物プランクトン）は地球上で行われる光合成の実に40%を担うことが知られており、環境中のCO₂を極めて効率よく取り込んで固定し、地球の食物連鎖と物質循環の基盤となる重要な生物種です。

私たちは微細藻類が持つこの能力を活用し、主に海洋性珪藻類を対象にCO₂を出発物質としてバイオ燃料、医薬・化成品原料等の有用物質を生産する細胞を創出し、脱炭素社会実現に向けた究極にエコなカーボンニュートラル型細胞工場の実現を目指して研究を行っています。



【担当】 研究代表者 原田尚志（工学部化学バイオ系学科）

地域資源を活用した環境低負荷・オンサイト型 再生可能エネルギー生産技術の開発

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



糖化&発酵



バイオエタノール

【活動概要】

地域資源を活用した再生可能エネルギー生産に関する研究を行っています。化石燃料は有用なエネルギー源として利用されてきましたが、温室効果ガスを大量に発生させるため、近年、気温の上昇はじめ、大雨や台風など異常気象の増加など地球温暖化による環境への影響が問題視されています。わが国では2011年以降、化石燃料への依存度が高まっており、パリ協定でのCO₂削減目標達成のためにも再生可能エネルギーの拡充が重要と考えられています。そこで新たな代替エネルギーの一つとして、持続的に利用可能なバイオマスを原料とする、環境に負荷の少ないバイオエタノールが注目されています。

当研究室では、自然界から見いだした多様な発酵性を示す野生きのこを用い、天然に潜在するユニークな機能を活かすことで、生ごみなどの未利用資源から単一のプロセスで効率的にエタノールを生産する技術開発を進め、地産地消の持続的循環型社会構築を目指しています。

【担当】 研究代表者：岡本賢治（工学部化学バイオ系学科）

乾燥地を活かしたバイオディーゼル生産の促進

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



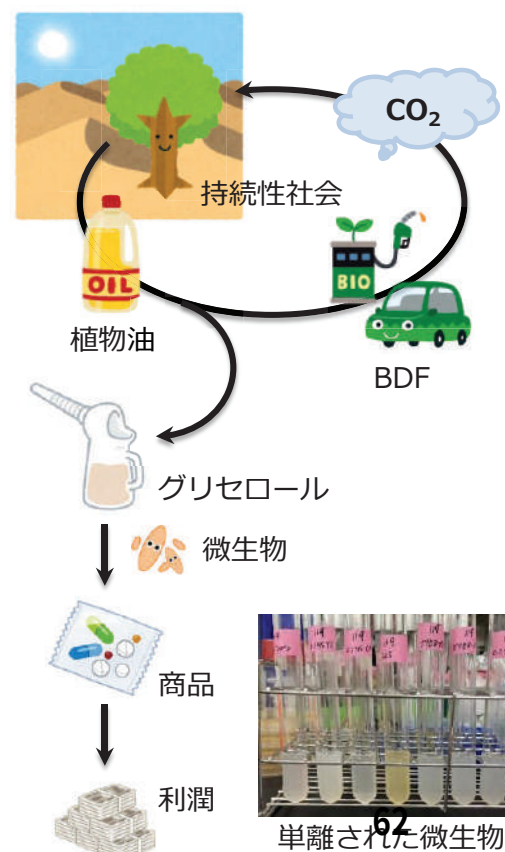
【背景】

- ▶ CO₂を増加させないようにエネルギーを生産したい
- ▶ 植物油からバイオディーゼル（BDF）を生産できる
- ▶ 乾燥地で育ち油を蓄積する植物がいる
- ▶ そのような植物からBDFを作れたら持続的だね
- ▶ 生産コストと市場価格の問題から実装は難しい



【活動概要】

- ▶ 植物油からBDFを生産する際に生じる廃棄物（グリセロール）に着目
- ▶ この廃棄物から高付加価値な商品を生産できれば、BDFの生産を促進できるはずだ
- ▶ グリセロールで生育する微生物を探そう
- ▶ なおかつ組換えタンパク質を大量に生産できる微生物を探そう
- ▶ その微生物を用いてグリセロールから組換えタンパク質を生産させる技術を確認しよう
- ▶ 組換えタンパク質は様々な商品価値をもつから、BDF生産の赤字を補填できるかもしれない
- ▶ そうなればBDF生産の促進に繋がるはずだ



【担当】 研究代表者：鈴木宏和（工学部化学バイオ系学科）

単離された微生物

実用的なPET分解酵素の開発

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



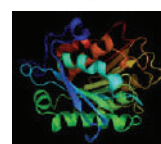
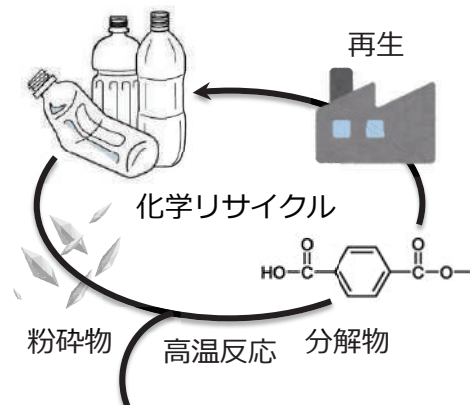
【背景】

- ▶ プラスチックの海洋流出による環境汚染が問題となっている
- ▶ ポリエチレンテレフタル酸 (PET) は主要なプラスチック
- ▶ ペットボトルやトレイなどに広く利用される
- ▶ 化学分解や完全リサイクルが難しい
- ▶ PET分解酵素の発見と実用化への期待
- ▶ 高温 (70℃くらい) ではPET分子が揺らぐため、PET分解酵素によるPET分解が促進される
- ▶ 高温に耐えられるPET分解酵素が欲しい

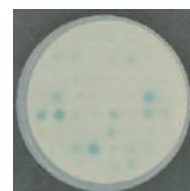


【活動概要】

- ▶ 高性能なPET分解酵素 (Cut190) に着目
- ▶ この酵素に変異を入れて、耐熱化した変異型酵素を取得しよう
- ▶ 独自に開発したスクリーニング法 (特願2022-191608) の利用
- ▶ これまでに複数の変異型酵素を取得
- ▶ さらに耐熱性に優れた変異型酵素の探索
- ▶ 実用的なPET分解プロセスの樹立を目指す



耐熱性PET分解酵素
の開発と利用



開発研究の様子

【担当】研究代表者：鈴木宏和（工学部化学バイオ系学科）

糖の自己集合による機能性材料の創生

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

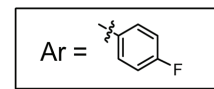
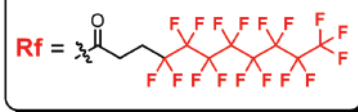
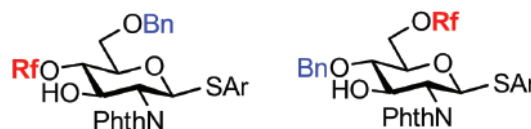
研究



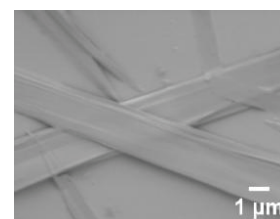
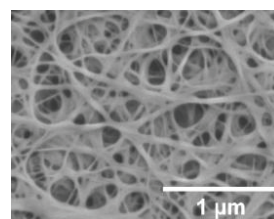
【活動概要】

生体三大高分子のうち、DNAやペプチドは確立された自己集合制御法を用いて、形状やサイズが規定された分子の集合体(超分子集合体)を形成可能である。しかし、糖からなる超分子集合体、入手が容易なシクロデキストリンや合成が簡便な糖ペプチドなど一部の糖を除いて、高純度な糖の供給がボトルネックとなり、その構築方法は発展途上にある。我々の研究室では、糖分子に分子間相互作用部位を導入し、分子の自己集合により超分子集合体の創生をおこなっている。有機合成化学的に分子をデザインすることで、多様なマイクロスケールの構造体の形状を構築できる。得られた超分子集合体を用いた高撥水性材料の構築に成功しています。

現在は、単糖から多糖まで幅広いモノマー分子を用いて、超分子集合体の合成やソフトマテリアルへの応用を目指した研究に取り組んでいます。



超分子集合体を構築する糖モノマーの分子構造



高撥水性



【担当】野上敏材（鳥取大学工学部化学バイオ系学科）
佐々木紀彦（鳥取大学工学部化学バイオ系学科）

超分子集合体のSEM観察像および
各構造体が生じた撥水性の写真 63

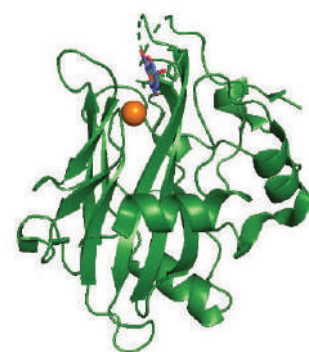
研究



【活動概要】

植物病原体による農作物への感染は、収穫量や品質に影響を与え、世界中で毎年多額の経済的損失をもたらしています。殺菌剤は、これらの問題を改善するため、農業生産の場で広く利用されている。しかし、ほとんどの安価で大量に使用される殺菌剤は、環境や人体への長期的な影響に関して、充分には解明されていない。したがって、もっと有効性が高く、適用量が少なく、選択性が高く、コストが低く、環境への影響が少ない新しい化合物と戦略が非常に望まれています。

私たちが研究している植物のスフィンゴ糖脂質は、植物の細胞膜にたくさん含まれていて、ある種の病原菌が産生する毒素タンパク質の受容体になる事が知られています。この毒素タンパク質の標的となる糖脂質の構造が詳しくわかっていないため、この構造を明らかにし、病原菌の、感染を防ぐ新しい農薬を作ることを目指しています。



【担当】

研究代表者：花島慎弥（工学部 化学バイオ系学科）

研究分担者：佐々木克聡（工学部 化学バイオ系学科）

プラスチックの化学リサイクル

研究



プラスチックのリサイクルにはいろいろな手法が提案されていますが、廃棄物の環境負荷を大幅に低減し、地球上の炭素循環に影響を与え、カーボンニュートラル化に貢献するほどの大量・普遍的なリサイクルのためには、廃プラスチックの大半を占めるポリエチレン（PE）やポリプロピレン（PP）を、異種プラスチックや充填材、紙などの夾雑物を含んだまま溶媒で溶かし、化学反応によって原料であるナフサ（C5～10炭化水素混合物）に戻ることが求められます。しかし通常はプラスチックとともに溶媒も分解してしまうため、廃プラスチックをリサイクルするために溶媒を消費してしまうこととなります。

我々は図1の極めて小さな細孔を持つゼオライトを触媒としてPP分解を試み、小さいが嵩高い分子形状を持つシクロオクタンを溶媒としたときには、細長いPP分子のみが分解し、溶媒をほぼ全て回収し何度でも繰り返し利用できることを見出しました。世界初の、他に消費する物質のない廃プラスチックリサイクル技術を開発したと言えます。そこでNEDO革新的プラスチック資源循環プロセス技術開発事業として実用化研究に取り組んでいます。

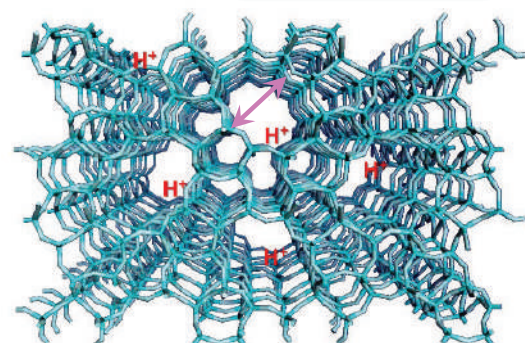
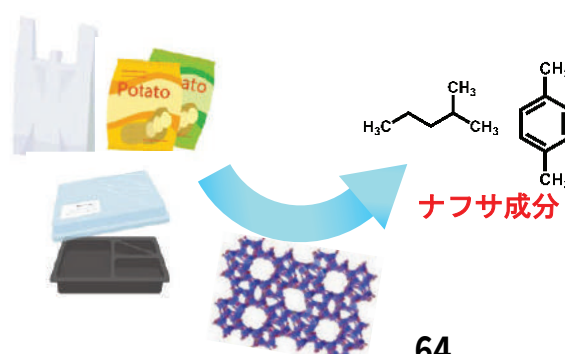


図1 触媒として用いるゼオライトと反応の鍵を握るイオン交換サイトとマイクロ細孔の模式図



【担当】研究代表者：片田直伸

（工学部化学バイオ系学科工学部附属GSC研究センター）

図2 ゼオライトを用いた化学リサイクル

未利用・低利用海藻、魚廃棄部位の有効活用を目指した研究

工学部
(化学バイオ系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

海産物を中心に、未利用・低利用の海藻や、魚の廃棄部位に付加価値を見出し、社会実装を目指して取り組んでいます。

海藻は約100種類が食用として流通しています。日本にはもっと多くの海藻が生育しており、同じ仲間であっても食感、味等から未利用あるいは低利用の海藻となっています。「海藻＝健康に良い」という印象はありますが、海藻に含まれる成分を研究し、科学的に人の健康に寄与することを証明し、近年注目されているヘルスケアに有効活用できるように目指しています。また、環境においても海藻の有用性が注目されており、ブルーカーボンニュートラルに関する取り組みも進めています。

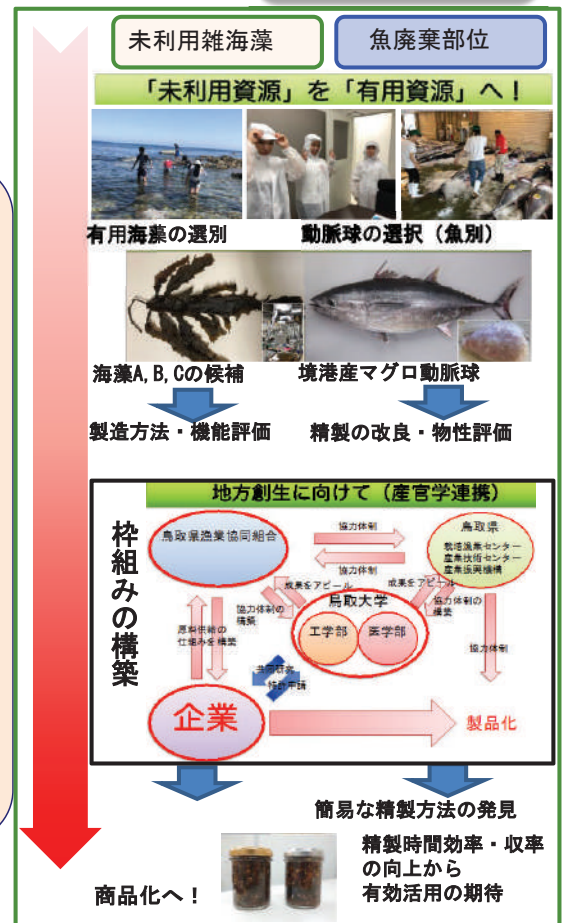
魚の廃棄部位においても、人の健康に寄与する成分が多く含んでいることがわかってきており、成分抽出方法の開発等も含めて、資源を無駄なく利活用することを目指しています。

循環型社会の構築、海への貢献、地域を活性化するために、研究のみではなく、多くの関係者の協力関係も構築して進めています。

その取り組みの1つの成果として、低利用海藻を用いた食品開発を行い、社会実装しています。

【担当】研究代表者：八木寿梓（工学部化学バイオ系学科）

研究分担者：大城 隆（工学部化学バイオ系学科）



地震によって引き起こされる斜面災害の数値シミュレーション技術の開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

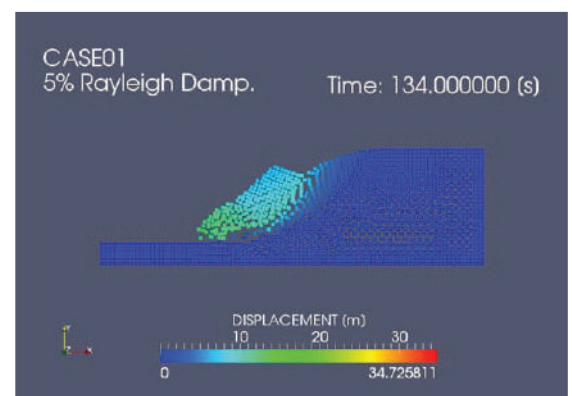
研究



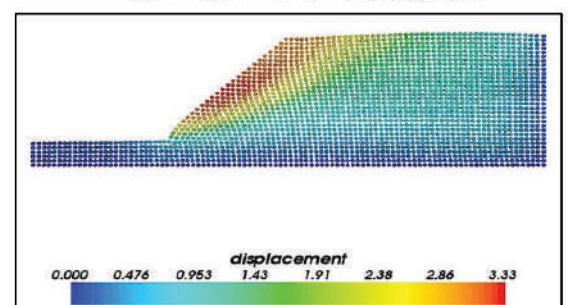
【活動概要】

地震による斜面災害には様々な種類があります。鳥取県のような中山間地域では、崖崩れや落石のより道路が閉塞し集落が孤立します。また、都市部においても道路や堤防の盛土が崩壊し、交通や上下水道等のライフラインが寸断されます。これらの災害を引き起こす斜面の崩壊は、その地点の地盤条件や地震動の特性によって多様な形態を見せます。

本研究では、様々な斜面と地震動に対応した、統合的な斜面災害の数値シミュレーション技術を開発しています。この研究の最大の特徴は、新しい数値解析技法である粒子法を利用していることです。粒子法は流体力学を中心に発展してきた手法ですが、斜面を構成する地盤に対して適用した事例はほとんどありません。本研究では、これまでに多くの斜面の崩壊挙動の再現に成功しています。今後は、さらなる解析精度の向上とともに、斜面崩壊に伴うライフライン設備への影響度の評価への応用を進めます。



粘性土斜面の崩壊の再現解析結果



砂質土斜面の崩壊の再現解析結果

【担当】研究代表者：小野祐輔（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

中山間地域内道路における 落石遭遇リスク評価と対策方針

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

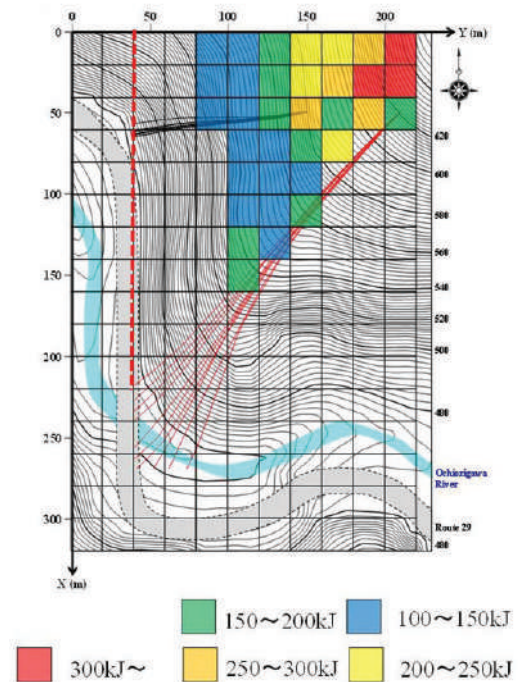
研究



【活動概要】

中山間地を縫うように走る道路、その地域にとっては生活を支える基盤であり、欠かすことできないものです。このような道路沿いの急峻な斜面が降雨や地震に伴い崩壊する、あるいは何の前触れもなく落石が発生し道路に至ることを過去の事例が示しています。このような斜面災害の危険度評価は、まず地形・地質図を用いた該当地点の抽出および評価点での日常的な点検が実施されています。しかしながら、対象地域を網羅的に精査することは財政的な制約を受けるといわれています。

そこで、特に落石を対象として現状の点検結果を生かしつつ、発生危険度が高いと判定された地点における簡易試験による原位置材料の強度把握、力学解析による被災崩壊危険度の定量的表示と崩壊時の保全対象への影響を評価する手法の開発を進めています。



中山間地内道路沿い斜面における
落石軌跡の解析と点検区域の絞り込み例
(モデル解析)

【担当】研究代表者：西村強（工学部）研究分担者：河野勝宣（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

自治体震度計を用いた県内震度のリアルタイム把握システムの開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究

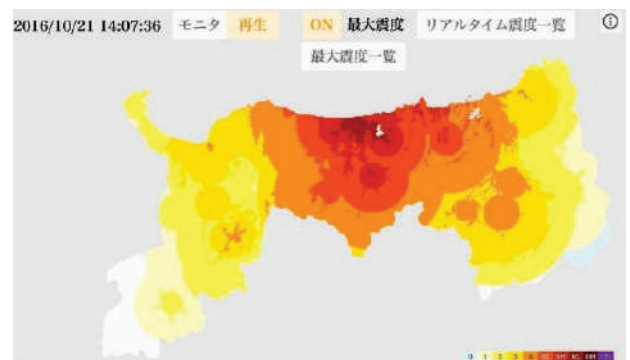


【活動概要】

国内で最も密に展開されている自治体震度計を用いて、1秒毎に送信される計測震度および最大加速度パケットと波動伝播解析のデータ同化により、被害地震発生時の揺れをリアルタイム、あるいは先行して把握するシステムの開発を行っています。

自治体震度計が気象庁が緊急地震速報に用いている地震計よりも高密度に配置されており、この利点を活かすことで緊急地震速報配信時にはほぼ揺れの概要を把握することができます。これにより、自治体の初動対応をより迅速かつ効率的に実施することが期待されます。現在は、鳥取大学で解析した結果をリアルタイムで鳥取県と共有できるようにしています。

自治体震度計設置地点および県内各所の揺れやすさに関する調査を継続的に実施することで予測精度の向上を図るとともに、自治体が活用し易い形式での情報提供のありかたを、鳥取県の協力で実施しています。



2016年10月鳥取県中部の地震における、緊急地震速報警報（第3報）配信時の震度分布（データを元に再現）



2024年1月能登半島地震において把握された最終震度分布

【担当】研究代表者：香川敬生（工学部社会システム土木系学科・工学部附属地域安全工学センター）66
研究分担者：野口竜也（工学部社会システム土木系学科・工学部附属地域安全工学センター）

常時微動観測による地域の地盤震動特性の把握と地震防災への活用

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

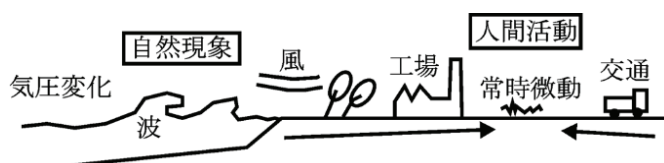
研究



【活動概要】

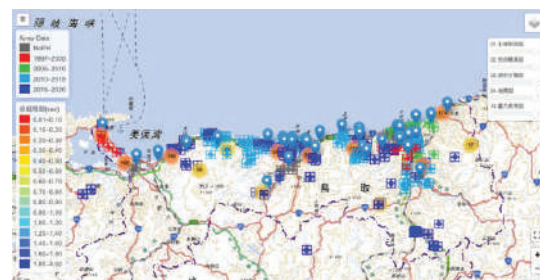
主に常時微動（波浪や風などの自然現象や交通振動など人間活動による地面の微小震動で、地震時の揺れと共通な地盤震動の特徴を評価できる）の観測を通じて、地域の地盤震動特性の詳細把握および地下構造の推定をおこなっています。

得られた解析結果は地震防災の基礎資料として鳥取県の地震被害想定に活用されるとともに、GIS（地理情報システム）として整理して公開しています。これらを使って地域の揺れの特徴が把握でき、また地盤の成り立ちを紐解くデータとして活用することができます。

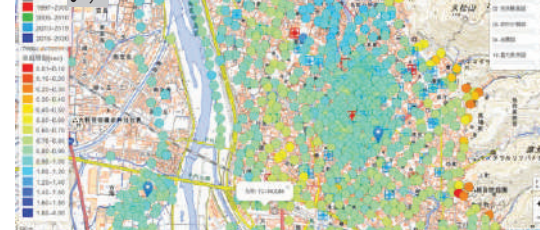


自然現象や人間活動に起因する常時微動は、地震計を設置すればいつでも観測することができ、揺れが伝播する地盤の特徴を得ることができる

【担当】研究代表者：香川敬生（工学部社会システム土木系学科・工学部附属地域安全工学センター）
研究分担者：野口竜也（工学部社会システム土木系学科・工学部附属地域安全工学センター）



これまでの調査結果を入力したGISの広域表示例
(暖色系は短周期で、寒色系は長周期で揺れやすい)



鳥取市街域の拡大表示例



地盤卓越周期の解析例（背景を航空写真に変更）

砂浜のモニタリングと砂浜保全対策検討ツールの開発ー3次元海浜変形予測モデルー

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



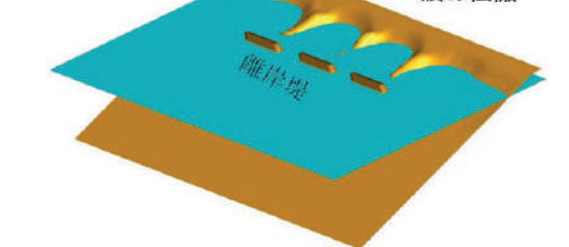
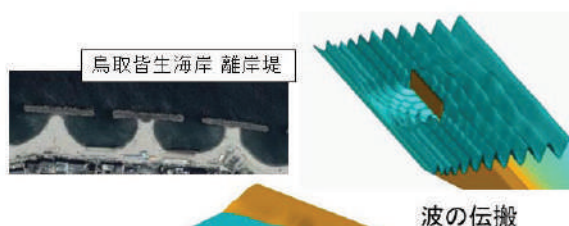
【活動概要】

我が国は四方を海で囲まれているため、津波、高波、高潮などの沿岸域災害リスクが高く、沿岸域災害を防ぐため、日本全国にたくさんの護岸や堤防などが造られてきました。一方で、砂浜は沿岸域の開発、人工物築造の影響で消失してきました。砂浜は、海水浴やサーフィン、地引網などの利用面と生態にとって大切な環境だけではありません。砂浜があることで高波から背後地を守ることができます。砂浜の存在は防災の面においても重要です。今後は地球温暖化による海面上昇、気候変動による波浪の変化などによって最悪の事態で多くの砂浜が消失すると言われています。今後、砂浜を守り維持していくためには、砂浜地形の変化を常に監視（モニタリング）して、将来の砂浜を予測して災害から守る手立てを考えておく必要があります。

本研究では、最新の技術を駆使した海浜モニタリング手法の開発や将来の海浜保全対策検討のためのツールとして、高波による砂浜と海底地形を予測できるシミュレーションツール（3次元海浜変形予測モデル）の開発を行っています。



鳥取砂丘海岸：ドローンによる砂浜モニタリング(3D化)



3次元海浜変形予測モデル
シミュレーション例(トンボロの発達)

【担当】研究代表者：黒岩正光（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

滑動や跳躍現象の痕跡から作用地震動の特徴を推定する方法の開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

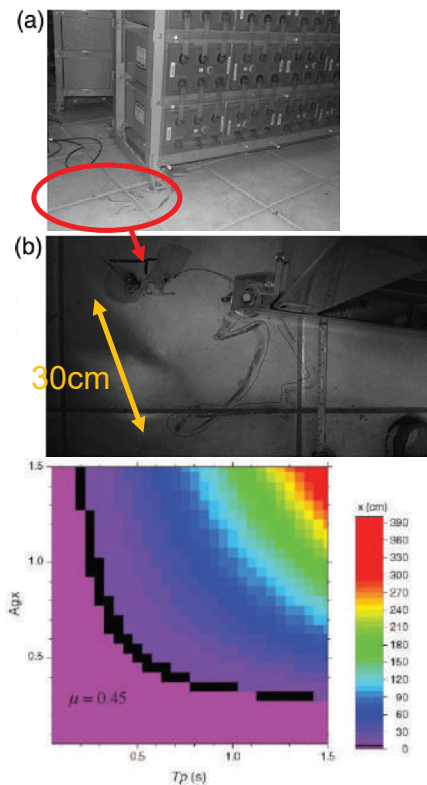
研究



【活動概要】

国内外で地震計の設置が進んでいますが、その設置状況はまだまだであり、地震被害が生じたところの近くに必ずしも地震計があるわけではありません。そこで、被災地で見つかる物体の滑動や跳躍現象の痕跡から、その物体に作用した地震動の特徴（加速度の大きさや主たる周期）を推定する方法を開発しています。作用した地震動の特徴が推定できることにより、その物体があった地域にある建物や橋などの被災状況について、一歩踏み込んだ説明や理解をすることが可能になることが期待されます。

右図は、2010年ハイチ地震後に見つかったバッテリーラックの滑動距離から地震動の特徴を推定した例で、数学的に求めた正弦波による物体の滑動距離を統計的に補正した結果として求めています。（BSSA,102(6),pp.2704–2713,2012 アメリカ地質調査所(USGS)との共同研究）。一方、跳躍現象の痕跡から作用した地震動の特徴を推定することは、現在開発中です。



【担当】研究代表者：谷口朋代（工学部社会システム土木系学科）

コンクリート構造物の長寿命化に向けた劣化予測手法と補修工法の開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



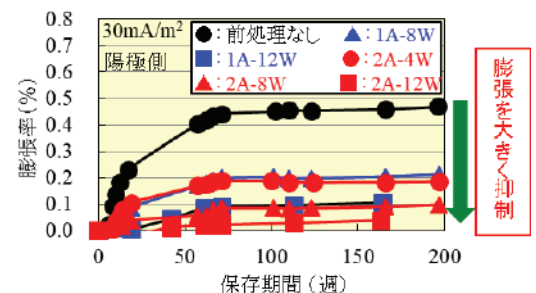
【活動概要】

私たちが快適で豊かな生活をするうえで、道路、鉄道、橋梁、ダムなどの社会基盤施設は欠かすことのできないものです。国土交通省の試算によると、近い将来（2030年代）、建設後50年以上となる社会基盤施設の割合が半数以上となり、その老朽化が問題となっています。このような社会基盤施設を安全・安心に、できるだけ長く使い続けていくためには、社会基盤施設の性能を評価するための精度の高い劣化予測と、長期間にわたって効果を発揮する適切な補修を行うことが重要です。

本研究では、社会基盤施設の中でも特にコンクリート構造物の劣化メカニズムの解明と劣化予測手法の開発を行っています。さらに、劣化機構に応じた補修工法の開発も行っています。コンクリート構造物の劣化機構には様々なものがあり、それらが単独あるいは複合して構造物に影響することにより劣化が進行します。このような複雑な劣化現象を解明し、その劣化の発生や進行を精度よく予測するとともに、劣化機構に応じた適切な補修を行うことにより、コンクリート構造物を長寿命化することができます。このように、人々が快適で安全・安心な生活を続けられるように、コンクリート構造物を可能な限り長く使い続けていくための技術開発に取り組んでいます。



ASRIによるコンクリート橋の劣化事例



ASRIに配慮した電気防食工法の開発



鋼材腐食の防止を目的としたコンクリート内部への亜硝酸リチウム水溶液の圧入工法の開発

【担当】黒田 保（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

階層分析法(AHP)と地理情報システム(GIS)を用いた地すべりハザードマッピング

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



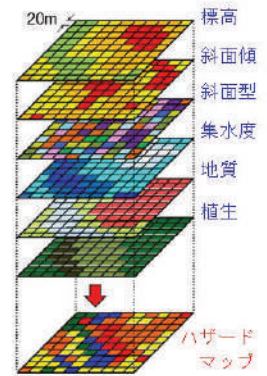
【活動概要】

約16,000箇所に及ぶ地すべり地形を基に、階層分析法(AHP法)と地理情報システム(GIS)を用いて、中国地方の地すべりハザードマップの作成方法を試行し、過去の斜面変動が起きた箇所と同等の危険度を有する斜面の抽出を試みています。

特に、本手法ではAHP法による地すべり危険度に関する評価項目(標高、斜面傾斜角、斜面型、集水度、地質、植生など)の対比較において、地すべり地形分布と評価項目の関係を数値化したものを導入しています。

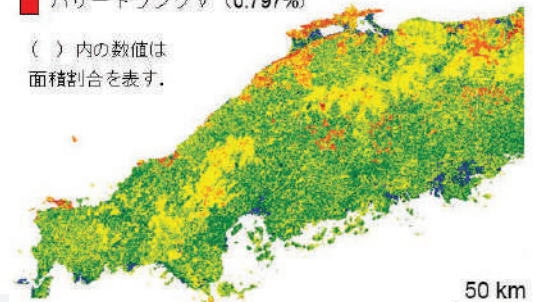
本手法は、不安定斜面の抽出に期待でき、優先順位を考えた効率的な対策および斜面防災技術の発展に貢献できると考えます。

AHP法によって得られた
地すべり危険度得点の
GISによる重ね合わせ



- ハザードランクⅠ (1.60%)
- ハザードランクⅡ (41.3%)
- ハザードランクⅢ (50.0%)
- ハザードランクⅣ (8.29%)
- ハザードランクⅤ (0.797%)

() 内の数値は
面積割合を表す。



地すべりハザードマップ(中国地方の例)

【担当】研究代表者：河野勝宣（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

粒子衝突による土壌クラスト崩壊特性の影響因子に関する実験的検討

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

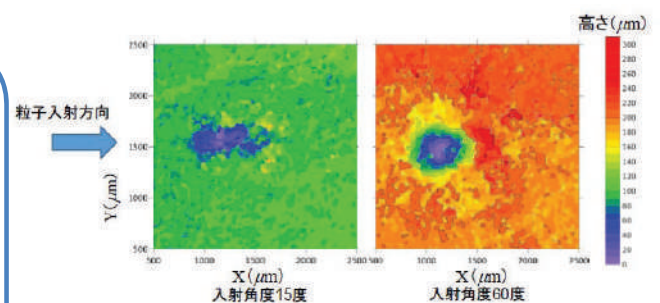
研究



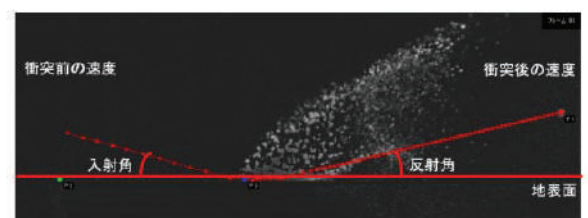
【活動概要】

黄砂数値モデルは気候研究や黄砂予報などに使われていますが、地表面の状態を考慮した計算を行っていません。これは土壌クラスト崩壊に関する定量的評価手法がないことが原因と考えられます。このため、黄砂数値モデルに入力するパラメータを決定できず、黄砂数値予報の精度向上をはかることができません。

以上より本研究では、粒子衝突による土壌クラスト崩壊特性に影響を与える因子について実験的検討を行っています。具体的には、土壌クラスト崩壊は、サルテーション(跳躍)による粒子衝突が原因であると考え、ゴビ砂漠の鳥取大学観測サイトより採取した試料や模擬試料を用いて供試体を作成し、この供試体に対し粒子を衝突させ崩壊現象を計測し、土壌クラスト崩壊特性の影響因子を検討しています。



直径0.5mm粒子衝突後の供試体表面の衝突痕
(入射速度 約8m/s)



高速度カメラによる衝突状況の把握

【担当】研究代表者：中村公一（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

研究

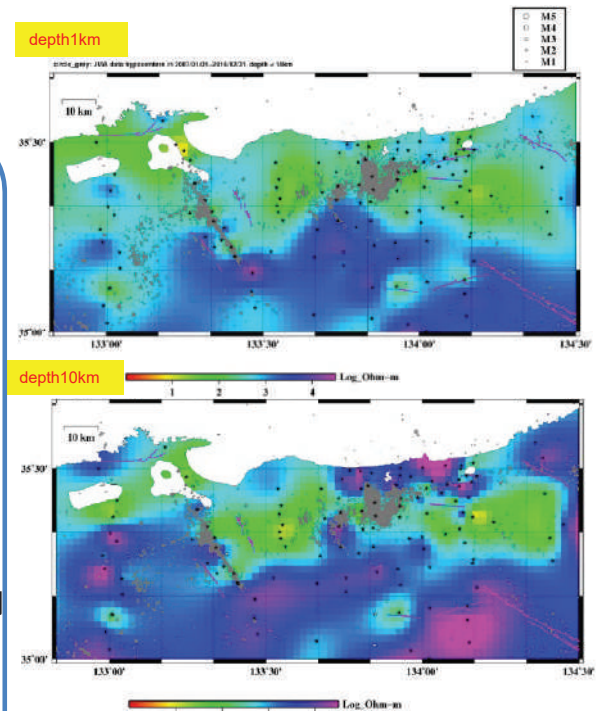


【活動概要】

地震の発生機構や発生場を理解するために、断層近傍の応力場および断層の強度を知る必要がある。これらの情報を知るために、中国・四国地方において基盤的比抵抗構造調査研究を実施している。本研究では地殻・マントル上部や内陸地震の断層や第四紀火山周辺の比抵抗構造の不均質性を解明することを目的とする。

内陸地震の断層周辺の不均質構造としては、下部地殻のWeakzoneの変形による直上の断層への応力集中過程が注目されているが、さらに、断層の両端部の構造や延長部での連続性に着目して、大地震の起こる場所の特徴を抽出することができないか、調査研究を進めている。

山陰地方の比抵抗構造モデル（右図）をみると深度1kmでは明瞭ではないが、深度10km程度になると深部低比抵抗領域と高比抵抗領域の境界が東中部域の地震活動帯の下に存在することが、基盤的比抵抗データを取得することにより浮かび上がってきた。この境界領域は中西部で一度途切れるが、西部域でその存在が再び示唆される。



山陰地方の比抵抗構造モデル：

観測点ごとに推定された1次元比抵抗構造モデルを用いて深度別の空間的比抵抗分布を示す。深度は上図が1kmであり、下図は10kmである。暖色系は低比抵抗、寒色系は高比抵抗を示す。地震の震央分布も灰色丸印で重ねて描画されている。

【担当】研究代表者：塩崎一郎

(工学部社会システム土木系学科・工学部附属地域安全工学センター)

流れおよび波(津波)による
構造物周辺の高精度地形変化力予測に関する
三次元数値シミュレーションモデルの開発

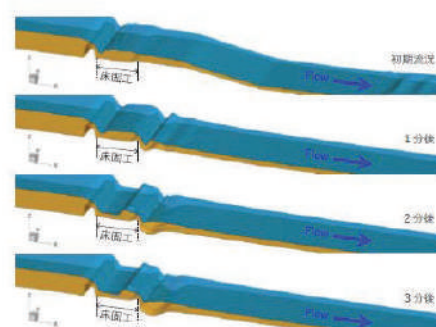
研究



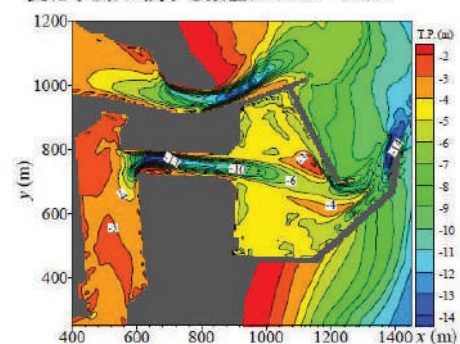
【活動概要】

河川内に設置される堰や橋脚、あるいは海域に建設される港湾や洋上風力発電施設等の構造物周辺では、流れや波（津波）の影響により局所的な深掘れや堆積などの地形変化が発生します。このような地形変化は構造物の安定性を低下させるため、構造物の機能維持さらには防災を考える上でもその予測は極めて重要となってきます。本研究では、そのような地形変化を高精度に予測するため、流れの三次元性を考慮した数値シミュレーションモデルの開発を行っています。

これまでの研究では、①河川流による堰下流部および橋脚周辺の地形変化予測、②津波による港湾周辺の地形変化予測などを行ってきました。今後は流れ（津波）だけでなく、波浪による構造物周辺の地形変化予測も可能とするモデル開発を目指していきます。



床固工下流部における局所的な洗掘現象(地形変化予測)に関する数値シミュレーション



2011年東北地方太平洋沖地震津波による港湾周辺の地形変化に関する再現計算

【担当】研究代表者：梶川勇樹（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

津波災害が予想される地域での住民主体による「事前復興まちづくり計画」立案のプロセスに関する研究

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

教育、研究、社会貢献



【活動概要】

「事前復興」は、1995年阪神淡路大震災の復旧・復興過程に関わっていた専門家から言われた言葉ですが、防災基本計画の緊急見直しの際に使用されたことから一般に知られる言葉となりました。

本研究は、大山町御来屋地区をモデル地区とし、住民自治組織「支えあいのまち御来屋」と共同して、「事前復興まちづくり計画」の素案を作成することを目的に行っています。

具体的には、①大山町内の応急仮設住宅建設予定地における建設戸数や配置計画の検討、②指定避難所及び応急仮設住宅建設予定地における地盤及び建物振動特性調査、③「地区防災計画」の作成などを行っています。

本研究を通して、津波災害だけでなく、土砂災害等ほかの災害への活用に広げることができると考えています。



防災学習会「みんなで作る地区防災計画」の様子



配置計画案（9坪・プレハブのみ）
旧光徳小学校グラウンド

研究代表者：浅井秀子（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）
研究分担者：黒岩正光・野口竜也（工学部社会システム土木系学科
工学部附属地域安全工学センター）

高度統計解析手法を用いた 工学的アプローチによるマーケティング戦略の立案

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究

売れ行きの可視化



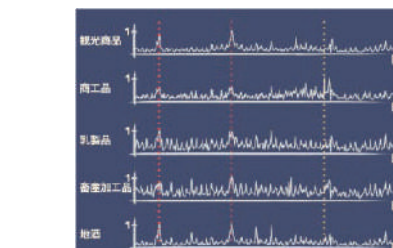
【活動概要】

地場産の食材や食品を提供・販売する飲食店、地産物店、農水産物直売所などは、地域のイメージやブランドを形成、発信する重要な地域拠点です。

私たちは、各店舗のレジに記録されている過去の膨大な販売データ（POSデータ）に、別途収集した天候情報、カレンダー情報、イベント情報、店舗の立地状況などのデータを組み合わせ、それらの関係を分析することで商品の売れ行き傾向を把握するとともに消費者の行動メカニズムの解明を行っています。その上で、

- ・明日は何がどれくらい売れる？
- ・ある日の商品の売上が、前後日の売上にどう影響する？
- ・セールや広告、イベントの効果はどれくらい？

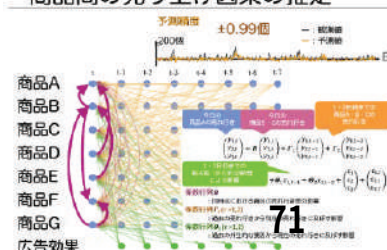
などの商品の販売数予測や施策評価を高精度に行うための分析システムを開発しています。これにより各店舗の特性に応じたブランディング、フードロス削減、在庫管理効率化などを実現するためのマーケティング戦略を提案しています。



日々の販売数予測 ディープラーニング（深層学習）
デイルーフーズの需要予測



売れ行き要因分析 SVARXmodel LiNGAM推定
商品間の売り上げ因果の推定



【担当】桑野将司，南野友香，細江美欧
(工学部社会システム土木系学科)

将来の健康リスクをAIでシミュレーション ～ 健康づくりサポートアプリ「とっとり健康+プラス」への実装 ～

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究、社会貢献



とっとり健康+プラス

「とっとり健康+プラス」は、
個人の健康リスクをシミュレーションし、
住民自らが健康管理できる無料アプリ。

本研究はアプリ内の健康リスクシミュレーションの
分析手法と計算アルゴリズムを開発しています。

健診結果や体重・血圧・生活習慣などアプリに記録した
日々の健康データをもとに6つの疾病について

(脳卒中、心疾患、COPD、糖尿病、高血圧症、脂質異常症)

将来の発症リスクを深層学習(DNN)を用いて
高精度にシミュレーションできます。

さらに、個人の特徴に合わせた具体的な
生活習慣の改善提案と目標設定を可能にしました。

多くの県民の皆様にご利用いただいています。

【担当】 桑野将司(工学部社会システム土木系学科、クロス情報科学研究センター)
南野友香(工学部社会システム土木系学科、地域安全工学センター)
細江美欧(工学部社会システム土木系学科、地域安全工学センター)



鳥取県民の健康づくりをサポートするため、鳥取県内の産・官・学が連携し、鳥取県国民健康保険団体連合会が鳥取県と共同開発。

出典：鳥取県国民健康保険団体連合会
<https://lancing.tottori-kenko-plus.jp>

AIと地域連携による交通安全施策の立案と実装

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

SDGsでは「2030年までに世界の道路交通事故による死傷者数を半減させる」という目標が掲げられており、安心・安全な交通環境の整備は地域の重要な課題です。

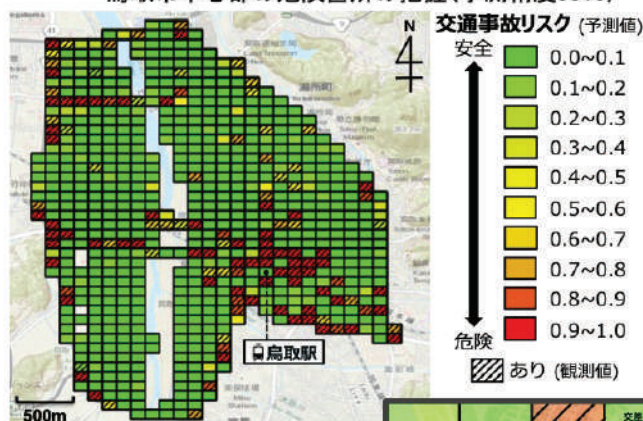
本取り組みでは、交通事故や運転挙動、道路環境に関する多様なデータを収集し、AIを用いた交通事故リスク予測や施策効果の定量化を行い、その成果に基づく交通安全啓発や施策の立案を一気通貫で実施する取り組みの社会実装を目指しています。

本取り組みは、鳥取県内の産官学金言のさまざまな関係者が連携し、県内の交通事故予防に向けた共同プロジェクトとして進めています。

【担当】 細江美欧(工学部社会システム土木系学科、地域安全工学センター)
桑野将司(工学部社会システム土木系学科、クロス情報科学研究センター)
南野友香(工学部社会システム土木系学科、地域安全工学センター)

■ AIによる交通事故リスクの予測

鳥取市中心部の危険箇所の把握(予測精度98%)



■ 潜在的危険箇所の把握

観測値と予測値を比較し、観測データからはわからない潜在的危険箇所の把握



■ 交通事故リスク低減施策の効果の定量化

鳥取駅・明徳小周辺のゾーン30の設置効果



地方都市における居住分布など空間構造のコンパクト性の評価

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究

9 産業と技術革新の基盤をつくろう



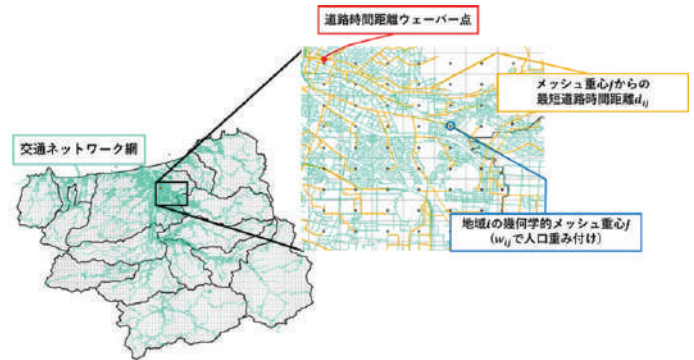
11 住み続けられるまちづくりを



【活動概要】

全国の多くの地方都市では、人口減少にともなって居住の希薄化（居住者の空間密度の低下）がすすんでおり、今後、生活しづらく不便な生活圏になって行くことが危惧されています。そこで、国や多くの地方自治体は、都市機能や居住を中心拠点や地域拠点に集める「都市のコンパクト化」を目指しています。コンパクトで住みやすい地方都市圏を作ること、人口減少下において都市計画上の最重要課題であり、生活圏全体の効率性を高め、それにより生活圏の価値を高めることは自治体の持続可能性の点でも重要であるといえます。

近年、ますます充実してきている多様な都市データを収集し、地理情報システム（GIS）や統計分析を適用して、都市施設・店舗や居住者の配置などの生活圏の空間構造を明らかにし、今後、どのような配置を目指すことが効率的で住みやすい、ひいては持続可能な地域の経営に効果的であるかを研究しています。



鳥取県東部地域住民(500m²メッシュ単位)の道路利用で最も近い地点「道路時間距離ウェーバー点」の算出



居住が増加するとコンパクト性(道路時間距離ウェーバー点までの住民平均距離)が向上する「コンパクト化寄与エリア」(500m²メッシュ単位)の導出(旧鳥取市)

【担当】研究代表者：福山敬

(工学部社会システム土木系学科・地域安全工学センター)

少人口地域における持続的な公共交通システムの開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

中山間地域を念頭において、人口が少なくなっても、また、高齢化が進んでも、どの人々にとっても基礎的な生活サービス（商業施設、病院、学校など）へのアクセスが保障できるような持続可能な公共交通システムを開発するとともに、それを行政、企業、地域住民が協働して社会へ実装していくことを促進するための研究を行っています。

従来は路線バスを想定した検討が中心でしたが、そのビジネスモデルが人口減少に適応できなくなりつつあることから、①タクシーや共助交通などの小規模なサービスへの円滑な転換、②貨客混載など、旅客運送以外の移動サービスとの統合の促進、③自動運転技術の導入の可能性の検討を行っています。

本研究は、科学研究費、内閣府のSIP、経済産業省のスマートシティ関連事業、トヨタモビリティ基金のプロジェクトとして実施してきており、鳥取県やその周辺の自治体をはじめ、様々な関係者と共同で実施しています。



社会実験中の自動運転の路線バスに乗車。性能を体感。鳥取県八頭町にて。



旅客と貨物の運送を複合的に供給する公共交通サービス。鳥取県大山町にて。

【担当】研究代表者：谷本圭志（工学部社会システム土木系学科

工学部附属地域安全工学センター）研究分担者：桑野将司（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

買い物弱者をなくすための持続可能な移動販売サービスの開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

運転免許を持っていなかったり、公共交通の利用が困難な高齢者は、スーパーなどの商業施設で買い物をすることは大変です。このため、移動販売サービスの役割が再評価されています。移動販売は単に食料を供給するのではなく、健康維持やコミュニティへの参加の機会でもあります。本研究では、健康で文化的な生活を支援するサービスとして移動販売を位置づけ、その持続可能性を高めるビジネスモデルを検討するとともに、それを行政、企業、地域住民が協働して社会へ実装していくことを促進するための研究を行っています。

具体的には、①移動販売サービスの利用者数の予測、②食料供給以外のサービスとの統合の可能性の評価、③地域と協働した新たな供給体制の検討を行っています。

本研究は、科学研究費などの財政的支援を得つつ、鳥取県や県内の市町村とのプロジェクトとしても実施しており、企業を含めた様々な関係者と共同で実施しています。



食料供給以外にも様々なサービスを統合して供給している先進的な移動販売サービス。鳥取県江府町にて。



学生と現地に視察に出かけることも多いです。鳥取県鳥取市にて。

【担当】研究代表者：谷本圭志（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）研究分担者：長曾我部まどか（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

小規模・高齢化集落の持続可能な運営に関する研究

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究



【活動概要】

人口減少や高齢化に伴い、集落の住民自らが主体的に地域の課題に関与し課題解決に取り組む必要性が高まっています。鳥取県内の小規模・高齢化集落を対象として、集落の維持や活性化のために必要な要素（人材や機能など）と仕組みを明らかにすることを目的とした研究に取り組んでいます。

具体的には、①地域運営組織の構成員と住民の関心事から地域内の活動を評価する手法の開発、②集落にある機能（寄り合い・清掃活動など）と住民の態度（参加率や定住意向など）から集落を客観的・総合的に評価する指標の開発、③集落の維持に必要な活動を評価する手法の開発、などを行っています。

本研究は、平成28年度に鳥取県と大山町、平成30年度に鳥取市、令和3年度に北栄町と共同で実施しています。



工学部生が地域運営組織の関係者にヒアリングをする様子（鳥取県大山町）



工学部生が古民家で開催されたイベントの参加者と関係者にヒアリングをする様子（鳥取県日南町）

【担当】研究代表者：長曾我部まどか（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

研究分担者：谷本圭志（工学部社会システム土木系学科工学部附属地域安全工学センター）

研究



適用例

海岸・港湾構造物（消波護岸や消波ブロック被覆堤）の損傷（劣化）

⇒高波の作用による消波工の断面変形＝損傷（劣化）

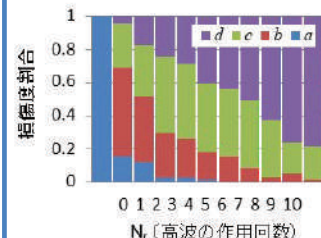
⇒水理模型実験データによる断面変形量の推移

⇒変形量を表すパラメータで、4段階の損傷度を設定

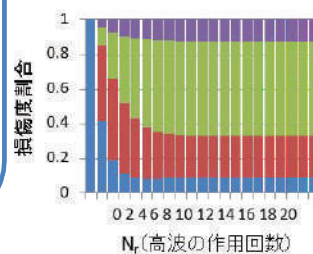
【活動概要】

わが国では、1960～70年代に集中的に整備された社会基盤施設の老朽化による維持管理・更新費の増大が懸念されています。これに対処するには、効率的かつ効果的な維持管理を行い、かかる費用を抑制することが必要となります。この研究では、施設の効果的・効率的な維持管理計画に必要な、施設の劣化過程のモデル化、補修過程を考慮した劣化進行の予測と総費用の算定を行うことを目的としています。

具体的には、施設の点検データまたは実験データによる状態の把握（劣化度合のランク分け）とデータの蓄積、データにもとづく確率的劣化過程モデルの構築、補修過程を考慮した劣化進行予測と、補修費用および損害額を合わせた総費用の算定などを行っています。

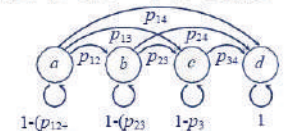


損傷度割合の変化(実験値)

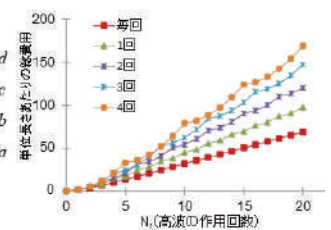


損傷度割合の予測結果
(補修過程を考慮)

⇒ 損傷過程モデルの推移確率 p をデータから推定



損傷過程のモデル



消波工単位長さあたりの総費用

【担当】研究代表者：太田隆夫（工学部社会システム土木系学科
地域安全工学センター）

土着藻類を利用した下水処理場のエネルギー供給拠点化

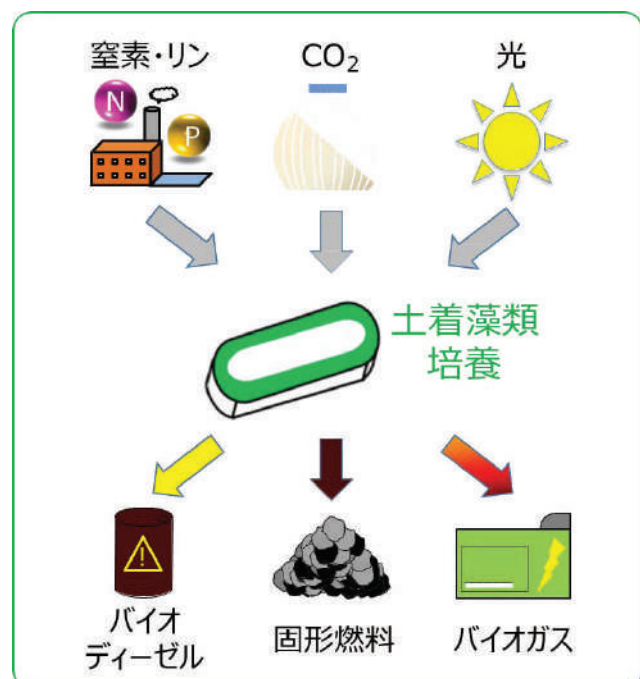
研究



【活動概要】

人口減少に伴う経営環境の悪化や地球温暖化を背景に、下水処理場では「処理・排除」から「再生・活用」へのシフトが求められます。

下水処理場に集約される窒素・リンといった資源を活用した上で、土着藻類（与えられた環境で増殖する微細藻類）の培養・エネルギー化技術の開発を実施します。



【担当】研究代表者：高部祐剛（工学部社会システム土木系学科
地域安全工学センター）

サンゴの生息に影響を及ぼすリン流出の低減に向けた物質循環型共創ネットワークの形成

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

日本最大の八重山地方のサンゴ礁海域は、地球温暖化に伴う高温による白化、陸域からの赤土や栄養塩の流出等の複合ストレスを受け危機的な状態にあります。

このような中、サンゴの生息に著しい影響を与えているリン酸の海域への流出を低減させ、栄養塩の物質循環の改善を促す方途を究明するための調査・研究を行っています。

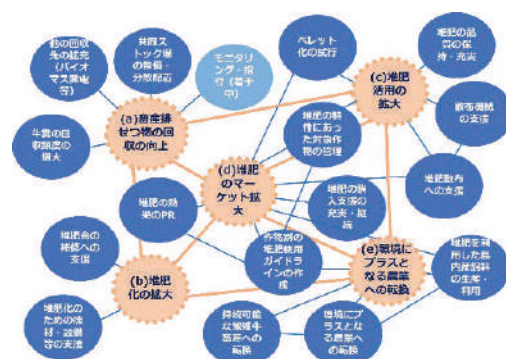
陸域におけるリンの発生源と想定されるサトウキビ栽培などの農地に多量に使用される化学肥料や、畜産から発生する牛糞などから供給され土壌に蓄積・残留するリンについて、土地利用別、営農形態別に土壌中のリン含量を調査・分析し、負荷源を特定し適切な農地管理の方法と島内循環を促す施策を検討しています。

そして、環境省、関連自治体、関連ステークホルダー、NPOと意見交換をしながら共創関係を醸成し、牛糞の堆肥化とその農地還元への促進などのプロジェクトを起動させ、問題解決に向けた共創ネットワークを構築し、社会実装を図っていきます。

【担当】工学部社会システム土木系学科環境計画研究室
(宮本善和・高部祐剛)



健全な状態の八重山地方のサンゴ礁。複合的な影響で衰退しています。



リンの島内循環を促すためのアクティビティシステムマップ

住民参加による斜面環境防災モニタリングシステムの開発

工学部
(社会システム土木系学科)
大学院工学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

気候変動の影響で豪雨による斜面災害が世界各地で多発しています。一方、斜面緑地は都市の貴重な自然環境でもあり、生物多様性の保全、ネイチャーポジティブ達成のため重要な存在です。

そのため、崩壊リスクのある斜面を選定し、MEMS技術を活用したIoT傾斜センサーによって斜面を住民参加でモニタリングし、適切な避難行動につなげるとともに、斜面緑地と共生していく斜面環境防災システムを開発しています。

住民とともに斜面のリスクと環境価値を共有した上で、傾斜角速度等の指標によって避難スイッチとなる基準値を設定し、IoT傾斜センサーでモニタリングを行います。また、斜面を都市緑地として持続する住民参加の維持管理を具体化しています。

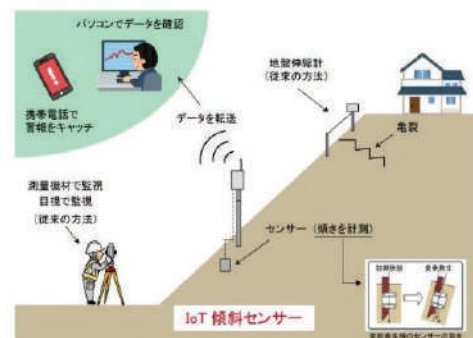
【研究開発内容】

- (1) 斜面リスク情報の共有方法の開発
- (2) 斜面緑地の環境の評価・評価手法の開発
- (3) IoT傾斜センサーによる参加型モニタリング手法の開発
- (4) 斜面緑地の参加型維持管理手法の開発
- (5) 避難スイッチによる避難行動ガイドラインの開発

【担当】工学部社会システム土木系学科環境計画研究室
(宮本善和)



IoT傾斜センサーの設置状況。住民参加でモニタリングを行っています。



IoT傾斜センサーの特長。原位置で、安価に、正確に、遠隔で斜面の挙動をモニタリングできます。

研究、社会貢献



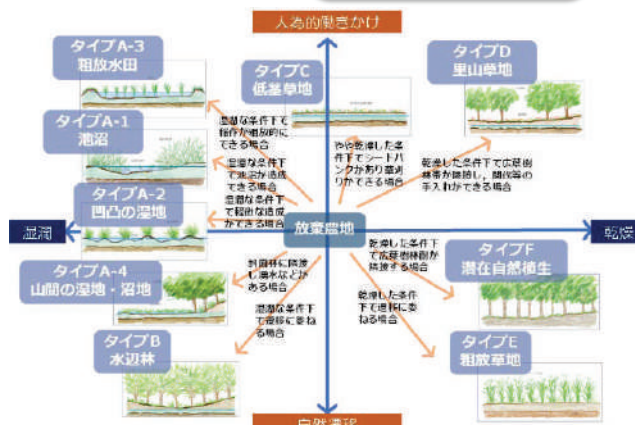
【活動概要】

日本各地で増加傾向にある放棄農地において、営農が継続しにくい場合には、ネイチャーポジティブ(自然再興)の観点から、よりよい自然環境に再生した上で山野に還すことが望ましいと考えられます。

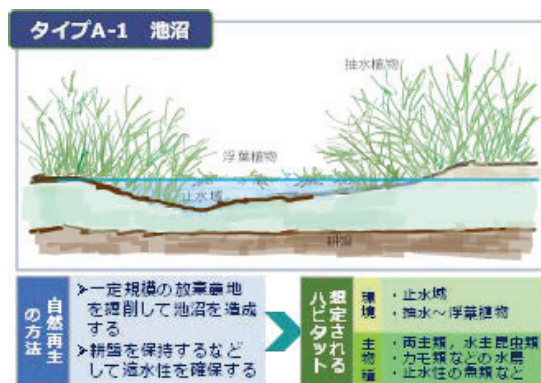
そのため、全国の放棄農地の自然再生の事例を調査・分析し、場の環境ポテンシャルを考慮しながら、望ましい自然環境に再生する手法の確立を目指しています。

現在のところ、放棄農地の自然再生には、主に乾燥～湿潤の条件、及び人為的働きかけ～自然遷移を考慮することが重要であることが分かり、自然再生のパターンを9タイプに類型化することができました。

今後は、事例調査を拡充していくとともに、ケーススタディを行い、放棄農地の自然再生の手法を洗練させていきます。その際、外来種や野生鳥獣の影響についても考慮していく必要があると考えています。また、9つの自然再生の適用性について考究し、実際の放棄農地の自然再生の計画、デザインに活かせるようにしていく予定です。



放棄農地の自然再生の9つのアプローチ



放棄農地の自然再生のタイプ例

【担当】工学部社会システム土木系学科環境計画研究室
(宮本善和)

地域と連携した実践型教育で将来を担う産業人材を育成する「ものづくり実践プロジェクト」

教育



【活動概要】

ものづくり教育実践センターでは、将来の産業や技術革新を担う人材の育成を目指して、PBL(Project-Based Learning)型の実践型授業「ものづくり実践プロジェクト」を展開しています。この授業では、地域の企業や行政機関との協力のもと、学生がものづくり活動や製品開発活動に主体的に取り組めます。このような実践的な教育により、工学知識の応用能力や問題解決能力を効果的に伸ばすことができます。また、地域にとっては、学生の力を取り込んで地域問題の解決に取り組むということに相当し、地域貢献の側面も持っています。



学生グループによるものづくり活動の流れ



遠隔監視機能付イノシシ罠



地域素材を活用したお土産製品

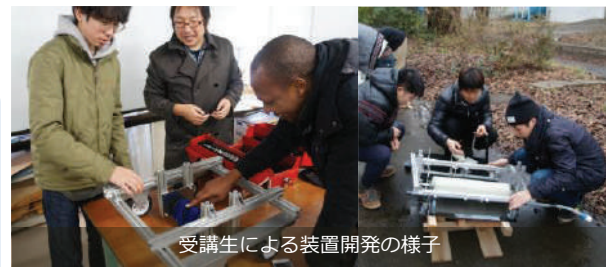
【担当】

教育



【活動概要】

ものづくり教育実践センターは、これまでに培った創造性教育のノウハウを活かして、ケニアのジョモ・ケニヤッタ農工大学（JKUAT）における産業人材育成を支援しています。JKUATにおける創造性教育拠点iPICの創設に関して、企画・構想段階から参画し、技術トレーニング、PBL教育のノウハウ提供、組織運営に関する助言などを行ってきました。また、鳥取大学の学生を対象に、ケニアの社会問題をテーマとしたものづくり教育をすることで、グローバルな視野を持った産業人材を育成する活動にも取り組んでいます。



受講生による装置開発の様子



PBL型教育に関する
セミナー・ワークショップ



先進的工作機械に関する
技術支援

【担当】



鳥取大学工学部附属
ものづくり教育実践センター
Innovation Center for Engineering Education, Tottori University

地域の子ども達への実践的教育の提供

社会貢献



【活動概要】

ものづくり教育実践センターでは、これまでに蓄積したものづくりに対する知見、技術を活用し、地域の子ども達を対象としたものづくり教室などを実施しています。ものづくりや工学に興味を持ってもらうことで、今後の産業の中心を担う人材の育成を目指しています。

さらに最近、実践型授業のノウハウを活用したPBL(Project-Based Learning)型の教室を地域の企業や団体と協調しつつ開発し、より高度になっていく社会システムに対応していくために必要となる、問題解決能力を伸ばすことが期待できる教育プログラムとして展開しています。



夏休みものづくり教室



地域課題解決型教室

【担当】



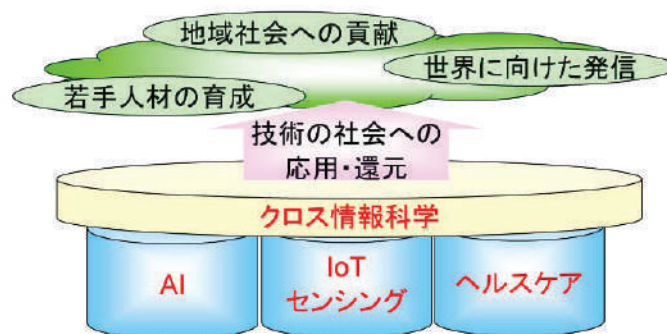
鳥取大学工学部附属
ものづくり教育実践センター
Innovation Center for Engineering Education, Tottori University

大学運営



【活動概要】

本センターは、情報科学全般を取り扱う研究センターとして、(1)AIとその応用に関する取り組み、(2)IoTや通信、センシングに関する取り組み、(3)ヘルスケアや生体信号処理に関する取り組みなどの研究を進め、その成果を地域社会に役立てるとともに、世界に向けても発信することを目指しています。また上記分野の若手人材の育成にも注力していきます。



【担当】センター長：櫛田大輔（工学部電気情報系学科）副センター長：近藤克哉（工学部電気情報系学科）

Learning Analytics 手法の確立とデータ利活用環境整備

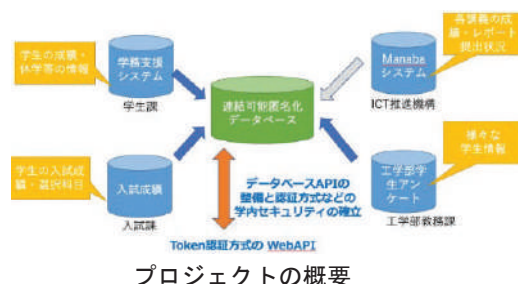
教育、研究、大学運営、地域貢献



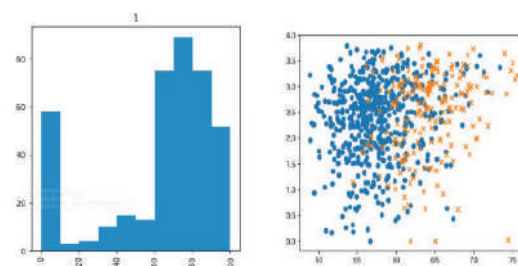
【活動概要】

遠隔講義やe-learning等で蓄積されたデータを分析、可視化することにより、学習状況の推定や学習者への適切な助言方法、教材の改善点、入試制度の改革方法などを探索的に研究することで、地域のデジタルハブユニバーシティを目指しています。

このような分析を可能にするためには、全学の各部署との調整や連携しつつ、各部署が持っているデータベースを一ヶ所に統合していく必要があります。工学部附属クロス情報科学研究センターでは、データベースの統合にかかる様々な問題点を明らかにしつつ、改善に取り組んでいます。一部のデータベースは既に統合されており、それらのデータベースを用いて様々な分析が可能となっています。



プロジェクトの概要



学習成果の可視化例

【担当】

岩井儀雄(工学部電気情報系学科)

マイクロ波無線のチャネル状態情報を用いた 非破壊果実糖度測定技術の研究

工学部
(クロス情報科学研究センター)
大学院工学研究科
農学部

研究、社会貢献



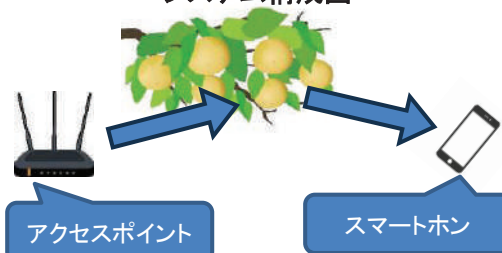
【活動概要】

マイクロ波無線を用いるWi-Fiシステムを利用した非破壊果実糖度測定技術の研究に取り組んでいます。携帯できる糖度計のほとんどは果実を切ったり絞ったりして用いるため、全数検査を行うことはできません。また選果場に設置されている大掛かりな非破壊糖度計を収穫前の果実には使用することはできません。そのため、果樹園で利用できる低消費電力かつ持ち運び可能な非破壊糖度計のニーズが高まっています。

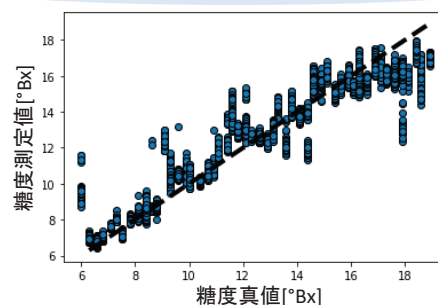
そこで物体を透過する性質を持つマイクロ波を用い、透過波のチャネル状態情報の利用と機械学習によって高精度に果実の糖度を判定する手法を研究しています。シヨ糖水溶液を対象とした実験では、精度良く糖度を測定することが可能となりました。現在は、果実そのものの測定性能を向上させる手法について検討しています。本手法によって高精度な全数検査が可能になれば、測定した果実をそのまま出荷、販売することができ、作物を無駄にすることがありません。

【担当】中川匡夫、笹岡直人(クロス情報科学研究センター)
竹村圭弘(農学部)

Wi-Fiを利用した果実糖度測定 システム構成図



シヨ糖水溶液による実験結果



電波を用いる非接触心拍検出システム開発

工学部
(クロス情報科学研究センター)
大学院工学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

対象物の振動を電波のドップラー効果によって観測するドップラーレーダを使って動物の見守りをする生体センシングに取り組んでいます。近年は子供の数よりもペットの数の方が多く、ペットの家族化が生じています。それに伴い、ペットの高齢化や日中の見守りなど人間と同様な問題が生じてきていますが、人間と異なるのは言葉が話せないため明確な意思疎通が難しいという点です。

そこで、ドップラーレーダを用いてペットの体表面の微細な振動変化を捉え、ペットの呼吸数や心拍数の推定を試みました。比較的振動成分の大きい呼吸成分をまずは抽出し、呼吸成分に由来する高調波成分を適応ノッチフィルタによって除去することで、微細な振動である心拍成分を正確に推定することができています。本研究は実際に農学部附属動物医療センターで飼育している犬を対象として検証を進めましたが、本技術によりペットと共に暮らす安心安全な生活を実現すべく、企業との共同研究や製品化の準備を進めています。

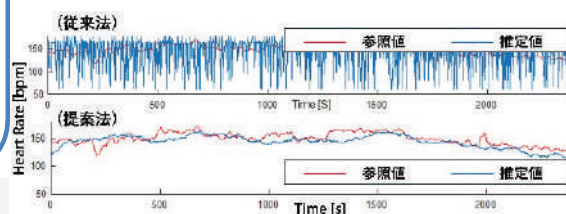
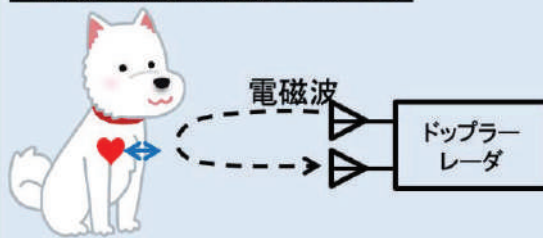
【担当】
笹岡直人(工学部電気情報系学科)

■ドップラーレーダ

ドップラー効果により
電波で対象の振動を観測



■動物を見守る生体センシング



研究、社会貢献



【活動概要】

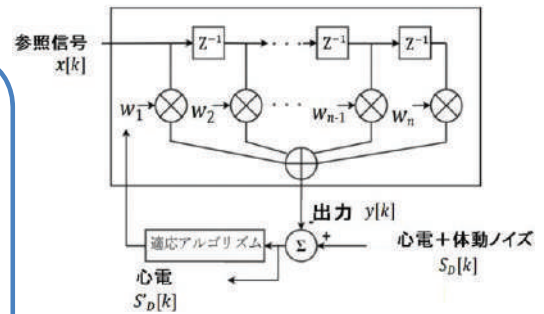
ミリ波無線やDepthカメラといった非接触なセンシング技術を使って日常的に健康を見守るための研究に取り組んでいます。最近では核家族化の時代を経て独居世帯が増えており、知らず知らずに自身の健康を損っていることに気付かないケースが増えています。また、遠くに暮らす独居家族を何如にして見守るか、健康状態を確認するかなどの問題も継続的に生じています。

そこで、電波の一種であるミリ波やDepthカメラによって非接触非拘束に日常生活の中で身体の状態をモニタリングする研究を試みました。人の体動ノイズを除去する適応フィルタの提案や、それを実装できるミリ波デバイスの改良、Depthカメラから得られる三次元座標による行動分析、呼吸や心拍といったバイタルセンシングなど非接触非拘束で計測した日常の何気ない動作や行動から健康への気付きを提示するものです。これにより独居世帯であっても自身を見守ってくれる住環境の構築や、遠隔から家族の健康を見守るなどが可能になることが期待されます。今後の実用化を目指して特許出願や企業連携を進めています。

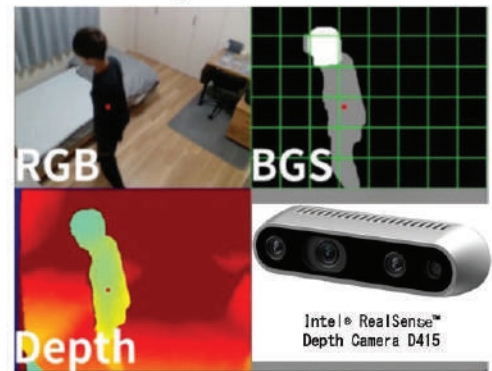
【担当】

中川匡夫、笹岡直人、櫛田大輔(工学部電気情報系学科)

適応フィルタ



Depthカメラ



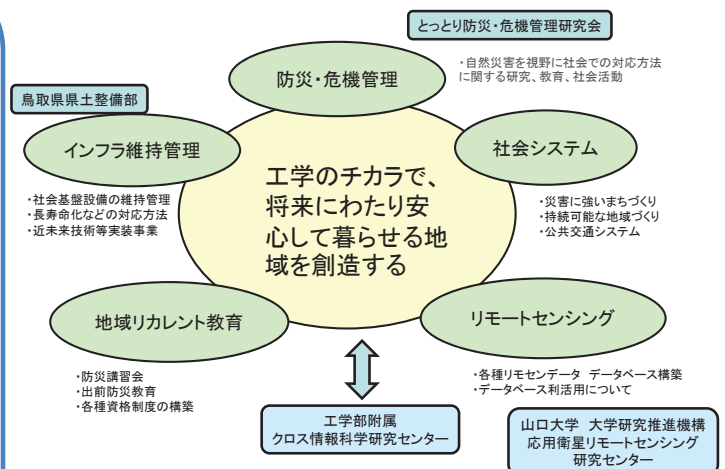
工学部附属地域安全工学センター

大学運営



【活動概要】

本センターは、頻発する自然災害に対する安全・安心の確保と、過疎化が進む地域の持続的発展を図ることを目的として、平成24年4月に設置されたもので、「安全・防災」、「社会システム」、「情報システム」の3部門がそれぞれの強みを活かして連携し、地域の様々な課題に取り組んできました。令和元年12月に、山口大学研究推進機構応用衛星リモートセンシング研究センターと衛星データの防災利用を目的とした研究協力協定を締結し、この衛星データを利用した新たな防災・減災研究に取り組むためのリモートセンシングに関する研究体制を構築しました。防災・危機管理、社会システム、社会基盤インフラ維持管理、リモートセンシング、リカレント教育を主とし、工学部附属情報クロスセンターとも連携し、本センターのテーマ『工学のチカラで、将来にわたり安心して暮らせる地域を創造する』の下、研究・教育・地域貢献を進めています。



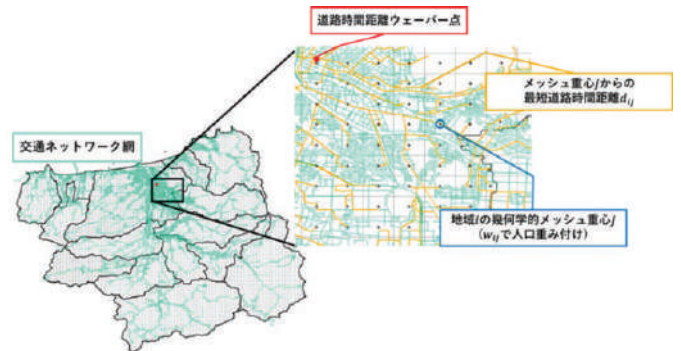
研究



【活動概要】

全国の多くの地方都市では、人口減少にともなって居住の希薄化（居住者の空間密度の低下）がすすんでおり、今後、生活しづらく不便な生活圏になって行くことが危惧されています。そこで、国や多くの地方自治体は、都市機能や居住を中心拠点や地域拠点に集める「都市のコンパクト化」を目指しています。コンパクトで住みやすい地方都市圏を作ること、人口減少下において都市計画上の最重要課題であり、生活圏全体の効率性を高め、それにより生活圏の価値を高めることは自治体の持続可能性の点でも重要であるといえます。

近年、ますます充実してきている多様な都市データを収集し、地理情報システム（GIS）や統計分析を適用して、都市施設・店舗や居住者の配置などの生活圏の空間構造を明らかにし、今後、どのような配置を目指すことが効率的で住みやすい、ひいては持続可能な地域の経営に効果的であるかを研究しています。



鳥取県東部地域住民(500m²メッシュ単位)の道路利用で最も近い地点「道路時間距離ウェーバー点」の算出



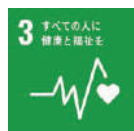
居住が増加するとコンパクト性(道路時間距離ウェーバー点までの住民平均距離)が向上する「コンパクト化寄与エリア」(500m²メッシュ単位)の導出(旧鳥取市)

【担当】研究代表者：福山敬

(工学部社会システム土木系学科・地域安全工学センター)

工学部附属グリーン・サステナブル・ケミストリー
(GSC)研究センター

大学運営



【活動概要】

持続成長可能な社会を実現するための研究と学生のためのGSC啓発活動を行っています。研究はグリーン反応部門(上記7,9,12,15に関連)、グリーンエネルギー部門(上記7,9,12に関連)、グリーン媒体部門(上記3,9,11,12,13,15に関連)、バイオテクノロジー部門(上記3,7,9,12-15に関連)、環境評価部門(上記11,12に関連)の5部門で推進しています。これまでにセンターの各メンバーが数多くの研究業績(センター全体として2022年度時点で査読付原著論文774編、著書127編、特許申請73件、国際学会招待講演101件)を残すとともに、多くの外部資金を獲得してきました。GSC啓発活動(セミナー・シンポジウム)は2008年12月からの14年間で通算75回開催され、延べ参加者は8071名、講師は151名に達しました。また、国内外の研究機関との連携により大学院GSC教育プログラムの充実も図っております(上記4に関連)。



【担当】センター長：片田直伸(工学部化学バイオ系学科)

副センター長：永野真吾(工学部化学バイオ系学科) 野上敏材(工学部化学バイオ系学科)

分野横断によるバイオ線維の「理解」「操作」「応用」： BF-UMAプロジェクト

工学部
(グリーン・サステイナブル・
ケミストリー研究センター)
大学院工学研究科

研究

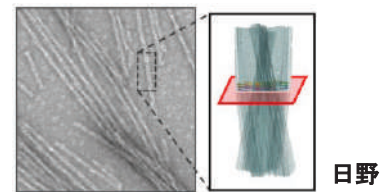


【活動概要】

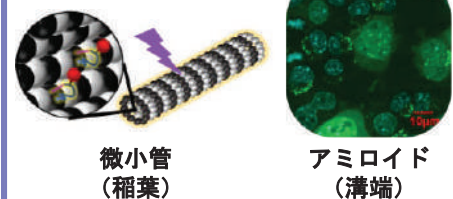
タンパク質、ペプチド、多糖高分子などから構成されるバイオ線維（BioFibril）はナノメートルサイズの線維構造体であり、その成分に応じて細胞内外における不溶性沈殿や、細胞の形態・運動・分裂に関与する細胞骨格、本学の強みとなるキチンナノファイバーなど、多種多様な構造・機能を有します。これらバイオ線維は様々な難治性疾患との関連が確認されており、その理解は医学的見地から見て重要な課題です。また、自己集合により規則正しい構造を形成するバイオ線維はナノマテリアルの材料としても注目されています。そこで、各分野の専門家で協力することで、これらバイオ線維の「理解」「操作」「応用」を目指した「BF-UMAプロジェクト」（BioFibril Understanding, Manipulation, Application）を進めています。例えば、「理解」として細胞内および試験管内におけるタンパク質の線維形成の観察やその構造解析、「操作」として細胞骨格の光制御、「応用」としてキチン・キトサンナノファイバーの新素材開発などを行っています。

【担当】研究代表者：稲葉央（工学部化学バイオ系学科）・井澤浩則（工学部化学バイオ系学科、現・宮崎大学）・日野智也（工学部化学バイオ系学科）・溝端知宏（工学部化学バイオ系学科）

「理解」



「操作」



「応用」



刺激により生理活性を制御できる人工脂質分子の創成

工学部
(グリーン・サステイナブル・
ケミストリー研究センター)
大学院工学研究科

研究

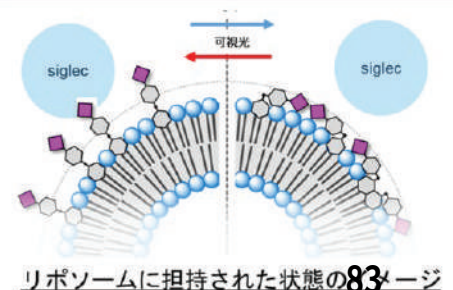
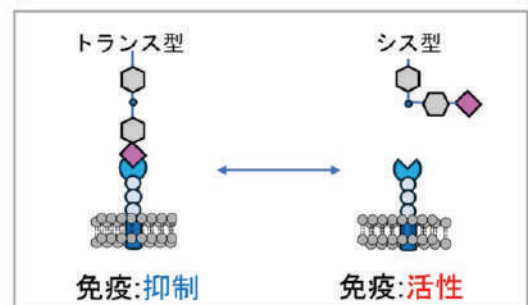
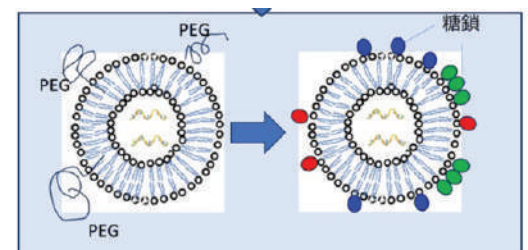


【活動概要】

リポソームは脂質分子の球状の集合体で、内部には分子を格納できる空間が存在します。この空間に薬物やコロナワクチンを格納して輸送するナノマテリアルとして、リポソームはすでに実用化されています。私たちは特別な機能を付与した新しい人工脂質分子を合成して、リポソームの脂質膜に加えておくことで、新しい機能を付与したリポソームを作成して、薬物の選択的な送達に応用することを目指します。現在は刺激に応答することで、分子構造の変化を誘起し、細胞上の受容体との親和性を制御できる脂質分子を合成しています。強力な副作用も強い薬をリポソームに内包しておき、生体中で腫瘍などの標的組織付近で刺激を与えて人工分子の構造変化を誘起し、ダイナミックなリポソームの構造変化を介して薬が放出されたり、免疫活性化を介してよりがん細胞を選択的に攻撃したりすることで、望む薬効が最大限に発揮されるようになることを期待しています。

【担当】

研究代表者：花島慎弥（工学部 化学バイオ系学科）
研究分担者：佐々木克聡（工学部 化学バイオ系学科）



二酸化炭素の資源化を実現するシングルナノ触媒の開発

工学部
(グリーン・サステイナブル・
ケミストリー研究センター)
大学院工学研究科

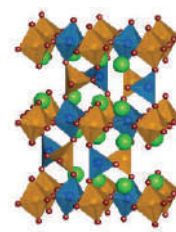
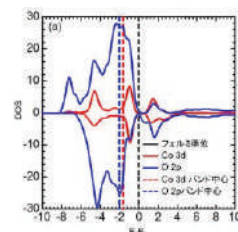
研究



【活動概要】

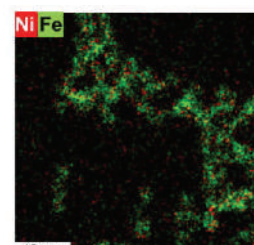
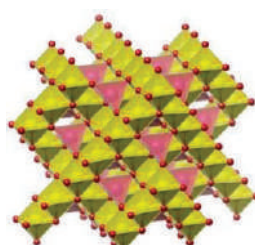
2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、温室効果ガスである二酸化炭素をいかにして炭素資源として利用するか、が非常に重要な課題です。二酸化炭素を光あるいは電気化学的に還元し、化学原料となる一酸化炭素やエチレン、エネルギーキャリアとして期待されているギ酸、燃料となるメタンなどに変換可能であり、これら生成物を高効率で自在に作り分けられる優れた触媒開発が鍵となる。これには触媒、電気化学のみならず、有機化学、分析化学、計算科学の研究者が分野横断的に連携する必要があります。

本課題では、遷移金属元素を含み数nm以下の量子ドット、量子薄膜を中心に据え、幅広い分野の研究者が柔軟に連携することにより高い活性・選択性を満たす触媒を開発しています。

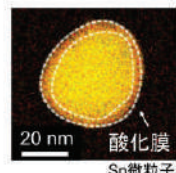
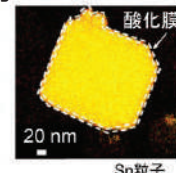
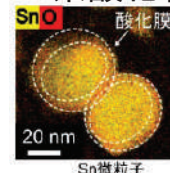


DFT計算
Co, Fe位置
電子状態密度
解明

量子ドット触媒



Sn系酸化物



反応時に
金属種を
形成

【担当】研究代表者:辻悦司(工学部化学バイオ系学科)

研究分担者:薄井洋行、道見康弘、南条真佐人、野上敏材、増井敏行(工学部化学バイオ系学科)

星 健夫(工学部機械物理系学科、現・核融合科学研究所)

乾燥地研究も活用した空気中の水蒸気からのグリーン水素生成

工学部
(グリーン・サステイナブル・
ケミストリー研究センター)
大学院工学研究科

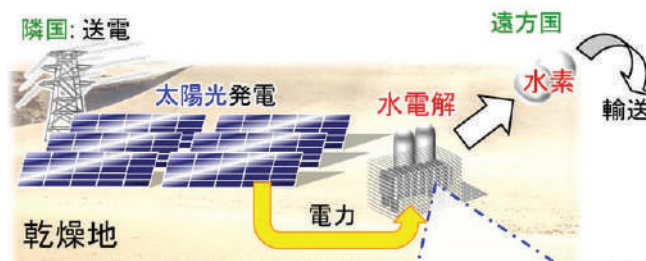
研究



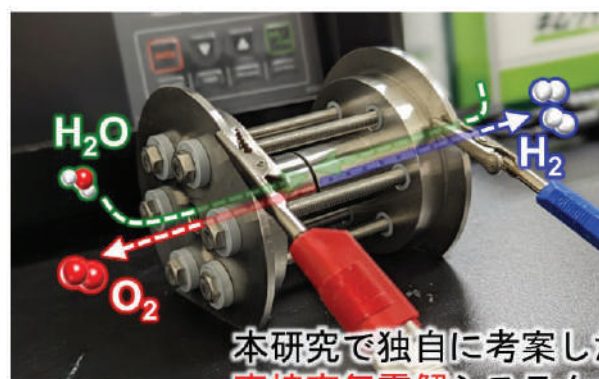
【活動概要】

太陽光が豊富に降り注ぐ砂漠などの乾燥地で太陽光発電をし、その電力を利用した水電解により水素を製造、それをさまざまな国に輸送する水素社会が構想されています。しかし、乾燥地では生活用水にすらアクセスできない地域も多く、如何にして大量の水を手入れするかが課題となっています。

本研究では、鳥取大学乾燥地研究センターで培われてきた乾燥地研究を活用し、乾燥地でも存在する「空気中の水蒸気」に注目しました。この水蒸気を常温で吸湿・液化し電解して水素を得る直接空気電解を新たに考案しました。これには吸湿性で中性付近の液性を示す電解液を用いており、安価で資源豊富な鉄やコバルトから成る電極触媒を使用可能です。今後、さらに電解効率を向上させ、地球上どこでも水がなくても手軽に水素を製造可能な技術の構築を目指します。



【砂漠での課題】
多くの場所で液体の『水(反応物)』
の確保が困難 → 空気中の水蒸気を利用



本研究で独自に考案した
直接空気電解システム

【担当】辻悦司(工学部化学バイオ系学科)

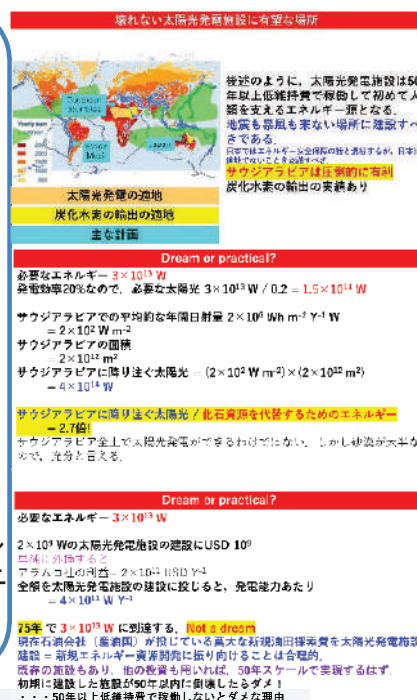
教育



【活動概要】

担当者の片田は本センターにおける教育研究活動などを関連業界から高く評価され公益社団法人石油学会副会長に選ばれている。石油学会という名称からは石油を使うことを推進する団体と誤解されやすい。しかし学会に集う研究者・技術者は、石油をベースとするエネルギー・資源供給の現状をよく解析し、石油（化石資源）の消費量を最小限にし、石油の働きを代替する物質やシステムの開発を進め、カーボンニュートラルおよび持続的エネルギー・資源供給を本当に実現するための学術活動を行うことのできる日本で唯一の集団である。片田はこれらの特性を活かし、学会を持続的エネルギー資源関連の名称に変えることなどを提唱して副会長に選任された。このようにカーボンニュートラルに関して情報を集める位置にある。ので、本学学生にカーボンニュートラル達成に必要なエネルギーや物質生産プロセスに必要な資源の量、コストなどを提供し、現実にカーボンニュートラルを実現するために有効な手段は何か、専攻の異なるそれぞれの履修者が何をすればよいのかを考える場を提供することとなり、2025年度前期から主題科目「石油学会副会長が語るカーボンニュートラル」を開講した。授業は毎回の2/3が解説、1/3が議論、最後の2回は「カーボンニュートラルに最も必要な手段を提案し、他の履修者を説得する」というディベートで構成され、2025年度には熱い議論が交わされた。右は配布資料の例。

【担当】片田直伸（工学部化学バイオ系学科）



食品残渣からの有用成分抽出に向けた深共晶溶媒プロセスの開発

研究



【活動概要】

食品加工で生じる果皮や搾りかす等の食品残渣には、スベリンやフェノール類などの高機能成分が含まれ、資源循環・SDGsの観点から有効活用が強く求められています。加えて、鳥取県は果樹栽培をはじめとする農産物が盛んで、地域特有の食品残渣が大量に発生することから、残渣の高付加価値化を実現する地域循環型プロセスの確立が重要な課題です。深共晶溶媒は、低毒性・低コスト・再生可能性を併せ持つグリーン溶媒であり、従来の酸・アルカリ抽出と異なり疎水性かつ高分子性の成分にも温和で選択的に作用できる点が大きな利点である。

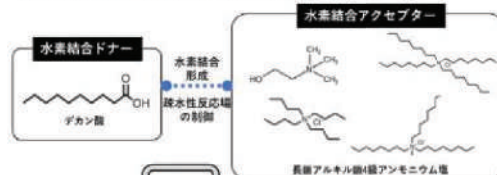
本研究では、この特性を活かして深共晶溶媒を抽出媒体として用い、食品残渣からの選択的・高効率抽出プロセスの確立と成分分離挙動の機構解明を目的とします。あわせて、得られた抽出物について濡れ性（親水・撥水〈水／油〉）や抗酸化等の生理活性を指標とする機能評価を行い、撥水性材料・コーティング材料等への応用展開を図ります。これにより、地域資源を基盤とした持続可能な資源循環モデルの構築に資することを目指しています。

【担当】吾郷万里子、野上敏材、佐々木紀彦（工学部化学バイオ系学科）、上中弘典（農学部生命環境農学科）

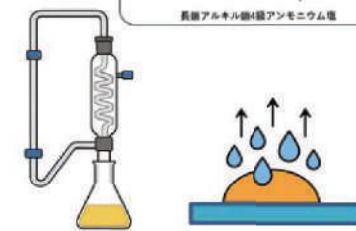
食品残渣等



深共晶溶媒（最適な組み合わせと条件）



疎水性有用成分の抽出

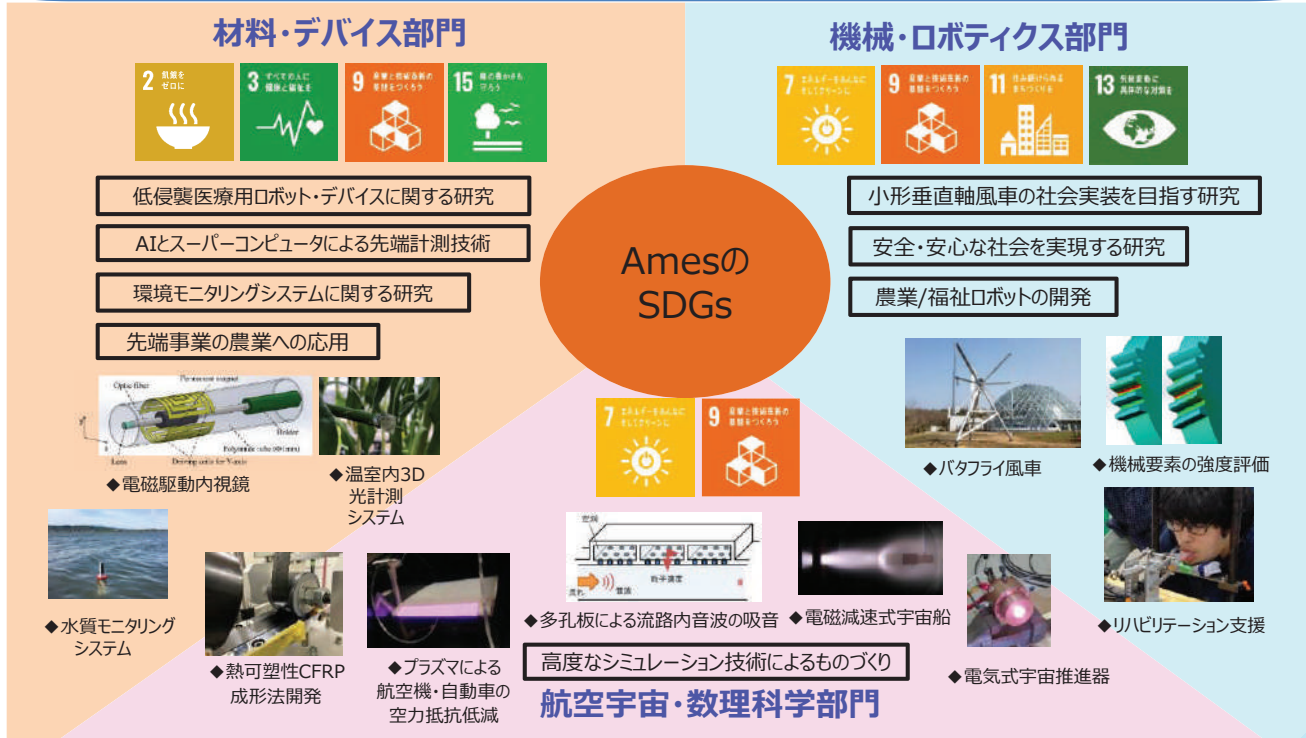


用途のイメージ



【活動概要】

本センターは、工学部内の研究シーズを集約し、産業界のものづくり基盤技術の革新へ挑戦するため、以下の3部門を構成して活動を行っています。地域および産官学の連携を模索し、若手研究者を育成しながら持続可能な社会の実現に向けて研究を展開します。



【担当】センター長：市野 邦男（工学部電気情報系学科）、副センター長：原豊（工学部機械物理系学科）、副センター長：酒井武治（工学部機械物理系学科）

AI同化による変形・破壊部の初期形態復元

教育、研究、社会貢献、課外活動、大学運営



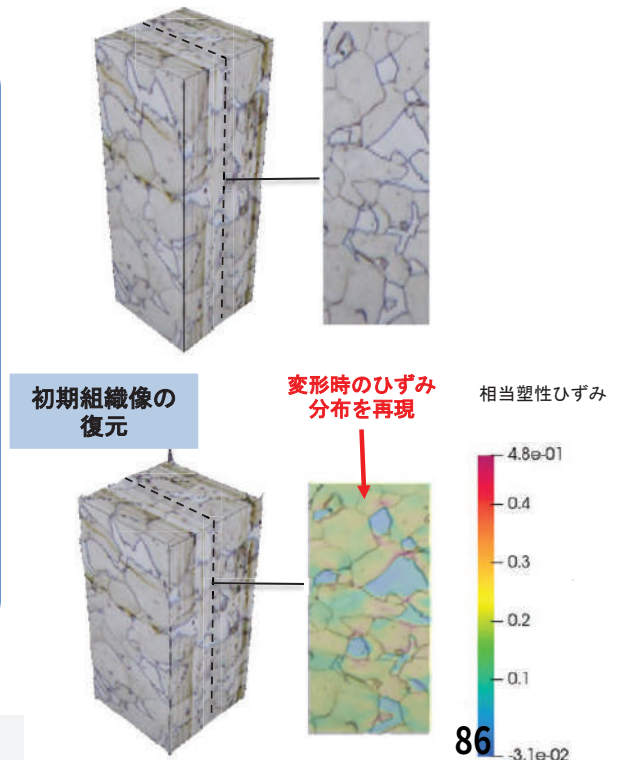
【活動概要】 塑性加工ではよく金属材料が割れてしまう不良が起きます。また、身の回りではいつの間にか金属が破壊してしまい、事故に繋がります。

このような場面では、なにが原因で破壊してしまったのかを明らかにすることが必要です。しかしながら、一度破壊してしまった金属は元には戻せません。破壊部を見ても、よく分からないことが多々あります。

本研究では、変形・破壊部の時間を巻き戻して元の状態に復元した上で、さらに破壊した時のひずみや応力分布を可視化することを目指しています。既にシミュレーションとAIを組み合わせた手法によって変形部の金属組織を元の状態に復元することに成功しました。

今後は破壊部の復元と産業応用まで進めていく予定です。

変形した金属組織



【担当】松野 崇（工学部機械物理系学科）

農学部

大学院連合農学研究科 大学院共同獣医学研究科



農学部生命環境農学科
—地域規模から地球規模までの広範な課題に対応できる人材養成—

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育



【活動概要】

農学部生命環境農学科は、乾燥地における環境・農業問題の解決、流域環境と地域資源の保全とその利活用、有用生物資源による食料生産の推進、生命現象の解明と応用を通じて人類の生存や生活に貢献することを目標とし、地域規模から地球規模までの広範な課題に対応できる学際的かつ総合的な視野、高い倫理観と協働力、高度な専門的実践力を修得し、いかなる困難な課題にも立ち向かえる人材の養成を目指しています。



【担当】 農学部長：明石 欣也

日本国内のフィールドで学び、乾燥地において適切かつ持続的な方策を展開

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育、社会貢献



【活動概要】

日本国内のフィールドで学び、乾燥地において適切かつ持続的な方策を展開することを目的に、県内特産品の営農課題をどのように解決するのかということを実践的な維持管理作業および収穫作業などを通して学びます。

国際乾燥地農学コースの学生は、梨やらっきょう栽培に関する営農活動のひとつとして、梨の袋掛け、獣害対策用の金網設置、らっきょうの掘り取りや根切りなどを体験しています。また、本講義は地域住民、ボランティア、行政機関などとの共同活動であるため、本活動をきっかけに、各学生が地域とのつながりを自主的に構築するきっかけとなっています。

地域の特性に応じた具体的な解決策を提案できる人材を育成しています。

【担当】

生命環境農学科 国際乾燥地農学コース
国際乾燥地農学演習担当教員



教育



【活動概要】

本実習では、メキシコの研究所や大学で2週間の実地教育を行います。

- 学生は乾燥地や開発途上地域における持続的農業生産、農産物流通、砂漠化対処、砂漠緑化および環境保全に関する知識と技術を習得します。
- 学生は学習対象、研究対象としての乾燥地の自然、暮らし、社会を肌で実感することができます。
- 実習を通して、学生には強い目的意識が芽生えます。そして、学生は国際通用性と専門性を兼ね備えた人材へ自らが変化しようと行動様式を変化させています。
- 実習では講義やプレゼンテーションを英語やスペイン語などで行うことにより、語学能力の向上が図られます。



【担当】

生命環境農学科 国際乾燥地農学コース
国際乾燥地農学実習担当教員

アクアポニックス廃液を灌漑用水とした露地栽培圃場の
土壌水分・塩分変動特性の解明

研究、社会貢献

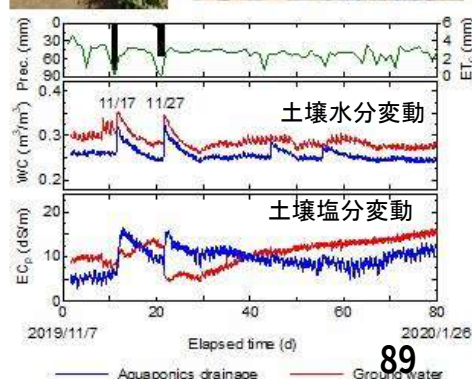


【活動概要】

水資源を有効に使う食料生産技術の一つにアクアポニックスという方法があります。アクアポニックスでは、水産養殖と水耕栽培を組み合わせ水循環を使用します。これまでのアクアポニックスでは循環利用後の最終廃水を廃棄していましたが、我々のグループではこれを露地栽培の灌漑用水に利用することで、さらにアクアポニックスシステムの水生産性を高め、乾燥地での食糧生産技術として確立しようとしています。

アクアポニックス廃水には豊富な栄養塩類があるため、液肥効果が期待できますが、同時に余分な塩類によって塩類集積が生じる危険性もあります。この取り組みでは、過剰な塩類集積を回避し、アクアポニックス廃水を露地栽培で利用できるようにする露地畑の水管理技術の確立を目指してメキシコと日本で実証研究を行っています。

・メキシコ合衆国
・バハカリフォルニア州・ラパス



【担当】 猪迫 耕二、齊藤 忠臣、山田 智
(生命環境農学科国際乾燥地農学コース)

農業廃棄物由来のバイオ炭を利用した作物栽培に関する研究 ～持続可能な農業を目指して～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

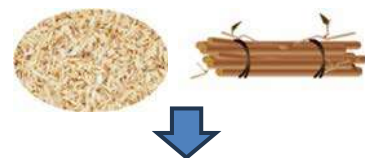
研究



【活動概要】

2050年には世界人口が97億人に達すると予測されており、世界人口の増加は貧困や飢餓を悪化させる主な要因の一つである。また、産業革命以降平均気温は上昇し続けており、地球温暖化は喫緊の課題である。国際社会は持続的な社会を形成し維持するためにこれらの問題を同時に解決していかなければならない。

私たちの研究室では、バイオ炭を利用した作物栽培の研究を行っており、これにより先述の問題に貢献できると考えている。バイオ炭とは簡単に言うとバイオマスからつくられた炭である。その多孔質構造は養分を吸着し、またバイオ炭自身も養分を含んでいる。これらの養分を作物が吸収することで、収量の向上や化学肥料の削減が可能である。これに加えて、バイオ炭には難分解性炭素が多く含まれることから、本来微生物に分解されてCO₂として大気中に放出される炭素を土壌に貯留することができる。これは温室効果ガス削減の有効な手段の一つとなっている。研究概要としては、バイオ炭による収量向上や化学肥料削減、水田からのメタン排出量と収量に与える影響についてなどの実験を行っており、研究室一同、バイオ炭を利用した作物栽培の栽培体系の確立に向けて研究している。



バイオ炭



【担当】 乾燥地作物栽培学研究室 （担当教員：西原 英治）

モンゴル草原の持続的牧畜利用にむけて ～劣化草原の自然回復の実態解明と回復促進策の検討～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



【活動概要】

牧畜はモンゴル国の主要産業の1つで、草原は牧畜を支える重要な資源です。モンゴル草原を将来にわたり持続的に牧畜利用するため、劣化・荒廃した草原の自然回復の実態解明と回復促進策の検討に取り組んでいます。草原の牧草地としての回復を考えるには、草原の植物量だけでなく、どのような植物がどのような環境でどのように生きているのかといった、生態学的な理解が必要です。丹念に時間をかけて生態学的な情報を集め、草原の実態を解明していきます。近年は、気候変動が草原生態系に与える影響の解明に取り組み、モンゴル国の今後の草原利用にどのような変化が生じる可能性があるのか明らかにすることを目指しています。



モンゴルでは草原を利用した牧畜が盛ん



様々な要因で草原の劣化・荒廃が進む



植生や環境を丹念に調査して実態を解明する

【担当】 衣笠 利彦（生命環境農学科）

農村地域におけるショートタイムワークによる「新たな働き方」の確立

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究、社会貢献、課外活動



【活動概要】

農村地域には働く場所がないと思われがちですが、農作業はもちろんのこと、農村の景観を形成する水田畦畔や水路、ため池のような場所の草刈りなど、農業に関わる季節的な労働は無数にあり、人手が足りていない状況です。その他にも、地域の中で人手が足りていない状況は多々存在すると考えられます。

本研究プロジェクトでは、鳥取大学と日南町、ソフトバンクとの地域連携協定を基盤に、短時間労働（ショートタイムワーク）がどのような現場で必要とされているのか、また短時間で働きたいと考える人がどれくらいいるのかを明らかにし、多様なあり方と組合せを検討しています。これらの実態の解明を通して、短時間での労働と収入の確保を可能にする仕組み＝「日南町らしい働き方」を実現するモデルを検討し、「おしごとバンク」として一般化・普及することを目指しています。

プロジェクトへの学生の参画



ショートタイムワークのテスト



イベントでの実証調査

【担当】 木原 奈穂子（生命環境農学科）
連携：日南町、ソフトバンク株式会社

農村の集落機能維持に「通い」が果たす役割の検討

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究、社会貢献、課外活動



【活動概要】

都市への人口流出と高齢化により、防災や交流を担うコミュニティが脆弱化してしまい、「限界集落」や「消滅集落」に迫っている農村集落が多数みられるようになっていきます。このようなコミュニティが弱体化した集落や地域では、そもそも外部からの関係人口や交流人口を受け入れるだけの余力がなく、移住や定住を希望する人材を受け入れることすらままならない場合が散見されます。

現状、このような集落で他出した子弟が通いながら空き家や農地を管理している場合が見られます。本研究プロジェクトでは、このような「通い」の人材に焦点を当て、子弟のみならず学生のような第三者が集落に関わることによって、集落機能の維持が可能かどうかを実証調査し、モデルとなる集落の確立を試みています。

地域連携協定を結ぶ南部町の協力の下、大学生の活動拠点を設置し、「通い」による集落維持の方法と「通い」が果たす役割を明らかにします。



大学生の活動拠点である地域の交流スペース



コワーキングスペースやシェアキッチンを活用しながら交流活動を推進する

【担当】 木原 奈穂子（生命環境農学科）
連携：南部町

マルチ・ステークホルダーによる畦畔管理組織の確立に向けた実証研究

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

農村景観を形成する水田畦畔や、農業に必須の水路や農道、ため池は、これまで農業者の生産活動の一環として管理されてきました。しかし、農業に限られた担い手に集中するのに伴い、これらの地域資源の管理が疎かになりつつあり、「日本の田園風景」の維持が困難になっています。

本研究では、これらの地域資源の維持、具体的には「草刈り」を地域内外の人材で構成する組織化によって解決することを目的に、多様な地域での草刈りの実態や、各地で結成される「草刈り隊」の調査を行っています。これらの調査を通して、多様な人材＝マルチ・ステークホルダーが関与する際の組織化の要点を明らかにし、実際に草刈り隊を設立することなどを通して、各地で問題となっている草刈りの問題の解決に取り組みます。



農村景観を維持するため
必須の畦畔草刈り

草刈りに使用
される刈払機



地域内で結成された草刈り隊活動
の聞き取り調査

【担当】 木原 奈穂子（生命環境農学科）

地域コミュニティのための会計手法の確立に向けた実証研究

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究、社会貢献



【活動概要】

自治会・町内会や、さらに小さな活動コミュニティ、複数自治会が連合したさらに大きなコミュニティには、明確な会計手法が存在していません。それぞれの地域や活動状況に応じて、誰もが理解できる方法で会計情報を取りまとめたため、全国統一されたルールの設定が困難であるためです。

しかし、「村のルール」のような独自の会計ルールが確立されてしまい、誰もが会計に取り組める状況ではなくなっていることや、第三者が会計情報を見ても理解できない状況も散見されます。また、会計役の負担が大きく、コミュニティ活動への参画や地域活性化の取り組みを阻害する要因にもなっています。

本研究では、農村集落の会計情報が含まれる会計情報を読み解き、誰もが参画可能な地域コミュニティの会計のあり方を検討するとともに、その手法の確立に取り組んでいます。



集落に代表される自治の地域
コミュニティの総会資料を基に
活動内容や会計方法を調査する

【担当】 木原 奈穂子（生命環境農学科）

ニホンナシの自発休眠機構の解明と新品種の育成

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究

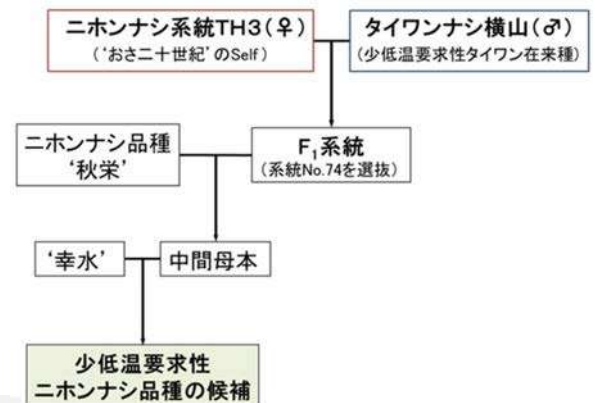


【活動概要】

ニホンナシをはじめとする落葉果樹の芽は、冬季に一定量の低温に遭遇しなければ翌春に発芽することができません。近年の温暖化の影響により、世界の低緯度地域ならびに日本の西南暖地では、低温遭遇量の不足による発芽不良が多発しており、ニホンナシの栽培が困難になっています。本研究室では、自発休眠の生理・生化学的な機構解明を進めると同時に、低温要求量の少ない新品種の育成ならびに選抜マーカーの開発を行っています。これと同時に、人為的な打破処理技術の確立も行っています。



大学内で保有しているナシ遺伝資源を研究に活用



温暖化適応品種の育成図

【担当】 竹村 圭弘（生命環境農学科）

異種ゲノム導入技術の開発による作物の多様化

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究

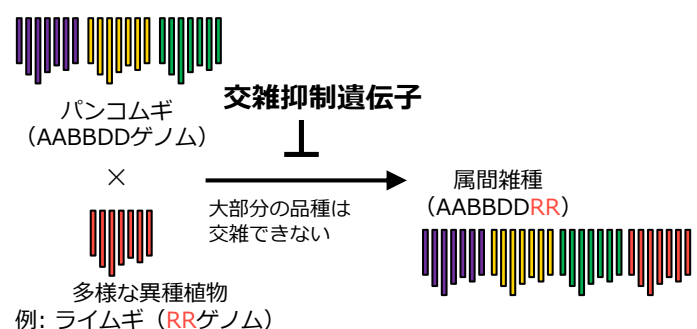


【活動概要】

気候変動下における食糧生産問題の解決に向けて、画期的な作物新品種の開発が求められています。植物育種学研究室ではムギ類の遺伝的多様性を理解して新品種開発に繋げる研究を進めています。麦の穂の形は収量性に大きく影響しますがこれを制御する遺伝子はほとんどわかっていません。私たちは麦類が示す多様な穂の形に着目して、責任遺伝子の単離と機能解明を進めています。また、遠縁交雑を抑制する遺伝子を明らかにすることで、パンコムギに多様な自然環境に生育する野生植物のゲノム（遺伝子群）を効率的に追加する技術の開発を目指しています。バラエティに富んだ多品種開発の基盤技術確立し、画一的な少数品種による大量生産からの脱却、不測の事態に備えた持続的な食糧資源を開拓します。



作物の多様なかたちを制御する遺伝子を解明する



遠縁交雑を制御する遺伝子を明らかにする

【担当】

佐久間 俊（農学部生命環境農学科）

農芸化学コース

持続性社会を支える農芸化学～高い志と高度な技術を持つ人材育成～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育、研究



【農芸化学コース】

動物・植物・微生物等の多様な生命現象や食品に関わる化学と生物学の理論・知識の習得と、新たな発見や問題解決に向けた思考力と実践力の養成を通して、生物資源や食品、環境などについての高度な知識と技術を有し、広い視野に立つ人材を育成します。

農芸化学とは、「**生命**」「**食**」「**環境**」をキーワードに、**動物・植物・微生物の生命現象、生物が作る物質、食品と健康**などを、主に**化学的な考え方**にもとづいて、**基礎から応用**まで広く研究する学問分野です。

【担当】 生命環境農学科 農芸化学コース

分子から生命のしくみを
化学的・生物学的に探究する

知識



講義を受けて

連携

技術

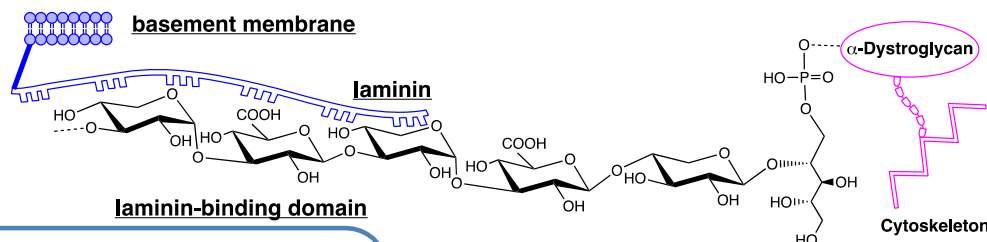


実験で検証

糖鎖医薬品開発の基盤研究

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



【活動概要】

糖鎖は生体機能を制御する分子としてたいへん重要ですが、これまではその実証に構造的に不均一な天然糖鎖が用いられており、微細構造の関与する生体機構の解明に明確な答が得られていませんでした。一方、化学合成した糖鎖は構造的に正確かつ均一で、必要に応じて量産できる長所があります。適切な用途のため、あるいは機能向上を目的にしたり作用機作を明らかにするため、構造の一部を改変した糖鎖を合成することも可能です。

私たちの研究室では、合成的に困難な多くの硫酸化糖鎖を中心に、その効率的な合成に成功し、生化学的機能解明のプロープとして糖鎖機能を解明しました。糖鎖医薬品の開発に繋がる結果です。

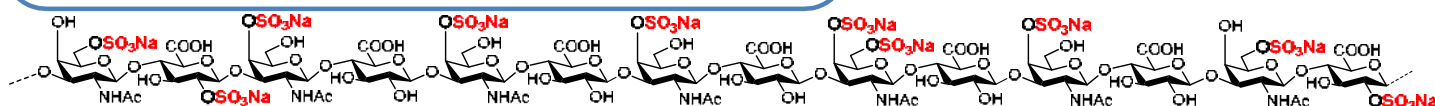
筋肉組織を構築しているのは「糖鎖」



化学合成
(再構築)
による
機能解明

糖鎖医薬品

細胞表面で情報伝達しているのも「糖鎖」



【担当】 田村 純一（生命環境農学科）

線虫を用いたビタミン欠乏の高感度バイオマーカー 及びビタミンの新規機能の探索

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

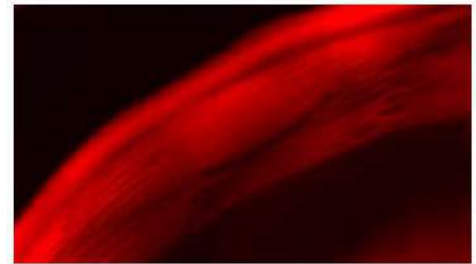
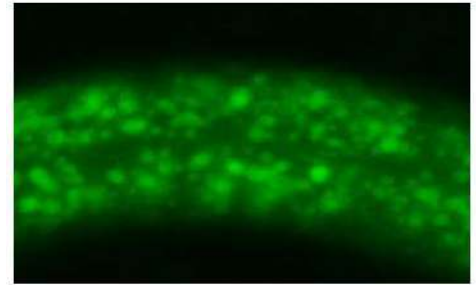
研究



【活動概要】

飽食の時代にある我が国では典型的なビタミン欠乏症はほとんど見られなくなりましたが、生活習慣の多様化や高齢者の増加に伴い潜在的欠乏（ビタミン不足）が増えています。我が国は超高齢社会に突入し、健康寿命の延伸や高齢者のQOLの向上が求められています。生活習慣に加え、ビタミンの潜在的欠乏が多様な疾病を誘発することが確認されており、ビタミン欠乏（あるいは不足）を高感度に検出する指標が求められます。

線虫（*Caenorhabditis elegans*）は優れたモデル生物であり、最近では栄養素の機能解析にも用いられるようになりました。私たちは、線虫を用いてビタミンの新規機能の探索、ビタミン不足が誘発する様々な疾病の発症機構の解明、ビタミン不足を評価する高感度バイオマーカーの作成などに取り組んでいます。線虫での研究成果は、培養細胞やラットなどの実験動物へ展開し、ヒトの疾病予防や健康増進への応用を目指しています。



高齢者に不足しがちなビタミンを線虫から欠乏させると脂質の異常蓄積(上の写真)や筋繊維の破綻(下の写真)が観察される。

【担当】 藪田 行哲、美藤 友博（生命環境農学科）

むし歯予防に関わる物質の探索

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



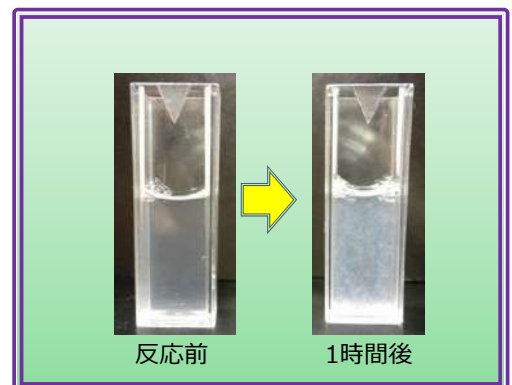
【活動概要】

むし歯は歯を失う大きな要因の一つです。むし歯の発生は *Streptococcus mutans* が作り出すグルカンと呼ばれるネバネバとした物質中に様々な菌が住みつき、酸を産生し、歯を溶かすことで発生するため、*S. mutans* がむし歯の原因菌と考えられています。

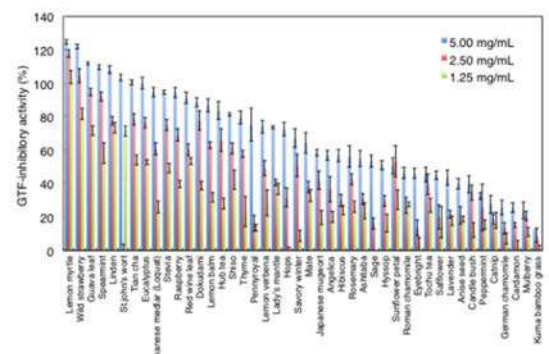
そのため、*S. mutans* のグルカン生成、酸生成、生育などを阻害することが、むし歯の予防に繋がるのではないかと考えられています。

フッ素がむし歯予防に有用ですが、フッ素のみでは予防に不十分と考えられています。また、フッ素の過剰摂取は健康を損なうため、より安全な物質が求められています。

そこで、私たちはこれらの阻害に関わる物質を食品より探索しています。



Streptococcus mutans が作り出すグルカン



様々なハーブティー抽出物に含まれる
グルカン合成酵素の阻害活性 95

【担当】 藪田 行哲（生命環境農学科）

規格外食品ならびに食品廃棄部からの機能性成分の探索

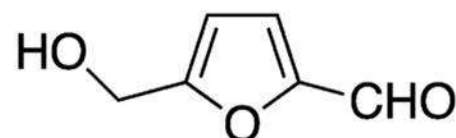
農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育、研究、社会貢献



【活動概要】

傷やアザの付いた規格外農産物は、安価で取引・廃棄処分され、昨今のフードロス問題の1例です。規格外農産物からヒトの健康維持に役立つ機能性成分を見出すことは、その農産物の付加価値を向上させることにつながります。これまでに規格外の二十世紀梨から作成した加熱ジュースと搾汁残渣から、天然由来の美白作用を示す化合物と血糖値上昇抑制作用を示す水溶性食物繊維を見出しました。現在一般的に廃棄されるリンゴや梨の果芯部に焦点を当て、美白作用を示す機能性成分を探索しています。また、日本で漁獲される魚の皮（魚皮）や未利用の深海魚から魚皮コラーゲンを精製し、そのコラーゲンを酵素処理して生成される血圧上昇抑制作用を有する機能性ペプチドの探索を進めています。



規格外の二十世紀梨の加熱ジュースから見出した美白作用成分



美白作用成分

食べられそうで廃棄されるナシの果芯部



底引き漁で捕れる未利用魚

血圧上昇抑制作用成分



食べられそうで廃棄される魚皮

【担当】 美藤 友博（生命環境農学科）

食用きのこ×廃棄食材→有用物質の産生、機能性食材の開発

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育、研究、社会貢献

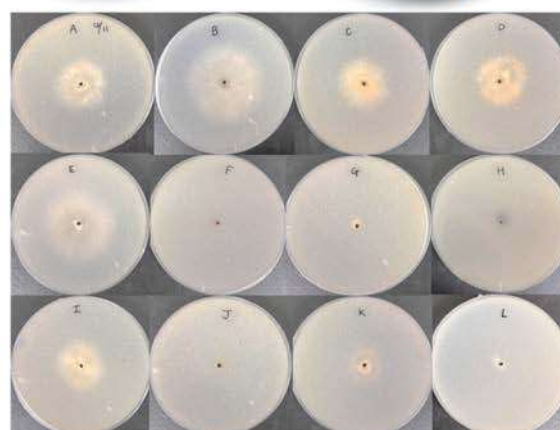


【活動概要】

近年、食品産業から排出される廃棄食材の有効利用と、持続可能な機能性食材の開発が強く求められている。本研究では、食用きのこが有する多様な分解能（主に糖質分解酵素やプロテアーゼ）に着目し、産業利用が難しいとされてきた「おから（大豆粕）」等の食品副産物を原料に、きのこ類の発酵的活用による新規有用物質（たとえば機能性多糖類、低分子ペプチド等）の生成を検討している。

また、食用きのこの分解能を利用することで、消化しやすい食品（高齢者向け食品）やアレルギー低減化食品への応用も視野に入れ、研究を進めている。今後は、きのこ発酵技術による廃棄食材の高付加価値化および多様な機能性食材の開発により、食品ロス削減と健康増進の両立を目指す。

食用きのこ



おから培地によるスクリーニングの様子

- ・食品副産物の有効活用法の開発
- ・高次機能性食品の開発

【担当】 美藤 友博（生命環境農学科）

リンドウ科植物由来成分を利用した菌根菌の感染促進技術

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

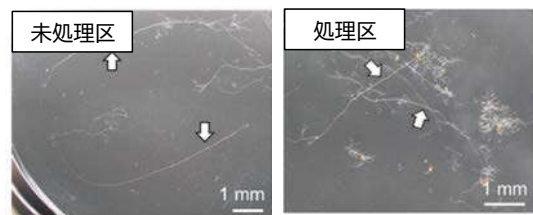
研究



【活動概要】

近年、持続可能な食糧生産の実現に向けて、微生物を用いた農業への関心が高まっています。菌根菌と共生することで、植物ではリン酸の少ない土壌での生育改善や様々なストレスに対する耐性の向上効果が認められています。そのため、菌根菌の農業利用には国内外で大きな期待が寄せられています。

我々はリンドウ科植物に特異的な成分に菌根菌の菌糸分岐促進能が備わっていて、その処理により菌根菌の感染能が高まることを発見しました。また、リンドウ科植物の抽出液を用いることで低コスト化を実現し、菌根菌の感染を促進する世界初のバイオスティミュラント資材「マイコエナジー」として商品化しました。現在は、未利用資源であるリンドウ科植物の栽培残渣を資材原料として活用する取り組みも実施しています。



リンドウ科植物由来成分による
菌根菌の菌糸分岐促進能



バイオスティミュラント資材「マイコエナジー」

【担当】 上中 弘典（生命環境農学科）

2つの農場と4つの教育研究林を活用したフィールド教育の実践

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育



【活動概要】

農学部附属フィールドサイエンスセンターは、2つの農場（湖山、大塚）と特色ある4つの教育研究林（蒜山、伯耆、三朝、湖山）を保有し、これらを活用して、フィールド教育を推進しています。

農場では、学びのキャンパスに隣接しているという地の利を生かし、学生が実習を通して多くの作物に携わることで、農業生産の基本技術と高度な栽培技術を身につけることができます。

また、教育研究林では、蒜山の森を中心に、座学で得た森林の生態・保全に関する知識を現場で生かし、体得する森林実習を実施しています。蒜山には、最大60名宿泊できる施設があり、実習で利用する他に、研修や他機関の研究者でも利用することができます。

地域貢献では、地域のこども達を対象としたあぐりスクールや森林教室などを実施しています。



環境に優しい田植方法を学ぶ



農作業軽労化のための機械開発



効率的な施肥条件を探る



高品質農産物生産技術を習得



森林資源の活用を学ぶ



原木しいたけ栽培の実践

【担当】 農学部附属フィールドサイエンスセンター

農業基礎演習Ⅰ～Ⅲ 農業演習Ⅰ～Ⅳ

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

教育



【活動概要】

「農業基礎演習Ⅰ～Ⅲ（2年次）」

学びのキャンパスに隣接した農場を活用して、様々な作物を見て、触れて、食べて、作物の声を感ずること、農業の本質を理解し、作物の生育にあわせた基本的な栽培技術を修得します。この体験を通じて、食料の安定確保と持続可能な農業の重要性を学びます。

「農業演習Ⅰ～Ⅳ（3年次）」

農業基礎演習Ⅰ～Ⅲの学習を土台として、この演習では、作物班、果樹班、野菜班、花卉班に分かれて、それぞれの作目について栽培から商品化、流通にいたる過程を体系的に実習し、食料生産に関わるより専門的な知識・技能を修得します。この体験を通じて、持続可能な農業を推進する能力が身に付きます。



田植え



イネ刈り



ナン摘果



ブドウ整穂



ダイコン収穫



シロネギ収穫

【担当】 野波 和好、木戸 一孝、近藤 謙介、
辻 渉、竹村 圭弘（兼任）
（農学部附属フィールドサイエンスセンター）

菌類きのこ遺伝資源の基礎研究 ～菌株収集・分類・保存技術の開発～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



【活動概要】

自然生態系の維持、植物の成長促進やストレス耐性の付与、環境汚染物質の浄化など多様な機能を持つ「菌類きのこ」に関して、その多様性、遺伝資源の評価・保存に関する研究に取り組んでいます。

- ・ きのこを中心とした菌類遺伝資源の収集と培養菌体（菌株）を得る方法の確立
- ・ きのこ菌株の安定的保存技術の確立
- ・ 遺伝資源の生理的諸性質の解明、培養特性の調査、遺伝子情報の集積化
- ・ DNA塩基配列による遺伝子情報、顕微鏡観察による形態情報を組み合わせた分類同定システムの確立
- ・ 教育や産業分野での活用に向けた菌株の分譲

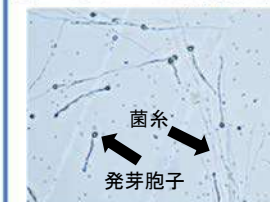
上記研究を通じて、特色のある体系的教育による優秀な人材の育成、並びに産業の活性化や新産業の創出を目指しています。



樹上のサルノコシカケ類の採集



組織分離の様子



菌糸
発芽胞子
胞子と菌糸



菌株を保存する
液体窒素タンク



培養菌体



菌株を保存する凍結チューブ

【担当】 早乙女 梢・尾崎 佑磨
（農学部附属菌類きのこ遺伝資源研究センター）



菌株のオンラインカタログ

菌類きのこ遺伝資源の収集と活用 ～きのこ資源を活用して健康で安全な社会をつくる～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



【活動概要】

自然生態系の維持、植物の成長促進やストレス耐性の付与、環境汚染物質の浄化など多様な機能を持つ「菌類きのこ」に関して、栽培技術の開発、機能性分子の探索、機能発現の仕組みの解明を行うこと、そしてこれらを基盤とした応用研究に取り組んでいます。

- ・ 有用きのこ実体の人工栽培技術開発
- ・ 高い栄養価や機能性成分を多く含む菌種・菌株の選抜
- ・ 医薬開発につながるリード物質の探索
- ・ きのこを利用した農産物の生産方法の開発
- ・ 安全な生物農薬としての利用技術の開発

これらの研究を通じて、特色のある体系的教育による優秀な人材の育成、並びに産業の活性化や新産業の創出を目指しています。

【担当】 霜村 典宏、會見 忠則、石原 亨、一柳 剛、大崎 久美子
(生命環境農学科、農学部附属菌類きのこ遺伝資源研究センター)
高橋 賢次
(共同獣医学科、農学部附属菌類きのこ遺伝資源研究センター)



食用動物における抗菌薬耐性細菌の保有実態 ～有用な抗菌薬を将来にわたって使用するために～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



【活動概要】

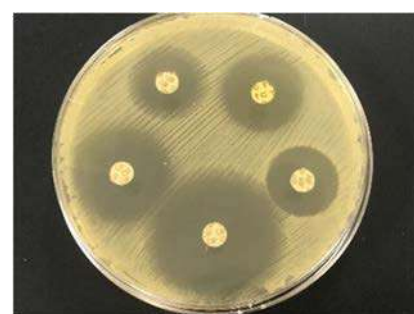
細菌感染症の治療に抗菌薬が必要な場合がありますが、抗菌薬に耐性を示す（抗菌薬が効かない）細菌に感染すると、治療が困難になります。治療などで使われる抗菌薬に耐性を示す菌は、抗菌薬を適切に使用しないと選択され広がってしまいます。

食用動物（家畜・家禽）に使われる抗菌薬は人の医療で使われるものと同じものがあるので、食用動物が腸管内などに保有する抗菌薬耐性菌は人の健康を脅かす可能性があります。したがって、耐性菌をモニタリングすることが重要であり、次のような研究に取り組んできました。

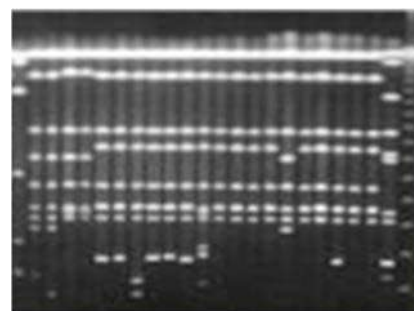
- ・ 肉用鶏における抗菌薬使用と耐性菌検出との関係
- ・ 個体間と動物舎間における耐性菌の伝播
- ・ 抗菌薬耐性に関わる遺伝子（耐性遺伝子）の細菌間の伝播

得られた成果は、持続可能な畜産生産のため、どの抗菌薬をどのように使用するか等の指針策定に貢献することが期待されます。

【担当】 村瀬 敏之、尾崎 弘一（共同獣医学科獣医微生物学）



薬剤感受性試験
(抗菌薬耐性の程度を調べる試験)



抗菌薬耐性菌のDNA解析

教育



【活動概要】

「動物衛生学」健康な動物を健康に飼育すること、家畜においては動物にストレスを与えず生産性を最大限に高め食糧生産に結びつけるにはどのような飼養環境が必要か、家畜から排出される糞尿を含む様々な畜産廃棄物を適正に処理し、污水浄化等により清浄な環境を保ちながら持続的に畜産を行っていくために必要な知識と技術について講述しています。また、家畜の生産性に深刻な影響を与える感染症を未然に防ぐための技術や法規、早期発見のためのシステム及び発生時にすみやかに疾病を封じ込めるための防疫に求められる知識と技術、さらには食糧として安全な畜産物を生産するために必要な農場段階でのHACCPについて講述しています。

「動物衛生学実習」家畜にストレスを与えず生産性を最大限に高めるために必要な、暑熱管理や換気などによる飼養環境の整備や家畜伝染病の発生予防及び発生時の防疫対応に求められる疾病制御に関わる知識と技術を実践的な実習を通し教授しています。

「家禽疾病学」ニワトリ、うずら、アヒルなど、家禽の生産に深刻な影響を与える非感染症や感染症など多様な疾病について、その原因、診断、治療及び予防法を講述し、これら疾病の発生を未然に防ぐとともに発生時には食糧生産に与える影響を最小限にするために必要な知識や技術、法規について講述しています。

【担当】 山口 剛士（共同獣医学科獣医衛生学）、村瀬 敏之（共同獣医学科獣医微生物学）
笛吹 達史（共同獣医学科獣医衛生学）

放射線生物学 毒性学 毒性学実習 獣医倫理・動物福祉学

教育



【活動概要】

「放射線生物学」放射線は農業、工業、医療分野において生活に欠かせない存在ですが、一旦原発事故などが起こると被ばくや修復が困難な環境汚染を引き起こします。本講義では放射線を安全に取扱うための知識を習得し、放射線を「正しく恐れる」意味が理解できることを目標とします。

「毒性学」化学物質はその特性により地球規模の汚染につながることから、環境毒性は地域のみならず「地球規模で環境」についても考慮する必要があります。環境中に放出された化学物質の環境や生態系に対する動態や特性、それらが惹起するヒトや野生動物を含む生物への毒性について概説します。

「毒性学実習」農薬は食糧生産の向上には欠かせませんが、過度な使用は環境を汚染しうるため、本実習では農薬の毒性を解析し、農薬の環境への影響及び利用する責任について持続的に考える力を養っています。

「獣医倫理・動物福祉学」伴侶動物、産業動物、野生動物、使役動物、展示動物などあらゆる動物を対象とする動物の倫理と福祉は、ヒトへの健康と福祉、動物の生活環境を介した海と陸の豊かさを守ることに影響を及ぼします。本講義では、動物生命倫理学の基本原則と世界規模での概念の多様性を講述した上で、動物医療、動物介在療法、動物愛護、動物福祉とヒトへの福祉への貢献、動物を介した環境保全、社会奉任などについて概説します。

【担当】 高橋 賢次（共同獣医学科獣医薬理学）
柄 武志（共同獣医学科獣医画像診断学）

抗菌薬に代わる病原体制御法の探索 ～病気を起こさず微生物と共存する～

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

研究



バクテリオファージによるプラーク
(病原菌を溶かして穴のように見える)

バクテリオファージから取り出した
遺伝子産物による
細菌の破壊
(中・右：細菌が
破壊され、透明な
溶液になっている)



【活動概要】

細菌感染症の主な治療法に抗菌薬を使った化学療法があります。大変有用な薬ですが、使い方を間違えると薬剤耐性菌の出現を招きます。近年、抗菌薬が効かない「多剤耐性菌」が世界的な問題となっています。この問題を解決するために、抗菌薬の開発以前に研究されていた「バクテリオファージ（細菌に特異的に感染し、破壊するウイルス）」の活躍が再注目されています。現在、抗菌薬のように幅広く細菌を制御して病気を治療する考えを、バクテリオファージを使って病気を起こす細菌だけを減らして病気を防ぐような方法に転換できないか、という方法を探索しています。

- ・ 家禽農場に存在する病原菌はその農場に存在するバクテリオファージで制御できるか？
- ・ バクテリオファージが持つ有用な遺伝子資源を活用して細菌を制御する方法ができないか？

抗菌薬の不利な面を別の微生物の力を借りて克服することを目指しています。

【担当】 尾崎 弘一（共同獣医学科獣医微生物学）

高度獣医療の実施

農学部
大学院連合農学研究科
大学院共同獣医学研究科

社会貢献

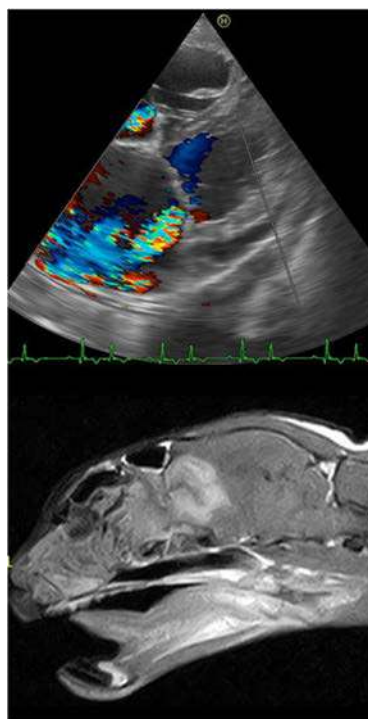


【活動概要】

近年、動物は単なるペットとしてではなく、コンパニオンアニマル（家族の一員）という位置づけになってきており、人と同様の高度な獣医療が求められています。

農学部附属動物医療センターでは、優れた獣医師の養成教育、社会で活躍する獣医師の卒後教育、中・四国地域を拠点とした地域社会への高度医療サービスの提供、難病の診断・治療の開発を実施しています。

MRI装置、マルチスライス16chのCT装置、放射線治療装置を導入し、これまで以上に精度の高い診断と治療を行うとともに、開業動物病院への情報提供に努めています。



【担当】 農学部附属動物医療センター(センター長：原田 和記)

教育



【活動概要】

獣医学共用試験に合格した学生（Student Doctor）を対象として、実際の診療技能と臨床的知識を身につけることを目的とした実習です。

飼い主とのコミュニケーション、インフォームドコンセント及び医療の安全性確保などの重要性を十分に理解し、模擬症例を用いた確実な診断及び治療を習得した上で、教員の同伴もしくは指導の下において、臨床例に対する診療行為を実施します。実習は、農学部附属動物医療センター及び学外（NOSAI鳥取、公益財団法人 鳥取県畜産振興協会 鳥取放牧場）において実施し、産業動物関連施設では防疫対策の実習も行います。



【担当】 農学部附属動物医療センター（センター長：原田 和記）

大学院連合農学研究科

－3大学が連合した教育研究体制による研究者・技術者の養成－

教育



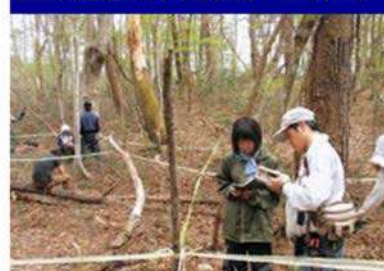
【活動概要】

連合農学研究科では、一大学のみでは成し得ない広範かつ専門性の高い教育研究分野を組織し、水準の高い農学系博士課程の教育研究体制を作り、農学及びその関連分野に関しての課題探求能力と豊かな学識、高度な技術を備え、国際社会に貢献できる研究者、技術者の育成を目指しています。

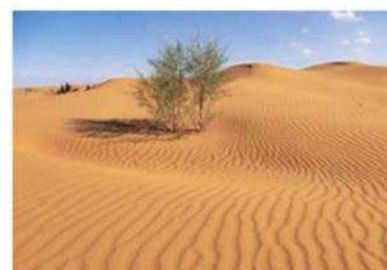
生産環境科学、生命資源科学及び国際乾燥地科学に関する研究を推進させ、我が国の学術研究の進歩と生物関連諸産業の発展に寄与することを目指しています。

産業界からの社会人学生の受け入れ、開発途上国からの外国人留学生の受け入れに対して積極的に取り組んでいます。

生産環境科学専攻：
農林業生産に関わる教育・研究領域



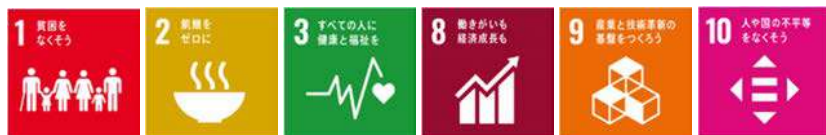
生命資源科学専攻：生物資源の発掘・
利活用に関わる教育・研究領域



国際乾燥地科学専攻：
乾燥地科学に関わる教育・研究領域

【担当】 大学院連合農学研究科

研究

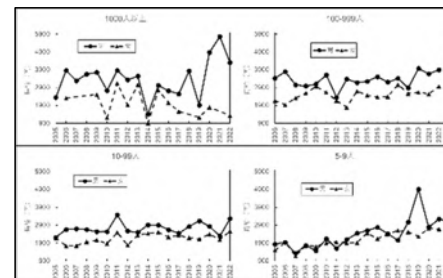
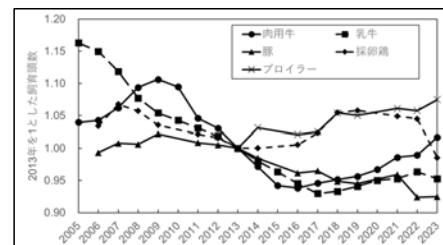
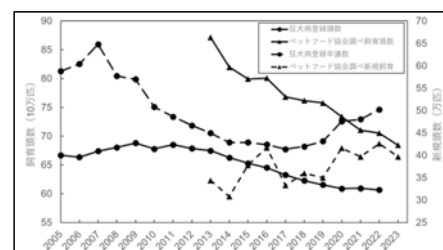


【活動概要】

獣医師は、小動物獣医師や産業動物獣医師、公衆衛生を司る公務員獣医師など多岐にわたる分野で活躍しています。近年の世界情勢や経済状況の変化は、獣医師の働き方に大きな影響を与えています。また、獣医師の男女比率を見ると、他の職種と比べて女性が多く、女性獣医師の待遇改善が必要とされています。特に、獣医師が不足している地方では重要な課題となっています。本研究では、獣医師を取り巻く経済状況の変化や獣医師の経済的待遇、福利厚生の変化について情報収集し、分析します。そして、将来的に持続可能な獣医業の在り方を提案することを目指しています。

近年のトピック

- ・犬の飼育頭数は減少傾向にあるものの、新規飼育頭数は増加傾向にあります。
- ・産業動物の頭数は全体的に減少していますが、肉用牛など一部の動物種では増加しています。
- ・女性獣医師の経済的待遇は他業種同様、依然として低い状況が続いています。



【担当】 山下 真路（共同獣医学科獣医神経病腫瘍学）

犬の飼育頭数、産業動物頭数、獣医師の賃金待遇の推移を示している。

大学院持続性社会 創生科学研究科



教育



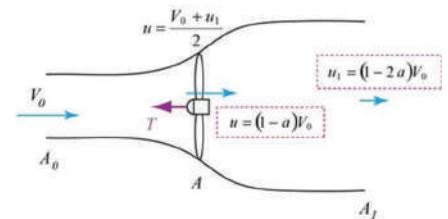
【活動概要】

「再生可能エネルギー特論」は持続性社会創生科学研究科の共通科目であり、専門以外の学生にも、再生可能エネルギーの代表格である風力発電に関する基本的知識と、専門的知識への導入的内容を授けることを目的としています。

本講義では、最初に「エネルギー」について基礎から概観し、日本のエネルギー状況を考えます。そして、「風車と風力発電の歴史」、および「風力発電の現状と将来」を講述します。その後、「風の性質」と「風力エネルギー」、「風速の度数分布とその利用」、「風車の基礎：回転原理」などの基礎知識を説明した後、やや専門的になりますが、「翼に働く空気力」、「翼面の境界層」、「翼型と3次元効果」、「運動量理論（BEM）」、「最適設計とBEMの限界」、「発電機の仕組みと風車の制御」、「垂直軸風車のBEM」などを講述し、最後に「風車研究の紹介」を行っています。



メキシコで揚水ポンプの駆動に使用されている多翼型風車



風車特性の予測に用いられる基本的な一次元運動量理論の模式図

【担当】原 豊（工学部機械物理系学科、持続性社会創生科学研究科工学専攻）

固体・液体・気体のナノ薄膜を利用した省エネ

研究、社会貢献

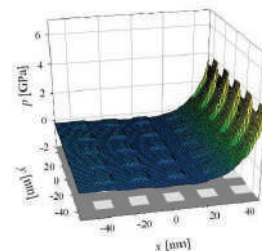


【活動概要】

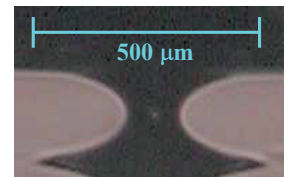
機械には動く部分があり、そこには必ず摩擦が生じます。

また、近年では機械の精密化・高精度化が急速に進むと共に、目に見えるか見えないか位の微小な部品からできた小さな機械も生活の中で随所に使われています。機械を精密に動かしたり小さな機械部品を間違いなく動かすためには、表面と表面が互いに作用しあって生じる摩擦を原子・分子のレベル（ナノメートルあるいは大きくてもマイクロメートルの領域）から理解し制御する必要があります。

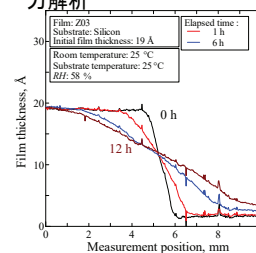
ナノ／マイクロメートルの超微小領域では、一般的に我々が経験するセンチやメートルの大きさでの現象とは違う現象が重要となってきます。例えば、空気はナノメートルの空間では粒々に見えます。こうした超微小領域で顕著となる“表面間相互作用”，“分子液体効果”，あるいは“分子気体効果”による力学作用を、連続体力学，統計力学等に基づいて究明し、理論解析・計算機シミュレーションあるいは実験的手法を駆使することにより、超微小領域での機械の特性解析を行います。それにより低摩擦化、引いては省エネの実現を目指します。



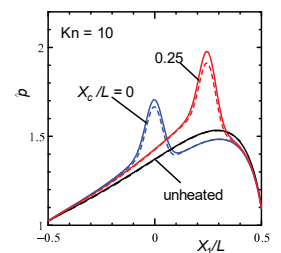
ナノメートルすき間に生じる分子間力による圧力解析



微小液体メニスカス架橋の実験観察



液体ナノ段差形状の時間変化の測定結果



局所加熱マイクロ潤滑流路内の空気膜圧力分布

	ダイヤモンド	DLC	グラファイト
構造			
結晶質	結晶質	非晶質	結晶質
元素	C	C, H, etc.	105 C

炭素ナノ薄膜の内部構造とその多様性

【担当】松岡広成・土井俊行・石川 功
（工学部機械物理系学科、持続性社会創生科学研究科工学専攻、工学研究科工学専攻）

教育



【活動概要】

「エネルギー化学特論」は持続性社会創生科学研究科の共通科目であり、超領域科目として特に環境を意識した視点から、エネルギーの創造や有効利用に関する知識を身につけます。

エネルギーの有効利用に関わる化学や材料の技術、二酸化炭素排出など、エネルギーの使用が地球環境に及ぼす影響を学び、人類の持続的発展のために重要な方法を考える材料とすることを目指しています。

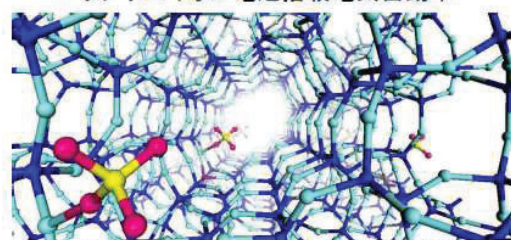
具体的には、エネルギーの有効利用に関わる化学や材料の技術を説明し、自分の研究課題に活用できるように、「エネルギー」、「二次電池」、「太陽電池」、「水素」、「自然エネルギー」、「バイオマス」、「重質油」、「メタン」、「蛍光体」、「発光ダイオード」について講述します。

【担当】片田直伸・増井敏行・薄井洋行

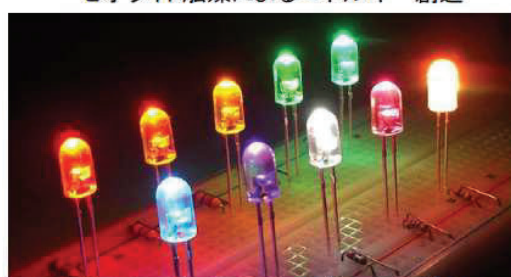
(工学部化学バイオ系学科・持続性社会創生科学研究科工学専攻)



リチウムイオン電池搭載電気自動車



ゼオライト触媒によるエネルギー創造



発光ダイオードによるエネルギーの有効利用

附属学校



附属幼稚園 捨ててしまう前に遊んでみよう 「あるあるコーナー」の取組

附属幼稚園

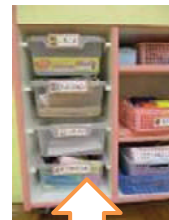
教育



空き容器を親子
で持ってくる
回収の箱



みんなが使える
あるあるコーナー



色紙、画用紙
まだつかえるよ

【活動概要】

附属幼稚園では、家庭と協力して、空き容器を回収しています。子どもたちが食べたお菓子の箱やペットボトルなどの空き容器を登園時に親子で持ってきて、回収の箱に入れます。子どもたちが使いやすいように、保育者がそれらの空き容器を「あるあるコーナー」に分類して置きます。この「あるあるコーナー」は保育室前の廊下に設置されていて、すぐに使うことができます。子どもたちは、発想豊かに、空き容器を使って様々な遊びを展開していきます。また、各保育室では、画用紙や色紙などまだ使用できる物は、子どもたちで判断して「まだつかえるよ」の箱の中に入れます。「もったいない」「すぐに捨ててしまわない」そんな気持ちを育んでいきます。

子どもたちの物作りや遊びは、家族を巻き込み、自然と資源の有効活用に取り組む姿につながっています。



お菓しの箱で
バッグを作ろう



ペットボトルに
色水を入れよう

いろいろな遊び
考えられるね



新聞紙のプール・ドレス



段ボールで車づくり

【担当】松川智子（附属幼稚園）

附属中学校生徒会 ～社会に貢献する附属中学校に向けての取り組み～

附属中学校

教育



【活動概要】

現生徒会執行部は、社会に貢献する取り組みを、委員会活動等を通して行いました。一部を紹介します。

○執行部・有志

「ボランティア活動『砂丘一斉清掃』」《11・15・17》

→鳥取砂丘レンジャーと連携し、執行部員が鳥取砂丘について学びました。そして、全校へ呼びかけて有志を募り、除草活動を通して地域資源の環境保全に貢献しました。



○マナー向上委員会（執行部・有志・委員会生徒）

「マナーアップ活動」《11・16》

→公共マナーを広める登下校改善活動を行っています。公共の場での自分たちの行動を振り返り、地域との共生を念頭に置いて、公共マナーの向上を図っています。

「あいさつ運動」《3・16》

→あいさつ運動を通して学校を元気にしたいという思いから、有志も募り、あいさつ運動を行っています。

○給食委員会

「完食ビンゴ」《2・3・12》

→クラスごとに、その日完食するメニューをきめ、学級ごとに完食を目指す取り組みを行いました。完食するメニューは、ビンゴの表に記入されていて、完食するとビンゴが完成します。



○福祉委員会

「朝掃除ボランティア」《3・11・12》

→掃除を通して、誰もが気持ちよく過ごせる環境作りを目指したり、誰かのために進んで活動できる気持ちを育むため、活動を行っています。

今後も、各委員会活動などを通して、SDGsの取り組みを計画していく予定です。

【担当】鳥取大学附属中学校生徒会

教育



作成したチラシ



話し合い



ランドセル寄付



ユニセフ出前授業
「箱の中の学校」



インド校長先生
訪問

【活動概要】

中学部では鳥取県ユニセフ協会に依頼をしてユニセフの活動についての学習を行っています。出前授業では主に、困難な状況に置かれている子どもたちのことや、ユニセフの支援活動について学習します。栄養が足りずに病気になったり、学校に行くことができなかったりする子どもたちが存在する世界の実情を知って、生徒たちは驚き、自分たちにできることがないかと考える生徒もいます。

講師の一人でインドの小学校への支援活動を行っておられる「イッポラボ合同会社」の田中さんに協力をいただき、1月にランドセル寄付の活動を行いました。2、3年生で分担してチラシやポスターを作成し、校内や附属中学校に協力を呼びかけると、短期間にもかかわらず60個のランドセルを集めることができました。寄付したランドセルは、早速一部が3月にインドへ渡っていきました。

令和7年4月には寄付先のインドの学校から校長先生が来校され、生徒たちは、実際にランドセルが渡っていった様子や、ランドセルを受け取って喜ぶインドの小学生の姿を動画や写真を通して知ることができました。「自分たちにできることを」と取り組んだ生徒たちがやりがいを感じた瞬間でした。

【担当】 山口 綾乃（附属特別支援学校）

国際乾燥地研究教育機構



社会貢献



【活動概要】

砂漠化の防止や乾燥地問題に対処するための国際的活動を行っています。

●国連砂漠化対処条約への支援

本条約は、1994年にパリのユネスコ本部で120カ国の出席のもとで採択されたもので、干ばつ又は砂漠化に直面する国や地域がその対処のために行動計画を作成及び実施すること、そのような取り組みを先進締約国が支援すること等について規定しています。鳥取大学は本条約を組織的に支援し、隔年開催される締約国会議に日本代表団の一員として参加しています。2024年12月に開催された第16回締約国会議（サウジアラビア）にも参加するとともに、JICA等の共催の下、サイドイベント「エビデンスに基づく持続可能な土地管理（SLM）のためのグローバル知識ハブの強化」及び「東アジア地域における風成砂漠化と砂塵嵐防止に向けたモンゴル・中国・日本の連携」を開催し、鳥取大学の取り組みを世界に発信しました。

●世界的国際会議の開催協力

乾燥地科学分野で最大の国際会議である「乾燥地開発国際会議」を関係機関と共催しています。また、本会議には乾燥地研究センターの教員がボードメンバー（理事）として参画しています。

●国際協力機構（JICA）との連携

JICAとの人事交流、JICA研修の実施協力などを行っています。



2024年12月の国連砂漠化対処条約第16回締約国会議（サウジアラビア）で開催されたサイドイベントで鳥取大学の取組を発信

【担当】国際乾燥地研究教育機構

黄砂発生の原因解明と黄砂数値モデルへの応用

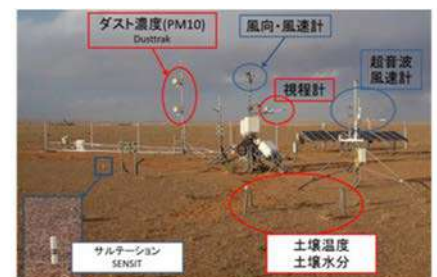
研究



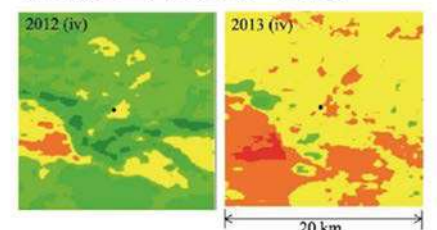
【活動概要】

日本では黄砂として知られるダスト粒子（土壌粒子）は乾燥地において強風（砂塵嵐）によって舞い上がり、細かい粒子は上空の風で長距離輸送されます。黄砂発生地では人や家畜の死亡・行方不明、建築物損壊などの気象災害的な被害をもたらします。日本のような発生域から離れた地域でも、アレルギー・呼吸器疾患の増悪等の健康被害が発生します。また、大気中に浮遊する黄砂粒子は放射過程・雲凝結過程を介して、気候に影響することが分かっています。砂塵嵐災害と健康被害の回避のため、また黄砂の気候への影響を評価するためには、黄砂数値モデルが必要ですが、現状では、世界のどのモデルも黄砂発生量の再現性が悪いことが分かっています。

黄砂発生モデルの精度を上げるため、ゴビ砂漠（モンゴル）における観測、気象台データ等を用いた地域による黄砂発生原因解明を行い、これらの結果の数値モデルへの応用を行っています。



ゴビ砂漠（モンゴル・ツォクトオボー）に設置した黄砂モニタリングステーション。



2012年(左)と2013年(右)夏のNDVI(正規化植生指数)。2012年は多雨の影響で窪地の植生量が多かった(Gantsetseg et al. 2017)。



枯れ草が多い年と少ない年の例

【担当】研究代表者：黒崎泰典（乾燥地研究センター）

研究



【活動概要】

陸域生態系における二酸化炭素（CO₂）の吸収と排出や、その環境因子（温度や土壌水分）への応答特性の把握は、温暖化を含む将来の気候変動を予測する上でも重要です。それらを明らかにするために、下記の研究に取り組んでいます。

1. モンゴルの草原生態系におけるCO₂の吸収と排出に対する温暖化や降雨イベントの影響評価

乾燥地における草原生態系の劣化は、砂漠化につながります。また、生態系におけるCO₂の吸収や排出は、その生態系の生産性に関する一つの指標となり得ます。そのため、モンゴルにおける草原生態系を対象として、CO₂の吸収と排出に対する温暖化や降雨イベントの影響評価に取り組んでいます。

2. 海岸砂丘におけるCO₂吸収と排出の時空間変動に関する研究

海岸砂丘は、CO₂の吸収と排出に関する知見が不足している生態系の一つです。そのため、海岸砂丘を対象として、海浜植物群落におけるCO₂の吸収と排出に関する観測研究を行っています。また、それらCO₂の吸収と排出に関する季節変化および温度や土壌水分の変化に対する応答特性を研究しています。



モンゴルの草原におけるCO₂の吸収と排出に関する観測の様子



海岸砂丘におけるCO₂の吸収と排出に関する観測の様子

【担当】研究代表者：寺本宗正（乾燥地研究センター）

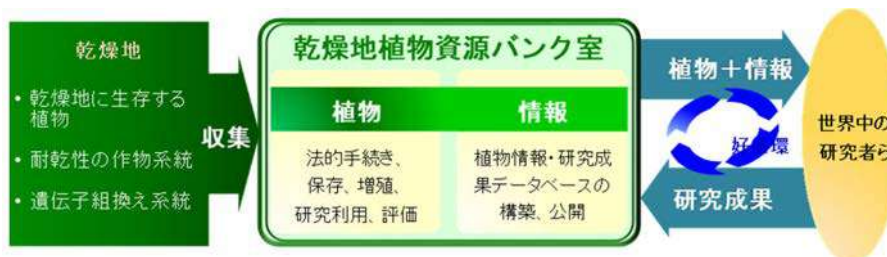
乾燥地植物資源バンク室(乾燥地研究センター)
植物資源と研究情報の提供

研究



【活動概要】

個々の研究者らが乾燥地由来の植物を国際条約に則って自生地から導入し、日本の気候で育て、研究利用するのは容易ではありません。このような状況を改善し、植物を用いた共同研究を推進するため、乾燥地に由来する植物を組織的に収集・保存・増殖・評価して、研究者らに提供しています。さらに、保有している植物に関する情報や研究成果を収集して、植物資源の研究利用価値を高めています。このほか、乾燥地植物に関する情報発信や教育も行っています。



コムギ系統の保存・増殖



ジャトロファ(バイオ燃料植物)の評価



乾燥地関連植物の保存・活用

【担当】室長：石井孝佳（乾燥地研究センター）

室員：留森寿士（乾燥地研究センター）

研究



【活動概要】

植物成長の数値モデルと天気予報を組み合わせ、純収入を最大化させる新しい灌漑水量決定法を提示しています。毎回の灌漑水量を最適化するため、次の灌漑までの蒸散量に比例する仮想収入の概念を導入しました。これまで砂丘圃場における6作のほか、ヨルダン、スーダン、チュニジア、モロッコで圃場実験を行い、水分モニタリングに基づく自動灌漑区と、新しい方法に基づく灌漑区とで純収入を比較することにより、後者の効果を検証しました。これまでのところ、多くの場合で提示された方法の方が自動灌漑区よりも高い純収入を与えることが示されています。

現在もインド中央土壌塩分研究所とウズベキスタンのアラル海流域イノベーションセンターと共同で方法をさらに改良する実験を実施しています。



モロッコの国際乾燥地農業研究センター
(ICARDA)圃場に設置された節水実験圃場



スーダンにて国連主催で行われた国際研修で
本手法について4日間の集中講義を実施

【担当】研究代表者：藤巻晴行（乾燥地研究センター）

アフリカ乾燥地における持続可能な農業に向けた気候リスク管理

研究



【活動概要】

干ばつリスクに曝されるアフリカ諸国では、作物収量の年次変動が大きく、将来の気候変動下では、更に大きくなると予測され、農家が干ばつに対処するために詳細な農業気象情報が求められています。世界では、スマートフォンの普及に伴い、各種のアプリケーションが開発され、農業分野においても、栽培管理や農業経営などのスマホアプリが提供されています。しかし、多くは気候、土壌、作物データなどの静的情報であり、乾燥地農業にとっては、十分な情報とは言えません。

アフリカの農業研究機関は、ステークホルダーミーティングを随時開催し、播種時期、品種選択、播種量、施肥量などの作付けに関する情報が必要であることを認識しています。こうした状況を背景に、作物生育状況や収量予測などの動的情報を含む農家支援スマホアプリの開発が急がれています。本研究は、気候予測を利用して、意思決定支援システムを開発することにより、サブサハラアフリカの農業干ばつリスク管理における科学技術の発展を目的とします。



水ストレスなし



水ストレスあり

トウモロコシ圃場

【担当】研究代表者：坪充（乾燥地研究センター）

研究

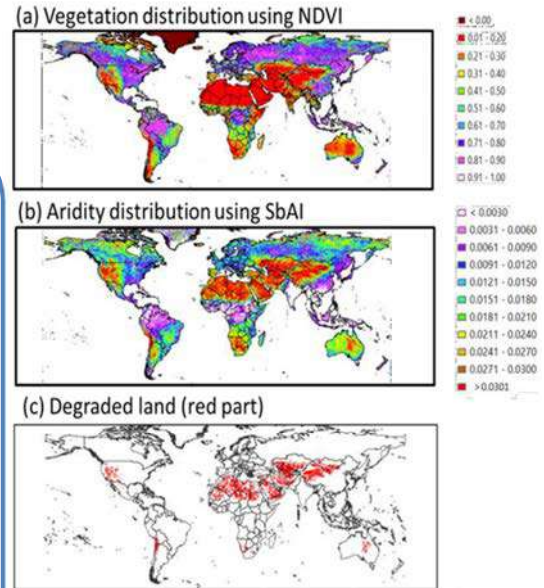


【活動概要】

IPCCのAR5（気候変動に関する政府間パネル第5次報告書）によると、近年の気候変動、特に地球温暖化は乾燥地における気温上昇や降水量の減少に影響を与えています。気候変動に伴う砂漠化を防ぐには現状の地表面の乾燥度を継続的に監視し、対策を立てる必要があります。

砂漠化は乾燥地における土地劣化と定義されていますが、おおざっぱには土地劣化は「飛砂またはダストの発生＝風食」という現象に集約されます。風食が植生や土壌水分の減少によって促進されることを鑑み、衛星から土地劣化の面積をモニタリングする方法を提示しました。

本研究で提示する最新の土地劣化情報を日本から発信することは、UNCCD（国連砂漠化対処条約）に批准している日本にとって、科学的視点からの国際援助という点で重要です。



2014年の(a)植生、(b)地表面乾燥度、(c)土地劣化の全球分布。飛砂やダストは、植生指標が0.2以下（赤色部分）、地表面乾燥度指標が0.003以上（赤色部分）の両方の閾値を満たすエリアで発生すると仮定し、土地劣化のエリアを抽出しています。特に、中国やモンゴルでの干ばつや湿潤傾向によく対応していることが検証によって確認されています。（引用）Kimura, R (2018).: Global distribution of degraded land area based on dust erodibility determined from satellite data. IJRS, 39, 5859-5871.

【担当】研究代表者：木村玲二（乾燥地研究センター）

砂漠化対処に向けた次世代型「持続可能な土地管理(SLM)フレームワーク」の開発～超学際的アプローチで砂漠化問題に挑む！

研究



【活動概要】

世界的にも土壌侵食が激しい地域のひとつである青ナイル川上流域（エチオピア）において導入されているトレンチやソイルバンドなどの土壌侵食対策の効果をフィールド実験により検証しています。

これまでの土壌侵食削減を主目的とする持続可能な土地管理（SLM）をさらに拡張し、土壌侵食の削減に加えて、土地生産力の向上や経済的・社会的エンパワメントを組み込んだ次世代型の持続可能な土地管理（SLM）の開発、検証と社会実装を目指しています。

本研究は、2017年度から2022年度にかけてJST-JICA SATREPSプロジェクトとしてエチオピアのバハルダール大学と共同で実施されました。その後、開発された持続可能な土地管理（SLM）技術・手法の普及拡大を目的として、JICA科学技術普及プログラムの一環として社会実装対象プロジェクトに選定されています。

SATREPS (Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development: 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム) : JST (科学技術振興機構) と JICA (国際協力機構)、AMED (医療研究開発機構) が共同で実施している、開発途上国の研究者が共同で行う研究プログラム

【担当】研究代表者：Nigussie Haregeweyn AYEHU（協創連携・DX部門）



管理前（上）および管理後（下）のガリー。管理は、植栽による植生回復区（エンクロージャー）を通じて実施された。地域住民はガリー管理活動に自主的に参加し、バイオマス生産の向上と地下水位の改善といった恩恵を共有した。

研究



【活動概要】

気候変動による温暖化や干ばつに、耐える作物を創る技術開発を行っています。

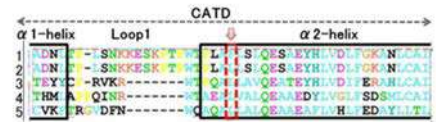
人類が主食として食べている作物は非常に限られています。現在ではコムギ、コメ、トウモロコシが主に栽培され食べられています。しかし、未利用作物を利用し、持続可能な農業を提案することは非常に重要になってきています。また、育種学的、細胞遺伝学的な革新的技術開発は人類の持続可能な発展に必要不可欠です。そこで、私達のグループでは以下の研究を行っています。

1. 遺伝的、細胞遺伝学的研究を利用した未利用作物遺伝資源の開拓。
2. 動原体関連タンパク質の改変による育種年限の短縮技術の開発。
3. 最新のゲノム編集技術CRISPR/Cas9を用いた新規細胞遺伝学技術の開発。
4. 遠縁交雑による遺伝資源の拡大。

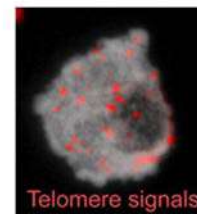
【担当】研究代表者：石井孝佳（乾燥地研究センター）



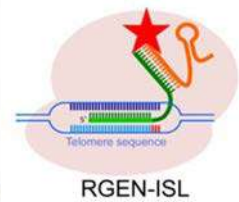
未利用作物である、ササゲ、テフ



環境に対応した植物の短期間での育成法の開発



Telomere signals



RGEN-ISL

ゲノム編集技術の応用による可視化技術の開発

乾燥地における生態系修復や持続的農業への
微生物利用に向けた研究

研究



【活動概要】

乾燥地における劣化土地の生態系修復、および持続的な農業に植物根の共生微生物を利用することを目指して、このために必要な微生物の生態情報の収集と有用微生物の探索を行っています。

研究対象地として、アメリカ、中国やモンゴル、そしてスーダンやエチオピアといったアフリカを対象に研究を行っています。

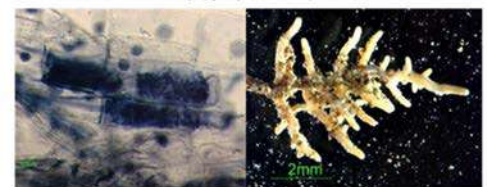
次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析に基づき、乾燥地で微生物が湿った時期と乾燥した時期をどのように過ごしているのか、そしてその植物への機能として、植物にどのように貢献しているのかなどについて調べています。有用微生物の探索方法の開発については、アメリカの乾燥地植物やソルガムを対象として、植物の成長や耐乾性向上を指標とした研究を行っています。また、劣化土地の生物的劣化の状況調査やこのような劣化土地への微生物利用の効果の検証なども行っています。

これらの研究は、これまでに終了したプロジェクトを含め、科学研究費補助金事業、限界地プロジェクト、エチオピアSATREPS等の一環として推進しています。

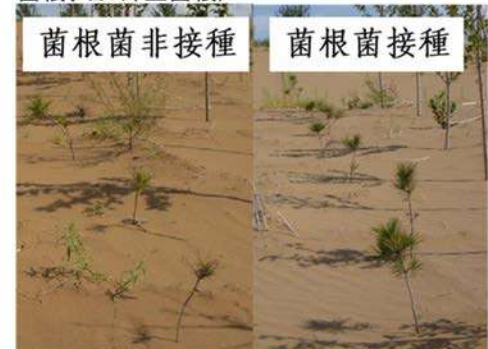
【担当】研究代表者：谷口武士（乾燥地研究センター）



微生物の生態情報を解析する
次世代シーケンサー



根に共生する菌根菌(左:アーバスキュラー菌根、右:外生菌根)



菌根菌非接種

菌根菌接種

中国のクブチ砂漠での菌根菌の接種実験
(菌根菌を摂取するとマツの成長が良くなる)

研究



【活動概要】

土壌の塩類集積は、世界の農業生産に大きな影響を及ぼしています。植物の耐塩性機構を解明することで、塩に強い植物の作出、塩類集積土壌に相応しい農耕技術の開発、塩分濃度の高い荒れた土地の農地利用などに繋がります。

これまで、ダイズ、メロン、トマト、コムギ、ハウレンソウなどの作物について、植物生理学の側面から、特に植物の地上部について研究を進めてきました。研究の結果を見ると、ほとんどの作物は、その耐塩性には根が重要な役割を果たしていることが分かりました。

現在、土壌中の塩分と直接コンタクトし、また、地上部への輸送の通路になっている根について調査しています。



世界の塩類集積土壌の分布



塩分が土壌表面に集積している様子



塩類集積土壌でのコムギ栽培

【担当】研究代表者：安萍（乾燥地研究センター）

ウズベキスタン・サマルカンド農村部における
ストレス耐性作物の社会実装に関する活動

教育、研究、社会貢献、課外活動



【活動概要】

ウズベキスタンSSU-鳥取学生チームは、ウズベキスタンにおける鳥取大学の協定校であるサマルカンド国立大学(SSU)と、交流及び研究活動を進めている鳥取大学の有志学生のグループです。本グループの学生は、中央アジアの厳しい塩害・乾燥地帯に位置するウズベキスタン共和国へ渡航し、ストレス耐性の雑穀類の現地栽培試験や、農村部の女性に対する生活状況の聞き取り調査、近郊の放牧地の荒廃に関する現地調査などを、サマルカンド国立大学の教員や学生、現地JICA事務所や現地自治体等の関係機関等と連携して進めています。また、ウズベキスタンから鳥取大への若手教員や学生の招聘において、滞在サポートや文化交流を行っています。2025年の春と秋には、サマルカンド郊外の農村においてストレス耐性作物の普及イベントに参加し、両国学生による調査発表等を行いました。本チームでは、JICA協力隊連携派遣による鳥取大学学生のサマルカンドでの長期滞在に向けた諸活動や、更なる交流のためのイベント企画も進めています。

農村部女性へのインタビュー



ストレス耐性作物普及イベント



荒廃が進む放牧地に関する活動



【担当】ウズベキスタンSSU-鳥大学生グループ

パートナーシップ

(統合ソリューション + チームスピリット + 効率的な成果提供 = インパクト + サステナビリティ)

国際連携
(日本の研究機関等)



国内連携
(スーダンの研究機関等)



官民
パートナーシップ



イノベーションプラットフォーム



より高品質な種子
→ より多い収穫量
→ よりたくさんの収入
→ 貧困の減少



質の高い教育
→ 未来のリーダー
→ 能力の強化 + 持続可能性



気候変動に強い品種
+ 気候分析・意思決定ツール
→ より良い適応力と回復力



より高品質な種子
→ より多くの収穫量
→ より良い食料安全保障



科学の統合 + イノベーションプラットフォーム + 強靱な種子
→ より良い影響力
+ 持続可能性

他のあらゆる成果と
マイルストーンの土台を築く



インパクトと
サステナビリティ

【担当】 イザット・タヒル 特命准教授、辻本 壽 特任教授、坪 充 教授、
ナスリン・カマル 特命准教授、石井 孝佳 准教授

教育支援・国際交流 推進機構



教育、大学運営



【活動概要】

全学的な教育方針を企画・立案するとともに、学部・研究科等と連携して教育プログラムの自主的な質保証及び質向上に関する取り組みを支援しています。具体的な活動は以下になります。

○ 教学マネジメントの実施・運営

シラバスの充実、学生との意見交換、授業実施状況に関する教員へのアンケートを通じて、学生主体の教育の充実に取り組んでいます。

○ 教育の内部質保証(自己点検・評価)の実施・運営

授業アンケート、教育力アンケートを実施・分析するとともに、教育プログラムの自己点検・評価を実施して改善に繋げ、その結果を外部に公開しています。

○ エンrollment・マネジメントの実施・運営

eポートフォリオ(右図)の構築・運営により学生の自己調整学習を支援し、初年次からのキャリア形成、卒業後のフォローアップについて取り組んでいます。

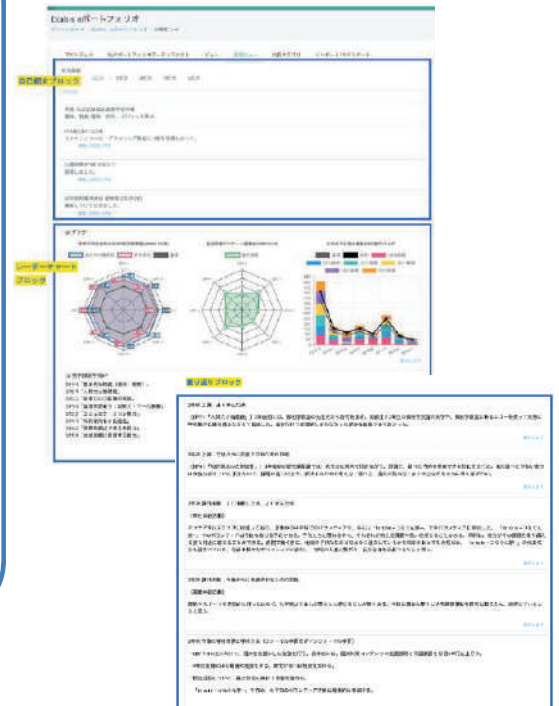
○ 学修成果の可視化

学修成果を多角的に分析・可視化し、結果を教育プログラムに提供して改善に活用します。

○ 全学的なFD・SDの企画・実施及び部局等との調整支援

全学教職員対象の講演会などFD・SDを企画・実施し、授業公開や学外講習などの情報提供を通じて、教育の質向上をおこなっています。

eポートフォリオ

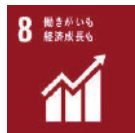


【担当】教育支援・国際交流推進機構 高等教育開発センター
連携: 学生部 教育支援課

教職を目指す!

「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

教育



【活動概要】

「自らを高めることができる」「国際的な視野を持つ」「授業がおもしろい」「創造的な授業ができる」「他職種と協働できる」、そうした教員を養成するためのプロジェクトです。

- 学びの教室：主に学校現場（幼・小・中・高・特支）で働いている教員を大学に招き、授業づくりやクラスづくり、キャリア形成を学びます。
- 学びの座談会：若手の先生と共に、ざっくばらんに学校の様子や教員採用試験のことまで話し合います。
- 遊びの教室：遊びを通しての学びを、遊びながら学びます。近年はプログラミング教育をテーマとしています。その他、ブッククラブの企画もあります。
- つなぐ教室：多様化する子どもたちや社会の課題への対応、学校内外での連携、グローバルな視野など、ひろく教育と社会に関する現代的課題を考えます。鳥取県教育委員会と連携し、中学生と語り合うトークプログラムも実施しています。

学びの教室



学びの教室



遊びの教室



つなぐ教室



【担当】教育支援・国際交流推進機構教員養成センター、
学生部教育支援課教職教育係

教育、社会貢献、大学運営



【活動概要】

学生支援センターでは「縁の下で力持ち」をモットーに、学生支援をおこなってきました。学生一人ひとりが孤立せず、安心して学べる環境を整え、個を大切に居場所づくりを目指しています。学生への個人対応と併せて、グループ活動を通して自他の違いを理解したり助け合いを行っていくことができるよう、様々な活動をおこなっています。

- **なんでも相談**：学生の学内でのワンストップ相談窓口です。
- **サポートマーク**：サポートマークを身に着けることで、「お手伝いしますよ」というサポートの意思表示をおこなっています。学生・教職員がマークの付いた様々なグッズを身に着けています。
- **アクセシビリティリーダー（AL）**：様々な場面でアクセシブルな社会づくりをリードしていける人材を育成することを目的に、教職員と学生を対象にALの養成をおこなっています。本学ではALⅠ級とⅡ級を取得できます。
- **学生サポーター**：学生サポーターの仕組みを作り、学生による学生のサポート活動をおこなっています。
- **コミュニケーションワークショップ**：他者との意思疎通を円滑にするため、日々の生活で使えるコミュニケーションスキルについて考えるワークショップです。
- **小グループ活動**：調理・運動等を通して、楽しみながら少人数でのコミュニケーションに慣れることを目的に活動しています。

【担当】教育支援・国際交流推進機構 学生支援センター

学生支援センター



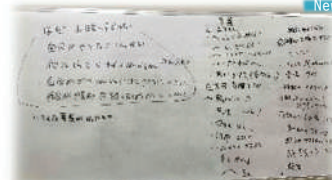
共通教育棟A棟の2階にあります。メールや電話でも、なんでも相談を受け付けています。

アクセシビリティリーダー



2023年度2級AL認定証授与式の様子。今後の活躍を期待しています！2024年度から1級も取得可能です。**New**

コミュニケーションワークショップ **New**



他の参加者の意見を聞いて学ぶことも多々あります。

サポートマーク



学内の投票で決定したマークです！ピンバッジ、キーホルダー、ステッカーなどがあります。

思いやりのある鳥取大学を目指します。関心のある人、着けてみたい人は学生支援センターまでどうぞ。

学生サポーター **New**



定例会で、居場所作りなどの企画を考えています。

小グループ活動



小グループ活動として焼きいもの会を催しました。協力して作業をおこなうことで、話が盛り上がりしました。

New 2024年度、新規導入活動！新しい取組にも積極的に挑戦しています。

タフで実践力のあるグローバル人材の育成を目的としたグローバルゲートウェイプログラムの開発

教育 大学運営



【活動概要】

鳥取大学では、タフで実践力のあるグローバル人材の育成を目指して、平成24年度から鳥取大学Global Gateway Program (GGP)を実施しています。学生はGGPを通じて、夏休みや春休みの期間に、海外で語学研修や異文化体験、海外の協定校等での研究活動など、様々なプログラムに参加できます（図1）。また、留学効果を高めるため、留学の前後も語学力やコミュニケーション力向上のために、国内で語学強化コースや英語イマージョンプログラムを実施しています（図2）。

海外プログラムでは、英語・異文化研修（台湾、マレーシア）及び海外実践教育プログラム（ウガンダ、メキシコ、マレーシア）を実施しており、ポストコロナにおいてはマレーシア、タイ、フィリピンで新しいプログラムの開発と、ハイブリッド型の事前研修など新しい取り組みをしています。本学では、「教育理念」である「知と実践の融合」の下、長年海外で実践的な教育研究活動を展開してきました。その成果をもとに、海外実践教育プログラムでは、学生の身体的及び精神的健康を強化及び育成するために、過酷な環境・異なる文化、極端な気候条件のある乾燥地域の発展途上国および新興国で実施されます。

さらに、自分のキャリアに特化することに興味がある学生は、交換留学等にも参加できます。こうした留学経験を経た学生は、卒業する頃にはグローバル社会を生きていくために必要な能力を備えた学生になることができます。また、鳥取大学では、海外において安全な勉学、生活、滞在ができるよう海外渡航を予定しているすべての学生に対し、海外安全教育の受講を義務付けています。

【担当】教育支援・国際交流推進機構 国際交流センター

教育支援・国際交流推進機構
国際交流センター



図1. 鳥取大学海外プログラム (Global Gateway Program)

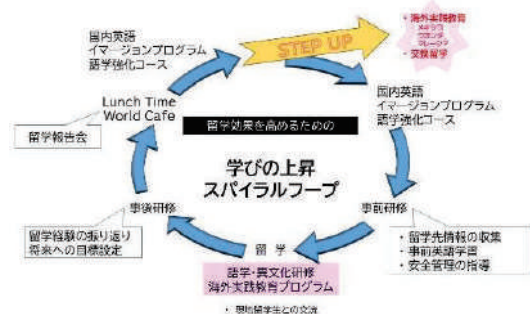


図2. 留学効果を高め、ステップアップするための国内及び海外プログラムのスパイラルフープ

教育 社会貢献 課外活動



【活動概要】

鳥取大学教育支援・国際交流推進機構国際交流センターでは、地域の自治会や小・中・高等学校等に、外国人留学生や国際交流団体の学生を派遣し、国際理解・異文化交流の機会を提供しています。

【活動例】

- 留学生による（日本語/英語での）自国紹介のプレゼンテーションやクイズ
- 留学生による母語でのあいさつや自己紹介のミニレッスン
- 留学生による自国での子どもの遊び紹介
- 児童・生徒や地域住民による伝統文化・生活文化紹介
- 児童・生徒による学習成果発表
- 児童・生徒による学校・地域の紹介・案内
- 留学生と地域住民による協働活動

【担当】 教育支援・国際交流推進機構 国際交流センター



小学校での国紹介
プレゼンテーション

高校生による英語での町案内



高校生の英語での発表に
コメント



地域の方との餅つき交流

染色体工学研究センター



未来を紡ぐ染色体工学：医療・環境・生命の調和 ー染色体工学技術を用いたネオ人工染色体の作製に向けた挑戦ー

染色体工学研究
センター

研究

<概要> 私たちは独自に開発した染色体工学技術を駆使して、ヒトあるいはマウス人工染色体を創り出し、創薬研究の加速化に貢献してきました。さらに、ブタなどの哺乳類人工染色体に加えて、種を超えた魚や昆虫などの人工染色体の開発は、医療分野だけではなく生態系に調和した新たなバイオ技術基盤を拓きます。これは、医療、環境、産業をつなぎ、『誰一人取り残さない』持続可能な世界を実現するために、私たちは人工染色体の可能性をさらに広げていきます。

「染色体工学」技術＝染色体を切る・繋ぐ・移す



最大の特徴：搭載サイズに制限がない（転座も可能）。

1Kb 10Kb 100Kb 1Mb 10Mb 100Mb
plasmid cosmid BAC YAC ヒト染色体 (40-250Mb)

セントロメア・テロメアを操作し、種の壁を超えて遺伝子・染色体を運ぶ技術の開発（ネオ人工染色体の作製）

新しい創薬・疾患モデル生物



移植

疾患・行動

再生

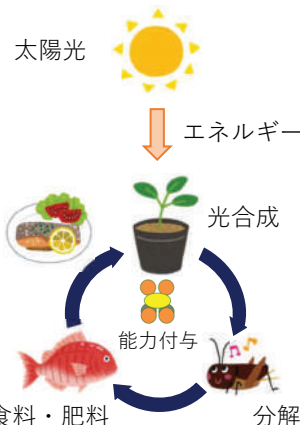
新奇薬物・有用代謝物の産生



植物の作る多様な代謝物

創薬への応用

エネルギー・資源循環



非食部も分解しムダなく循環

担当：染色体工学研究センター
大関淳一郎、大平崇人、香月加奈子、久郷裕之、香月康宏

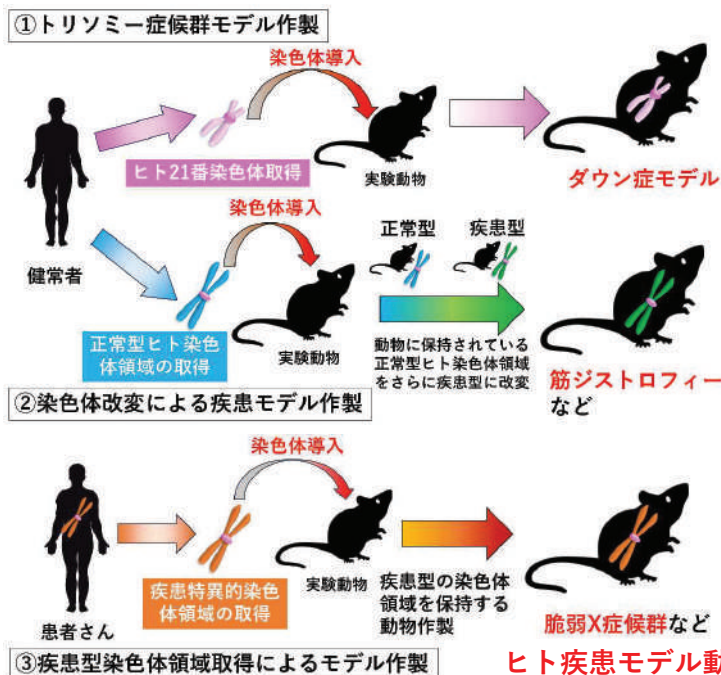
染色体工学で挑む難病解明と未来医療 ーダウン症から神経変性疾患まで：人工染色体が切り拓く創薬の道ー

染色体工学研究
センター

研究

ヒト疾患モデル動物作製による病態の解明及び創薬

<概要> 染色体工学技術を応用して、ダウン症や筋ジストロフィー、神経変性疾患（脆弱X症候群など）のモデル動物を作製し、病態の仕組みを解き明かします。さらに、病態の解明を通して創薬の開発を目指します。



担当：染色体工学研究センター
中山祐二、阿部智志、香月康宏、久郷裕之

研究

3 すべての人に
健康と福祉を



4 質の高い生活を
みんなに

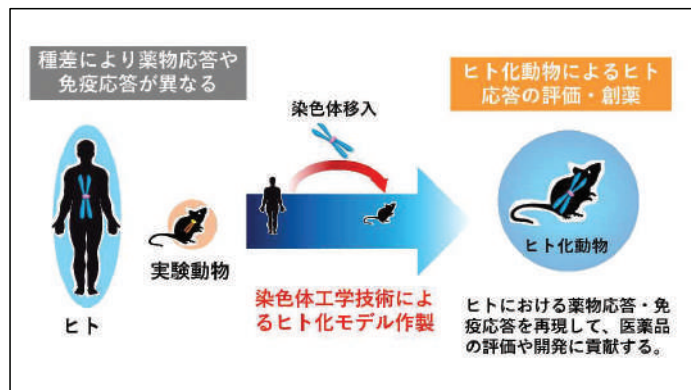


9 産業と経済活動の
振興をつくろう

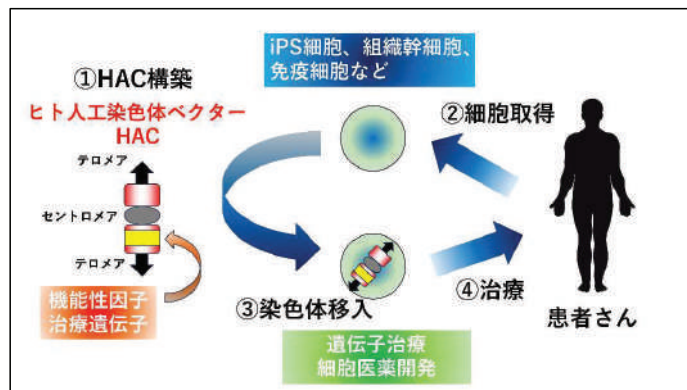


＜概要＞私たちは独自に開発した染色体工学技術を駆使し、完全ヒト抗体産生動物を用いた抗体医薬品シーズの創成研究を進めています。さらに、薬物動態ヒト化動物を活用した安全性評価により、創薬プロセスの効率化と信頼性を高め、次世代治療薬の早期実用化を目指しています。また、人工染色体を応用した遺伝子・細胞医薬の開発にも取り組み、がんや遺伝性疾患治療の基盤を築きます。

次世代治療薬の早期実用化の試み



がんや遺伝性疾患治療の基盤構築



担当：染色体工学研究センター
阿部智志、香月加奈子、香月康宏

その他部局等



県内外の大学・公共図書館との連携で地域の学びを支える

附属図書館

教育 研究 社会貢献



【活動概要】

鳥取大学附属図書館は「鳥取大学附属図書館ビジョン」に基づき、大学の基本理念である「知と実践の融合」を実現するため、教育・研究を支援する学術情報基盤拠点としての役割を担っています。教員・学生との協働のもと、学生の多様な学修環境を整備するとともに、研究を推進するための電子的リソースを中心とした学術情報を安定的に提供しています。さらに、学内で創成される教育・研究成果を発信・保存するポータル機能を担い、知の循環を支えています。

また、地域社会に貢献する「地域の知の拠点」として、公共図書館や大学図書館などとの資料貸借、文献複写、レファレンス業務を通じて、積極的な連携・協力を進めています。これにより、社会全体の財産である学術情報を共有し、学術の発展とSDGsの達成に貢献しています。

学術情報の提供



中央図書館書架



中央図書館閲覧室



個人学修用ブース



SDGsに関する展示

他の図書館との連携



県内外図書館との資料の貸借、文献複写



学内に移動図書館車

【担当】図書館情報課

鳥取大学カーボンニュートラル宣言について

研究推進機構 研究推進部

教育、研究、社会貢献、大学運営



【活動概要】

本学では、鳥取砂丘の砂防造林の研究を端緒とする乾燥地研究をはじめとする環境問題に関する様々な研究を通して、地域・国・世界への貢献に取り組んできました。このような活動を一層加速し、脱炭素社会、カーボンニュートラルの実現に貢献するため、本学では令和4年6月28日にカーボンニュートラル宣言を発出しました。また併せて、カーボンニュートラル行動方針を推進します。

『鳥取大学カーボンニュートラル宣言』

鳥取大学は、二酸化炭素排出量を、2030年に2013年比60%、2040年には75%削減し、遅くとも2050年までに、実質的なカーボンニュートラルを目指します。そのため、温室効果ガス排出削減に資する本学独自の研究およびイノベーション創出を推進します。

■鳥取大学カーボンニュートラル行動方針

- ・省エネルギー、資源節約の徹底、低二酸化炭素排出量の電力事業者との契約導入、再生可能エネルギーの利用拡大。
- ・浜坂地区における先行取組、湖山地区におけるイノベーション・コモンズ構想、米子地区におけるスマートホスピタル構想の推進。
- ・地球温暖化・気候変動、グリーンエネルギーの創出、次世代二次電池、エネルギー削減や二酸化炭素排出削減に資する固体触媒、低炭素社会を目指した社会基盤構築、温室効果ガスを排出しにくい作物開発、未利用生物資源の有効活用など、本学ならではの研究活動および関連する産学連携活動と研究成果の社会実装の推進。
- ・環境に関わる一般基礎教育、専門教育、SDGsの達成に取り組める人材の育成を更に加速し、カーボンニュートラル実現に貢献できる人材を教育・育成。
- ・地方自治体および地域の産業界、金融界との緊密な連携による、地域におけるカーボンニュートラルの推進。



地球温暖化、気候変動に関わる研究拠点：乾燥地研究センター、ドームと社会実装を目指すバタフライ風車（浜坂地区）

【担当】研究推進機構、研究推進部

地域のさまざまなステークホルダーとのパートナーシップによる地域創生に 資する人材育成と課題解決の取り組み

地域価値創造研究教育機構
地域未来共創センター
Tottori uniQ

大学運営



地域連携プラットフォーム

さまざまなステークホルダーとのパートナーシップによる産業と技術革新の基盤づくり、住み続けられるまちづくり。



アントレプレナーシップ教育

鳥取の未来を切り拓くイノベーターを育成。地域との共修を通じ、関係人口創出にも寄与する。



リカレント教育

社会人の学びの環境を整え、プログラムを提供し、地方創生を目指す。

【活動概要】

- 地域価値創造研究教育機構「地域未来共創センター」（愛称：Tottori uniQ）は、「とっとりユニーク」（本学独自の知を活用し、地域と世界に"Unique"を発信）を具現化する拠点です。
- これまで以上に地域との連携を深め、課題解決と新たな価値創造を目指すため、恒常的な議論の場である「地域連携プラットフォーム」を構築しました。このプラットフォームを通じて、さまざまなステークホルダーとのパートナーシップを築き、県内19市町村が抱える課題や地域に眠る地域資源を掘り起こします。そして、大学の知恵・技術・若い力を掛け合わせることで、多様な地域課題を解決し、新たな価値を生み出します。これらの取り組みにより、「産業と技術革新の基盤」や「人口減少下でも住み続けられるまち」をつくり、その成果を全国・世界へ発信します。
- 学生に対しては、アントレプレナーシップ教育を通じて、時代の変化が生み出す課題を捉え、果敢にチャレンジし、失敗からも学べるレジリエンスをもって、価値創造から社会変革に取り組み鳥取の未来を切り拓くイノベーターを育成します。また、地域と学生との『共修』、豊かな『ふれあい』を通じて鳥取への『愛着』を育み、鳥取に深く根ざして活力を生み出す『地域定着』人材の輪を広げます。さらに、『関係人口』の増加も促進し、多様な人々が鳥取で活躍できる未来を創造します。
- 経営者をはじめとする社会人に対しては、経営学、DXやAIなどのアップデート、社会人基礎力の強化に関する学びを提供します。これにより、事業を承継し発展させる、新たな事業を起こす、地域に新たな価値を創造することのできる人材を育成し、「リカレント教育と地方創生の好循環」を目指します。

【担当】 地域価値創造研究教育機構

中国電力との共同オリジナルカードゲーム制作

学生 Small CoRE
project 採択団体

TORICEF

教育、社会貢献、課外活動



【活動概要】

現在、世界的に地球温暖化に伴う気候変動等が問題視され、その対策として世界中で再生可能エネルギーを用いた発電方法が注目されています。私たちは中国電力の方と協力して若者男女がわかりやすくエネルギーについて学べるコンテンツを作成することにしました。

ただ今、私たちは中国電力の方々とカードゲーム作りを行います。

なぜ、カードゲームなのか...

その理由は多世代の方が気軽に楽しみながら学ぶことができると考えたからです。また私たちTORICEFは、2つのオリジナルカードゲームを作成している実績があり、その経験を活かし、新たなカードゲームを作りたいと考えたからです。

カードゲームの概要は、盤面の資源を取り合い、環境とエネルギーに配慮しながら、それぞれの町を発展させていきます。

ほかにも、時折起こる災害などの対策も必要になります。

ただ今、製品化できるように鋭意製作中です。

定例会

メンバーと製品化に向けて週に一度行っています。時折中国電力の方を招いて行っています。



実際のホワイトボード

より良いものになるように、必ず良い点と課題点を出すようにしています。



カード案

写真も鳥取にある場所を使用しております。

127

【担当】

TORICEF (地域未来共創センター「学生 Small CoRE project」採択団体)

カード案写真の出典元

https://www.eheya.net/sumicoco/2024/ranking/tottori/sumitai_area.html
<https://ameblo.jp/tankura/entry-12640514193.html>

地域課題の解決を目指す実践教育と、学生発の地域貢献活動の創出

大学運営



「学生 Small CoRE Project」活動概要

「学生 Small CoRE Project」は、学生の地域貢献活動を支援する地域価値創造研究機構 地域未来共創センターの取り組みです。学生が自ら企画・運営する課外活動に対し、地域活動の企画立案を促し活動費を助成することで、自主的な地域貢献への挑戦を後押し、実践活動をマネジメントします。

プロジェクトの目的

プロジェクト名の「CoRE」には、Community（地域社会）とRelationship（つながり）、そしてEducation（教育）とEnrichment（豊かさ）の頭文字が込められています。「学生 Small CoRE Project」という名には、「小さな核」となって地域に貢献する人材を育成するという鳥取大学の理念が根底にあります。学生は自ら地域の課題を発見し、同志を募りながらその解決策を企画・実行する過程を通じて、実践的なスキルを養います。また、自らの意思によって地域住民との交流を深めることで、鳥取県の文化や社会への理解を深めます。こうした活動が、学生の成長を促すと同時に、地域との絆を深め、ひいては多岐にわたるSDGs活動の発展へとつながることを目指しています。

活動内容と意義

本年度は学生団体8組を採択し支援しています。子ども向けのSDGs体験学習やフードロス削減の取り組みなど、学生の多様なアイデアの実現を支援しています。この教育プロジェクトは、学生が地域社会の一員として課題解決に参画する機会を提供し、地域に新たな活力を生み出します。学生と地域住民が一体となって未来を創造する、まさにSDGsを推進し共創する場づくりと言えます。

本年度支援しているプロジェクト8組：「いちばんはじめの性教育」を考える絵本プロジェクト」「TORICEF SDGs工作プロジェクト」「TORICEF 中国電力とのオリジナルカードゲームの共同制作」「ばばのばプロジェクト ～駄菓子を通じて人の縁を紡ぐ～」「ばばのばプロジェクト ～駄菓子の縁は日野町へ～」「結梨 梨や柿について楽しく知ろう！」「チーム・地産知承」「すなめぐ」

【担当】地域価値創造研究教育機構 地域未来共創センター

地域未来共創センター 学生 Small CoRE project

支援する学生プロジェクト例 ①



結梨（ゆいりん）

鳥取の特産である梨や柿を通じ、子どもたちに地産地消やフードロスを伝える。廃棄される果物の美味しさを体験する料理イベントや、クイズで楽しく学べる企画を公民館等で開催し、地域との繋りを育む取り組み。

支援する学生プロジェクト例 ②



ばばのばプロジェクト

世代を超えて愛される駄菓子を通じて、人と人とのつながりを生み出すコミュニティ活動。駄菓子屋の枠を超え、誰もが笑顔で交流できる温かい居場所づくりは、孤立化の予防にも繋がり、ウェルビーイングなまちづくりを推進する。

鳥取の梨を通じた子ども食育

教育、社会貢献、課外活動



【活動概要】

結梨は梨農家のもとで栽培を学んでいます。団体の取り組みの一部で、その知識や経験を活かして子どもたちに梨の魅力を伝える活動を行っています。

子ども食堂や公民館では、梨を使ったカレーやパウンドケーキづくりをはじめ、手づくりのゲームや梨クイズ、ワークショップなどを通じて「食育」を実践しています。

これらの取り組みは、子どもたちの栄養改善や健康的な食習慣づくりに役立つだけでなく、地元の梨を使うことで地産地消や食品ロス削減の意識を育むことにもつながっています。

また、子ども食堂や地域の方々と協力することで、地域とのつながりを深めています。

【担当】結梨

（地域未来共創センター「学生 Small CoRE project」採択団体）

学生 Small CoRE project

採択団体

結梨



梨クイズ

調理後、食後に梨や鳥取に関するクイズを行っています。

梨の収穫体験

子どもたちと一緒に梨カレーなどを作るだけでなく、体験型のイベントも行っています。これは、日頃お世話になっている観光園で収穫体験を行いました。



クリスマス会

千代水公民館で梨のパウンドケーキ作りを行いました。

学生・教職員の心身の健康を守り育み 安心して学び働けるキャンパスへ

保健管理センター

教育、大学運営、社会貢献



【活動概要】

全ての学生・教職員が、心身の健康を保ち、安心して学び働き、力を発揮でき、健康づくりを実践できるよう、医師、保健師・看護師、カウンセラーが連携して活動しています。

● 健康支援

- ・健康相談・カウンセリング：不安や心身の不調に対応しています。HPお問い合わせフォームからいつでも申込できます。
- ・学生健康診断：心身の不調をスクリーニングし、早期対応・支援を行っています。
- ・測定機器：体組成計(Inbody)・視力計等の測定機器を設置し、セルフケアに利用できます。スタッフによるアドバイスも行っています。

● 健康アドバイス(教育)

- ・食事・運動・睡眠など生活習慣について、心身の健康を保てるようアドバイスしています。
- ・コミュニケーション・メンタルヘルスについて、少人数のグループで学べる機会を提供しています。セルフケアに役立つ資料をHPに掲載しています。

● 誰もが安心できる環境

- ・性・LGBTQ+や国籍などにとらわれず、誰でも利用できる環境整備に努めています。
- ・障害や疾患、個々のニーズに応じた個別支援を行っています。
- ・相互理解を深めるための啓発活動を行っています。

● 連携

学内部署や地域と連携し、プレコンセプションセミナー、AED・エピペン講習、学生歯科健診やがん予防など地域の健康増進への取組を行っています

カウンセリングルーム(個室)

プライバシーに配慮された安心な環境で相談・休養できます

休養室(個室)

自動視力計

Inbody

自動血圧計

測定機器やフードモデルを用いてアドバイスをしています

フードモデル

カウンセラーと一緒に体験します

グループワーク

【担当】保健管理センター

誰もが健やかに成長や挑戦ができるキャンパスづくりを推進

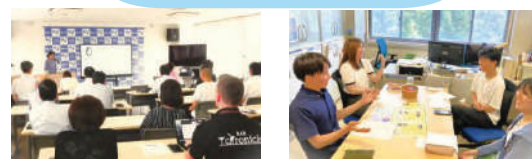
ダイバーシティ キャンパス推進室

【推進室の基本方針】

多様な個性・価値観やライフスタイルを尊重しあい、
無意識の思い込みやハラスメントに気づき、
誰もが健やかに成長や挑戦ができるキャンパスづくりを推進します



多様な構成員の共生環境づくり



講演会「多様性を活かして
元気の鳥取大学をめざして」

学生スタッフミーティング

キャリア形成支援



企業見学会

プレコンセプションケア・キャリアデザインセミナー

過ごしやすい環境づくり



相談対応・休憩スペース

オールジェンダートイレ設置
生理用品の配置

研究活動支援

◆研究支援員制度

出産・育児・介護等により
研究時間の確保が困難な
研究者に研究支援員を
パートタイム職員として雇用し
研究者のキャリア形成・研
究活動の維持向上を支援

ライフイベント支援

◆育児・介護・治療等との 両立支援セミナー

◆意識調査の声を反映し た取組み

キャリア形成支援

- ◆キャリアデザイン研修
- ◆プレコンセプションケア
セミナー
(共催：保健管理センター・
鳥取市・県)
- ◆サバティカル体験談
- ◆企業見学
(共催：キャリアセンター)

多様な構成員の 共生環境づくり

- ◆ダイバーシティ講演会
- ◆大学入門ゼミ(DEI)
- ◆ニュースレター発行
- ◆意識調査
- ◆学生スタッフ活動
- ◆県や市など連携した啓発

担当：ダイバーシティキャンパス推進室 総務企画部人事課
連携：鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センター



Tottori University Office for Campus Diversity
鳥取大学 ダイバーシティキャンパス推進室

事務局 技術部



運営

8 働きがいも
経済成長も9 産業と技術革新の
基盤をつくろう

【活動概要】

「少子高齢化による生産年齢人口の減少」や「育児や介護との両立・働き方の多様化」を考慮し、「ムリ・ムラ・ムダ」の無い生産性の高い業務プロセスを実現する必要があります。

当該プロセスの実現に向けて、契約課の業務のひとつであり、多くの時間を要す「手作業による伝票起票業務」は、定型的業務であることから、自動化に期待ができます。

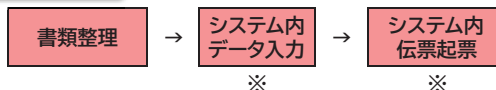
当該業務を、RPAソフトである「Power Automate for desktop」で記録することにより、自動化しております。

今後は、自動操作の精度向上、自動化する業務の拡大を予定しており、いずれ定型業務の全てを自動化することを目標としております。

【自動化対応中】

- ・ 消耗品費について財務会計システム上で支出契約決議書起票、未払伝票起票(⇒実施例・右)
- ・ 消耗品費について科研システム上で科研決議書起票
- ・ 運送料、総合複写 未払伝票起票

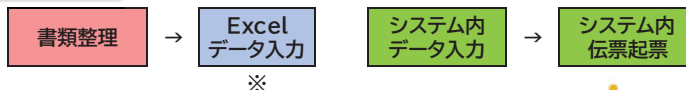
RPA導入前



※ 10画面以上を遷移し入力、起票。全て担当者の手作業によるもの。



RPA導入後



※ RPAにシステム入力させるためのデータを用意。以降は担当者の手作業をRPAで自動化。



【担当】財務部契約課 消耗品係

サステナブルキャンパス※ 形成の推進

(※ 教育・研究・社会連携・キャンパス整備をとおして、持続可能な社会の構築に貢献する大学)

事務局

大学運営

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに12 つくる責任
つかう責任13 気候変動に
具体的な対策を

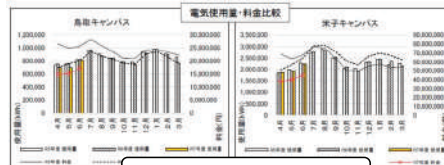
【活動概要】

「鳥取大学環境憲章」及び「鳥取大学カーボンニュートラル宣言」に基づき、サステナブルキャンパスの形成を推進します。

1.省エネルギー及びカーボンニュートラルに向けた取組

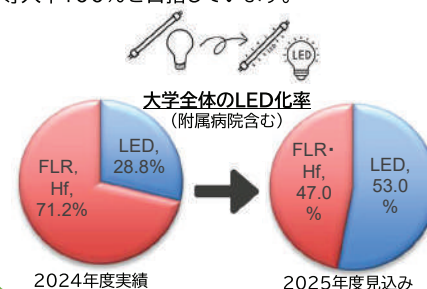
ソフト面では、学内エコアクションパトロールによる省エネ意識の向上や、光熱水使用量をイントラネットで公表することで情報共有と意識啓発を行っています。

ハード面では、空調・照明などの高効率機器への更新や建物の高断熱化を進め、省エネとカーボンニュートラルに貢献しています。



省エネに関する意識啓発

エネルギー効率向上と環境負荷低減のため、照明のLED化を推進しており、2030年度までに導入率100%を目指しています。



省エネ

①アクティブ技術

(エネルギーを効率的に利用するための技術)

- ・高効率空調
- ・高効率換気
- ・LED照明 など



②パッシブ技術

(建物内の環境を適切に維持するために必要なエネルギー量(エネルギーの需要)を減らすための技術)

- ・自然換気、昼光利用
- ・高断熱化
- ・日射遮蔽など



カーボンニュートラルに資する改修工事

2.環境負荷低減と管理業務の効率化

環境負荷低減と業務効率化を目的に、電子マニフェストと化学物質管理システムを導入し電子化を進めています。さらに、毎年発行していた環境報告書も冊子から電子化へ移行しました。これにより、紙資源の削減、記録・集計業務の効率化、コンプライアンス強化を実現しています。



環境報告書2025



化学物質管理システム



【担当】施設環境部

社会貢献



【活動概要】

「出前おもしろ実験室」は、子どもたちに理科・科学への興味・関心を深めてもらうことを目的として行う出張形式の体験型科学実験教室です。

技術部では、平成18年に「鳥取大学発『出前おもしろ実験室』プロジェクト」を立ち上げ、これまでに延べ8000人以上の子ども達に科学のおもしろさ・楽しさを伝えています。小中学校だけでなく、特別支援学校や聾学校、保護者からの実験室開催依頼や、小学校教員からの授業支援・教員向け研修会の依頼が多く寄せられており、広く科学教育に貢献し、地域のイベントや公民館事業を通して「理科好き」の子どもが育つ環境づくりに寄与しています。技術職員が持つ化学、電気、機械等の様々な分野の専門知識を活用した「出前おもしろ実験室」を提供することで、子どもたちに科学や工学、ひいては鳥取大学の魅力を発信しています。更に、アート要素のある科学工作やロボットのプログラミング体験などを試み、STEAM教育を目指しています。

また、プロジェクトに興味を持った本学学生とともに活動しており、子どもたちへの実験指導や実験教材の開発、研究会への参加などを通して本学学生の科学力・人間力向上につなげています。

【担当】 技術部



小学校での実験室の様子



中学校での実験室の様子



小学校教員向け研修会の様子